観世流・金剛流
宗家本発行元
檜書店
〒101　東京都千代田区神田小川町2－1
電　話03（3291）2488－9　振替東京3－3552
〒604　京都市中京区二条通鉄屋町東入
電　話075（231）1990　振替京都1－113

能楽の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18-18
（郵便番号　464）
電　話（052）731－7984
振替口座　00800－6－36393

購読料　1年1100円
郵送の場合　1年1800円
一　部　100円

4月に熱田能楽殿40周年記念特別公演

能楽協会名古屋支部
平成7年度催能日程

能楽協会名古屋支部主催による平成七年度の演能は、恒例のように熱田まつり奉納能、名古屋薪能、大衆能、歳末助け合い協賛能の四公演と、昨年から行われている「普及能」が二日間・四回上演、さらに熱田神宮能楽殿創立四十周年を記念する特別公演が四月に二部制で挙行される。

それぞれの日程、能・狂言の演能予定は次のとおり。

・普及能公演

三月十一日（土）第1部
（観）能「隅田川」（武田邦弘）狂言「不見不聞」（野村又三郎）

三月十一日（土）第2部
（観）能「玄象」（久田徹二、竜神・清沢一政、姥・松山幸親、師長・中川雅章）狂言「名取川」（野村又三郎）

・熱田能楽殿四十周年記念特別公演

四月二日（日）第1部
能「高砂」（衣斐正宜、ツレ東川光夫）狂言「三本柱」（井上松次郎）、（観）能「猩々乱」双之舞（泉嘉夫、久田徹二）

四月二日（日）第2部
（観）能「草子洗小町」替装束（梅田邦久、貝之・中川雅章、ツレ前野郁子、清沢一政、今沢美和、祖父江修一）（喜）能「小鍛冶」白頭（長田驍）狂言「吹取」（野村又三郎）

・熱田まつり奉納能

六月五日（月）＝入場無料
（喜）能「経政」（和谷衛市）、（宝）能「杜若」（竹内澄子）、（観）能「巻絹」（生駒里翠、ツレ八神孝充）、狂言「歌争」（松田高義）

・名古屋薪能

八月五日（土）＝神宮神楽殿前
（観）能「菊慈童」（松山幸親）（宝）能「羽衣」（玉井博祐）、（観）能「土蜘蛛」入違之伝（古橋正邦、ツレ三村恵子、本田勲、須部甫）

・普及能公演

八月二十日（日）第1部
（観）能「実盛」（梅田邦久）狂言「昆布売」（井上礼之助）

八月二十日（日）第2部
（観）能「藤戸」（泉嘉夫）狂言「雷」（佐藤友彦）

・大衆能公演

九月三日（日）第1部
（観）能「賀茂」（祖父江修一、ツレ加賀敏彦、須部甫）、（宝）能「阿漕」（衣斐正宜）狂言「鈍根草」（井上祐一）

九月三日（日）第2部
（観）能「自然居士」（高橋暁一）、（喜）能「紅葉狩」（長田暁、ツレ和谷衛市、長田郷）、狂言「菊の花」（野村又三郎）

・歳末助け合い能

十二月三日（日）
（宝）能「清経」（稲川寿一）（観）能「富士太鼓」（近藤幸江）、（観）能「殺生石」（清沢一政）、狂言「蟹山伏」（大野弘之）

催能はいずれも熱田神宮能楽殿入場料はそれぞれの催しとも前売二千五百円、当日三千円、学生千五百円、記念能のみ前売三千円、当日四千円、学生二千円。熱田まつり奉納能は入場無料。

◈演能カレンダー◈

（熱田神宮能楽殿）

〔平成7年1月〕
29日（日）青陽会定式能　（有料）（番組③面）

〔2月〕
4日（土）幸謡会　（有料）（番組③面）
5日（日）宝生会定式謡　（有料）（番組④面）
11日（土）富翔会　（来場歓迎）
12日（日）観世会定式能　（有料）（番組④面）
19日（日）九阜会定期能　（有料）
25日（土）恵美寿会　（来場歓迎）
26日（日）恵美寿会　（来場歓迎）

〔3月〕
5日（日）大蔵狂言会　（来場歓迎）
11日（土）能と狂言の世界・普及能　（有料）
12日（日）三交会　（来場歓迎）
18日（土）名古屋能楽鑑賞会　（有料）
19日（日）梅猶会　（有料）
21日（祭）巽会　（来場歓迎）
25日（土）井上松次郎傘寿記念狂言会　（有料）
26日（日）壺泉会大会　（来場歓迎）

〔4月〕
1日（土）翠謡会　（来場歓迎）
2日（日）能楽殿創立40周年記念能　（有料）
8日（土）名古屋猶風会　（来場歓迎）
9日（日）観世会定式能　（有料）
16日（日）邦謡会　（来場歓迎）
22日（土）中部電力謡曲会　（来場歓迎）
23日（日）久田観正会　（来場歓迎）
29日（祝）幸友会春の会　（来場歓迎）
30日（日）笙月会　（来場歓迎）

〔5月〕
7日（日）能楽殿創立40周年記念素人会　（来場歓迎）
13日（土）青陽会定式能　（有料）
14日（日）名古屋金春会　（有料）
20日（土）九阜会定期能　（有料）
21日（日）狂言やるまい会　（有料）
27日（土）たまも会　（来場歓迎）
28日（日）名古屋観衛会　（来場歓迎）

（演能変更の節はご了解下さい）

熱田神宮能楽殿運営委員会

謹賀新年

委員長　熱田神宮権宮司　岡地幸雄
委員　熱田神宮総務部長　露原通泰
同　熱田神宮権祢宜財務部長　大山剛
同　株式会社不動産秘書室長　伴明郎
同　松坂屋本社　糸川英夫
同　狂言方和泉流　野村又三郎
同　シテ方観世流　梅田邦久
同　シテ方宝生流　衣斐正宜
同　ワキ方高安流　飯富雅介
同　狂言方和泉流　井上松次郎
同　太鼓方観世流　鬼頭喜太郎
同　小鼓方幸清流　福井啓次郎
同　笛方藤田流　藤田六郎兵衛
同　大鼓方大倉流　筧鉱一
顧問　神社本庁祭式講師　長谷啃男

謹賀新年

名古屋観世会
観世清和

社団法人鐏仙会
観世鐏之丞
観世栄夫
観世暁夫

幽誣会
片山九郎右衛門

財団法人研能会
梅若万紀夫
梅若万佐晴

梅猶会
猶諷会
大阪国際フェスティバル能
梅若盛義

名古屋観衛会
山本勝一
名古屋正花会
山本博通
〒540　大阪市中央区徳井町一丁目三－六
電話〇六（九四二）四〇七〇番

大槻清韻会
大槻文蔵
〒540　大阪市中央区上町A番七号
電話〇六（七六一）八〇五五番

鳳鳴会
武田志房
稽古場　名古屋市千種区今池四丁目15－3　茂井ビル
電話〇三（七三二）三七三六

幽花会
片山慶次郎
伸吾
〒603　京都市北区小山下花ノ木町二
TEL　四九二－五三〇二番
FAX　四九二－五三〇九番

野村四郎

名古屋観世九皐会
観世喜之
観世喜正
加藤保彦
青木武弘
高木美智子
高橋暁一
外山圭一

春雅日記

(158)

新春閑話

えと文 二井栄逸

庭の寒つばきの赤さに、ハッと息をのんで思わず窓をしめる手をとめた。

この頃、めっきり耳が遠くなってしまったので、周囲の雑音は聞えず、くらく垂れ下った冬空と、寒椿と、私がとり残されている。

八十三才とは、私もずい分長く生きたものだ。その反面、食事もおいしく、毎日が楽しいから、百才までも生きたいという願望も結構ある。

最近、製パン会社の社長をしていられる日さんにねだって、幼い頃から舌に馴染んだ餡パンとジャムパンをとどけてもらい、一度に五個食べて家内にひどく叱られた。

しかし、大腸のポリープは切除したし、精密検査によって血管が大変若いと言うことを、主治医から折り紙をつけられた。いい気になって酒量を少しふやしていると宮地の悪い後援会長のN女史が

「しかし、我々は押しも押されぬ死亡適齢期なんですからネ」と、痛い釘をさされた。そう言えば新聞の死亡欄にも八十才前後の方が多く登場する昨今である。

どれ、死亡適齢期を一番忘れさせてくれる謡いを謡って新春をたのしませて頂こうか。

（平成七・一・一記）

能楽協会名古屋支部の謡初式

能楽協会名古屋支部（野村又三郎支部長）は、一月三日熱田神宮能楽殿で謡初めを催し、今年はとくに一般公開として、観世、宝生、喜多各流による舞囃子、金春、金剛各流による仕舞、和泉流小舞が演じられ、来観者とともに新春を祝った。

ひきつづいて、支部総会が行われ、野村支部長から「昨年の名古屋支部主催の催能は予定どおりつがなく行われたことを感謝する。本年も各行事が予定されており亡協力をお願いしたい」とあいさつ。平成七年度の支部主催の能と狂言について梅田邦久副支部長から別項（①面）のように発表。とくにことしは、熱田神宮能楽殿四十周年記念特別公演が四月二日に催能、各流による素人会が二回にわたって行われる予定である。

さらに役員改選では、支部長野村又三郎、副支部長梅田邦久、福井啓次郎、筧鉱一の三氏に加え、藤田六郎兵衛氏を副支部長に決定した。

また新たに観世流シテ方高島良一氏、狂言方野村信行の両氏が能楽協会名古屋支部に加入された。

'95 大槻能楽堂 自主公演

源氏物語の〝魅力〟シリーズも

大槻清韻会能楽堂では、毎年自主公演能を行っているが、一九九五年度の公演予定は次のとおり。

（自主公演）

2月8日（水）6時始
能 海士 観世 暁夫
懐中之舞

3月8日（水）6時始
能 隅田川 高橋 章

4月12日（水）6時始
能 熊野 山本 順之
村雨留

5月10日（水）6時始
能 杜若 片山九郎右衛門
素囃子

6月14日（水）6時始
能 賀茂 泉 泰孝
御田 働

9月13日（水）6時始
能 天鼓 斉藤 信隆
弄鼓之舞

10月11日（水）6時始
能 安達原 梅若 盛義
黒頭
急進之出

11月8日（水）6時始
能 安宅 栗谷 菊生

12月13日（水）6時始
能 経政 浅井 文義
替之型

能 殺生石 赤松 禎友
替装束

（能の魅力を探るシリーズ）
源氏物語の世界

4月22日（土）2時始
能 住吉詣 武田 志房
浅見 真州

5月13日（土）2時始
能 葵上 山中 義滋

6月24日（土）2時始
能 半蔀 長山礼三郎

9月30日（土）2時始
能 浮舟 野村 四郎
彩色

10月21日（土）2時始
能 野宮 観世銕之丞
合掌留

11月18日（土）2時始
能 落葉 金剛 巌

（ろうそく能）
復曲名作シリーズ

7月12日（水）6時半始
能 実方 観世 栄夫

7月13日（木）6時半始
能 鵜羽 観世 清和

7月18日（火）6時半始
能 重衡 梅若 六郎

7月19日（水）6時半始
能 舞車 大槻 文蔵
友枝 昭世

（研究公演）
12月16日（土）2時始
世阿弥自筆本による
能 難波 泉 嘉夫

会場／大槻能楽堂（大阪市中央区上町A番7号）・

入場料／当日券一般三千八百円

前売券一般三千三百円、学生千六百円。

前売券は、阪急、阪神、高島屋プレイガイド、チケットぴあ各ステーション（TEL06・363・9999）

問い合わせ 大槻能楽堂事務所（TEL06・761・8055）

謹賀新年

観世芳宏門人会
観芳会 観世芳宏
観世芳伸

大垣浦声会
稽古場 大垣市伝馬町大垣別院
電話〈〇五八四〉七三一三三六二
住所 京都市左京区下鴨芝本町六
電話〈〇七五〉七八一七〇三〇
浦田保利
浦田保浩
蒲田保親

邦謡会
梅田邦久
須部甫
清沢一政
今沢美和
本田勲
名古屋市昭和区台町二丁目十六—五
電話〈〇五二〉（八四一）四六三二番

壺泉会
泉嘉夫
名古屋市昭和区山里町一〇三
電話 八三二—三一八五
西宮市甲陽園目神山町二三—二五
電話〈〇七九八〉（78）二四五八

山中能舞台
山中義滋
〒545 大阪市阿倍野区阪南町六—五—八
電話（〇六）六九二—三八二五

井上嘉久
（〒603）京都市北区紫野下鳥田町六

名古屋橋岡会
名古屋市昭和区丸屋町五ノ三五
山田紀子方

謡交会 奥善助
東京都世田谷区三軒茶屋二—一〇—二二
電話（〇三）三四二二—二六三七番

竹翠会 若松宏守
（〒662）西宮市平松町四—九
電話（〇七九八）二三—〇六〇一

武田謡楽会
武田欣司
武田邦弘

名古屋淡交会
橋岡慈観

三交会
瀬戸三津子
稲沢市稲島町二ノ宮六 瀬戸方
電話〈〇五八七〉（22）三三八八番

下田雄三
豊中市曽根東町四—一—二二

雄謡会中部地区連合会
名古屋和謡会
一宮竹石会
岐阜花謡会
下呂雄謡会
萩原雄謡会
高山雄謡会
倭文之屋社中

名古屋修謡会
梅若修一

松音会
泉泰孝
〒168 東京都杉並区宮前四—一九—四
電話〈〇三〉三三二—八二八〇番

佳泉会
泉雅一郎
〒181 東京都三鷹市牟礼二—三—一
電話〇四二二—七一—二四〇四

春鶯会
梅若善高
〒565 豊中市新千里南町三丁目18-12
電話〈〇六〉八三一—七八五四

山本眞義
山本章弘
豊中市本町六丁目一〇—六

初陽会
武田宗和
稽古場 名古屋市千種区今池四丁目15—3 浅井ビル
電話〈〇五二〉（七三二）三七三六

上田観正会能楽堂
社団法人 観正会
上田観正会
TEL〇七八—六九一—五四四九
上田貴弘
拓司
公威
大介

中日文化センター
謡曲・仕舞教室 名古屋（栄）岐阜・四日市
翠謡会
生駒里翠
名古屋市名東区社ガ丘3ノ1503
電話〈〇五二〉七〇三—五七一七番

演能案内

青陽会定式能（第139期 第1回）

一月二十九日（日）十時半始
熱田神宮能楽殿

狂言 小鍛冶　加藤保彦　馬場信至　高島良一

能 巴
仕舞 籠太鼓　今沢美和　近藤幸江　地謡 三村恵子　前野郁子　生駒里翠　須部武田　高橋邦弘　武田瞭一　加賀敏彦　須部甫

能 養老
仕舞 高砂　松山幸親　東北　キリ　今村嘉勇　地謡 玉木孝男　中川雅章　古橋正邦　今村嘉勇　清沢一政　高野物狂　道行　梅田邦久　地謡 加藤保彦　久田邦久　中川雅章　玉木孝男　松山幸親　于方松山晃之　男須部甫　女生駒里翠　男加賀敏彦　女三村恵子　貫之武田邦弘　高橋瞭一　辻本正樹　杉江元　橋本宰　河村大助　後藤嘉津幸　竹市竜夫　佐藤友彦　間 後見 前野郁子　梅田邦久　地謡 高島良一　馬場信至　今沢美和　近藤幸江

能 草子洗小町
仕舞 飯富雅介　福井啓次郎　河村真之介　鹿取希世　間 井上祐一　後見 今沢美和　近藤幸江　地謡 高島良一　玉木孝男　馬場信至　松山幸親　前野郁子　梅田邦久　今村嘉勇　松山幸親　井上松次郎　小柳保志　後見 井上礼之助

狂言 竹生島参

能 鵺
清沢一政　高安勝久　河崎勲　柳原富司忠　鬼頭好信　竹市学　間 佐藤融　後見 生駒里翠　武田邦弘　地謡 三村恵子　上野嘉宏　須部幸甫　松山親　加賀敏彦　古橋父江修一　加藤正邦　保彦

附祝言

主催 青陽会

愛知県文化振興基金事業
〔要金員券〕当日券 三千円

幸謡会

二月四日（土）午後一時半始
熱田神宮能楽殿

番組

仕舞
高砂　三村恵子
敦盛　今沢美和
采女　前野郁子
葵上　生駒里翠　共地
大江山　瀬戸三津子
車僧　加藤春枝

舞囃子
頼政　大槻文蔵　河村総一郎　柳原富司忠　鹿取希世　地謡 泉水田泰博　稲生芳雄

狂言 昆布売　井上松次郎　井上礼之助　後見 佐藤融

仕舞
弱法師　泉嘉夫
梅枝　ロンギ　泉泰孝　地謡 今村嘉勇　泉雅一郎　赤松禎友　武富康之

―休憩 十五分―

能 葛城
近藤幸江　飯富雅介　橋本宰　河村総一郎　柳原富司忠　鹿取希世　助川龍夫　大和舞　間 大野弘之　黒田博光　八神博光　泉雅一郎　泉泰孝　大槻文蔵　赤松禎友　地謡 松山幸親　今村嘉勇　水田博夫　泉嘉夫　後見

附祝言

主催 幸謡会

近藤謡幸会
岡崎市鴨田本町十一―三
TEL（〇五六四）二一―二五二九

金員券 四千円
学生券 二千円（全館自由席）

平成7年1月・2月放送

〔平成7年1月〕NHK・FM（午前8時～9時）
22日（日）「藤戸」～観世流～ 浦田保利
29日（日）「千手」～宝生流～ 渡辺三郎
NHKラジオ第二放送（午後5時～6時）
16日（月）「東北」～金春流～（故）桜間金太郎
〔2月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）
5日（日）「高砂」～観世流～ 観世栄夫
12日（日）「老松」～喜多流～ 喜多節世
19日（日）「小塩」～宝生流～ 本間英孝
26日（日）「唐船」～観世流～ 大槻文蔵
☆テレビ放送はなし

久田観正会　久田徹二
大倉流小鼓 松月会　久田舜一郎
郁謡会　前野郁子
松韻会　松山幸親
馬場信至
玉木孝男
〒462 名古屋市北区東水切町四ノ四三 電話（〇五二）九八一―三六四三番

笙月会　中川雅章
長浜市地福寺町八ノ二九 電話（〇七四七）〇六三〇番

洗心会　奥村富久子
〒606 京都市左京区永観堂西町二〇 電話〇七五（七七一）〇七六七番

賀水会
桑名賀水会
名鉄百貨店友の会
加賀敏彦
〒463 名古屋市守山区森孝二丁目七〇九 電話（〇五二）（七七一）八九四五番

猶恵会　熊沢恵美子
名古屋市名東区平和ケ丘3―76 日車マンション四〇四

観修会　祖父江修一
多治見市日ノ出町2丁目 電話（〇五七二）（二二）三六五六

芳韻会　稲生芳雄
半田市船入町三十一 電話〇五六九（二）〇八一五

幸謡会　近藤幸江
岡崎市鴨田本町十一番地ノ三 電話（〇五六四）（二一）二五二九

重陽会　菊池重郷
犬山市犬山字相生五九―一六 電話（〇五六八）（六一）四五〇一番

清謡会　今村嘉勇
岩倉市東新町下境52―401 電話（〇五六七）（三七）七二三八

恵謡会　三村恵子
〒445 西尾市住吉町三―一二 電話〇五五（五七）二五九四番

梅猶会所属　熊沢光俱
〒485 小牧市篠岡3―2―11 電話（〇五六八）七九―九五八七

宝生英雄
宝生英照
名古屋巽会
辰巳孝
近藤乾之助
〒170 東京都豊島区巣鴨五―二三―八

恵美寿会
衣斐正宜
〒466 名古屋市昭和区御器所3―23―19 御器所パークマンション802号 電話（〇五二）八八二―五六〇〇番

衣斐正宜後援会
〒450 名古屋市中村区名駅三―二六―二六 平松昌彦方 電話（〇五二）五八六―一一二〇番

佐野由於
〒152 東京都目黒区八雲3―14―23
〒921 金沢市泉野町四丁目12―14

倉本雅
神戸市東灘区田中町一―13―26 本山アーバンライフ四〇二号 電話〇七八（四四一）五四六五番

宝生流 嘉宝会
鬼頭嘉男
名古屋市昭和区川名本町二ノ五一

竹腰勝一

司宝会
佐藤耕司
名古屋市天白区島田二丁目三〇一 島田構住宅二三〇 電話（〇五二）七三七二

金剛巌
金剛永謹

廣田後援会
廣田陛一
廣田幸稔

菊扇会後援会
廣田泰三
泰能

金剛流
松野恭憲
松野洋樹
〒616 京都市右京区鳴滝泉殿町一八―三 TEL〇七五（四六二）二二四八番 FAX〇七五（四六一）六〇九八番

豊嶋能の会
豊嶋春会
豊嶋三千春

名古屋宝生会定式能（第139期）（第1回）

二月五日（日）午後一時始
熱田神宮能楽殿

番組

西王母
能　津田信彦
佐藤耕司
間　杉江元
辻本正樹
後見　筧鉱一
後藤嘉津幸
佐藤友彦　助川龍夫
竹市学

嵐山
後見　辰巳孝
衣笠正宣
地謡　伊藤温
堀部通夫
外山学
玉井道夫
仕舞　竹内澄子
地謡　田村和恭
戸田博祐
玉井足立
知子

笹ノ段
倉本雅

羽衣
クセ　衣笠正宣
地謡　稲川寿一
広瀬克栄
鬼頭嘉男
佐藤耕司

難波
狂言　馬場富四夫

宝の槌
井上祐一
井上松次郎
井上靖浩
後見　井上礼之助

鉢木
玉井博祐
辰巳孝
杉江元
高安勝久
辻本正樹
間　大野弘之
佐藤融
河村真之介
後藤孝一郎
大野誠
後見　倉本雅
戸田和
地謡　石森智幸
堀広司
加賀山憲治
大森尚人
稲川寿一
馬場富四夫
鬼頭嘉男
佐藤耕司

附祝言

主催　名古屋宝生会
事務所　名古屋市天白区島田二丁目三〇一
島田橋住宅　二棟一三一〇
佐藤耕司方
FAX(052)七三七二
携帯(090)一六六一四六五二

正会員（年四会分）　壱万五千円
臨時会員（一・四回当日券）五千円
（二・三回当日券）　六千円
学生会員（当日券）　二千円
（二・三回当日券）二千五百円

名古屋観世会定式能（初回）

二月十二日（日）十二時半始
熱田神宮能楽殿

能組

素謡
神歌　梅田邦久　古橋正邦
地謡　松山幸親
中川雅幸
小島一英
本田勲

三山
能　観世芳伸
観世清和
間　福王茂十郎　河村稔一郎
野村又三郎　大倉源次郎　藤田六郎兵衛
後見　藤井完治
観世鈴之丞
地謡　清沢一政
古橋正邦
中川雅章
久田徹二
武田邦弘
片山慶次郎
片山九郎右衛門
梅田邦久

素袍落
狂言　井上祐一
井上礼之助
井上松次郎
後見　大野弘之

屋島
仕舞　片山慶次郎

羽衣
法師
能　観世鈴之丞
地謡　加賀久田徹彦
梅田邦久
古橋正邦

国栖
子方　観世安寿子
姥　片山清司
天女　観世芳宏
片山九郎右衛門
白頭　宝生閑
間　野村信行
松田高義
筧鉱一
柳原富司忠
助川龍夫
藤田六郎兵衛
後見　武田邦弘
片山慶次郎
地謡　今村嘉勇
須部完治
高橋暎一
祖父江修一
藤井徳三
小島一英
久田徹二
（終了四時半頃）

〔要会員券〕
（当日券は発売されません）

主催　名古屋観世会

江戸から明治への名古屋能楽界

―古春増五郎と「保能会」(二)

飯塚恵理人

前回は、「保能会」を行った古春増五郎の芸歴について述べた。『名古屋市史』『お能の番組』所収の番組を見ても、相当な技量を持つと周囲から認められた役者だったのではないかと述べた。

古春は名古屋に来てほんの数年の間に大野の舞台を譲り受けている。古春になぜこのようなことが出来たのか。

古春は江戸期を通じて大阪の町役者の筆頭であった名家であった。現在名古屋でこそ知られていないが、大坂の能楽史は古春家の存在を抜かして考えることは出来ない。また、古春家は尾張藩お抱えの宝生流役者とも芸事上の交流があった。

今回は、この古春増五郎以前の、古春家の歴史と、名古屋との関わりについて考えてみたい。

古春増五郎の先祖が登場する最も古い資料は、管見によれば『近代四座役者目録』（『四座役者目録』所収　田中允編わんや書店一四〇頁）の「其ノ他ノ役者」の項に「住吉ノ小春」として、「謡手。上手也。観世道見ノ代ノ者也。」と記載するものである。この小春が観世道見（金春禅鳳女婿、大永二（一五二二）年没、四五歳？『能楽全書第二巻（復刻版）』三一四頁による。）と同時代であれば、古春の先祖は室町時代後期から能に携わっていたこととなる。同書に（浅野本朱註―註云古春。元来、住吉明神之伶人之家也卜云）とある。浅野本に依れば、古春家は住吉大社の伶人の出となる。

江戸時代の記録には、「薪能番組」（『日本庶民文化資料集成』第三巻一八二頁）の元禄九（一六九六）年二月十日に「古春佐右衛門」が南大門で「田村」を舞ったという記事がある。

〔⑤面につづく〕

金剛流　景雲会
国際能楽研究会（I・N・I）
インターナショナル能インスティテュート
（日本・カナダ・アメリカ・ニュージーランド・ドイツ・フランス・台湾）
宇高通成面乃会
宇高通成後援会
宇高通成
〒606　京都市左京区高野泉町四〇
TEL(052)七〇一―〇七九三
名古屋事務所　前組英安方
TEL(052)八五二―二三二四

金剛流
名古屋周星会
岐阜周星会
吉川周子
名古屋市千種区西崎町三―六
電話〈052〉七六一―二二五七

金春信高
金春安明
〒167　東京都杉並区南荻窪3―17―16
電話(03)(三三三一)二五七一番

金春欣三
東京都杉並区成田東四丁目35―20
電話(03)(三三一五)七三八二番

本田光洋
東京都中野区上高田二ノ二五ノ二
電話(03)(三三八六)二六四一番

春敲会
金春晃実
金春穂高
廣瀬瑞弘
〒467　名古屋市瑞穂区東栄町三―二四
電話〇五二―八四一―四七四五

伊勢金春会
中村富次
伊勢市宮町一―一四―一七
電話〈0596〉㉘二四五六番

名古屋金春会
林鉄郎
渡部道三
近藤修彦
小島芳樹

二井栄逸
松阪市殿町1412の3
電(〇五九八)二三―〇二一六

喜多流　山本才
愛知県高浜市青木町三丁目七の五
電話(〇五六六)五三―六一八二番

長田驍後援会
〒514-22　津市高野尾町三三五一―四六
電話〈059〉㉚〇六九七番

喜多流
和楽会
和谷衡市
〒516　伊勢市中島二丁目26―12
電話〈0596〉㉓〇一五九番

福王茂十郎
〒662　西宮市名次町六番十二号
電話〈〇七九八〉㉓〇七七二

宝生欣閑
〒176　東京都練馬区小竹町一―五〇―五
電話　〇三(三九七二)七二三〇
〇三(三九五五)四七九五

名古屋高安会
高安勝久
飯冨雅介
杉江元

岡次郎右衛門
向日市上植野町地田一ノ五四
電話(075)九三四―二四〇六

豊嶋十郎
〒271　松戸市下矢切五五―五
電話(〇四七三)㊐一九八二

谷田宗二朗
〒603　京都市北区衣笠街道町31―7
電話(075)(四六三)四八七五番

森常好
東京都世田谷区世田谷一―47―12
電話〇三(三四二六)四八五三

高安流　岡同門会
清水利宣
高坂康弘
森晴蔵
北野三郎
塩田耕三
村山弘
中川湖舟
伊藤久蔵
谷口雅信

〔④面よりつづき〕

これは「薪能」（奈良興福寺修二会に付随した神事猿楽・二月に行われた。南大門と御社上がりの能。）の資料である。

この「佐右衛門」について、表章氏は「南都両神事能索引」（『能楽研究』第一六号一九二頁）において「左衛門」と同一人として扱っておられる。

江戸時代の興福寺の「薪能」について、表章・中村保雄両氏は、『資料集成』（前掲）の解題（一二〇頁）に、

江戸時代前半の薪能は、寛文二年に観世座の参勤免除と金春・金剛・宝生三座による二座交代参勤の制度が定まったことをはじめ、開始日の二月七日への変更、大夫や座衆以外の役者による代勤の恒例化など、変貌が激しかった。

と言われる。代勤が恒例化していると言う点を考えると、古春家の役者が宝生大夫の代勤をしているからと言って、地位が高かったと即断は出来ない。しかし「薪能番組」に記される紛争について、両氏が同じ解題に「興福寺の勢力減退と能役者の身分向上が背後にあっての現象に相違ない衆徒と猿楽の間に芸能執行をめぐる紛争の実態」と記されるように、ここに出勤している役者が、興福寺に対してもかなり強気に出ることのできる、ある程度の地位のある役者であったことは事実であろう。

古春家のシテ方役者は、享保三（一七一八）年までの資料が載るこの「薪能番組」に、「左衛門」「増五郎」「十郎兵衛」「甚大夫」「辰之進」の五名が確認できる。この番組に載る「左衛門」「増五郎」は、明治期の『お能の番組』に載る人物と同一ではあり得ない。これらの五つの名前の内少なくとも「左衛門」「増五郎」は古春家の何人かのシテ方役者に伝えられた名前であると考えられる。

野々村戒三氏は、「能の地方的分布とその情勢」（『能楽全書』第二巻 前掲一八一・一八二頁）に、文化三（一八〇六）年の『乱舞人物録』に載る主な大坂の能役者として、宝生流の古春左衛門を挙げられ、

古春家は、大阪能役者中最古の家で、もとは金春流であったが、後宝生流に変ったのである。この家に就いては、『浪花文庫』に、

古春氏は、南久太郎町一丁目に住居し、保生流の能大夫なり。往古より天王寺に由緒あり。即ち先祖は楽の河勝にて、天王寺中の猿楽の由、次男或は弟ある時は、必らず河勝を以て氏とす。毎年天王寺睦月の宴の時は、左衛門も参りて、酒食を給はり、青銅壱貫文頂き帰る事、古例なるよし。

とある。この家は後に名古屋に移住したとの事であるが、その家芸は今断絶してゐる。

と述べておられる。

『浪花文庫』は「大坂市史史料第三輯（昭和五六年）」に翻刻されている。野々村氏の挙げられた記事は、「天王寺舞楽解怠」（六六・六七頁）という題で、宝暦九（一七五九）年三月一七日に古春が天王寺に於いて能を行ったという記事の解説である。この記事によれば、古春が演能したのは、天王寺と楽人の間に争論があって二月二二日の聖徳太子聖霊会の舞楽が出来なかったので、「僧侶も音楽無之ゆへ、せめて申楽の能を数番催して太子に奉納なさんとて、三月中旬に南門に舞台をしつらひ。能を興行せんとて、能太夫は古春左衛門、河勝左兵衛へ被申付候。」という事情だった。この時の古春の演能は楽人が舞楽に出ないという異常事態によって生じたものであり、恒常化したものではなかったろう。この日の催しは前掲の『浪花文庫』の番組によれば、翁・能十番（この内最後の二番は日暮となったため取りやめ。）・狂言七番という大がかりなもので、「此度天王寺能興行之費、凡百金余なり。」（同書）であったという。

また、この催しとほぼ同時期に刊行された宝暦版『改正能之訓蒙図彙』（表章 能楽資料集成一〇 わんや書店二〇四頁）の「京都の部附大坂」に、宝生流の大坂住の役

筆者の頭として「南久太郎町一丁目東へ入 古春左衛門」の名が見られる。また二番目にも「同（所）同（姓）新三郎」と古春姓の名が見られる。そして同書は幸流小鼓方に「堂島北町 古春利左衛門」と、古春姓を持つ者がいたことを載せている。或いはシテ方の古春の一族であるかも知れない。この本の刊記のある宝暦一二（一七六二）年前後において、古春家は大坂の宝生流の家として重んじられていたと考えて良いだろう。

古春家は尾張藩お抱え役者の宝生鉄五郎の芸事後見も勤めている。野々村氏前掲一八七頁）は、「尾張藩の能楽」に於いて宝生金三郎に触れ、「宝生金三郎の召抱へられたのは、何時の頃か不明である。その子鉄五郎は文政十五年父の後を襲ぎ、江戸に在住してゐた。若年の頃は、宝生大夫と古春左衛門とがその後見となってゐた。」と述べておられる。（文政は一三年までであるから、文政一五年は天保三年をさすかも知れない。）藤田六郎兵衛氏蔵「安政五（一八五八年）戊午八月改分限帳」（「名古屋芸能文化」第四号平成六年三四頁）の宝生鉄五郎の項に、「文政十二（一八二九）年巳七月廿九日、親金三郎跡御大夫被召抱、御切米三拾五石、御扶持江戸五人分・尾州三人分被下置。若年二付、宝生大夫・古春左衛門後見相勤候筈。」とある。この資料によれば古春左衛門が宝生鉄五郎の芸事後見を勤めたのは文政一二年からとなる。同書に「天保二卯（一八三一）年、古春左衛門、後見御免被成下候。」とある。鉄五郎はこの『分限帳』に四三才と書かれている。この事から鉄五郎は文化一二（一八一五）年生まれであり、古春左衛門が芸事後見を勤めたのは、鉄五郎が一四から一六歳までであると言える。

天保一四（一八四三）年十月には古春左衛門が大坂に於いて舞台再興を願い出て却下されている。このことは「触れ」として『大坂市史』（第四巻一七一五頁）に記載されている。この記事の内容は、もと大坂に五箇所あった能舞台が当時一箇所であったこと。古春が天保一三（一八四二）年に再興を願い出た舞台も実際には「取締中と申迄ニ而、其後も中絶同然之姿」であったこと。そこで勧進能を五年に一度許可する「古例」に復するのを条件とし、能舞台は一箇所で済むという理由で再興は「差止」たというものである。

この「触れ」が歌舞伎役者・人形遣いの住所限定、勧進相撲の年一度の限定等、芸能規制の一環として出されていることを考慮しても、当時大坂の能が衰微に向かっており、古春家も自らの舞台を維持する力がなかったと考えて良いのではなかろうか。前掲の宝生鉄五郎が「江戸住」の太夫であったことを考えると、古春左衛門も江戸にいたことが多かったかも知れない。

以上のことから考えて、古春増五郎は、能の家として格式があり、名古屋の役者と縁のある家のものであったと言える。このことから、明治期の名古屋で迎えられる資格があったと考えられる。

追記

この古春家に関しては、関西の研究者の間でも関心が高まっている。平成六年十一月、関西の能楽研究者の研究会である「六盤会」に出席する機会があった。その会で古春家に関係する発表を二つ聴くことが出来た。一つは中川桂氏の「近世大坂の能舞台」という発表で、大阪の能の定舞台の変遷について述べたものである。さらに一つは小林健二氏の「沼名前（ぬまくま）神社神事能―出演役者の素性」という発表である。この発表は、福山の沼名前神社の神事能に出勤した役者の人物索引を作り、それらの役者の素性を明らかにするという内容だった。

二つの発表とも、両氏の捜された新出資料を多く用いられた刺激的な発表だった。それらの資料は近く活字になるとのことであるが、非常に待ち遠しい。近世における古春家の活動が明らかになれば、関西と名古屋能楽界の交渉に関する新たな発見もあるかも知れないと思う故である。

（筆者は相山女学園大学生活科学部助教授）

龍吟会
藤田六郎兵衛
名古屋市西区幅下二丁目一〇番九号
電話（〇五二）五七一―五七六三

幸清会
幸義太郎
正昭
東京都中野区丸山二―二四―一―310
電話〇三（三三三三）五六七二番
FAX

幸友会
涛華能
福井啓次郎
福井良久
福井良治
柳原冨司忠

大倉源次郎
〒532 大阪市淀川区宮原五―五―八 ローズコーポニュー大阪七〇五
電話〇六（三九七）三三二三

桂会
後藤孝一郎
嘉津幸

冨耀会
柳原冨司忠
〒456 名古屋市昭和区滝川町47―147 サザンヒル八事2―703
電話（八三二）一〇三一番

小鼓教室
名古屋市中区栄 朝日神社内（丸善前）

瀬尾乃武
〒171 東京都豊島区西池袋1―30―10―305

亀井俊一
忠雄
保雄
実

谷口正喜
京都市上京区中立売通室町西入室町スカイハイツ610号

叶石会
河村総一郎
河村真之介
466 名古屋市昭和区前山町一丁目二三
電話（〇五二）七六一―四八八二

河村大
602 京都市上京区仁和寺街道千本西入コスモトゥディ四〇二号
電話（〇七五）四六二―四一一五

呉竹会
寛鉱一

吉田定男

飯島佐之六
〒920 金沢市香林坊2―8―17

前川光隆
前川光長
京都市右京区御室芝徳町一の六
名古屋稽古場 名古屋市東区英二―13―3 ツインクルガーデン601前野舞台
電話九三二―八八〇六番

金春流太鼓
青耀会
上田悟
〒530―02 和泉市光明台三丁目15―25
電話〇七二五（66）八五二一
名古屋稽古場 名古屋市中区丸の内二―三―一七 那古野神社
電話（〇五二）二〇一・四〇三〇

長生会
鬼頭喜太郎
好信
大鼓方 鬼頭英二
愛知県中島郡平和町城西
電話（〇五六九）㊊一九六〇番

助川龍夫
助川治
〒453 名古屋市中村区下米野町3―27
電話（〇五二）四五一―九六一一

大蔵流
大蔵狂言会
大蔵彌右衛門
大蔵彌太郎
大蔵吉次郎
〒215 川崎市麻生区岡上四三八―一
電話〇四四（九八七）一一八七番

名古屋和泉会
大垣狂言の会
和泉元秀
和泉元彌
和泉淳子
三宅藤九郎

茂山千作
千五郎
真吾
千三郎
正邦

◆師走の舞台から◆

「第六回涛華能」「第廿六回義捐能」「壺泉会」「大槻自主公演能」

竹尾邦太郎

「楊貴妃・玉簾」 シテは当地初来演の三川泉。宮の前に十二条（左右も略同数）の厨箱の翠帯を下げ、その美麗は如何にも玉楼。それだからこそ、へ九華の帳を、と左手で簾を押し分けた時、垣間見せる泣増の容に憂愁は深い。勅状を齎すワキ方士・宝生閑の恐懼は、初同前、平伏してシテと連吟するところ、ぐっとくる。再び帳（とばり）を隔てる対面は、君の消息を知るにつけ、悲傷の思い只ならぬ雰囲気がワキを通じてひしひしと伝わる。君への報告に証拠の品を乞うワキに、へこれこそありし形見、と今度は扇で右に大きく押し分け左手で天冠を渡す。更に証の言葉を求めるワキに、尤も、と言いつつ郷愁を掻き立てられるところ、しっとりとした地謡（乾之助・隆三ら）に覚えず感情移入させられる。へさす袖の、と床几を立ち、簾を分けて右足から宮を出たシテは、襟白二・白摺箔（舞芝文）・緋大口・白地金花菱（牡丹菊鳳凰文）唐織壷折の気品。物着に一旦戻された天冠を着け、イロエは抜く。舞ゲセに、へ仮に人界に生まれ来て、とひっそりと音たてずに踏む拍子が如何にも秘密めかして象徴的なら、憐れ儚い己が身上を、へ身の露の、と左袖に視線を遣る具象はシテの機微に触れる。典麗静やかな序ノ舞は所謂「霓裳羽衣の曲」、安禄山に追われた玄宗は曲を半ば見残して落ちてゆくが、「此仔細を以て楊貴妃の序の舞の位を序破迄となし急無き囃子といひ序破の舞とは云ふものなり」という。心残すかの余情で舞上げると天冠は再びワキに渡り、へさるにても、のシテの招き扇もせつなく、一ノ松に下居するワキは右手をつき、天冠左手に捧げて暇乞いすると発ってゆき、シテはしおしおと宮の横へ伏し沈みてゞ、と扇翳しつつ下居から安座、囃子（六郎兵衛・啓次郎・総一郎）留とした。（1時間26分）

「石神」 大酒で離縁迫られ困惑の夫・又三郎、仲人・礼之助に相談するがそこは男同士の心安立て、「よいやうにおしゃらう迄よ」、と顔見合わせての呵々大笑は仲人も中々のワル。離縁成就は石神の心次第と因果含められ、参詣する妻・信行に夫扮する石神は「ノー」のサイン。「今迄の様に添はずはなるまい」の妻の諦念は可哀相だが、石神へせめてものお礼とて神楽（六郎兵衛・啓次郎）を上げる。舞う裡エクスタシーの境に至り、躍動する肢体に夫はなんぼう堪るべき、ぐんぐん惹き付けられて連舞の果てにバレル迄、活き活きとした舞台だった。（33分）

「善知鳥」 シテ乾之助、ツレ雄賀、ワキ旅僧・閑。証に水衣の袖を解くところ、仕付糸がきつくて強く引き拗るのが思い断ち切るかで、一ノ松でそれを受け取るワキも神妙。立ち別れて二ノ松、耐えかねる様にさっと振り返ってワキを見送るシテに、ワキも振り向く阿吽の呼吸もよく、シオリのまま地（淳雄・隆三ら）一杯に三ノ松、更に深閑の中を幕入する前場に粛然の気があった。

後は蝮男・黒頭・濃紺無地熨斗目・白縦水衣・腰蓑（羽蓑でないのは愛鳥家の面目か）・往事渺茫、殺生に没頭して他を顧みなかった業（ごう）を、地との掛合からクセにいうところの深刻味は、現代の仕事人間に通じて恐ろしい。へうとう、と常座で悲愴な声に拍子三つ踏めば眼目のカケリ。正中小廻りして正先の笠上虚空を一打し二ノ松へ、ゆっくりと杖突き一ノ松に戻ると頭を取って笠を見込み、ワキ正で再度笠を見込むと両手で、次いで左手に、杖を持ち直すと大小前、刀の様に杖を右手で抜いて笠に進み虚空を二打、そして音を立てず一つ、音を立てて一つ、拍子踏んだ。笠を直に打たないところは気迫の形象を見る思いである。キリは、へ紅葉の橋の、とスミへ鮮やかに笠を投げたのや、へ逃げんとすれど、と正中からスミへ抜き足に往くところ、が印象に残った。それにしても、三婦人と三卑賤の一を並べた皮肉な番組の、双方のワキを勤めた宝生閑の位の在り方云々の前に、さぞ演り難かっただろうと思うばかり。千代童は辛抱が足りなかった。（1時間8分・12月3日・涛華能）

「枕慈童」 一畳台三方を取り回す生花の菊が風情を添え、薬屋（菊薬屋に非ず）の引廻を取るとシテ博粘つくねんと居て一景である。襟浅黄赤・萌黄半切（金唐花菱文様）・浅黄唐織（三巴唐花菱文様）蛋折が明るい印象を与え、不老長生の童子が潤達に舞う楽（がく）も朗らか。へ潭ひ寄りて、と台に上って枕を戴き、台上右左と膝を着いて直ると唐扇をカザシて安座する所も鮮やかだった。キリは頭を取って酈県の山を望み、へ尽きせじや、と檜懸に抜けると地一杯に三ノ松でトメる。ただ薬屋を出るのに足元を見て立ったが、慈童の天衣無縫に慎重はそぐわない。（39分）

「龍田」 一畳台に萌黄引廻の小宮は龍田明神、その神木の紅葉が散り敷いて錦あやなす龍田川を渡るのは、たとい薄氷下とて御神体を足下にすること、薄氷を履む、の喩えもある、とワキ旅僧・勝久の無謀を強く戒めるシテ郁子の、気合が入った前場はわわしい程。間道にいざない、へいざ宮廻り、とシテ・ワキ見合い、へ名に負ふ、と下居からすっと立つ気負いに、中入のへ龍田姫は我なり、の顕示も利く。後シテは面少々テリ気味で、シテ謡は些か咆哮に聞こえないでもない。しかしその意気込みは神楽から直って中ノ舞と楊達。キリの、へ吹き乱れ吹き乱れ、の撓ネ扇が美しかった。全体としては気張り過ぎ。（1時間31分）

「佐渡狐」 シテ佐渡ノ百姓・高義と越後ノ百姓・信行の掛素袍は色違いだが同じ折鶴文様。対立する二人だけに文様も替えた方が、と思うが家の決めか。また、シテが狐の形貌を奏者・又三郎の教示に仰ぐところも、又三郎家台本は手の内見せかねない程くどくきわどい。だからこそ「らしく」話を進める力量求められるが、スムーズな展開は見事。キリに鳴き声を問われてグッと詰るシテの、「ぐうぐうと鳴くわいやい」はさもありなん。（28分）

「殺生石」 大小前、一畳台に石の作物を据える。シテ正邦、前は何やら妖美な面（近江女か）を掛け、中入前、へあら恥かしや我が姿、とワキ玄翁（元）にアシラウところなど悩殺せん勢いで少々品はない。作物に中入し、後は小飛出・赤頭・襟紺・紅白段厚板・赤地金宝輪文様半切・金地唐花菱文様袷法被の金ピカの妖狐・袖扱いの疾風、足拍子の迅雷、猛々しい運びも荒っぽく、女狐玉藻前の翅やかに跳躍するイメージに遠いが、粗削りながら存分の働きはダイナミック。小掛付でないので橋懸へも往けず、大柄な肢体を舞台だけに持て余して暴れまくった、と言えなくもなかった。（1時間2分）ところで、薬屋・小宮・殺生石、加えて一畳台も出すという能三番、後見の出入もさることながら見た目にも煩い番組だった。（12月4日・第26回義捐能）

「腰折」 シテ祖父・又三郎、屈んだ腰を杖に頼って暮を放れた直後、三ノ松に止ってキッと右に面を切るところ、腰の曲った老人の何気ない特徴を一瞬に捉えて鮮やか。その生態模写の巧みに期せずして笑声が起る。顎の上下動、歯抜け声、腰の捻りと屈伸、と細かい表現を拡大してみせる又三郎、アド山伏・信行の法力でギクギク動くところはチャップリンの物真似芸や人形振を思わせた。（18分）

「乱・双ノ舞」 シテ嘉夫・ツレ雅一郎。へ猩々舞を舞はうよ、とツレがシテを誘ってスミから常座へゆくと、へ声の葉の笛を、の地（善高・正人ら）で連舞となるところ、酒興の戯れの喜悦。乱（みだれ）は、ツレが波を蹴立てる乱レ足から水に乗る流レ足となるのを、一ノ松床几で望見して居たシテが、酔いに任せ「よし」、という気分で再び舞い出す連舞が楽しい。形影相離れ、先ずツレの酔臥の褄にシテ独りが舞うところでは、酔の微妙を陶然の気にみせて嘉夫の面目。（37分・12月11日・壺泉会）

「花月」 先ず常は無い桜立木をスミに置く。シテ鎖之丞。きりっとした喝食の面・襟白赤・金浅黄段鉄線文様縫箔・黄大口・濃浅黄水衣の若々しく綺麗な姿、出から既に羯鼓も付けていた。小歌、へ恋と云へる曲者、でアイ忠三郎、桜立木を背に膝を着き、拘うようにシテの顔色窺う剽軽は、じれる様にシテに寄り添い、開いた扇を口に当てるのも、なーいしょ、の茶目っけ。シテはお節介の煩を厭うか、照れか、へ恋こそ寝られぬ、とアイを突き放せば、膝を着いた視線の先に花を見たアイは、「花に目がある」、頓狂に叫ぶ。この辺り、鎖之丞と忠三郎息の合ったところをみせる。へいでもの見せん鴛、と花を指し、足音高く拵拍子、次いで忍び寄るかに、へ足取を踏ん脱いで、と大仰に抜き足をする弓ノ段の諧謔味も捨て難い。親（雅之助）千再会を果した後の慶びの羯鼓（伝之輔・照雄・総一郎）は、物着がないだけでは早速ののり、心の弾みが現われる軽快である。キリの山巡りに、へ鬼が城と、で撥二本、鬼の角に見せて両手に持ち上げるのも面白く、巧者が軽々と自在に舞って楽しい一番だった。（46分）

「横座」 厩物と知らずに牛（正邦）を得たアド幸四郎、被害者のシテ千作は回復追求権を楯に返還を迫る。「返さぬでもないが」と厩揚な幸四郎の好人物ぶりが光る。三声名を呼ぶ裡に応えたら返す、の条件に、畜生とて心有らんと努力傾注する千作の涙ぐましい奮闘ぶりも蓋し見事だった。（25分）

「乱・双ノ舞・霊壺」 シテ晋・アド信一郎、熟れた連舞の美しさ。壺に寄って酌む所、ニンフが水に戯れる趣。囃子方・地謡・後見、裃を着けなかった。（40分・12月14日・大槻自主公演能）

〔おことわり〕年賀広告の掲載につきましては、紙面の都合上、掲載は順不同ですので何卒ご理解を賜りますようお願い申し上げます。

新年謹賀

野村万蔵
東京都豊島区南長崎六―五―三
電話〇三―三九五〇―五二八八番

名古屋和泉会
狂言共同社

狂言やるまい会
野村又三郎
野村信行
〒460 名古屋市中区正木二丁目16―25
電話（三三一）七五五三番

能楽講座
能と狂言に親しむ会
梅田邦久
藤田六郎兵衛

朝日カルチャーセンター
囃子教室
小鼓 後藤孝一郎
丸栄スカイル10階

能楽写真
ウシマド写真工房
〒602 京都市上京区北野上七軒
TELo3ー四六二ー一三四一番
FAXo3ー四六一ー五七七二番

楽諷庵舞台
名古屋市昭和区滝川町四七―八三
電話（八三二）七〇〇一番

能楽の友社

ビデオ撮影
西川企画
〒451 名古屋営業所 名古屋市西区名駅2―20―3 輪の内荘 小椋方
電話（〇五二）五七一―五八一六
〒500 岐阜市北野町20―2
電話〇二六―二六三―九八六九番

栄能楽舞台
名古屋市中区栄五―六―四
電話（二六二）一一八三番

葵心庵舞台
尾張旭市東大道町原田二四九三ノ二 若杉ビル（旭市役所南）
電話〇五六一五③二三四六番
能舞台 電話〇五六一五④〇六九八

彰諷閣
名古屋市天白区植田西二―八〇二―二
電話（〇五二）八〇五―三三〇一
連絡先 名古屋市緑区鳴海町有松裏40―9
電話（〇五二）六二一―四二三八

能楽殿喫茶室
グリル 喫茶 城
猪口節子
連絡先 〇五二―九三七―〇一八二

年賀欠礼致します
大西智久
茂山忠三郎

観世流・金剛流
宗家本発行元
檜書店
〒101　東京都千代田区神田小川町2－1
電　話03（3291）2488－9　振替東京3－3552
〒604　京都市中京区二条通麩屋町東入
電　話075（231）1990　振替京都1－113

能楽の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18-18
（郵便番号　464）
電　話（052）731－7984
振替口座　00800-6-36393

購読料　1年1100円
郵送の場合　1年1800円
一　部　100円

井上松次郎師

傘寿記念・名古屋演劇ペンクラブ特別賞受賞

祝賀　能と狂言の会

3月25日　熱田能楽殿で

和泉流狂言方・井上松次郎氏の傘寿祝賀、名古屋演劇ペンクラブ特別賞受賞を記念する「能と狂言の会」がきたる三月二十五日（土）熱田神宮能楽殿で催される。

井上氏は、大正三年生れ、名古屋狂言共同社代表、昭和四十三年日本能楽会会員認定、五十四年から五十八年まで能楽協会名古屋支部長、能楽協会理事、五十四年度第一回名古屋市芸術特別賞受賞、六十三年勲五等双光旭日章受章、平成元年十月、名古屋市制百周年に際し市政功労者として受彰。なお狂言共同社は平成三年に観世寿夫記念法政大学能楽賞を受賞。

祝賀の演能には、片山九郎右衛門、和泉元秀和泉流宗家が来演。「翁」（片山九郎右衛門、三番叟井上靖浩）、「髭櫓」（和泉元秀）を上演。井上松次郎師は、老人物の大曲「枕物狂」を所演する。

なお名古屋演劇ペンクラブは平成五年十二月に井上松次郎師に特別賞を授与、この受賞式が行われる。

記念の演能は、名古屋市教委、狂言共同社が後援。（番組③面）

時空を越えて…和のオペラ

春　幽玄の世界

3月22日　NHK名古屋で

きたる三月二十二日（水）、NHK名古屋放送センタービル・プラザウエーブ21で、「～時空を越えて再現される和のオペラ～春　幽玄の世界」が上演される。

この舞台は、全国でも初めての試みで、「和のオペラ」といわれる「能」の魂を単に現代の空間にあてはめるだけでなく、「舞」・「音楽」・「語り」の三本の柱による演出を試みることで、新しい能舞台を創作し発信しようという斬新なイベント。能の愛好者だけでなく、これまで能に関心のなかった人、若い世代の人たちにも広く話題をよぶものと期待されている。

名称～時空を越えて再現される和のオペラ～春　幽言の世界

主催　NHK名古屋放送センタービル共同事業者
NHK名古屋放送局、第一生命、日本生命、名古屋鉄道
会場　NHK名古屋放送センタービル・プラザウェーブ21
とき　三月二十二日（水）
◆Kyogen（正午～午後一時）
「三番叟」舞・野村又三郎、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・福井啓次郎、後藤孝一郎、柳原冨司忠、大鼓・河村総一郎。
「蝸牛」山伏・野村信行、主・奥津健太郎、太郎冠者・井上祐一
◆Noh（午後七時～八時三十分）
「智恵子」原作高村光太郎、作曲仙道作三、企画／構成藤田六郎兵衛
第一場　オペラ　智恵子抄
第二場　能・智恵子抄、朗読智恵子抄
出演　能　大槻文蔵（智恵子）
観世銕之丞（光太郎）藤田六郎兵衛（笛）大倉源次郎（小鼓）河村【其之介（大鼓）、地謡観世暁夫、西村高夫、片山清司、柳田稔
アリア　洞谷吉男（バリトン）
朗読　観世葉子
◆入場無料（ただし着席券必要）
着席券は官製ハガキ（一名につき一枚）に住所、氏名、電話記入のうえ、〒461－91、NHK名古屋放送局事業部「春・幽玄の世界」係まで。
「狂言」「能」のいずれかも必ず記入。締切りは三月十日。会場はオープンスペースなので立見もできる。

◆演能カレンダー◆

（熱田神宮能楽殿）

〔2月〕
19日（日）九皐会定期能　（有料）（番組①面）
25日（土）恵美寿会（来場歓迎）（番組①面）
26日（日）恵美寿会（来場歓迎）（番組①面）
〔3月〕
5日（日）大蔵狂言会（来場歓迎）（番組①面）
11日（土）能と狂言の世界・普及能　（有料）（番組②面）
12日（日）三交会（来場歓迎）（番組②面）
18日（土）名古屋能楽鑑賞会　（有料）（番組③面）
19日（日）梅猫会　（有料）（番組③面）
21日（祭）巽会　（来場歓迎）
25日（土）井上松次郎傘寿記念狂言会　（有料）（番組③面）
26日（日）泉会大会　（来場歓迎）
〔4月〕
1日（土）翠謡会　（来場歓迎）
2日（日）能楽殿創立40周年記念能　（有料）
8日（土）名古屋猫風会　（来場歓迎）
9日（日）観世会定式能　（有料）
16日（日）邦謡会　（来場歓迎）
19日（水）花伝の会「能・狂言」公演　（有料）
（演能変更の節はご了解下さい）

名古屋観世九皐会能（初回）

二月十九日（日）午前十一時始
熱田神宮能楽殿

素謡　神歌　胥木武弘　加藤保彦
能　田村　中所宜夫　杉江元　吉田定男　後藤孝一郎　大野誠　間　井上礼之助
狂言　因幡壁　野村又三郎　野村信行　後見　松田高義
春日龍神　観世喜正
胡蝶　佐々木勝輝
仕舞　花月クセ　五木田武計
玉ノ段　観世喜之
高橋暁一
能　雲林院　飯冨雅介　河村総一郎　福井啓次郎　助川龍夫　藤田六郎兵衛　間　松田高義
附祝言

主催事務所　名古屋観世九皐会
457　名古屋市南区元塩町一－一－一七（加藤保彦方）
TEL　〇五二（六一一）三六五九
〔要会員券〕当日自由席券　五千円

第3回恵美寿会

第一日　二月二十五日（土）午前十時始
第二日　二月二十六日（日）午前十時始
熱田神宮能楽殿

〔一日目〕（二月二十五日）
舞囃子　弓八幡（衣斐愛）
素謡　高砂、海人、唐船
仕舞　嵐山（河合佐紀）鳥追（若原さおり）花月・キリ（中村多栄）
仕舞　高砂（小野郁子）網ノ段（早川照子）胡蝶（山本洋子）
素謡　夜討曽我、融、国栖
仕舞　網ノ段（梅田順二）鵜ノ段（三橋茂三）
仕舞　岩船（石川利子）善知鳥（酒井敬子）
仕舞　三井寺（寺田澄子）松虫・キリ（平岡一子）
舞囃子　七騎落（森峯子）忠度（小林福子）山姥（松田よし子）
素謡　邯鄲、清経
仕舞　玉ノ段（吉野靖子）笠ノ段（花井きみ）
仕舞　野宮（竹内喜代香）采女キリ（伊藤君子）
舞囃子　玉葛（大島田鶴江）西行桜（村瀬郁子）須磨源氏（竹内良伯）
素謡　花筐
仕舞　籠（久野幸三）通小町（竹内孝成）
舞囃子　鶴亀（竹内淳一）高野物狂（浦野正二）
素謡　頼政
仕舞　鞍馬天狗（門脇達祐）杜若キリ（竹内繁）
舞囃子　清経（長阪清子）高砂（余語一子）

〔二日目〕（二月二十六日）
素謡　竹生島、土蜘、絃上
仕舞　巴（林佳代子）吉野節キリ（林治代）
仕舞　経政クセ（竹内久人）八島（内藤飛龍）
素謡　高砂
仕舞　経政キリ（前田素女子）巻絹キリ（小坂絢子）
舞囃子　胡蝶（酒井美由貴）右近（山名達郎）
仕舞　大江山（吉房瞳）天鼓（千田梅倭子）
舞囃子　羽衣（後藤恒子）放下僧（松村七雅子）
素謡　咸陽宮
能　班女　鈴木マチ子　飯冨雅介　杉江元　河村真之介　福井啓次郎　藤田六郎兵衛　間　佐藤友彦　井上祐一
仕舞　花筐クルイ（中村しきよ）砧アト（関上喜代枝）
舞囃子　蟬丸（嶋ちよ）雲林院（梁田道子）
素謡　俊寛
舞囃子　邯鄲（犬塚恵）松風（鬼頭京子）
能　熊坂　中埜恵生　高安勝久　筧鉱一　鬼頭喜太郎　柳原冨司忠　鹿取希世　間　大野弘之
附祝言

〔御来場歓迎〕
主催　恵美寿会
衣斐正宣

大蔵狂言会なごや会（第25回）

三月五日（日）正午開演
熱田神宮能楽殿

狂言組
小舞　七つに成子　宮本昇
鵜飼　真船道朗
鞍馬参り　花井雅子　高木久美子
柿山伏　牛田明伸　牛田敏明
小舞　歯雪　山口和枝
泰山府君　高木久美子
鴈金　河村文　花井貴久子
鱸庖丁　松川佳澄　樽本道子
十七八　竹内寛
岩飛び　森浩一
景清　牛田敏明
昆沙門　村松泰子　大蔵基照　大蔵基誠
比丘貞　放下僧　丹羽節　樽本道子　丹羽理紗子
貝尽し　大蔵吉次郎
餅酒　大蔵彌太郎　大蔵彌右衛門
附祝言
〔入場無料〕
主催　大蔵狂言会なごや会
代表　丹羽節
指導　大蔵彌右衛門

春雅日記

(159)

七草粥

えと文 二井栄逸

せり、なづな、御形、はこべら、仏の座、すずな、すずしろ、これぞ七種、という歌がある。

中国では七種（ななくさ）の生薬は薬物（あつもの）にしたともいわれ、日本でももとは薬物であったようで、室町時代の頃から粥に入れて食べるようになったと物の本にはかいてある。

祖母が生きていた頃、よく七種囃子をきいたものだ。

正月の六日の夜から七日の朝にかけて祖母は、まないたに七種をならべ、トントンときざみながら

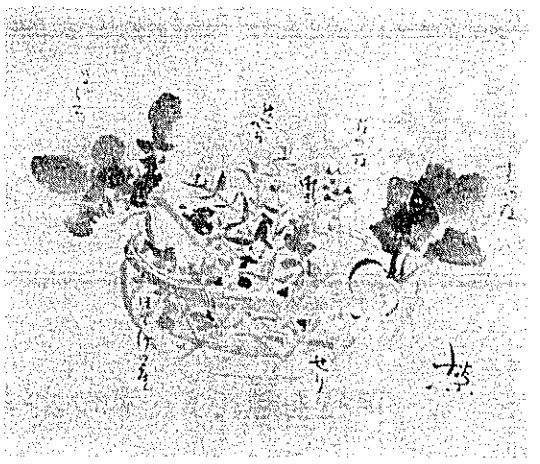
——七草なづな
唐土の鳥と
日本の鳥と
渡らぬ先に……

などと囃すのである。

求塚や二人静などの前半は、のどかな若菜つみのが展開されて美しい。

この七草囃子のもと歌は、鳥追の文句であったらしい。

（平成七・二・一）



名古屋市芸術奨励賞
大鼓方 河村真之介氏

名古屋市では一月二十七日平成六年度名古屋市芸術賞として、芸術特賞、芸術奨励賞の受賞者を発表、能楽部門で、大鼓方・河村真之介氏が芸術奨励賞を受賞した。

真之介氏は昭和三十九年十一月生れ、能楽師石井流大鼓方・河村総一郎氏の次男、五歳より子方として舞台に立ち、八歳より大鼓の稽古を始める、昭和五十一年石井流に入門。囃子「西王母」を披く。五十八年初能「菊慈童」六十二年能楽協会入会。同年「猩々乱」六十三年「翁」「石橋」平成二年「道成寺」平成四年「望月」を披く。

名古屋では初めより能楽を専業とする数少ない能楽師で、名古屋を中心に中部、関西で活躍。シテ方・ワキ方と違って囃子方として目立たない存在であるが、名古屋の能楽界をになう若手として、今後の活躍が期待される。

能楽師育成会 生徒募集

能楽協会名古屋支部では、県の文化活動補助制度の協力を得、「能楽師育成会生徒」を現在隔年で募集致しております。

能楽の世界に興味を持っている方、また将来能楽の世界で生きていきたいと思っている方、是非ご応募ください。

○資格 原則として、十二歳から二十五歳までの男女。国籍は問いません。興味のある方ならどなたでも結構です。

○講義内容 必須科目として月一回の謡の授業があります。他のワキ、狂言、笛、小鼓、大鼓、太鼓の各役も希望により受講できます。

☆終了時に能楽殿舞台にて終了発表会を致します

☆受講料は一切必要有りません。

★なお、一年の育成期間の成績により、終了以後も希望者には「養成生徒」として、より高い専門教育を受けることが出来ます。

○講師 能楽協会名古屋支部支部員が担当します。

○講義期間 本年四月より翌年三月までです。

○試験日と試験方法 三月十一日に面接を致します。

★三月五日までに、四百字程度の作文（タイトル自由）と顔写真、簡単な略歴書をお送りください。

○場所 熱田神宮能楽殿にていたします。時間等は後日当方よりご連絡致します。

○申込みと募集期限 三月五日までにご送付いただいた作文、顔写真略歴書を当方にて受理した日時を申込み日といたします。

○申込み、問い合わせは、名古屋市熱田区神宮一—一—一
熱田神宮能楽殿内能楽協会名古屋支部
電話（〇五二）六八二—一七五一

能や狂言の世界は代々世襲の世界のように思われがちです。しかし全国のプロ活動をしている人達の中には、大学の能のクラブに入り、そのままこの世界に入った人もいます。また映画で能の場面を見て「いいなぁ」と思い、この世界に入った人もいます。皆さんが能や狂言に「何か」を感じたら、それがこの世界に入る「資格」となるのです。多くの募集を期待しています。

能や狂言は保存芸能ではありません。各時代時代に生き、その時代の人々に何かを訴えかけて存在してきました。

オペラやバレー、絵画等のように世界の人々に多くの喜びを与える文化と同じく、この能や狂言も地球上に住む世界の人々の共有財産の一つなのです。

能楽協会名古屋支部
支部長 野村又三郎

能・狂言—普及公演—

三月十一日（土）
一部・十一時／二部・二時
熱田神宮能楽殿

〔一部〕十一時始

解説 本日の能について 梅田邦久

狂言 不見不聞
太郎冠者 野村又三郎
主 松田高義
菊市 野村信行
子方 松山晃之
武田邦弘
後見 井上祐一

能 隅田川
飯冨雅介
杉江元
吉田定男
福井啓次郎
藤田六郎兵衛
後見 近藤幸江
中川雅章
地謡 高島良一
松山幸親
須部清沢
加賀敏彦
久田徹二
梅田邦久
古橋正邦
清沢一政

〔二部〕二時始

解説 本日の能について 久田徹二

狂言 名取川
新発意 野村又三郎
名取の某 井上祐一
後見 佐藤友彦
師長 中川雅章
姥 松山幸親
龍神 清沢一政
久田徹二

能 玄象
高安勝久
辻本正樹
笠鉱一
柳原冨司忠
鬼頭喜太郎
大野誠
間 佐藤友彦
後見 前野郁子
梅田邦久
地謡 上野嘉彦
八神孝充
今村嘉男
加藤保彦
高橋暎一
武田邦弘
泉嘉夫
祖父江修一

※公演二部終了後、出演者と懇談の場を設定（約三十分程）

各部とも前売二、五〇〇円（当日三、〇〇〇円）学生一、五〇〇円
前売り＝市内各プレイガイド、「ぴあ」、熱田神宮能楽殿
問い合わせ 熱田能楽殿（TEL052・六八二・一七五一）
主催 能楽協会名古屋支部

三交会大会

三月十二日（日）午前十時始
熱田神宮能楽殿

素謡 千手
早川功一
大川雪子
林貫一

仕舞 放下僧 小歌 鈴木多美子 羽宮 山口幸田 衣キリ 森清子 村キリ 立松美貴子

仕舞 雖井 波関明子 紅葉狩 泉あつ 箇中村立子 笹之殿 中田恵子

舞囃子 敦盛 渡辺幹子 唐船 伸尾和子 独吟 頼政 後藤弘次郎

舞囃子 高砂 早川功一 松風 光松見知子 五段 原小夜 遊行柳 胥柳之舞

能 砧
祖父江修一
瀬戸勝治
高安勝久
河村総一郎
福井啓次郎
鬼頭喜太郎
藤田六郎兵衛
梓之出
間 井上祐一
後見 橋岡慈観 久田徹二 松田慈観二
地謡 松山幸親 高橋暎一 清沢敏彦 加賀一政 上野朝義 鵜沢嘉夫 奥普助 泉雅章

番外狂言 柑子 佐藤友彦 井上礼之助（後見）井上靖浩

番外仕舞 雲林院クセ 橋岡慈観

能 菊慈童
原田千恵子
杉江元
辻本正樹
吉田定男
後藤孝一郎
助川鹿取
竜夫
希世
遊舞之舞
後見 奥普助 橋岡慈観
地謡 鈴木多美子 三村恵子 前野郁子 近藤幸江 祖父江修一 上野朝義 中川雅章 下田雄三

仕舞 班女クセ 秋田恵美子 船弁慶クセ 大川雪子 葵上 戸松花枝

舞囃子 草子洗小町 林貫一 龍田 伊藤さち子

仕舞 鶴亀 木村朝一 清経キリ 小谷隆之 玉髪 加納博 小袖曽我 坂崎耕三

番外舞囃子 屋島 瀬戸三津子

（終了予定 四時半頃）

附祝言

主催 三交会
瀬戸三津子

〔御来場歓迎〕

名古屋能楽鑑賞会公演（第二回）

三月十八日（土）午後二時始
熱田神宮能楽殿

解説 演劇評論家 堂本正樹

狂言 昆布売
大名 茂山千作
昆布売 茂山忠三郎

能 清経
片山清司
野村四郎
恋之音取 宝生閑 亀井忠雄 曽和博朗 藤田大五郎
後見 浅見真州 鵜沢郁雄 上野其雄三
地謡 柴田稔 岡田麗史 西村高寛二夫 清水 山本順之 世鍛冶之丞 観世 浅井文義 暁夫

主催 名古屋能楽鑑賞会

〔入場料〕臨時会員券八千円 事務局 名古屋市東区大幸4—19—26 岩田方TEL（052）721—4000
入場券取扱い＝チケットぴあ（052・320・9999）熱田神宮能楽殿・事務局
※会員無料 会費正会員一万一千円（自由席）学生会員五千五百円 特別会員一万八千円＝定期公演二回分

名古屋狂言史余話（一）

佐藤友彦

名古屋の狂言は、京都で活躍していた手猿楽狂言師、山脇五郎左衛門源助（和泉流七世）が慶長十九年（一六一四）に尾張藩祖義川義直に抱えられたことに始まる。これは尾張藩に抱えられた最初のお役者であった。その後能太夫として金春八左衛門が元和三年（一六一七）に、さらに寛永六年（一六二九）に至って笛方の藤田流初代藤田清兵衛が抱えられ、順次整備されることとなる。

山脇家に伝えられた「代々勤書之覚」（狂言辞典資料編所収）によれば、当時の状況が以下のように伝えられる。

其節ハ御役者未壱人も無御座、和泉儀ハ御役者初に被召出、追而知行ニも可被成下候へ共、先当分右之通被下置旨被仰渡御請申上、夫与御国ニ相詰候内ハ毎日御側江相詰、御夜詰迄被仰付御咄相手ニ罷出、難有御意共毎度御座候而、御紋附召下シ御服抔度々拝領仕、（以下略）

能役者としては狂言師が真っ先に抱えられたわけで、異例と言ってもよく、さらに切米百石、扶持方八人分を受け、ゆく〳〵は知行の話もあったと言う（これは実現しなかった）。大変な厚遇であったと言うべきであろう。常にお側近くに仕え、夜もしば〳〵話相手として伺候していたことがうかがわれる。当時お役者としての勤めは殆どなかったと思われ、むしろ藩主の慰み相手として寵愛を受けていたものであろう。この年に起こった大坂冬の陣にも源助は義直の供をしている。

さらに翌元和元年（一六一五）には、何なりとも願い事があらば申せとの藩主の御意により、源助はひとりではお役が勤められぬからと願い出て、京都の手猿楽時代の弟子の内から、山脇正五郎、山脇権三郎、渡辺甚三郎、佐々藤左衛門、筒井市三郎の五名をそれぞれ五〇石、五人扶持で召し抱えに成功している。

しかしながらこれは能太夫として金春八左衛門が抱えられる以前のことであり、いかにしても狂言師ばかり大勢抱えるのは無理があったものだろう。間もなく五名とも暇を出されている。その後寛永年間になって再び召し抱えの話が出るが、すでに死亡したり他藩に出仕したりしていて、結局残っていた佐々藤左衛門だけが以前と同条件で抱えられることになったと言う。

この解雇劇について関谷俊彦氏は「狂言史の基礎的研究」の内で『尚嗣公記』の寛永二十一年（一六四四）五月八日のお役者二十七名が財政危機によって解雇されたと言う伝聞記事に着目され、この時解雇されたものではないかと推測されている。しかしながら『名古屋市史・風俗編』に寛永八年の分限帳の「御能衆」としてお役者を掲載するが、幸若を合めて二十一名、この中にはすでに狂言方は山脇五郎左衛門（源助）の名前しか見られず、もっと早い時期に解雇されていたかもしれない。

また同じ『代々勤書之覚』の記録に、大獄院（秀光）が上洛の際に義直も上京し、その折りに和泉宅に立ち寄る旨の仰せを受け、急ぎ上京した源助は当時四条坊門通り弁慶町にあった私宅に御成の間を建立して義直を迎え、上機嫌の義直から帰国後特別に墨跡を頂戴し、代々これを大切に保存したことが記されている。この上京は元和九年の家光が将軍職襲位の時と思われる。

義直が尾張に封ぜられたのは慶長十二年（一六〇七）、七歳と言う幼少であり、源助が抱えられた当時も藩主義直は十四、五歳の幼君であった。源助の年齢は不明だが、寛永二十年（一六四三）にいったん家督を譲って隠居、その後二代目和泉元永が早世したため再度出仕し、承応二年（一六五三）に再び隠居し、万治二年（一六五九）に没している。

最初の隠居を仮に六十歳として計算するなら、没年は七十六歳、抱えられた時は三十一歳となる。おそらく三十歳前後であったのだろう。幼くして藩主の座に付いた義直が居並ぶ歴臣とは別に、お役者として抱えた狂言師に格別の親近感を覚えていたのかも知れない。ともあれこれらの記事から、一介の狂言師としては源助がまさに破格の待遇、寵愛を受けていたことがしのばれるであろう。

源助は寛永八年（一六三一）に禁裏御所にて「花子」を勤め、和泉守の口宣案を頂戴している。この口宣案の日付は十一月四日となっているが、『資勝卿記』によればこの年山脇五郎左衛門（源助）が石見守の受領号を受けた記事が見えており、さらに『資勝卿記』寛永十四年の記事に、同人が石見守を和泉守に改名したいと願い出ていることが記されている。いずれにしても以後代々山脇和泉を名乗り、後の和泉流の呼称のもととなったものである。

山脇和泉家はこの後尾張藩の庇後を受けながら、他方で京都手猿楽の雄・三宅藤九郎、および野村又三郎をその傘下に組み込むことに成功し、次第に大蔵、鷺の両流に互して一流を建てて行くこととなる。当初は京都住であったが、元禄九年（一六九六）四代目和泉元知（和泉流第一〇世）の時に尾張に居を移し、以後江戸時代を通して代々尾張で活躍することとなるのである。

この山脇和泉家のほかにも尾張藩お抱えの狂言師、いわゆるお役者として代々続いた家には、以下の三家があった。

（山脇藤左衛門家）

前姓佐々藤左衛門家、京都時代からの山脇和泉の弟子で、前述のごとく元和元年に召し出されるが、その後いったんお役御免となり、寛永年間になって再び抱えられた家である。正徳元年（一七一一）三代目藤左衛門の時に山脇姓を許され（『代々勤書之覚』、「藩士名寄」による）、以後明治維新まで山脇弟子家として続いた。やはり京都住のまま抱えられていたが、七世山脇次兵衛の代に尾張に居を移したとされている。

（早川幸八家）

早川幸八家は、初代忠三郎が元禄三年（一六九〇）に雇御用を仰せ付けられ、その後元禄九年より正規にお役者として召し出された家である。三代目和泉元信の弟子であった。一説には山脇家の下男で門前の小僧なみに見様見真似で狂言を修得したとも伝えられるが（伊勢門水『和泉流狂言記』）、天保末頃書写された城下各町のいわれと、そこに住む著名人を掲げた『金鱗九十九之塵』（桑山好之著）では以下のように伝える。

米倉町

乱舞狂言和泉流　御役者　十五石扶持二人分　早川幸八

此早川の先祖は市下に住し商家のよし。狂言を能す。或時御能に出勤す。公のたまわく、よが名はいかにと御尋被遊候時、はったと我苗字忘れたり。本苗早稲田成しを早川とぞ申上たり。夫より改名して、代々早川と名乗る。

（野村又三郎家）

さらに尾張藩のお抱えとなった家には、野村又三郎家がある。慶安二年（一六四九）に近衛公のもとでの演能に二代目又三郎が初めて初代山脇和泉の相手を勤め、その後明暦三年（一六五三）に三代目和泉元信に正式に弟子入りをしている。三代目又三郎の代となって、正徳三年（一七一三）に尾張藩に抱えられ、その後代々京都住いのまま御用の都度尾張に出勤することとなった。

（筆者は和泉流狂言方）

邦謡会能

3月4日　国立能楽堂

邦謡会（梅田邦久師主宰）は、三月四日（土）東京・国立能楽堂で「第十七回邦謡会能」を公演する。

能「屋島」大事（シテ梅田邦久、ツレ片山伸吾、ワキ宝生欣哉）

能「半蔀」（シテ観世銕之丞、ワキ宝生欣哉）

狂言「六地蔵」（野村万蔵）

一調「野守」（片山九郎右衛門、助川治）仕舞「弱法師」（片山清司）「熊坂」（観世暁夫）

名古屋梅猫会定期能

三月九日（日）十二時始

熱田神宮能楽殿

能

萬　松山晃之　熊沢恵美子　杉江元　筧福井啓次郎　鉱一　鬼頭喜太郎　大野誠

間　井上佑一

後見　梅若善高　井上生香　地謡　松山重郷　熊沢幸親　菊池雅一　梅若盛彦　橋本　梅若修一　池内幸三郎

狂言

昆布売　井上礼之助　佐藤融

能

宮　岡田晃一　飯富雅介　吉田定男　後藤孝一郎　藤田六郎長衛

間　佐藤友彦

後見　井戸和男　岡田朗詠　地謡　井戸良祐　熊沢光俱　松山幸親　橋本雅一　梅若基徳　井上生香　梅若善高　池内光之助

仕舞

大江山　熊沢光俱

采女キリ　菊池重郷

藤戸　岡田朗詠

昭君　梅若修一　地謡　井戸良祐　岡田晃一　井戸和男　梅若基徳

能

葵上　梅若善久　梅若盛彦　梅若盛義　高安勝久　辻本正樹　河村総一郎　柳原富司　助川竜夫　鹿取希世

間　大野弘之

後見　岡田晃一　梅若修一　地謡　井戸良祐　菊池重郷　熊沢恵美子　梅若基徳　池内幸三郎　井戸和男　岡田朗詠　池内光之助

（終了　五時二十分頃）

附祝言

主催　名古屋梅猫会

◎金員券　五、〇〇〇円（全席自由席）

◎金員券申込み先　能楽殿・出演楽師・梅猫会事務所

熊沢恵美子（〇五二―七八二―六九七三）

井上松次郎傘寿祝賀　名古屋演劇ペンクラブ特別賞受賞祝賀

記念　能と狂言の会

三月二十五日（土）十二時三十分開演

熱田神宮能楽殿

翁　片山九郎右衛門　面箱　佐藤融　三番叟　井上靖浩　千歳　片山清司

舞囃子　羽衣　佐野萌

狂言　末広かり　井上祐一

狂言小舞　景清　野村又三郎

狂言　枕物狂　井上松次郎

名古屋演劇ペンクラブ特別賞　受賞式

狂言　髭櫓　和泉元秀

◈前売　指定席七千円、自由席五千円、階上席三千円

◈当日　指定席八千円、自由席六千円、階上席四千円

◈チケット取扱い＝松坂屋、名鉄、三越各プレイガイド　チケットぴあ、熱田神宮能楽殿

主催　井上松次郎

後援　名古屋市教育委員会　名古屋狂言共同社

補佐　和泉元秀

能装束の世界展

2月21日から3月19日まで

長久手の「名都美術館」で

朝日新聞名古屋本社発刊六十周年記念「能装束の世界展」が二月二十一日から三月十九日まで、長久手町の名都美術館で開催される。

同展は、伝統文化フォーラム能装束研究所が主体となって、大名が所蔵していた江戸時代の装束など千数百領におよぶ能装束を調査研究し、復原した装束や、江戸時代を中心に、室町時代の作と伝えられる能面など約百二十点（全期中一部展示替え）を展示、さらに装束を復原する過程をわかりやすく、解説するため、蓋盃の様子や繭の種類、生糸や染料なども展示し、能装束の持つ様々な要素を幅広く紹介する。この展示に先立ち、平成五年から六年にかけてヨーロッパの五都市とアメリカのワシントンで開かれた展覧会は大きな反響をよび、その催園記念展として企画された催しである。

主催／名都美術館、朝日新聞社、後援／伝統文化フォーラム、長久手町、愛知県教委、名古屋市教委。

開演時間＝午前十時～午後五時。（月曜休館）　入場料＝一般八百円、大学生五百円、中・高生三百円。

名都美術館（愛知県愛知郡長久手町杁ケ池三〇一、TEL0561・62・8884）は地下鉄藤ケ丘駅より名鉄バスで戸田谷下車。

◈ 年末年始の舞台から ◈

「金剛巌古希祝賀能」「茂山狂言会」「ブラックシアター能」

竹尾邦太郎

「鷺」　狂言口開は千五郎の謹直、神泉苑への帝の行幸をきっぱりと触れて退くと、興のツレ帝を先立て、ワキ蔵人・茂十郎をしんがりに、ワキツレ大臣（三名）が美々しく賑やかに出て正に王朝絵巻。そこに、シテ鷺・巌がふわり下りたつかに一ノ松にとまる。鷺ノ天冠・直面・白袴・白鉢巻・襟白二・白地摺箔・白大口（金流水沢浮浮文）・白腰帯、の姿は神々しく清浄の美しさである。

初間（三千春・恭憲ら）へあら面白の池水やな、と薄く下を見れば、鷺の小首傾げる姿に重なる。それを見たツレの、捉えよ、の恣意は、ツレが子方で巌の令孫龍謹ならばこそ、幼帝の無邪気が微笑ましい。勅諚として、常座の杯一杯に出て右袖被き、一ノ松の鷺を窺うワキ。そのワキが狙い寄る気配に、双ユウケンでひらり幕際に飛び去る大らかな姿態にシテの充実ぶりをみる。ワキの招キ扇にすっと〆飛び下り、て二ノ松に右膝着く恭順も、自然体で衒わない。この辺り、シテとの絡みにワキ茂十郎の真摯も大いに光り好演。

舞は、抜き上げる足と流レ足に鷺の生態を写して、軽やかな乱（みだれ）。放たれて心嬉しく飛び立つキリは、二ノ松で両手を拡げて小廻りするところ、シテの体一杯に悦びの表情が溢れて古希を自祝するかだった。囃子は大五郎・博朗・正喜・惣右衛門、後見を陸一・泰三。（39分）

「木六駄」　主（真吾）の命で、酒樽を担って独りで木と炭各六駄計十二頭の牛を追い都の伯父（千之丞）に届けるシテ太郎冠者・千作一旦は降り出した雪に日延べを言うもこの苦役、理不尽とも思わずあっさり引き受けるところに主従の人情濃やかをさりげなくみせて滋味。叱咤しながら行く牛との険路の道行も人牛一体、一頭〳〵に独立の人格ならぬ牛格を見て呼び掛ける親しさは、愛情に溢れて千作の資性。言葉の表現力もさりながら、演技力の卓抜も、「うわぁぁ吹雪が来るわ」と尻餅搗くかに安座して、両手小刻みに震るわせ息吹きかけるところや、峠の茶屋（忠三郎）に辿り着いて凍えた手に蓑笠脱ぎ兼ねる様、また、手持ちの酒樽には思いも及ばず、心当ての燗酒か無いとて落胆する愚直の哀情、更には、茶屋の説得で御持たせに手をつける段となってからのリラックスぶり、など〳〵枚挙にいとまがない。就中、樽にぶーっと息を吹きかけるや、〆雪打ち払ひて見れば面白や、の「鉢木」の一節口ずさみつつ積った雪を手掴みに、ぱいと投げ捨てる所作の、悪戯心の発露や、酔余起き上りかねて立つと、〆只今のお肴に鵜一羽射んとて、と舞い出す鵜舞の滑説さは、千作の太郎冠者か太郎冠者が千作かの自在の境地。身も心も軽くなったキリは、伯父に案内を乞うのも「物もーっ、案内もーっ」「身どもーっ、私でござる」の牛の声色も浮いた酔心地である。「おのれ憎い奴の」と追い込まれはしても、それはそれ好人物の太郎冠者のこと、和気藹々の雰囲気だった。

なおシテ太郎冠者の肩衣、初めの黒地に白鷺文様は巌の「鷺」への祝意、後の浅葱地に白帆掛舟文様は「尻に帆を掛ける」の隠喩か、味なことだった。（41分）

半能「石橋・和合連獅子」　先ずワキ寂照法師・勝久、沙門帽子・白大口・紫水衣に品位をみせて名宜り座着くと直ぐ乱序。「清経」の「恋ノ音取」の笛のように、太鼓（光長）独りがにじり出て囃に向かって打ち出すのが珍しい。シテ白・永謹が向かって左、白牡丹の台に上り幕を指すと、ツレ赤・幸稔もさっと出る。一畳台は正面に縦横縦と略耳字型に三基、その上を白と赤が舞台狭しと縦横に跳び上り跳び違いの乱舞は絢爛そのもの。途中、笛一管で橋懸に抜けた幕際の赤と一ノ松の白が、膝行しながら擦れ違うのも異色である。祝賀ということもあろうが前を欠けば、数壮華麗とは云え獅子舞だけのもの、能劇として前も含めて見たかった。（21分・平成6年12月20日・金剛能楽堂）

「子の日」　禁裏御能御用の九世千五郎正虎（一八一〇―一八八六）に師事した歌道師範家冷泉為理の明治十三年（一八八〇）の作。正月初子の日、小松引とて公卿が野に遊び、若松を引いて千代を祝い、歌宴を張る行事を「子の日（の遊び）」と称し、宇多天皇の寛平八年（八九六）、北野雲林院のそれを嚆矢とする、という。源氏物語「初音」の巻にも「今日は子の日なりけり。げに千歳の春をかけて祝はむに、ことわりなる日なり。」とある。為理得意のテーマのこの曲は千五郎家のレパートリーである。

シテ公卿・千之丞、翁烏帽子・紫指貫・萌黄単狩衣の雅な姿。野（正中）に出て左膝抱え暫し憩うと、さらば謡いながら、と狩衣の裾を取って立ち、スミに行き小松を引くところ、アド女・真吾が被衣を着て出る。シテはなおも謡いながら袖を返して舞い、「翁」の天地人の拍子のバリエーションに〆喜びは日々に鶴まさりゆく、と左袖被き、扇を顔に当てて小廻りするが、それが如何にも世俗の外の公卿の鷗気。気付いた女が喝采を送れば、笠の内ならぬ被衣の下に別嬪を想像したシテは、早速和歌を手段に慇懃にアプローチするのも下心みえ〳〵で可笑しい。「子の日して心を寄する姫小松」の下の句を求められた女は、恥ずかしながら、と「引かれて君が袖に添わばや」と付ければ、吟じつつ素早く被衣の隙から女の顔を覗き込むシテ。呆気に取られるその眼技の冴えに千之丞本領を発揮する。頭を抱えるシテを引き留めんとする女は、「一たびは手に引き取りし姫小松、見捨て科白めく歌に雪を掛けられても、逃げる男の後を、嬉しと追う純情。真吾の女が柳腰で艶めかしく、王朝の色模様の一端を写して雅趣があり面白かった。蛇足ながら当地にめでたい「子の日松」の銘酒がある。（14分）

「蝸牛」　蝸牛が長寿に効く、と捕りに遣らされる太郎冠者・宗彦、外見聞かされ鵜呑みの早とちりは、チェックポイント悉く合ってシテ山伏・正邦を同道するとこう、宗彦の純真と正邦の茶目っ気はほんわかと和やか。愚鈍な者をなぶってやろうとは言い条、気分は雅子物で共に愉快に楽しもうの山伏の魂胆である。〆でん〳〵むし〳〵、に煽り立てられて浮かれ出す茂の、とぼけた味も捨て難い。千五郎家若手の競演である。（23分）

「武悪」　不幸公者の武悪・千五郎を討てとの主・忠三郎の命に、朋輩を討つに忍びない太郎冠者・千三郎。情けをかけたばかりの後ろめたさは、双方に善かれと懸命に取り繕うところ、千三郎熱演である。主が討たれた筈の武悪と出会す場は蓋し圧巻で、伸び上って覗き込もうとする主と、両手拡げ背伸びして視界を遮ろうとする太郎冠者との攻防は上質のパントマイム。立往生の苦境を自ら切り開く苦肉の策は武悪を幽霊に仕立てること、「要らぬことを言いだいた」、と当初の威勢何処へやら、俄かに落着かない忠三郎が上々なら愁眉を開く千三郎も可。橋懸を千鳥掛にちょう〳〵〳〵、と出る幽霊は黒頭に白綾ぞろりと着て杖を持つ。「武悪の」、と面切って凄み、「幽霊でござる」、と名宜ればこの度は千五郎の独擅場、魂と魄が幽明を分かち、「アア、苦しゅうござる」とツツッと爪先立ってシテ柱に寄り、右肩凭れかかるのもこれ見よがし。亡き父御の身辺不如意を口実に、主を強諸り放題の悪乗りには太郎冠者も堪りかね、「もはや消えてもよからう」、と袖を引き耳打ちする仕来。三人の個性がぶつかり合う厚味ある舞台だった。（62分）

「千切木」　「初心の間は宗匠に頼んでおきながら」兎角あれこれ鼻にかけて出しゃばるシテ太郎・千作を煙たがり、誘いをかけない連歌講の面々（正雄・千吉・狂雲・正美・やすし・薫）。立腹して乗り込む太郎を打擲して放り出せば、ツレ女房・忠三郎が聞きつけ、棒（千切木）を押っ取り駆けつける。喧嘩相手が留守なら虚勢を張って体面を糊塗する男のペーソスが、無智で強い女を得て深まった。太郎冠者の逸平の童僕ぶりが爽やか。（34分・1月14日・茂山会・京都観世会館）

「楊貴妃」　シテ鎖之丞、ワキ閑。ブラックシアター能と銘打ち、県芸小ホールの黒づくめの空間の実験劇場舞台。橋懸を挟み脇正面に五本、後座に二本のピアノ線を吊り、地謡座を舞台外、角掛けて置く。照明は固定で舞台空間を煌々と浮き上がらせる。冥界は即ち天上界の、白日夢の趣を意図するか。一畳台上の宮は丸みを帯びた屋根に引廻の淡紅色も独自。貴妃の所在問われるアイ僅行の、白地宝尽シ文様縫箔の着付は如何にも蓬莱国のイメージ。方士がワキ座に着くと、「雲清」の「松門ノ会釈」同様笛（六郎兵衛）のアシライがあり、吹きやむと宮の中から、〆あら物凄の宮の内やな、と謡い出すのが下懸のサシであるのも珍しい。ワキとの掛合に、〆押し除けて、と引廻下すと、左右側面後方各二、後部に六本下げられた聚帯の中にシテが床几に掛かる。面は玲瓏とした増・襟白二・白地金摺箔・白地水ニ波頭絡模様大口、壷折の唐織は茶紅白段紗綾形七宝聚地菊夕顔文様で備前池田家伝来の写シ、新調という。形見の鳳凰天冠をワキに渡し、更に誓言を伝えるところ、静かな力のある地（順之・暁夫ら）がムードを高め、〆仙宮に到りつく、と宮を出たシテの、絢爛の美しさは正に六宮の粉黛の顔色を無からしめる。唐団扇でワキに指し、終の途瀬を頼むと言えば、ワキは思わず天冠捧げて平伏するのも貴妃の威光、鎖之丞の存在感である。イロエを抜きへ生死の終りもなし、から直ぐ舞グセ序ノ舞と、きらびやかな姿は光芒の坩堝の中にあって奥は放射するにしても心の陰翳までは感じられず、冷えた美には遠かった。

◈ 観能寄稿 ◈

壺泉会「乱・双之舞」

松本　武

平成六年十二月十一日熱田神宮能楽殿で、泉嘉夫、同雅一郎が乱双之舞を舞った。

下り端の囃子でツレ（雅一郎）が登場、渡り拍子の「みきと聞く」でシテ（嘉夫）が謡いながら幕を出る。

乱れは、常の猩々の中之舞が、特殊の笛、特殊な舞に置きかえられるが、この舞は、猩々が波の上を舞いたわむれる有様を形象化したものであり、抜き足、跳り足、流れ足等のさまざまな秘技がありこれを完全にマスターして演ずることは至難なことがらに属する。

筆者は、かつて桜間道雄の乱を見たことがあるが、道雄は、これらの型を見事に見せてくれた。

やはり腰の重心のとり方が基本で、いささかも安定を欠いてはならず、その上でこれらの足の秘技がなされなければならないが、これは言うは易く、行なうは至難である。

ツレのそれは、シテに比べるとやや劣る。

シテは、一言にして言えば重厚という感じで、腰の重心のとり方は申し分なく、抜き足、流れ足、跳り足なども立派であった。

ツレも、いささか雑なところはあるものの華やかに、軽やかに、いかにも若者らしい持ち味を出していた。

相舞のところも両者意気が合って好演。乱はカカリから始まり、五段半でおさめた。双之舞としては、出色の出来栄と思う。

なお、当日の舞囃子・安宅（大槻文蔵）・熊坂（泉泰寿）も好演であった。

特に熊坂は、力動感あふれながら、序破急の急所はしっかりと舞い、太鼓入りの後半もいささかの破綻もなく舞った。印象に残る熊坂であった。

囃子二番、一調一管一番、狂言、能一番という当日の壺泉会二十周年記念公演は、時代のテンポにマッチしたものと見る。

これからは、このような番組が見所に受けるのではないかと思う。

ついでに一言すると、講師の講演時間が長すぎると思う。よく演能会の冒頭に解説のための講演がなされるが、見所から見ると、あまり有益とは思えない。当日の三十五分間は、いささか長きに失する。むしろ、演能終了後に講師が、有志と座談会形式で行った方がベターではないかと常々思うことである。

キリは宮に入って左ウケ安座、残り留。立つと前から出て退いた。（1時間17分）なお能に先立つ馬場あき子氏の話は、学究歌人のよくこなれた内容がアルトの美調にのり充実していた。（1月18日）

平成7年2月・3月放送

〔2月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）
26日（日）「唐　船」～観世流～大槻文蔵

〔3月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）
5日（日）「熊　野」～観世流～坂井音重
12日（日）「求　塚」～宝生流～今井泰男
19日（日）「八　島」～金剛流～豊嶋訓三
26日（日）「采　女」～観世流～木原康夫

〔テレビ〕教育テレビ（午前11時20分～午後1時）
3月21日①能「菊　慈　童」～観世流～シテ野村四郎
②能「黒　塚」～金春流～シテ高橋汎

日本の伝統芸能・能狂言鑑賞入門（再放送）教育テレビ
金曜日午後11時、翌週火曜日午後3時　講師・山中玲子
3月3日、7日能「葵　上」(1)ゲスト梅若六郎
3月10日、14日　同(2)
3月17日、21日　能「鵜　」(1)ゲスト友枝昭世
3月24日、28日　同(2)
3月31日　狂言「居人相撲」ゲスト野村耕介（万之丞）

〔ラジオ〕3月21日　午後5時ラジオ第2放送
「桜　川」～喜多流　大島久見

株式会社 セントラルパーク
本社　名古屋市東区泉1丁目23-36（NBN泉ビル）
PHONE 052-961-6111
F A X 052-953-2910

観世流・金剛流
宗家本発行元
檜書店
〒101　東京都千代田区神田小川町2－1
電　話03（3291）2488－9　振替東京3－3552
〒604　京都市中京区二条通麩屋町東入
電　話075（231）1990　振替京都1－113

能楽の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18-18
（郵便番号　464）
電　話（052）731－7984
振替口座 00800-6-36393

購読料　1年1100円
郵送の場合　1年1800円
一　部　100円

熱田神宮能楽殿建設40周年
4月2日　記念能
能楽協会名古屋支部主催

熱田神宮能楽殿は、昭和三十年に熱田神宮のご遷宮を機に、文化事業の一環として、熱田神宮造営会、能楽協会名古屋支部、愛好者の熱意により建設され、以来四十年にわたり東海地区の演能の殿堂として斯道の発展と文化の興隆に貢献してきたが、歳月の経過にともない老朽化がめだち、大改修を行う必要にせまられてきた。

名古屋市では、平成九年の春には、名古屋城能楽堂の竣工が予定されているが、熱田神宮能楽殿もまた、歴史ある能舞台として次の世代に伝えるため改修を計画、能楽協会名古屋支部では、改築資金造成の一環として、きたる四月二日「熱田神宮能楽殿建設四十周年記念能」を二部制で公演する。

なお五月七日と十一月五日には「熱田神宮能楽殿創立四十周年記念・素人会」の開催が企画されている。

記念能は、第一部（午前十時半開演）金春流素謡「翁」、宝生流能「高砂」観世流能「猩々乱」狂言「三本柱」金春流舞囃子「八島」ほか仕舞。第二部（午後二時半始）は観世流素謡「神歌」観世流能「草子洗小町」狂言「吹取」金剛流舞囃子「桜川」喜多流能「小鍛冶」ほか仕舞（番組②面）

入場料、当日券一部、二部それぞれ四千円（前売券三千円）

京都文化賞
広田陛一氏　受賞

京都府では、九四年度の府文化賞の受賞十六人を決定、二月二十八日京都市上京区の府公館で表彰式が挙行された。

表彰の内訳は特別功労賞として歴史家・奈良本辰也氏（八一）ら五人、功労賞八人、奨励賞三人。

能楽関係では、金剛流シテ方・広田陛一氏（七一）が「永年にわたる府民の文化向上に寄与した功績により府文化賞・功労賞」を受賞した。氏は昭和三十一年に謡曲、仕舞を集団で教える当時としては画期的な「謡曲仕舞教室」を設立、一般への能楽普及につとめ、金剛流の重鎮として活躍している。

中村弥三郎氏
大阪舞台芸術奨励賞

平成六年度大阪舞台芸術賞の贈呈式が二月十八日、フェスティバルホールで挙行され、能楽界からワキ方・中村弥三郎氏が奨励賞を受賞した。同賞はこれまで大阪府民劇場賞として、昭和二十七年度から府下で公演された舞台芸術で優れた成果をあげ、文化の普及向上に貢献した公演の出演、スタッフを表彰してきたが、今年度から「大阪舞台芸術賞」と改められた。

受賞の中村弥三郎氏は、平成六年一月大槻能楽堂大槻追善能で能「葵潜」のワキをはじめ年間を通じて数多くの公演において優れた舞台効果をあげたことが顕彰された。

花伝の会「天鼓」
4月19日　熱田能楽殿

花伝の会（藤田六郎兵衛氏主宰）では、能・狂言の魅力をひろく知ってもらうため種々のイベントを実施しているが、このたび、従来の定例公演とは別に、平日の昼間に能・狂言の公演を企画、その第一回の試みとして、きたる四月十九日（水）熱田神宮能楽殿で午後一時半から開催する。

上演は能「天鼓」青駒（シテ山本博通、ワキ福王和幸）と狂言。

入場料三千円。とくに今回の公演では団体鑑賞の割引制度（十名以上）を設け、幅広い鑑賞をよびかけている。連絡は電話052・953・6264。

◈演能カレンダー◈
（熱田神宮能楽殿）

〔3月〕
21日（祭）巽会（来場歓迎）
25日（土）井上松次郎傘寿記念狂言会（有料）（番組①面）
26日（日）壺泉会大会（来場歓迎）（番組①面）
〔4月〕
1日（土）翠調会（来場歓迎）（番組②面）
2日（日）能楽殿創立40周年記念能（有料）（番組②面）
8日（土）名古屋猩風会（来場歓迎）（番組③面）
9日（日）観世会定式能（有料）（番組③面）
16日（日）高島良一師範披露発表会（来場歓迎）（番組③面）
19日（水）花伝の会「能・狂言」公演（有料）（番組④面）
22日（土）中部電力謡曲会（来場歓迎）
23日（日）久田観正会（来場歓迎）
29日（祝）幸友会春の会（来場歓迎）
30日（日）笙月会大会（来場歓迎）（番組④面）
〔5月〕
7日（日）能楽楽創立40周年記念素人会（来場歓迎）
13日（日）青陽会定式能（有料）
14日（日）名古屋金春会（有料）
20日（土）九翠会定期能（有料）
12日（日）狂言やるまい会（有料）
27日（土）たまも会（来場歓迎）
28日（日）名古屋観衛会（来場歓迎）
〔6月〕
3日（土）山本博之23回忌追善能（有料）
4日（日）大槻清韻会（有料）
5日（月）熱田祭奉納能（来場歓迎）
11日（日）観世会定式能（有料）
17日（土）叶石会（来場歓迎）
18日（日）宝生会定式能（有料）
25日（日）狂言也留舞会（来場歓迎）

（演能変更の節はご了解下さい）

名古屋巽会大会
三月二十一日（祝）午前十時始
熱田神宮能楽殿

素謡　花月（鈴木ゆり子、赤塚龍）紅葉狩（森重夫、冨田正代司、織田哲也）東北（鈴木英夫、清水達郎）
舞囃子　西王母（荒川優子）小督（岩田幸子）草紙洗（河野高子）高砂（加藤美知子）清経（藤田静代）女郎花（別所和子）
独吟　橋弁慶（山内悠太郎）
舞囃子　養老（渥美公美乃）桜川（坪井香容子）富士太鼓（大渓和子）
舞囃子　枕慈童（長崎邦子）松風（永井喜美）芦刈（足立知子）鞍馬天狗（杉浦敏二）
ほか仕舞三十番。

〔御来聴歓迎〕　主催　名古屋巽会
愛知県愛知郡東郷町和合ケ丘2-11-5　戸田和方

井上松次郎傘寿祝賀
名古屋演劇ペンクラブ特別賞受賞祝賀
記念　能と狂言の会
三月二十五日（土）十二時三十分開演
熱田神宮能楽殿

翁　片山九郎右衛門　面箱　佐藤融　三番叟　井上靖浩　千歳　片山清司
大鼓　河村総一郎　小鼓　福井良治　小鼓　福井啓次郎　小鼓　柳原冨司忠　笛　藤田六郎兵衛

舞囃子　羽衣　佐野萌　大鼓　河村総一郎　小鼓　福井啓次郎　笛　藤田六郎兵衛　太鼓　助川龍夫

狂言　末広かり　果報者　井上祐一　太郎冠者　佐藤友彦　すっぱ　井上靖之助

狂言　小舞　景清　野村又三郎

狂言　枕物狂　祖父　井上松次郎　孫　井上靖浩　乙孫　小柳保志　大野弘之

名古屋演劇ペンクラブ特別賞　受賞式

狂言　髭櫓　妻　大槻男和泉元秀　和泉元彌　女　和泉淳子　女　三宅九郎　女　鷲見政行　女　石田喜樹　女　今枝靖雄　女　井上靖浩　注進　佐藤融
（終了予定　四時三十分）

◈前売　指定席七千円、自由席五千円、階上席三千円
◈当日　指定席八千円、自由席六千円、階上席四千円
◈チケット取扱い＝松坂屋、名鉄、三越各プレイガイド
チケットぴあ、熱田神宮能楽殿

主催　井上松次郎
後援　名古屋市教育委員会
名古屋狂言共同社
補佐　和泉元秀

壺泉会大会
三月二十六日（日）九時三十分始
熱田神宮能楽殿

舞囃子　海士　泉嘉夫　河村真之介　柳原冨司忠　助川竜夫　大野誠
解説之伝　大槻舞　桜川クセ　平野園

仕舞　鶴亀　安宅　内藤真帆　正キリ　太田祐紀子　高砂　鈴木智香子　班女クセ　池田文与

素謡　高砂　独吟　景清　内藤悦子　大坪由紀子　大池長人　南方幹子

囃子　藤戸　酒井逸夫　高杉嘉彦　河村真之介　柳原冨司忠　鹿取希世

舞囃子　清経　亀井信子　後藤嘉津幸　筧鉱一　鹿取希世

玄象　前川和子　河村真之介　柳原冨司忠　助川竜夫　鹿取希世

独吟　江口　山本和子　福島崇一郎　宮部悟

素謡　砧　独謡　山姥　泉泰孝　戸松博史　太鼓　鬼頭喜太郎

能　猩々　鳴田都彌子　飯富雅介　筧鉱一　助川竜夫　柳原冨司忠　鹿取希世
子方　中川万里奈　酒井逸夫　戸松博史　宮部悟　小森辰雄　高杉嘉彦
ツレ　伊藤健一　前川修

素謡　安宅　勧進帳　アイ　野村又三郎　野村信行

舞囃子　井筒　大矢洋美　河村真之介　後藤嘉津幸　鹿取希世

三井寺　柴田うた子　筧鉱一　福井啓次郎　鹿取希世

三輪　西尾静枝　吉田定男　後藤嘉津幸　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛

一調花鄙　石川晴子　小鼓　後藤孝一郎　河村総一郎　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛

舞囃子　邯鄲　内藤悦子　バンシキ　八神由季代

素謡　実盛　子方　中川万里奈　ツレ　近藤幸江　片岡なゝ子

能　善知鳥　高安勝久　アイ　野村又三郎　中川真澄　玉之段　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛

仕舞　芦苅　舞囃子　養老　山本和子　吉田定男　後藤孝一郎　橋本ハル子　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛

田村小森辰雄　吉田定男　福井啓次郎　大野誠

龍田八神敦子　吉田定男　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎

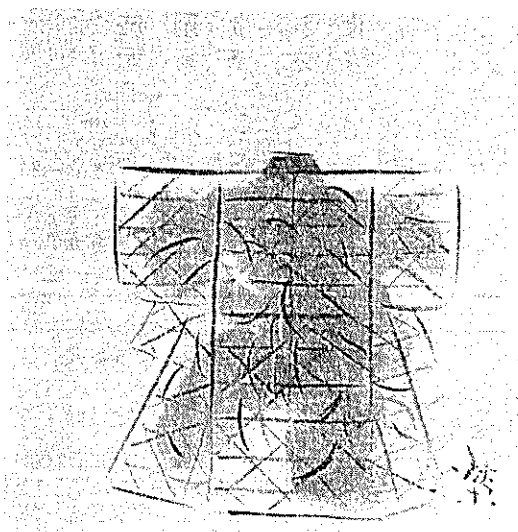
融　中沢修　舞返之伝　河村総一郎　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛

狂言　棒縛　野村信行　井上礼之助　松田高義

仕舞　小鍛冶クセ　泉嘉夫　小鍛冶キリ　泉泰孝

〔御来聴歓迎〕　主催　壺泉会

青雅日記 (159)



縫箔

えと文 二井栄逸

世界の舞台衣裳のなかで、日本の能装束ほど贅沢で華麗なものは珍らしいと思います。

世阿弥は、風姿花伝の中に「神をば、いかにも神体によろしきように出で立ちて、気高く、ことさら出物ならでは神といふ事あるまじければ、衣装を飾りて、衣文をつくろいてすべし」と其の時代から蜜華を求めていたことが汲みとれますが、とくに今日みるような精緻な技術と洗練された美しい意匠の舞台衣裳として展開を見せるのは、桃山時代から江戸時代にかけての頃であろうとされています。

さて、今年は私の能画カレンダーは休刊のようなことになり、御期待にそえず御迷惑をおかけしましたが、来年度は想をかえ立派なものにしたいと思って居ります。そのカレンダーの中に、桜川もかいて見たいと思い、想をねっています。桜川のシテには、桃山期の縫箔をかいて見たいと思っています。

渋い茶色の連線地に蛇籠が白、黄（二色）で刺繍がなされ、細い青葉を繁らせた枝垂柳を縫（ぬい）と摺箔（すりはく）の技巧を駆使して配した爽快な文様です。

文様のイメージは、清流の河原に積まれた蛇籠のかたわらに、微風に靡く柳葉の自然の風景を意匠化したものであります。

柳は樹木として長寿を意味し、福寿吉祥の文様であります。

〃道の辺に　清水流るる　柳陰
　しばしとてこそ　立ちどまりつれ〃

西行法師が、みちのく芦野の遊行で詠んだ歌でありますが、柳陰の涼しさに立ち去り難きを暗示し、この意匠の意によく通じるものがあります。

（平成七・三・一〇記）

能「江口」上演

生駒里翠師が父をしのぶ追善能会

観世流シテ方・生駒里翠師（翠謡会主宰）は、厳父・生駒璽一氏（後東幽学）の三回忌にあたり、自ら手向けの会として、きたる四月一日（土）熱田神宮能楽殿で能「江口」の上演、翠謡会会員、中日文化センター会員の参加により追善供養の会を開催する。（番組③面）

生駒璽一氏は、後東幽学の名で精神文化国際機構中部委員長として、名古屋での国際会議を開催、精神文化平和外交の推進に貢献されている。

翠謡会別会 後東幽学追善之会

四月一日（土）午前十一時半始
熱田神宮能楽殿

能組

舞囃子 女郎花 片山慶次郎 河村総一郎 福井啓次郎 鹿取 希世 地謡 加賀 敏彦 古橋 正邦 梅田 邦久 味方 玄久

半能 江口 今沢 美和 前野 郁子 生駒 里翠 高安 勝久 飯冨 雅介 杉江 元 河村総一郎 福井啓次郎 鹿取 希世 後見 近藤 幸江 小島 一英 須部 市 清沢 一政 祖父江 修一 味方 玄 古橋 正邦 梅田 邦久 片山 慶次郎 伸吾 地謡

（第二部）追善之会・翠謡会々員（午後二時頃）

連吟 誓願寺 鬼頭 木村 秀子 田中 幸 福上 春江 組 平田 三重子 野村 三重子 籠田 以と子 鬼頭 笑子 岡崎 佐多子 沢田 美智子 山口 佐藤 神戸 義春 吉田 弘司 二郎 陸男 柴田 渡辺 後石原 国夫 小野 隈井 正明 吉野 成信 内田 修平 藤 戸 清水小ずな枝

仕舞 夕顔 葛西 和子 東 野宮キリ 鬼頭 笑子 身 誓願寺キリ 太田 一栄 北キリ 三品登美子 瑶キリ 栗田あき子

連吟 砧 渡辺 平田 足立 稲上 秋山寿美枝 錠一 春江 東 組 仕舞 清井通 経キリ 小笠原賢司 放下 僧クセ 山内 弘司 簡キリ 籠田以と子 源氏供養 朝橋さかえ 盛 内田 修平 藤 戸 清水小ずな枝

連吟 通小町 佐藤 陸男 山口 二郎 柴田 義春 神戸 康秀 野口三重子 田中 幸 平田 春江 河村 幸子 木村 秀子 後石原 国夫 小野 錠一 薫 渡辺 正明 吉野 成信 内田 修平 藤 戸 清水小ずな枝

舞囃子 海士 岡崎佐多子 河村総一郎 福井啓次郎 助川 鹿取 希世 杜若 沢田美智子 河村総一郎 福井啓次郎 助川 鹿取 希世 融 秋山寿美枝 河村総一郎 福井啓次郎 助川 鹿取 希世

追加 賀茂 （会員全員）

（外）協賛者……米倉貞次、日野大順、澤村千恵子、岩間ちゑ

中日文化センター 名古屋（栄）・岐阜・四日市

主催 翠謡会 生駒里翠 後援 中日新聞社

熱田神宮能楽殿建設四十周年 記念能（第一部）

四月二日（日）十時半開演
熱田神宮能楽殿

能組

（春）翁 小島 芳樹 千才 広瀬 雅弘 地謡 佐久間祥夫 渡辺 道三 鈴木 寿 加藤 金春 伊藤 茂穂 雄二 正嗣 高穂

（宝）高砂 東川 光夫 衣笠 正宜 高安 勝久 西村 信広 辻本 正樹 河村真之介 後藤嘉津幸 鬼頭 好信 大野 誠 松田 高義 地謡 久野 幸三 竹内 澄子 佐藤 耕司 竹腰 勝一 稲川 寿一 後見 竹内 澄子 玉井 博 辰巳満次郎 水上 輝和 鬼頭 嘉男 孝

狂言 三本柱 井上松次郎 佐藤 友彦 井上 靖浩 佐藤 陸 後見 井上 祐一

（巻）八島 加藤 正嗣 鬼頭 英二 福井 良久 竹市 学

舞囃子 仕舞 加藤 春枝 地謡 佐久間祥夫 小島 芳樹 鈴木 寿 前田 金春 茂穂 広瀬 徳高 雅弘

（観）巴 北キリ 瀬戸三津子 地謡 熊沢 前野 三村 今沢 郁子 恵 美和子 恵子

（宝）山姥キリ 戸田 和 地謡 水上 辰巳 輝和 辰巳満次郎 孝

（観）猩々乱 能 久田 徹二 泉 嘉夫 飯冨 雅介 後見 清沢 一政 橋本 雅夫 地謡 黒田 八神 孝 松山 幸充 加藤 保彦 福井 良治 鉱一 鬼頭 喜太郎 藤田六郎兵衛 祖父江修一 河村 和重 梅田 邦久 川 雅章 中川 瞭 幸親 （終了 二時）

（観）神歌 能楽 謡 加藤 保彦 千才 黒田 博 地謡 松山 高橋 稲久 生田 芳徹 雄二 瞭一 幸親

入場料 前売券三千円 当日券四千円 学生券二千円 主催 能楽協会名古屋支部

熱田神宮能楽殿建設四十周年 記念能（第二部）

四月二日（日）二時半始
熱田神宮能楽殿

能組

（観）草子洗小町 杉江 元 河村総一郎 後藤孝一郎 鹿取 希世 王 松山 兎之 明恒 祖父江修一 女官 今沢 美和 忠岑 清沢 一政 女官 前野 郁子 貫之 中川 雅章 梅田 邦久 能 替装束 井上礼之助 後見 久田 徹二 泉 嘉夫 地謡 高島 良一 今村 嘉勇 須部 市 本田 勲 高橋 構本 河村 敏彦 雅和 瞭一夫 狂言 吹取 野村又三郎 野村 信行 井上 祐一 後見 松田 高義

（剛）桜川 吉川 周子 河崎 勲 福井啓次郎 大野 誠 地謡 小林 忠三 竹々 康治 菊川 遠幸 三司 舞囃子

（観）嵐山 熊沢恵美子 仕舞 若キリ 高木美智子 地謡 加藤 春枝 生駒 里翠 近藤 瀬戸 三津子 幸江

（観）鞍馬天狗 加賀 敏彦 地謡 高島 良一 須部 甫 高橋 山 瞭 親一

（喜）小鍛冶 長田 能 饒 飯冨 雅介 橋本 宰 白頭 聞 大野 弘之 吉田 定男 柳原冨司 忠 助川 龍夫 竹市 学

附祝言 後見 高林 白牛口二 石原 慎一 地謡 吉川 寛治 森田 村 正 戸沢 克彦 長井 和谷 大島 正允 衡市 彫郷

入場料 前売券三千円 当日券四千円 学生券二千円 主催 能楽協会名古屋支部

平成7年3月・4月放送

〔3月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）
26日（日）「采女」～観世流～ 木原 康夫

〔テレビ〕教育テレビ（午前11時20分～午後1時）
3月21日①能「菊慈童」～観世流～ シテ野村 四郎
②能「黒塚」～金春流～ シテ高橋 汎

日本の伝統芸能・能狂言鑑賞入門（再放送）教育テレビ
金曜日午後11時、翌週火曜日午後3時 講師・山中玲子
3月24日、28日 能「蝉」(2) ゲスト友枝 昭世
3月31日 狂言「唐人相撲」ゲスト野村耕介（万之丞）

〔4月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）
2日（日）「藤戸」～観世流～ 浦田 保利
9日（日）「船」～宝生流～ 三川 淳雄
16日（日）「角田川」～金春流～ 金春 信高
23日（日）「草子洗小町」～観世流～ 鵜沢 雅

日本の伝統芸能・能楽鑑賞入門 教育テレビ
土曜日午後9時30分、再放送・翌週水曜日午後3時
4月8日、15日、22日、29日 講師 高桑いづみ
能「道成寺」ゲスト山本東次郎、金春 安明
NHK保存ビデオのほか、五流のさまざまなビデオにより紹介。

名古屋狂言史余話（二）

佐藤友彦

山脇和泉家を始めとする尾張藩お抱えの和泉流の名家はいずれも幕末まで、名古屋の狂言をしっかりと支えたものである。しかしながら維新によって彼等の受けた打撃がいかに手ひどいものだったかは、想像に難くない。

嘉永三年（一八五〇）に家督を相続した八代目山脇和泉元賀（和泉流十五世）は、間もなく明治維新の動乱を迎える。この時、元賀はすでに五十六歳、息子元清は二十歳のことであった。代々住み慣れた御姫様屋敷跡の尾張藩からの賜邸も退転せざるを得なかったのであろう。明治九年元賀が六十四歳で没したのは上笹島町、十一年に元清の長女が同じくこの家で生まれ、十三年次女が誕生したのは隅田町であった。おそらく借家住まいで転々としたものであろう。同十三年元清の母おていがこの隅田町の家で没すると、元清は翌十四年二月に名古屋を離れて上京してしまう。ちなみにこの元清の母おていは三代目早川幸八の娘であった。

山脇家が代々住んだ御姫様屋敷跡と言うのは、七代藩主宗春の娘（後八代宗勝の養女）頼君の屋敷跡である。宝暦八年（一七五八）五代山脇和泉元福の代に拝借し、その後文化四年（一八〇七）に白鳥払い下げ木材を以て六代和泉元貞が邸内に舞台を建立している。

七代元業は舞台傍らに見物場を設置して、これを「寿泉軒」と名付け三宝芦能舞の筆になる扁額を掲げた。そして「寿泉軒記」を深田正韶に請い、以下の様に記してもらっている。（「天保會記鈔」名古屋叢書三編十三巻）

其父元貞、創建舞台、其地多雅松及桜楓、以襯其台、是元貞之素志也、元業作観屋、台曰延和、屋曰寿泉、共縉神家所筆之扁額也、元業嬉於屋中、授業之際、点茶以自娯也、（以下略）

この舞台を創建した六代和泉元貞は、始め田中道麿に学び、後本居宣長に従学、鈴屋門の門人となった。天明二年（一七八二）に道麿から宣長に宛てた書状に自らの弟子として山脇四郎（元貞）を掲載、また寛政十一年（一七九九）には宣長から山脇和泉に宛てた元貞の詠歌添削の返信通知に添えて祝儀の品に対する礼を述べた書状が見られる（『本居宣長全集』十七巻）。宣長自筆の門人録には寛政五年の門人の最後に山脇元貞の名が記されるが、門人中歌の秀れた者に○印を付しており、元貞にはこの○が付されている。同門の植松有信の『文通諸子居住処并転達所姓名所書』には、元貞の住所を「名古屋市下塩町裏御姫様屋敷」と記している。（植松茂著『植松有信』）

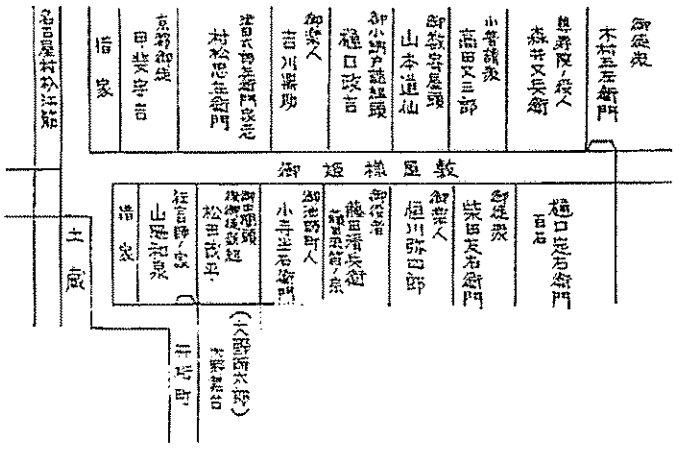
天保七年（一八三六）十月に宝生太夫大野時太郎舞台で六日間の勧進能が催されているが、この時の様子が『名陽見聞図絵』の内に「市下大野舞台にて能興行」の記事に添えて「大野氏能興行の図」が掲載されている。この図は「春月亭のぬし」が著した『猿楽図略』の一図を写したことが記されており、大野舞台の全景と土塀に続いて、左下隅に隣家の垣根と門が描かれ、ここに「山脇宅」と記されている。すなわち大野舞台と山脇舞台が隣合わせにあったらしいことがわかる。

この図について近年関家俊彦氏が『狂言史の基礎的研究』（和泉書院）で東洋文庫及び鴻山文庫蔵になる春月亭梅巽、歌月庵の識序を付す同じ勧進能を描く絵巻図中に「山脇宅」と記されたものを紹介されており『名陽見聞図絵』の図はこれを写したものであろう。

『金明録』の文政五年（一八八二）十二月四日の記事に、折からの大雪で「市下大野、能折々催有之候所、是も見物場、桟敷とも崩かも知れない。お姫様屋敷などの変遷の後、再びこの地に賜邸を賜ったものだろう。

『松涛棹筆』（名古屋叢書三編第十巻）に「御姫様屋敷」の簡単な屋並図が記されている。いつ頃のものか明確でないが、前後の記事から天保九、十年頃かと推測される。

これによれば南側の西の端から二軒目に「狂言師ノ家　山脇和泉」があり、東に二軒おいて同じ南側に「御役者藤田清兵衛　藤田流笛ノ宗」と記されている。明治以降は比米（ひめ）町と呼称された。この図には大野の家は記されないが、先の「名陽見聞図絵」と照合すれば左の如き配置となる。山脇家も大野家も退転するが、現在も藤田六郎兵衛氏はこの地に住んでおられる。



（筆者は和泉流狂言方）

広田後援会能

4月2日　金剛能楽堂

広田後援会では、四月二日（日）第八十四回後援会能を金剛能楽堂で開催する。午後二時開演。

仕舞「求塚」（広田泰三）
狂言「鈍太郎」（茂山真吾、網谷正巽、茂山正邦）
能「邯鄲」（シテ広田泰能、舞童・高橋恵子、ワキ谷田宗二朗、笛・光田洋一、小鼓・成田達志、大鼓・成田有辞、太鼓・前川光長、間・茂山千三郎、後見・金剛巌、地謡・茂山千三郎、後見・金剛永謹、今井清隆ほか。

当日券五千円（前売券四千五百円）申込み＝広田後援会075―781―1885、075―781・3421・金剛能楽堂075―221・3049。

京都

名古屋　猶諷会春の大会

四月八日（土）午前十時三十分始
熱田神宮能楽殿

素謡　阿漕原信子　井戸和男
連吟　通小町
仕舞　紅葉狩　岩田宏子　田村クセ　飯盛興子
天鼓　盛キリ　田辺公子　笹之段　田辺和永
山賊　安藤悲子　小林博政　野々山堯

名古屋観世会定式能（三回）

四月九日（日）十二時半開演
熱田神宮能楽殿

〔御来聴歓迎〕

主催　名古屋猶諷会　梅若盛義

素謡　天鼓　三木秀雄　梅若善高
舞囃子　砧　菊池敏子　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
恋重荷　奥田敏子　河村総一郎　福井啓次郎　助川竜夫　藤田六郎兵衛
井上種子　高安勝久　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
能　弱法師　盲目之舞　井上裕一　井上生香　後見　岡田朗詠　梅若修一　地謡　熊沢光俱　熊澤惠美子　橋本雅一　梅若善久　梅若善高　梅若盛義　梅若盛彦
子方　菊池紀子　姉和　岡田晃一　義経　梅若盛彦
素謡　正尊　大浦裕二　梅若修一　起請文
舞囃子　羽衣　河合敦子　笂久栄子　笂鉱一　助川竜夫　鹿取希世　和合之舞
富士太鼓　鈴木八寿　笂鉱一　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛　現之楽
融　小松勝徳　笂鉱一　柳原冨司忠　助川竜夫　鹿取希世
仕舞　松風　菊池紀子　坂野　笂鉱一　柳原冨司忠　菊池重裕
番外舞囃子　熊坂　熊沢光俱　笂鉱一　柳原冨司忠　助川竜夫　鹿取希世
善知鳥　梅若盛彦　笂鉱一　柳原冨司忠　鹿取希世
（終了　午後四時三十分頃）
附祝言　主催　名古屋猶諷会　梅若盛義

能　清経

久田徹二　梅若六郎　替之型　高安勝久　後藤孝一郎　笂鉱一　大野誠

狂言　八句連歌　野村又三郎　野村信行　後見　井上礼之助

仕舞　老松　山本勝一　本田勲　雲林院クセ　片山九郎右衛門　地謡　武田邦弘　小島一英　船橋　山本順之　中川雅章

能　海士

河村浩太郎　片山慶次郎　懐中之舞　谷田宗二朗　河村真之介　久田舜一郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛　間　松田高義

後見　小島一英　山本順之　地謡　松山幸親　加賀敏彦　清沢一政　古橋正邦　久田徹二　梅田邦久　片山九郎右衛門　武田邦弘

（終了　四時過頃）

附祝言

〔要会員券〕当日券八千円（自由席）

主催　名古屋観世会

高島良一師範披露　春の発表会

四月十六日（日）九時半始
熱田神宮能楽殿

素謡　神歌　右翁　岩田徳七　左翁　橋本治雄　千才　井深和弘　十二月往来
弱法師　岩田崇子　西沢冨貴枝
蟬丸　山田多鶴子　太橋芳子　笠井千代子　師　高木正之　ツレ　尾藤英邦
象玄　橋本恒夫　戸所喜平
仕舞　屋島　兼松三欣　松虫　虫キリ　古崎胤久　蛯キリ　井深和弘
舞囃子　敦盛　小沢日出子　柳原冨司忠　鹿取希世
熊野　今村玲子　河村真之介　柳原冨司忠　鹿取希世
龍田　種村とし江　河村真之介　柳原冨司忠　助川竜夫　鹿取希世
素謡　朝長　松原幸男　河合六三郎
仕舞　羽衣キリ　浅野文子　野田博子　富士太鼓　宮大塚多希子
舞囃子　清経　高野千勢子　河村真之介　柳原冨司忠　鹿取希世　替之型
定家　近藤とき子　河村真之介　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
仕舞　大江山　橋本恒夫　天鼓　松原幸男
素謡　隅田川　松山晃之　瀬辺聡子　遠山美津子　野田博子
仕舞　景清　小林冨美子　高野物狂　西川喜代子
西行桜　加藤井知子　雨之段　二木暉子
求塚　丹羽久子
舞囃子　高砂　砂森崎紀子　河村総一郎　福井啓次郎　助川竜夫　藤田六郎兵衛　五段
頼政　関谷薫　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
早川順子　鈴木志ず子　堀場吉成
素謡　砧　静松山晃之　義清沢一政　姉本田勲
（五時頃）
素謡　正尊　高島良一　梅田邦久　起請文
仕舞　田村キリ　古橋正邦　班女アト　中川雅章
網之段　久田徹二　鞍馬天狗　武田欣司
舞囃子　東方朔　片山九郎右衛門　河村総一郎　福井啓次郎　助川竜夫　藤田六郎兵衛
（終了　六時三十分頃）
附祝言　主催　邦会　謡会
〔御来場歓迎〕

花伝の会公演

四月十九日（水）午後一時半始
熱田神宮能楽殿

能　天鼓　山本博通

主催　花伝の会
TEL052・953・6264

入場料　三千円

創立六十五周年記念 笙月会大会

四月三十日（日）午前九時始
熱田神宮能楽殿

素謡　神歌　福田朋悟　千才節森昭雄
連吟　橋弁慶　内藤ヤス　坂本順市　楠木喬　伊藤義郎　安藤勝義
阿漕　奥田才二　酒井正雄　伊藤金夫　古家利男　山口正男　武藤治雄
富士太鼓　藤原邦治　中野朝子　清水たず子　芳子　生田敬三　川口敏夫　山田宏　石水国喜美子　千衣　大石彦　片多四郎　原　和田良治　竹内千鶴子　吉田早代子
船弁慶　仕舞　松風　正キリ今井雅羽　内田清志　渡辺守　盛　鞍馬天狗　吉野天人　生田咲子　鼓　松岡記久子
舞囃子　敦盛　天　鈴木信孝
連吟　柏崎　勝木登志　岩田多賀　小川春枝　宇野良子　柴田静子　中川はるみ　一田附弘　居渕渉
小督　笠原健一郎　宮川一　戌亥辰己　梶松村道信　和雄　城島倉たか　大和舞
舞囃子　藤戸　市橋ひで子
山姥　山田普晴　立廻入
連吟　班女　松崎勝　古橋佳和　長尾明夫　横井啓三
弱法師　駒月正覚　北村浩好　高橋邦夫　加代晃三　木原孝志　子安勇　飯沼定男
仕舞　大江山　広島啓子　井筒　網之段　内木ショウ　森英子　吉村千代子　白川順子
舞囃子　須磨源氏　五段替　片多初子　玉鬘　若井喜子
雲林院　車戸博子　子方森田博　義経加藤哲也　姉和高木守
素謡　正尊　藤井昭道　阿部毅　起請文
舞囃子　熊野　飯沼加遠利　野宮　伊藤キクエ　村雨留　合掌留
善知鳥　岩佐敏子　翔入
素謡　求塚　田中賀子　栗田はな　高木績

能　清手　福井清雄　大前勝男　日下部保郎　中川孝司　戸谷茂二　今井嘉己
連吟　千三村恵子　安田節之
経　高安勝久　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
後見　中川雅章　古橋正士　地謡　山口正男　高木安子　松山幸親　久田徹二　武田宗和　小島武志　一英
景清　大沢慶隆　池田一敏　宮代　松本喜代志　角川代四郎　大楚間寿雄　豆月修
素謡　道成寺　河崎幸子　武田志房　小島一英　祖父江修一　笙加藤万由子
舞囃子　高砂　沢村千代子　花
八段之舞　安宅　山崎佐東子　五段替
仕舞　花月キリ　長谷川京子
連吟　実盛　辻野村寅夫　今井富央　光三　今井　岡崎倍夫　今井久栄一　島倉英人　松村　山口正男　上
舞囃子　田村昌宏　雲雀山　観世道彦
仕舞　殺生石　加藤久登英
舞囃子　野守　村野村昌宏　幅敏明
番外仕舞　老松　中川雅章　鉄輪　武田志房
附祝言　（六時終了予定）
主催　笙月会　中川雅章

〔御来場歓迎〕

◆浅春の舞台から◆

「幸謡会」「宝生会」「観世会」「九皐会」

竹尾邦太郎

「昆布売」　シテ昆布売は松次郎代勤の曳舟の融、立ちはだかるアド何某は大兵の礼之助。無理矢理供に仕立てられ、太刀を持たされる無体に、如何にもおっかなびっくりの風情で果敢に抵抗する融の一所懸命が良い。立場が逆転し、様々な売り声で昆布を商う羽目に陥った礼之助の、不承〳〵が興に乗ってくる辺りも、噛みしめて味の出る昆布の味だった。（27分）

「葛城・大和舞」　葛城山から金蜂山への架橋に、葛城の女神は艶姿を恥じて夜しか働かず、遅滞は役行者の怒りに触れ、葛葛に呪縛されたという。シテ幸江、前はその化身里女、雪に難渋するワキ山伏（雅介・宰）への親身も己が身の痛みがあればこそ、庵に誘う初同（文蔵・泰孝ら）、へ無影の月を傾け、と暫し右ウケ、へ担頭の柴には、と雪溜く負柴を左背後に見、へ不審の花を手折りつつ、と勾欄に寄るところ、日常のなりわいの詩境である。雪笠の下は寝れた面差しの深井、紺地縫箔腰巻に淡浅葱水衣の冷え〴〵した寒色が杖を頼る初老の女に貼り付く。舞グセの中、スミで扇翳して寒風を防ぐ具象も優しく、ワキとの掛合に呪縛解放を願いつつ白銀色引廻の雪山に中入する心持は深長だった。

後は、へ来りたり、と引廻取れば柱に呪縛の葛紅葉は無く、面増・葛ノ天冠・緋大口・白地舞衣霊折のシテが木綿四手付榊を持って居る。見苦しい姿を曝す羞恥をワキに見せ、気を取り直すと、へよしや、と床几を立って出るところ、大和舞をいざ舞おう、の気魄を地が支える。舞は正先に下居の修祓も恭謙に、立って位進み地となると、キリは、へ面はゆや、とワキ雅介から目付へ面背けて袖で遮り、一ノ松に抜けては、へあさまにもなりぬべし、と左袖返シ見詰め、遥いの火照りに逃げる様に幕に消えてワキの合掌留、慎ましやかなシテだった。（1時間22分・2月4日・幸謡会）

「西王母」　狂言口開の友彦の触レの慎重から荘重な其ノ来序（学・嘉津幸・鉱一・龍夫）でワキ帝王・元がワキツレ大臣・正樹を伴って出るが、曲趣から大臣は多いに越したことはない。シテ耕司、泰平を寿ぎ仙桃一枝を献上する前場の神妙が、小面の可憐だけに初々しい。

後場は桃実盆を捧げる子方・津田信彦君（幼いが落着きがある）を先立てるシテ西王母、黒垂・天冠・緋大口・紫舞衣に飾太刀を佩く。面は類に朱を刷いた様な艶やかな泣増。中ノ舞を爽やかに舞上げてキリ、流れに向かって袖を返シ膝を着く水に戯れる様もそつなく、へ春風に和しつつ、と大きく引分けヒラクのが、上昇気流に乗って去ってゆく仙女の飛行（ひぎょう）の気分だった。（1時間4分）

「宝の槌」　宝競べに出す程の珍奇な品は私蔵しない主（友彦）に遣わされ、都に探し求めるシテ太郎冠者（祐一）・好飯ごさんなれとばかりのスッパ（靖浩）に、振れば思いのままに宝が出る、と太鼓の撥を摘まされる。撥る行為の根底には、物をゆり動かして活力を呼び起こす呪術的力があるとは云え、馬を出そうなどとの荒唐無稽な話には煙に巻かれようもなく、切羽詰った太郎冠者に気を外らされた主独りが煙に巻かれていた。（35分）

「鉢木」　陽は高いがあまりの雪の深さに宿を求めるワキ旅僧・勝久、土地のシテ常世・孝の、「ああ降ったる雪かな」の述懐がさもありなんを思わせる。ワキを呼び返さんと二ノ松に追い、背後から扇を左肩に、初同（富四夫・潤次郎ら）へ泊り給へや、と押し留めると、ワキは静かに振り返り暫し黙礼するところ、その情調がこの一曲を続べる。

寒気には火が馳走、薪ノ段にみせる古武士の一徹な気風（きっぷ）も孝の芸勘で、些かの痩せ我慢も滲ませる。暖をとり和んだ後、いざ鎌倉の心構えの一端披瀝するところも、落魄の中にあって気概は旗（おき）の如く、へ敵大勢ありとても、とサッと左袖返ス勢いも象徴的。名残を惜しむ中入は、ワキとツレ・間舘が共にシオルのにシテは目を伏せるだけなのも狷介。

後場は金入沙門帽子・白綾・白大口・紫水衣・掛絡に最明寺入道の品位を備えて勝久、貫録も充分に具足に身を固めたシテを接見する。前シテは素袍裃で目立たなかったが後は大口、右足引きずる体調は、勇みかねた痩馬を駆り一ノ松に出るところもだが、ワキの御前で「いつぞやの大雪に」、と素性明かされハッと見上げ、恐懼たら〳〵退るときも、その体調逆手にとって巧まず、孤高でどことなく不器用な佐野源左衛門常世を、孝は枯淡の中に情熱を秘めて熨し銀の良さにみせた。（1時間27分・2月5日・宝生会）

「三山」　山に魂があり擬人（神）化の例は三輪山も同様。これは、香久山の男が耳成山の桂子（シテ）と畝傍山の桜子（ツレ）の二道を掛け、ために桂子は自裁。ワキ良忠の弔いに現れる後場では、桜子への凄まじい嫉妬をみせるも恨みは晴れて消える、という。一九八五年復曲後、当地では八八年の「能・狂言に親しむ会」でシテ鉄之丞・栄夫、ツレ清司・晩夫のダブルキャストによる昼夜の二公演があり、夜の部のシテ面は前を若女、後は谷口明子の創作面（増と橋姫と泥顔を意識したという）だった。

今回はシテ清和（昨年九月京都観世会が初演）・ツレ芳伸で、前シテは襟白浅黄・金無子文様白摺箔・鬱金地鉄仙唐花文様唐織、面は龍たけた増（を無紅で使用か）。本年上半期、清和は本曲を五度勤める予定で、装束付からもシテの様々な造形を探る意欲が覗われ面白い。

前シテの春の愁いは爛漫を詰る桜（子）への愁い、へ入相もつく〳〵と、と鐘を聞く心のふりに面伏せたまま、へ生きてよも、の上ゲ端まで、微動だにしない居クセはただ〳〵隠忍、へその名を憚れみて、とワキ茂十郎にアシラヒ、入水の覚悟で回向を願うのもせつない。アイ所ノ者・又三郎は立シャベリ、言葉の明晰が光る。後場はカケリの前半、ツレがシテの視線に射竦められ、後半は打ち揺えられる様は美しくも酷く、女人の葛藤の凄じさが印象的。持枝で互いに打ち合うところは何だか舞踊を見るように思えた。

なお装束付はツレが右の毛を垂らし面小面、シテは左右に毛を垂らし蒼白な感じの面十寸髪、脱下ゲの紅入唐織は同じ菓玉文様でツレ銅色・シテ金色の地色違い。文様は同じでない方が良いのではないか、が私見。（1時間18分）

「業袍落」　参宮の前祝として伯父・礼之助に酒を勧められるシテ太郎冠者・祐一、茶を飲んだように涼しい顔で辞去したら酒を勧めた方は面白くあるまい、と思ったかどうか。酔態を見せるのも酒客たる者の嗜み、とばかりの荒れ模様の太郎冠者に、ペースに嵌ったとみせて当惑するのも伯父たる者の一種のサービス。息が合った。主は松次郎。（31分）

「国栖・白頭」　シテ九郎右衛門・ツレ清司・子方に外孫観世安寿子、の三代で勤める前場のめでたさ。追手（信行・高義）を掃ったシテが、匿った子方を舟から出して目見得るとところ、安寿子君の物怖じもせずに声を一杯に張った元気が立派。祖父の期待に応え、初冠に紫指貫・濃緑単狩衣も鮮やかに可愛く品があり、笑尉の面も自ずから微笑むかである。後場はシテの中入から天女・芳宏の舞、濃緑大口・赤地舞衣霊折、清朗に舞上げて、へこの山に、と幕に招キ下居平伏して地前に退くと天地ノ声、一気に正先へ走り出た後シテは、白頭に面は忿怒の形相の不動で白地袷狩衣を熨斗に着け紫地金襴飛雲文様半切の偉容。豪快に両袖巻き上げる勢いに圧倒的な威力をみせた。ワキ関。（1時間10分・2月12日・観世会）

「田村」　シテ宜夫、卍繋地文赤無地熨斗目・唐草地文浅黄水衣の童子姿が瀟洒。一体にさら〳〵と運び、値千金の春宵を共有するワキ元に親近感をみせて連吟するのも、ワキに誘いかけて肩に手をやり、へ面白の地主の花の、と面使ヒして散る夜桜を見るのも淡白で、クセ中、へ天も花に酔へりや、と頭取るのは型だけをした。後は、どよめく万木背山に鬼神と立ち向かう猛り心を表わすカケリ。征夷大将軍の圧倒的な貫録に不足の分、キリの型どころはさび〳〵と決めて痛快だったが、やはり田村磨の重みといったものも欲しかった。（1時間18分）

「因幡堂」　本尊薬師如来は一切の迷妄煩悩を癒す、という。されば大酒くらう妻（信行）に代わる女を、と祈願するシテ又三郎。そうはさせじと妻は夢の託宣に不法侵入（ハッカー）して撹乱する。固めとて被布の女は大盃三つ「酒は惜しまぬが女の酒を飲むは見苦しいものぢゃ」、と厭な予感にも男は好色、手酌の一杯もいじましい。被布が脱がされた後の沈黙の怖さが恐ろしかった。（16分）

「雲林院」　シテ瞭一、花の手折られた音がしたか、独白に花を案じながら出て一ノ松、へ散らしつる、で止まると、へ花や、「や、さればこそ」、とワキ公光・雅介に強い視線を向けるところ、気合が入る。花を見る心懸けの在り様を言うワキとの問答から掛合へ、桜立木を出せば舞台効果も上ろうというもの、況んや「田村」の地主の桜との桜尽しの番組に少々残念。後は薬平、類と類の左右に凹みのある面は憔悴とも思え、白地単狩衣に紫指貫姿も何か両肩窄めたように見え、忍びゆく恋の道行とは言え舞グセは少々辛気臭い。序ノ舞もここへ来ての長丁場、この曲の匂やかな文学的香気を発散し続けるのはむずかしいようだった。尚アイ高義、段熨斗目・長袴・小刀の正装での居語は精力的、如何にも懇ろに語り生彩があった。（1時間40分・2月19日・九皐会）

〔新住所〕
観世流・泉嘉夫氏
新住所　名古屋市昭和区山手通三-八-二、瑞光ハイツ306号
（〒466）
電話052・832・3185
（従来通り）

株式会社セントラルパーク
本社　名古屋市東区泉1丁目23-36（NBN泉ビル）
PHONE 052-961-6111
F A X 052-953-2910

能楽の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18-18
（郵便番号　464）
電　話（052）731―7　9　8　4
振替口座 00800-6-36393

購読料　1年1100円
郵送の場合　1年1800円
一　部　100円

山本博之23回忌追善能
6月3日　熱田神宮能楽殿で

観世流シテ方、山本博之師が昭和四十八年逝いてことし二十三回忌にあたり、山本追善会主催で、きたる六月三日（土）熱田神宮能楽殿で「山本博之二十三回忌追善能」が催される。

山本博之師は、明治二十八年京都に生れ、大正五年観世元巍、大正九年観世左近に師事、昭和四十年第一次重要無形文化財保持者認定、四十三年大阪府知事賞、勲五等双光旭日章受章、大阪文化祭賞、大阪府民劇場賞など受賞、名古屋にもゆかりふかく、追善能にあたり山本勝一、山本真義、山本順之の三氏は「当地は父がお稽古に伺って三十数年、永い間お世話になりましたので、ご親交を賜わりました皆様にご出演願い、亡き父に手向けたい」とあいさつを述べている。

演能は、能三番、狂言、舞囃子、仕舞、独吟で次のとおり。

能「清経」恋之音取（シテ山本博通、ツレ河村博重、ワキ飯富雅介）
能「卒都婆小町」一度之次第（シテ山本勝一、ワキ宝生閑）
能「一角仙人」（シテ梅若六郎ツレ山本章弘、河村信重、山本順之、ワキ高安勝久）
狂言「宗論」（野村又三郎）
舞囃子「融」酌之舞（山本真義）
仕舞「松風」（梶田邦久）「鞍之段」（久田徹二）「船弁慶」（河村和重）
独吟「反魂香」（河村禎二）午前十一時始。
入場料前売券一万円（全自由席）当日券一万二千円。
申込み　熱田神宮能楽殿（☎052・682・1751）または川久保彰礼方（☎052・621・4238）

平成六年度　日本芸術院賞
金剛流　金剛巌氏受賞

日本芸術院（犬丸直院長）は三月二十三日、芸術の各部野で業績があった人に贈る平成六年度（第五十一回）の日本芸術院賞受賞者九人を決定、能楽界から能シテ方・金剛巌氏（七〇）＝本名滋夫＝が受賞。授賞式は六月五日東京・上野の日本芸術院会館で行われる。

金剛巌氏は、大正十三年十二月二十三日生まれ。京都市出身。昭和五年より父初世金剛巌に師事。六年国栖の子方で初舞台、二十年龍谷大学予科卒業。二十六年父二十四世宗家金剛巌死亡により二十五世金剛流宗家を継承、二十六年京都能楽会会長就任（現在）四十年重要無形文化財「能楽」（総合指定）保持者認定、五十四年社団法人日本能楽会常務理事就任（現在）、五十九年京都市文化功労者受賞、平成三年紫綬褒章受章。

主な芸歴は、昭和十四年「翁」十四年「雪・雪踏之拍子」十六年「乱」十七年「石橋・赤」二十一年「内外詣」二十一年「望月」二十一年「石橋・白」二十二年「道成寺」二十三年「乱・九段」二十五年「鷺」二十七年「乱・広蓋之式」三十二年「道成寺・古式」三十五年「碁」（復曲）、三十八年「三輪・神道」三十九年「卒都婆小町」四十二年新作「御代の曙」（孝明帝百年祭）、四十四年「鵜鳥小町」五十四年「呉服」（復曲）五十九年「姨捨」五十九年ヴァチカン帝国でローマ法皇に羽衣を献能。

◆演能カレンダー◆

（熱田神宮能楽殿）

〔4月〕
23日（日）久田観正会（来場歓迎）（番組①面）
29日（祝）幸友会春の会（来場歓迎）
30日（日）笙月会大会（来場歓迎）

〔5月〕
7日（日）能楽殿創立40周年記念素人会（来場歓迎）（番組①面）
13日（日）青陽会定式能（有料）（番組②面）
14日（日）名古屋金春会（有料）（番組③面）
20日（土）九皐会定期能（有料）（番組③面）
12日（日）狂言やるまい会（有料）（番組③面）
27日（土）たまも会（来場歓迎）（番組③面）
28日（日）名古屋観衛会（来場歓迎）（番組④面）

〔6月〕
3日（土）山本博之23回忌追善能（有料）
4日（日）大槻清朝会（有料）
5日（月）熱田祭奉納能（来場歓迎）
11日（日）観世会定式能（有料）
17日（土）叶石会（来場歓迎）
18日（日）宝生会定式能（有料）
25日（日）狂言也留舞会（来場歓迎）

〔7月〕
8日（土）濤華能（有料）
9日（日）朝日狂言会（有料）
16日（日）観世会素謡会（有料）
22日（土）野村四郎名古屋公演（有料）

（演能変更の節はご了解下さい）

久田観正会春季大会

四月二十三日（日）九時半始
熱田神宮能楽殿

仕舞 高砂 浅井さおり　経 正キリ 加藤利恵子
縫 飼キリ 三浦敏靖　国 栖キリ 鈴木勇人
猩々 守屋佳世子
仕舞 網之段 永坂千鶴子　笹之段 水谷允子
大江山 金井奠晴
仕舞 経正キリ 坪井美記江　熊野 千賀岸恵
松風 近藤とと代　富士太鼓 西沢悦子
素謡 雨月 前野郁子　小池房子　小田シズ子
盛久 志賀礼子　田中信子　近藤とと代
仕舞 田村キリ 佐野安男　花月クセ 安藤録郎
班女アト 磯部信義　雲林院クセ 神谷功
鵜飼 瀬戸慶太郎
素謡 花筐 松井澄子　丸山敏子　瀬戸三津子　千賀岸江
西行桜 若山あや子　泉嘉夫　松山幸親
仕舞 清経クセ 大場はま子　胡蝶 服部喜美子
巻絹キリ 斉藤利子　通小町 志賀礼子
素謡 実盛 吉川宇良子　佐野正吉　佐野菊代
舞囃子 葛城 石黒操子　山姥 稲垣つね子
大和舞 立廻り入
番外仕舞 鵜之段 上田貴弘
素謡 景清 玉木孝男　斉藤利子　大脇寿美子　久田徹二
舞囃子 藤戸 神谷貞子　殺生石 田中雅子
二村源太郎　羽柴秀一　水野喜二郎
素謡 砧 番外仕舞 笹之段 久田徹二
附祝言 主催 久田観正会
（終了予定 四時半頃）

〔入場無料・御来場歓迎〕

幸友会春の会

四月二十九日（みどりの日）
午前十時始
熱田神宮能楽殿

囃子、連調、独調など三十番
番外一調 雲林院 藤井徳三　福井啓次郎
主催 福井社中　幸友会

〔御来場歓迎〕

創立六十五周年記念
笙月会大会

四月三十日（日）午前九時始
熱田神宮能楽殿

能 清経 三村恵子　安田範之　高安勝久　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
後見 中川雅章　古橋正士　地謡 山口正男　高木安子　松山幸親　久田徹二　武田宗和　小島一英　武田志房
素謡「道成寺」「正尊」「求塚」ほか
舞囃子、仕舞、連吟。（番組3月号掲載）
主催 笙月会　中川雅章

〔御来場歓迎〕

熱田神宮能楽殿創立四十周年
記念流友大会

五月七日（日）午前九時半始
熱田神宮能楽殿

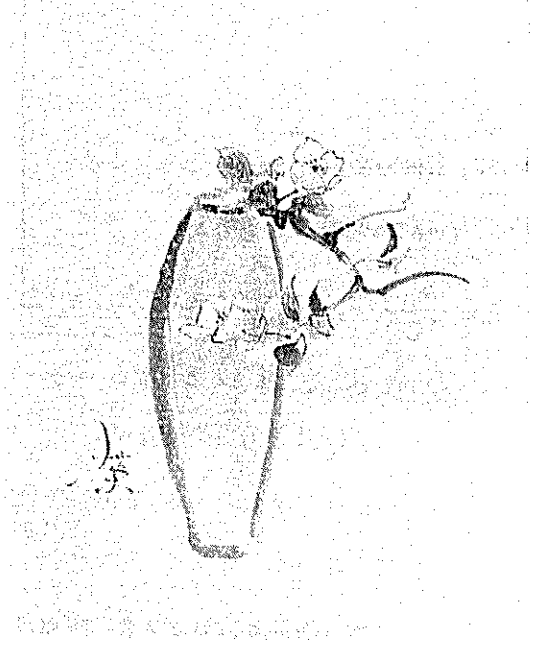
番外連吟 鶴亀 三村今沢恵子　高木近藤英智子　前野郁子　瀬戸三津子
素謡 賀茂（前野社中） 廣瀬正雄　前吉川利彦　后浜田国松　天野到
地謡 中沢孝文　佐治光幸　赤尾正　高島良一　須部甫　久田徹二　松山幸親
連吟 養老（瀬戸社中） 秋田恵美子　山口幸　大川雪子　伊藤さち子　鈴木多美子
素謡 清経（今村社中）サシ、クセ、抜キ 高木田鶴子　久須隆之　飯島弥助
地謡 永田洋子　浅野芳子　鈴木喜代子　鮮矢武子　大森孝二郎　三浦秀男　加藤千一郎　鈴木明　加野昭二郎　原博彦　佐藤尚雄　江口三郎
仕舞 経（稲生社中）網之段 政クセ　吉房徳二　鈴木寿太郎
舞囃子（高木社中）難波 若山弥栄子　河村真之介　柳原富司忠　鬼頭喜太郎　竹市学
仕舞 蝉（今村社中）松丸虫キリ 原博彦　加藤千一　河村真之介　柳原富司忠　鬼頭喜太郎　大野誠
舞囃子（高木社中）胡蝶 佐藤綾　加藤小都子　大久保喜代　小川礼子
仕舞 女郎花（加賀社中）遊行柳クセ　天鼓 佐竹鵠　河村総一郎　柳原富司忠　大野誠
舞囃子（松山社中）安宅 五段 城キリ 石黒操子　田中雅子
仕舞 葛城（久田社中）殺生石

（②面へつづく）

青山雅日記 (160)

水と和む

えと文 二井栄逸



鎌倉時代から現代までの八百年近い歴史を持つ備前。ピカソや魯山人までが世界一と称えた土を原料として焼く備前焼は、八百年という年月のあいだ一日たりとも煙を絶やしたことが無いという。

瀬戸内の海が美しい岡山県備前市伊部に備前の窯がある。

水と和む無釉の土肌の佗びがなんとも言えない。

備前のように、釉薬（ゆうやく）をつかわずに焼によって焼成（しようせい）する原始時代の技法をそのままうけついでいるのは、世界でも数少ないという。

独特の肌の佗びた色合いの美しさや、意外なモダン性に人々は魅了される。

先年、名古屋の松坂屋で、備前焼の香々都窯（かがつがま）の個展が開かれた。作家は武用真（ぶようしん）さんであった。会場でお会いした時、武用真さんは、「土味を最もよく生かし、落ちつきと風格のある備前焼、何時見ても現代感覚を失わぬもの、それに私は生涯をかける覚悟です。」と言った。

図は其の時、買い求めた花入れで、私の好きなものの一つである。

（平成七、四、二）

野村万作の世界

八ケ岳高原音楽堂で公演

雄大な自然に抱かれた八ケ岳高原音楽堂で五月二十七日、舞台生活六十周年記念「野村万作の世界」として狂言特別公演が催される。

八ケ岳高原音楽堂は木造六角堂で回廊つき日本建築様式で七年前に竣工した音楽専用ホール。

演目は「棒縛」など。

出演・野村万作、野村万之介、石田幸雄ほか。

企画・西洋環境開発。

問い合わせ＝八ケ岳高原ロッジ（☎0267・98・2131）

（①面より記念流友大会番組つづき）

舞囃子（祖父江社中）松風 林喜久子 河村総一郎 後藤孝一郎 鹿取希世
仕舞 嵐山 加藤尚子
（前野社中）班船 女アト 米田真理 佐治光幸 廣キリ 弁慶
舞囃子（高橋社中）吉野天人 深見しげ 河崎勲 福井啓次郎 鬼頭喜太郎 鹿取希世
仕舞 女郎花 磯部三枝子
（清沢社中）
舞囃子（瀬戸社中）唐船 原田千恵子 河村総一郎 後藤孝一郎 鬼頭喜太郎 鹿取希世
仕舞 松風 滝祥子
（古橋社中）
能 羽衣 半田智子 西村信広 高安勝久 辻本正樹 吉田定男 後藤孝一郎 助川龍夫 藤田六郎兵衛
仕舞 雪 林院クセ 小野喜子 石川晴子 田中米子
（近藤社中）鐘之段 熊坂
（梅田社中）彩色之伝 後見 清沢一政 久田徹二 地謡 高島良一 今村嘉勇 本田勲 須部甫 祖父江修一 中川雅章 梅田邦久 古橋正邦
連吟 小鍛冶 木村朝一 加納博 小谷隆之 林近藤賢一 早川功 日比野清一 正登 安藤勝義 横井啓三 野村昌宏
（瀬戸社中）
連吟 班女 鈴木信孝 内田清志 長尾明夫
（中川社中）
仕舞 江口キリ
（加賀社中）花山 鐘クセ 能クセ
舞囃子（久田社中）西王母 岡田康子 吉田定男 柳原富司忠 鬼頭喜太郎 竹市学
仕舞 笹之段 加藤伊都子
（三村社中）班女アト 鳥山廸永
舞囃子（前野社中）玉鬘 渡辺郁子 河村総一郎 福井啓次郎 助川龍夫 竹市学
仕舞 高砂 小田久子
（瀬戸社中）吉野天人 光松見知子
羽衣キリ 八木栄子
杜之段 渡辺幹子
若キリ 原小夜
舞囃子（梅田社中）天鼓 徳田文代 河村貞之介 後藤嘉津幸 助川龍夫 藤田六郎兵衛
仕舞 花筐クルイ 市野美代子
（久田社中）龍田 神谷貞子
山姥キリ 稲垣つね子
舞囃子（高橋社中）杜若 奈倉早苗 河村貞之介 福井啓次郎 助川龍夫 藤田六郎兵衛
仕舞 二人静 川越糸子
（近藤社中）松風 青木朋子
舞囃子（清沢社中）三輪 不破笠子 筑紫鉱一 後藤嘉津幸 助川龍夫 大野誠
仕舞 放下僧 小歌 赤尾正
（前野社中）笹之段 門脇千鶴
鞍馬天狗 石本純子
舞囃子（高木社中）小督 吉野笠之段 筑紫鉱一 福井啓次郎 助川龍夫 大野誠
仕舞 笠之段 楠本真理
（高橋社中）網之段 寺下武子
舞囃子（高木社中）猩々 青木美子 筑紫鉱一 後藤嘉津幸 助川龍夫 竹市学

番外 連吟 岩船 高島良一 松山親 本田幸 今村嘉勇 須部甫 加賀敏 高橋彦 稲垣芳雄 祖父江修一 中川雅章 梅田邦久 古橋徹二 清沢正邦 久田一政

（終了 六時過）

〔御来場歓迎〕 主催 能楽協会名古屋支部

青陽会定式能（第39期 第2回）

五月十三日（土）十二時半始
熱田神宮能楽殿

仕舞 藤トモ 須部甫
ツレ 梅田邦久 武田邦弘
キリ 生駒里翠
能 俊成忠度 飯冨雅介 筑紫鉱一 後藤嘉津幸 竹市学
兼平 加賀敏彦
仕舞 雲林院クセ 久田徹二 地謡 馬場信至 祖父江修一 中川雅章 松山幸親
国栖キリ 古橋正邦
能 羽衣 玉木孝男 高安勝久 辻本正樹 河村貞之介 後藤孝一郎 鬼頭好信 大野誠
狂言 縄ない 佐藤友彦 佐藤融 井上礼之助 後見 井上松次郎
能 葵上 前野郁子 今沢美和 杉江元 横本宰 吉田定男 柳原富司忠 助川竜夫 竹市学 井上靖浩
附祝言 主催 青陽会
（要金員券）当日券 三千円

名古屋金春流友会

五月十四日（日）午前九時始
熱田神宮能楽殿

仕舞 蟬丸道行 中川敦子
独吟 小鍛冶 島津美佐子 角仙人 平田貞三
仕舞 西王母 広瀬和宏 清水 経キリ 宮浦進
葛城 日比野はる江
仕舞 羽衣クセ 氷見恭子 蟬丸道行 拓治三
仕舞 天鼓キリ 中井弘光
仕舞 玉葛 ロウ・恵子 舟弁 慶ロウ・グレッグ
業躍 巴シテ 清水宏 ワキ 赤広一雄
仕舞 高砂 加藤剛 砂上 高橋恵津子
羽衣キリ 西山麻由美
仕舞 舟弁 慶クセ 福本寿子 東 北クセ 細川弘美
仕舞 融キリ 提暁伸
仕舞 鶴亀 下村卓也 角田川 青山美代子
生田キリ 豊田均
連吟 三井寺 シテ 加藤英昭
仕舞 玉之段 後藤美代子 羽衣クセ 小田君子
仕舞 鶴亀 赤広一雄 葛 武馬正和
連吟 黒塚 シテ 山田信普、松岡賢二、小野瀬荘樹
仕舞 雛波 吉田道子 兼平 小池信之

山姥キリ 加藤正嗣
独鼓 老松 伏原靖二 太鼓 片岡なな子
独吟 俊寛 渡部道三 八島 島清水宏
竹生島 水田孝司
独鼓 胡蝶 小島芳樹 木崎三郎 太鼓 片岡なな子
仕舞 放下僧 小歌 湯浅千里 小塩キリ 伊藤雄二
笠之段 鈴木寿
独吟 角田川 井上隆敬 笠之段 上田利英
連吟 紅葉狩 シテ 細川弘美
仕舞 杜若キリ 木崎三郎 竹生島キリ 林功
松虫 小島芳樹
仕舞 鞍馬天狗 原松枝 小袖曽我 広瀬雅弘
野キリ 広瀬瑞弘
舞囃子 藤戸 松本武

名古屋金春会・名古屋春敲会
名古屋春栄会・中部金春会
トヨタ車体謡曲部・日本電装謡曲部
愛知大学金春会

入場無料
ご来場歓迎

金春流能の会

五月十四日（日）午後二時始
熱田神宮能楽殿

解説 八島 佐藤俊之
林和利
仕舞 羽衣 柏崎 横山紳一 衣キリ 道行 高橋汎 地謡 伏原靖二 高橋忍 金春信高 小林穂高 金春安明 晃実
子方 山姥 二宮本田 停光洋
能 角田川 高安勝久 杉江元 後見 筑紫鉱一 後藤孝一郎 藤田六郎兵衛
後見 金春信高 佐藤俊之 地謡 清水正和 武馬広一雄 赤広 林永田孝司 功 河村高広明 吉場高汎 金春穂高 小島芳樹
狂言 太刀奪 大野弘之 佐藤友彦 井上祐一 後見 井上松次郎
養老 高橋忍
仕舞 江口キリ 横山紳一 金春信高 地謡 広瀬瑞弘 金春安明 佐藤俊之 柘治三
笹ノ段 吉場広明
能 小鍛冶 前シテ 金春晃実 後シテ 金春穂高 杉江元 辻本正樹 河村総一郎 福井啓次郎 鬼頭喜太郎 大野誠
後見 本田光洋 二宮倫行 地謡 伊藤雄二 佐久間祥夫 加藤正嗣 広瀬弘雅 鈴木寿 佐藤俊之 横山紳一 金春安明 高橋忍 前田茂徳
間狂言 井上靖浩
（五時四十分頃終了）
附祝言 主催 名古屋金春会

入場料＝五千円（自由席）
学生券三千円（二階席）
お問合わせ、申込み＝熱田神宮能楽殿（〇五二―六八二―一七五一）
名古屋金春会事務局（〇五二―九三五―二七二一）

（社）金春円満井会

名古屋狂言史余話（三）

佐藤友彦

維新当時、山脇藤左衛門家は九代目得平の代であった。『金城名家忌辱録』にこの得平に関して以下のように記している。

山脇得平　徳撥芳仙上座
明治十一年三月廿四日　四二
東区松山町合笑寺

名は則継　鬼頭氏の子なり　狂言和泉流の家元山脇和泉の支流山脇藤太郎、の家を継ぎ　弘化三年九代目を相続し　俸五口を賜ひ後加俸二口を賜ふ　得平家芸に精励し頗る妙技を以て称せらる。然れども其声枯れて徹せず　伝へ云う壮時美声を以て人に嫉まれ水銀を飲ましめられしに由ると

維新当時大和町にあった得平の家は、かなり大きな構えの家だったらしい。

小寺玉晁の『連城紀聞』の慶応元年の記事に、将軍上京の際名古屋城下宿泊時の宿割りが記されているが、これによると得平の家には小納戸役沼間鉱次郎、同保田銚太郎と両家の家臣計二十四名、さらに馬一匹が割り当てられている。同じ大和町では藤倉屋に二十三名と馬一匹に並んで最も多い割り当てとなっている。

ちなみにこの時は当時茶屋町の伊藤次郎左衛門の家が四十九名、同店（伊藤呉服店・後の松坂屋）に五十七名、同仕切場に百十六名と馬九四、姥屋町の関戸哲太郎の家には御目付新見河内守他二十名などとなっている。

細野要斉の『感興漫筆』に慶応三年の秋、各地に神社・仏閣のお札が降った記事を載せるが、得平の家にはなかなか降らなかったので、この年の春長島町の火事が延焼し、得平の家の北屋根を焼いて止まったことの穢れによるものと思い、塩をまいて注連を張り祈念したところ、伊勢内宮のお札が降ったと言う。ここでは得平の住所を「長島町五丁目中程西側」と記している。

大和町は長島町の一画で、長者町筋に挟まれた茶屋町からつながる通りであり、先の『連城紀聞』の屋並図と一致する。

同じ細野要斉の『雑の滴・諸家雑談』の内に小寺玉晁からの伝聞の形で、文政年間に市下の味噌屋で「大屋」と称した富豪が放蕩の末に自殺した記事を載せるが、その放蕩の始まりが山脇治兵衛に狂言を習ったことによると言う。治兵衛は山脇藤左衛門家七代目で大屋より大金を得るが、八代目が放蕩し家甚だ貧しくなり、その養子となったのが九代目で今の得平であると紹介している。

この『雑の滴・諸家雑談』や同じ要斉の『感興漫筆』などにしばしば得平に関する記事が見られ、それによると要斉と得平とは親交があったらしく、得平の家を訪ねたり、得平に誘われて当時珍しい記念写真を一緒に撮影したりしている。

また小寺玉晁と言うのは下級士族の出身だったが、驚くべき雑豆な雑文家で、自分の興味あることなら何でも写し、また書きとどめた。その著述の量は見当もつかないほどで、国立国会図書館、早稲田大学図書館を始め、知られているだけでも膨大な著述が残されており、『尾張芝居雀』『見世物雑誌』『古楽園随筆』など「名古屋叢書」に、また『連城紀聞』『東西評林』『東西紀聞』などが「日本史籍協会叢書」に収められている。

能狂言に関する記録も散見され『連城亭随筆』の内には「和泉流狂言由緒書」を書写し、『乱舞之雑録』では「山脇流狂言起証文」を書写するなど、かなり親しいところに狂言関係者の存在を感じさせる。要斉のほか、小田切春江、水野三四郎などとも親交があった。案外得平あたりとも直接の親交があったかも知れない。

明治十一年三月、四十二歳で得平が没すると、その子録弥は跡を継がずやがて廃業している。得平の弟子には角淵宣、田中庄太郎、職部定治などがあった。

早川家は四代目幸八の時に維新を迎えている。幸八は享和二年（一八〇二）生まれで幼名洗四郎、維新当時は六十六歳前後だった。宗家元賀より十歳の年長であり、しかも妹のおていが元賀のもとへ嫁いでいた。つまり幸八は宗家にとっては義理の兄に当たる立場にあったわけである。山脇得平も当時三十二歳と若く、自然幸八が維新後の名古屋狂言界に重きをなすこととなったのだろう。

前号で述べたように初代忠三郎は商家出身で町役者の家だったらしく、代々その気風があったのかも知れない。早くから町人商家に狂言を教えていたことがうかがわれる。桑山好之の『金鱗九十九之塵』（天保末頃書写）に幸八弟子として以下の名が見られる。

（大津町）　猿楽狂言
早川幸八門人　信濃屋孫助
（武平町）　乱舞狂言　山脇流
早川洗四郎弟子　佐分吉兵衛

後に早川家の芸事相続を許される井上菊次郎も商家の出ながら、嘉永六年に八歳で城内の舞台を踏んでいると言う。

幕末の尾張藩勘定方能吏として著明な片岡喜平次の日記「片岡喜平次覚帳日記」（鶴舞図書館蔵）によれば、明治二年四月六日「早川宅おゐて狂言有之」と狂言の会の番組が記されているが、この日狂言五番、「輝り」が終わったところで雨天延期となり、九日に引き続き十八番が演ぜられている。

二日間で十三名の名前が見られるが、宗家関係者の名は見られず、おそらく幸八・得平の共催の会だったものだろう。彼らは早くから弟子を養成していたらしく、それなりの力量を持った弟子が育っていたようである。

幸八弟子の井上菊次郎は二日間で八番、得平弟子の田中庄太郎が同じく十二番、やはり得平門の職部定治も十一番に名前を見せている。同年十二月一日にも「早川ニ而楊代八夕」で狂言会を開催、狂言十二番に囃子五番、ここでは狂言の内四番に子供たちが出演している。

早川舞台での催しは雨天でしばしば順延されており、おそらく屋根のない桟敷様式のものだったと思われる。明治十年に幸八は七十六歳で没するが、この頃まで大野舞台と並んで維新直後における当地催能の中心となった。この舞台がどこにあったかはっきりしないが、玉晁の『伝聞過去録』には明治十年の項に幸八が挙げられ、「大乗院堺内ニ住ス」と記されている。これによれば日之出町にあたり、大須、末広町にも近く、井上菊次郎、水野代次郎（伊勢門水）らの入門も地理的条件からもうなずけるものであろう。

幸八には娘ばかりで男子がなく早川家も結局絶家となってしまうのである。

（筆者は和泉流狂言方）

平成7年4月・5月放送

〔4月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）
23日（日）「草子洗小町」～観世流～　鵜沢　雅
30日（日）狂言「八句連歌」～大蔵流～　善竹圭五郎
「末　広」～同　～　山本　則直
日本の伝統芸能・能楽鑑賞入門　教育テレビ
土曜日午後9時30分、再放送・翌週水曜日午後3時
4月22日、29日　講師　高桑いづみ
能「道　成　寺」ゲスト山本東次郎、金春　安明
NHK保存ビデオのほか、五流のさまざまなビデオにより紹介。

〔5月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）
7日（日）「杜　若」～観世流～　山本　順之
14日（日）「善　知　鳥」～宝生流～　佐野　萌
21日（日）「雷　雀　山」～観世流～　関根　祥六
28日（日）「　鵜　」～金剛流～　種田　道雄

名古屋観世九皐会定例能（第2回）

五月二十日（土）午後一時始
熱田神宮能楽殿

舞囃子　玉　葛　高木美智子　河村真之介　後藤嘉津幸　竹市　学
地謡　外山圭一　観世喜正　中所宣夫　高橋暸一
能　蘆刈　佐久間二郎　駒瀬直也　杉江　元　河村真之介　後藤嘉津幸　竹市　学
間　佐藤友彦
後見　佐々木勝輝　外山圭一　観世喜之　高木美智子　加藤保彦　高橋暸一
地謡　観世喜正　五木田三郎　小林喜久　中所宣夫
狂言　清水　井上祐一　井上松次郎　後見　井上靖浩
仕舞　忠度　嵐山　外山圭一　五木田三郎　佐久間二郎　観世喜正
籠太鼓　小林喜久　駒瀬直也　高橋暸一
能　野守　観世喜之　黒頭　高安勝久　寛紘一　柳原冨司忠　鬼頭喜太郎　勝田六郎兵衛　間　大野弘之
後見　観世喜正　五木田武計　佐久間二郎　外山圭一　高橋暸一　加藤保彦
地謡　小林喜久　五木田三郎　青木武弘　中所宣夫
附祝言

主催事務所　名古屋観世九皐会
〒457　名古屋市南区元塩町一一一一七
（加藤保彦方）
TELO五二（六一一）三六五九

（要会員券）
当日券　五千円
学生券　二千円

第38回 狂言 やるまい会公演

五月二十一日（日）午後一時始
熱田神宮能楽殿

～夫婦のかたち　四題～

狂言　岡太夫　野村　信行　松田　高義　野口　隆行
囃子　沢辺之舞　河村真之介　福井啓次郎　助川　龍夫　奥津健太郎　勝田六郎兵衛
狂言　法師ヶ母　野村又三郎　野村　万作
狂言　右近左近　山本　則直　茂山　真吾
狂言　茶子味梅　野村　万作　石田　幸雄　井上礼之助
（終演午後三時頃）

入場料
A券（一階正面指定席）四千五百円
B券（一階脇正指定席）三千五百円
C券（二階正面指定席）二千五百円
学割券（二階脇正自由席）千五百円
（学生及び外国人対象、やるまい会事務所のみの取扱い）
入場券取扱　県内各プレイガイド、チケットぴあ（052・320・9999）やるまい会事務所
やるまい会事務所　〒460名古屋市中区正木2－16－25　野村方
（※事務処理の都合上、入場券のお申込みは葉書を希望）

第七回 たまも会

五月二十七日（日）午前十時始
熱田神宮能楽殿

囃子　胡蝶　酒井敬子　森温子　高木アイ子
源氏供養　平松伊佐子　青山博子　神村美智子
羽衣　長棟忠美　篠田慎子　水野すま子
鞍馬天狗　酒井美由貴　川本隆
地謡　三橋公恵　服部水野　平野安藤久　坂野峰子　房枝　匂子
能　融　金児晶子　高安勝久　河村真之介　福井啓次郎　助川龍夫　大野誠
間　井上靖浩
舞囃子　高砂　金児晶子　河村真之介　福井啓次郎　助川龍夫　大野誠
西王母　酒井美由貴　河村真之介　福井啓次郎　助川龍夫　大野誠
船弁慶　高橋豊子　河村真之介　福井啓次郎　助川龍夫　大野誠
仕舞　羽衣　鞍馬　生平　石　篠太鼓　衣キリ　松島幸子　金児晶子　水野すま子　篠田慎子
囃子　小袖曽我　鈴木久恵　福島明子　塚本照子　山本洋子　永田喜久子　小野郁子　長尾幸子　福村美代子　早川照子　藤川足立節子　平岡一子　丹羽治子　亀井茂一　寺田澄子　北原弘子
囃子　遊行柳　鈴木彦一　岡戸四朗　梅田順二　三橋茂三　山本辰雄
仕舞　八田　島村キリ　花生田　月キリ　敦盛キリ　金児晶子　青山博子　平松伊佐子　三橋茂三　梅田順二　金児晶子
囃子　加茂　猪飼達也　河田直倪　森温子　荒川淑子　酒井敬子　坂津矢子　青柳光昭
玉葛　青木堯　神村美智子
鉢木　青木堯　高木アイ子　平松伊佐子　真野久
龍田　篠田慎子　水野すま子
附祝言
（終了予定　五時頃）
主催　たまも会　金児晶子
〔御来場歓迎〕
三重県一志郡一志町田尻七〇〇番地
TEL（〇五九二九）三－五〇五六

名古屋観衛会

五月二十八日(日)午前十時始
熱田神宮能楽殿

番外仕舞　忠度　山本博通
西行桜　波多野晋
連吟　小袖曽我　湯浅知子　春日井以久子　寺田雅美　青山久美子　河合温子　石黒鏡子
素謡　井筒　青柳イツエ　北クセ　稲葉正信　川クセ　水谷圭子　上遠野ひな子
仕舞　東桜　伊藤秀子　吉田定男　柳原冨司忠　鹿取希世
舞囃子　梅枝　杉野伸江　筧鉱一　柳原冨司忠　鬼頭喜太郎　鹿取希世
玄象　舞五段　波　水野恵子　寺田雅美
仕舞　殺生石　伊藤健一郎　筧鉱一　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　鹿取希世
舞囃子　熊坂　駒形賀津子　吉田定男　柳原冨司忠　鹿取希世
采女　独吟　網之段　盛久　玉取　原田一平　木方洋　伊藤一枝
能　半部　川瀬とよ子　飯富雅介　井上祐一　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
仕舞　敷花筵　盛　山内栄瑜美　奥村泰広
舞囃子　江口　豊住雅子　吉田定男　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛
頼政　仕舞　箙　太鼓　山中節子　吉田定男　柳原冨司忠　鹿取希世
舞囃子　雲林院　阿漕　鈴村とみ　筧鉱一　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　鹿取希世
富士太鼓　現之楽　川久保彰礼　吉田定男　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
被　素謡　姨捨　吉田琴子　山本順之　斉藤光裕　後藤孝一郎　三宅川公香　河村総一郎　山崎栄治
一調三井寺　勧進帳　独吟　卒都婆小町
舞囃子　熊野　村雨留　中川芳子　筧鉱一　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛　脇田喜美子　河村総一郎　福井啓次郎　鹿取希世　足立奈々子　筧鉱一　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛
砧　融　酌之舞
番外仕舞　巻　知盛　山本勝一
視言志　賀　山本真義
（終了予定　五時頃）
主催　名古屋観衛会
指導　山本勝一
共催　名古屋正花会
指導　山本博通

◆観能寄稿◆

「清経・恋之音取」

—第11回名古屋能楽鑑賞会—

松本武

恋之音取の小書がつくと笛方の秘曲となり、シテの出に習ありとされている。

「枕や恋を知らすらん」と地謡が調子をしずめて低吟すると笛方（大五郎）がにじり出て幕方向を向く。笛吹き出すと、シテ（野村四郎）半幕で下半身を見せ、そのまま幕は、ゆっくり上る。

一管にひかれて、シテ幕を出て、笛途切れると三ノ松で停る。しばしの静寂。笛吹き出すとシテは、おもむろに二ノ松と一ノ松の間まで歩み、笛途切れたとき歩みを停める。しばしの静寂。やがて恋の手吹き終ると、おもむろに歩み出し、常座に進む。笛途切れたとき、シテ「うたたねに恋しき人を見てしより……」と謡う。

との間約八分。

恋の音取とは、シテ清経の霊が、笛にさそい出されてツレの夢の中におもむろに現われる様と見せる特殊演出であるが、そのためには笛方とシテが見えない糸で通じ合っているような感じを出すのが肝要である。

恋の音取のシテの型付は、五流それぞれ異なっており、金春の型付は後述（註）のとおりであり、金春に比べると観世の型は、笛が吹き出すと、シテは歩み出し、笛途切れるとシテ停るわけで、この点からすると、筆者は、シテの出は、いささか物足りなかったが、これは流儀の型付の問題で、シテ個人の技量とは別次元のことがらに属する。

清経の見所については、堂本正樹講師のユニークな解説のとおりである（清経のクセ、キリは、いわゆる仕方舞で、地謡の説明的な謡に合わせて、入水に至る経緯などを型で示すこと、これらはすべてツレ（清経の妻）の夢の中にうつし出されたものであること、清経は仏教の無常観ないし戒に対する懐疑につらぬかれているストーリーであること、ツレは坐つたまま終始するので、中々に大変な役であること等）。

さて、クセから始まる仕方舞であるが、地謡の「神馬七疋その外金銀種々の捧げ物……」の次に、ツレが「かように申さば尚も身の怨みに似たる事なれども……」と謡う。

ツレの夢の中に出たシテの仕方舞の途中でツレが問答するのは、いささか異和感を覚える（下掛—金春、金剛・喜多—は、ツレのこの謡はない。）が、意表をついた演出との評価もあろう。又「世の中のうさには神もなさものを何祈るらん心づくしに」とシテが謡ったが、金春では、ワキが謡う（金春ではワキの途中退場がない）。

「一葉の舟なれや……」以下はシテ常座を通り柱ガカリの二ノ松辺まで行き、「白鷺の那れいる松見れば……」の型どころをシッカリ舞った。又「舟よりかっぱと落汐の底の水屑……」の安座に至るまでも言うところなし。

総じて力のこもった好演と言えよう。

ツレ（片山清司）は、安坐の姿勢を終始いささかの破綻もなく維持しつづけ、「これは中将殿の黒髪かや、見れば目も昏れ心消え…」と謡いながら守り袋をじっと見つめるところ、「手向け返して夜もすがら……」で正先を向いて、身じろぎもせず、次第に夢の世界に入って行く様を見せるところ、いずれも佳。

ワキ（宝生閑）も好演。渋みがあって内に力を充実させ、情のこもったワキで印象的であった。

鎖之丞を地頭とある地は、さすがに立派。

大五郎のやわらかでせんさいな笛、忠雄の鋭い気合の大鼓、博朗のさえた小鼓も好演。

笛後見の六郎兵衛が、音取りのとき、笛を構え、不測の事態に備えていたのも印象的。

狂言昆布売の茂山千作、同忠三郎、いかにも上方の狂言という感じで、興趣をそそられた。

付言すれば、当日は満席の盛況で、謡を習っていない愛好者も多勢いたようで、これは、鑑賞会担当者の優れた企画力と行動力のお陰と思う。今後の同会の発展を心から期待する。

（註）金春の音取は、昭和十一年に桜間弓川（当時金太郎）が復活初演したもの（能楽三代、白水社、桜間竜馬著四六頁）。

一管にひかれてシテが三ノ松で停るまでは観世と同じであるが、停ったとき面を伏せる。笛途切れ、しばらくして笛途切れたまま歩み出し、歩みの途中で一管が吹き出し、二ノ松で正先向き面を伏せる。しばしの静寂。再び一管が吹き出し、歩み出し、笛途切れても、そのまま歩み、一ノ松で停ると、笛吹き出し、左右する型があって、正先向き面を伏せると笛途切れ、やがて恋の手が吹き出し、これを聴き終えてからおもむろに常座に進む。藤田流では約十五分である。

要するに笛途切れたまま歩み出し、歩みの途中で笛が吹き出すこと、又歩みの途中で笛が途切れることがあることと、シテは停ったら必ず面を伏せるという点に特色がある。

従って、シテと笛方が互に心の中で間を計り合う必要があり、この点は道成寺の乱拍子におけるシテと小鼓の間の計り合いに相通ずるものがある。

前述した笛とシテが見えない糸で通じ合っているような感じは、金春の型の方がベターと思うがどうであろうか。筆者の独断かも知れない。

岐阜淡交会　春季大会

5月21日　岐阜市文化センター

岐阜淡交会では、五月二十一日（日）岐阜市金町の岐阜文化センターで、春季大会を開催する。午前十時始。

番囃子「鉄輪」（伊藤好忠、三品喜嗣、栗本満智子）

素謡「景清」「井筒」「砧」「恋重荷」ほか舞囃子、独吟、仕舞など。

番外仕舞「藤戸」（橋岡慈観）

御来場歓迎。

◆仲春の舞台から◆　（その一）

「能・狂言普及公演（二部）」「第11回名古屋能楽鑑賞会」

竹尾邦太郎

「名取川」　授けられたものを奪られる口惜しさ、それが受戒した僧の法号という、本人の面目に関わる抽象的な名であれば、取り戻す過程も論理的かつ具体的でなければ説得され得ない、とまあ斯様な難しさである。

備忘のため法衣の袖に書き付けた希代坊とスペア不祥坊の法号、それらを更に反復暗唱する手段に謡節・舞節・踊り節・勤行節に乗せるシテ又三郎のはしやぎ様は、名取川で淵に嵌って動顛したはずみに忘れ、書き付けも流れ去る。されば名を拘わんと菅笠を水に入れれば持ち前の太平楽は川尽しの小舞謡機嫌、この辺り地（信行・高義）との掛合も上々。アド名取ノ何某・祐一に殺生禁断と咎められれば名取に付け込む名を返せの論理。怪しい（希代な）事を言い掛ける人に難儀（不祥）な処で出会した、と咄つ祐一の愚痴がヒント、ヘ二つの名をば取返し、本国さして帰りけり、と又三郎の意気揚々の謡留めも無邪気に、息の合った舞台は説得力充分、狂言次第のアシラヒ（誠・冨司忠・鉱一）のある本格もうれしかった。（26分）

「玄象」　琵琶の奥義を求める渡唐の名残の観月に、須磨に立ち寄るツレ師長（雅章）、風折烏帽子・鶯色大口・薄鼠色長絹の渋い品格。折から薄暮に汐汲むシテ尉・徹二は、青黒い野性味のある朝倉尉の精悍な面構えに剛毅な意志を顕わせ、それは後シテ村上天皇の威風に通じる。理屈抜きに、框一杯に出て深深と汐を汲むのも大胆なら、師長を前に臨するところ無く、琵琶をへ遊ばせや、とアシラヒ促すのも大きな風格。板庇打つ村雨に苫をへさつと葺き、と扇高く掃いたのも鮮やかだった。音の調子が同じになった、とワキ従者（勝久）から師長へとアシラッて視線を移してゆく辺りの、得意が出るのも微笑ましい。曰くありげな尉が逆に勧められて弾く琵琶は、安座扇抱える型のみ。後シテは初冠（歪纓）・面中将・紫指貫・白直衣の気品ある姿。悠揚暢達な早舞の袖捌きに、直衣の袖えぐりからこぼれる赤地縫箔着付の、青海波・帆掛船・浜辺ノ松の文様が師長に思い止まらせた渡海を暗示して象徴的。全体に輪郭の大きな立派な舞台だった。姥・幸親、龍神・一政、地は憲夫・邦弘ら。後見は邦久・郁子。（1時間33分・3月11日・普及公演二部）

「昆布売」　大蔵流は大名（和泉流は雑）狂言に分類するが、シテ千作の名宣は常座で「何れも御存知の者」、アド昆布売・忠三郎に下心あって近付くところはおどかな大名像とは程遠い打算的なあくの強さである。太刀を持つのを一旦は断わる昆布売に、威して承諾させる段で、「真実カアーッ」と大音声で駄目を押すなど、行儀の良すぎる見所の気配に鋭く反応するオーバーアクションも千作独得の資質の一。太刀が相手に渡って逆に脅され昆布を売る破目も、様々な節付けの売り声に「こりゃ中々面白さうな事ちゃ」と浮かれ「まだ売れ〳〵」と嗾けられれば頭上高々と昆布を掲げ、太刀を捧げるアドとの連舞となるあっけらかんの飄逸味もユニークだった。後見は千三郎。なお作り物の昆布にも、和泉流との異同があった。（31分）

「清経・恋ノ音取」清経入水をツレ妻・清司に知らせるワキ淡津三郎・閑、一ノ松の名宣も淡々と道行一杯に常座、笠を脱ぎ詞。笠を後見座に置いて戻り、ツレに案内を乞うのも冷静である。怨んでも詮の無い世を悲しむツレのシオリに、世の中は何事も儚い、と初同（鎖之丞・順之ら）が更にツレの心情を重ねれば、平伏のワキは静かに顔を上げてツレを直（ひた）と見詰める。その気色に押されるようにシオリを解くツレと、遺髪を手渡すタイミングを計るようなワキの重苦しい胸中も窺われ、ここは含蓄がある。眼目の恋ノ音取はすすり泣く妻の声の表徴。鳴咽の間歌を縫う憚りを、千鳥掛にみせて出るシテ清経・四郎の心象も重り、貫い泣きも誘うむせぶような大五郎の笛である。白地波ニ海松貝文様文大口に紺地破レ立湧文様単法被の瀟洒なシテ、ツレとの掛合にはさすが傷心もみせるが一体は醒めた印象。クセの型どころ、月を眺め、横笛を抜き取ると、すみやかに吹く型を大五郎が美しくアシラフ。西方浄土を希求してへ船よりかっぱと落汐の、と乗込拍子に扇カザシて入水をみせるやきりりと鋭く廻りざま安座、海の藻屑を消えるまでの連続する型も鮮やかに決めた。鎖仙会総出の地に囃子は大五郎・博朗・忠雄、主後見を真州。（1時間17分・3月18日・名古屋能楽鑑賞会）

能楽大会のビデオ撮影は西川企画へ！
舞姿の勉強と記念に是非どうぞ！
当社のビデオ撮影はNHKのテレビ放送番組を20年間制作してきた
専門技術により、きっとご満足いただける自信があります。
テレビ放送番組企画制作
テレビCM企画制作　ビデオプロダクション　西川企画
記録ビデオ撮影
名古屋営業所（〒451）名古屋市西区名駅2-20-3輪の内荘　小椋方　☎（052）571—5816
（〒500）岐阜市北野町20—2　TEL（058）263—9869

若い御二人の門出に
ふさわしい結婚式場
名古屋総鎮守 若宮八幡社
各種会合や宴会にも御利用下さい
（駐車場完備）
名古屋市中区栄3丁目35―30　電話（241）0810

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18-18
（郵便番号　464）
電　話（052）731―7984
振替口座 00800-6-36393
購読料　1年1100円
郵送の場合　1年1800円
一　部　100円

熱田祭奉納能

能3番上演

6月5日 熱田能楽殿

能楽協会名古屋支部（野村又三郎支部長）主催による熱田神宮大祭の協賛「熱田まつり奉納能」は六月五日（月）正午から熱田神宮能楽殿で催される。

演能は、喜多流、宝生流、観世流による能三番はじめ狂言、舞囃子、仕舞で能楽協会名古屋支部の恒例の協賛行事、後援熱田神宮。主な演能は次のとおり。

観世流舞囃子「百萬」（今村嘉男）
喜多流能「経政」（シテ和谷衡市、ワキ飯富雅介、笛・亜取希世、小鼓・後藤嘉津幸、大鼓・覚鉱一、地謡・長田聡、長田郷ほか）
狂言「歌争」（シテ松田高義）
宝生流能「杜若」（シテ竹内澄子、ワキ飯富雅介、笛・竹市学、小鼓・後藤孝一郎、大鼓・河村真之介、太鼓・鬼頭喜太郎、地謡・辰巳孝、衣斐正宜ほか。）
仕舞、金春流「天鼓」（前田茂穂）
金剛流舞囃子「海人」（シテ牧野元子）
観世流能「巻絹」（シテ生駒里翠、ツレ八神孝充、ワキ辻本正樹、笛・大野誠、小鼓・柳原冨司忠、大鼓・河崎勲、太鼓・助川龍夫、間・井上祐一、地謡・武田邦弘、古橋正邦ほか）
入場無料（番組②面掲載）

人間国宝に
観世流シテ方 観世銕之丞氏

文化財保護審議会（鈴木勲会長）は四月十四日、重要無形文化財保持者（人間国宝）に、能・シテ方・観世銕之丞氏ら十人を認定するよう与謝野文部大臣に答申した。

観世銕之丞氏のほかに今回認定されたのは、琵琶の山崎旭萍、浄瑠璃の常磐津一巴太夫、落語の柳家小さん、白磁の井上萬二、三彩の加藤卓男、羅の北村武資、鍛金の奥山峰石、桐漆の塩多慶四郎、竹工芸・二代前田竹房斎の諸氏。

〔授賞理由〕
幼少より祖父観世華雪及び父観世雅雪の厳しい指導のもとに修業し指導のもとに修業を積み、これまで各種の曲に好演を見せて来たが、緻密な芸と高い芸格の演能により平成四年芸術選奨文部大臣賞を受賞するなど高い評価を得ており、代表的なシテ方となっている。また復曲、改作上演、海外公演等にも幅広い活動を続けて成果を挙げ日本芸術院賞も受賞している。さらに後進の指導育成にも積極的に尽力している。

〔略　歴〕
昭和六年一月五日、七世銕之丞（雅雪）の四男として東京に生まれ、祖父華雪（六世銕之丞）、父雅雪、兄寿夫に師事。昭和九年「鞍馬天狗」子方で初舞台。初シテは一三年「合浦」。

国立能楽堂研修シテ方主任講師、（社）鉄仙会理事、（財）観世文庫評議員を歴任。昭和五五年、八世観世銕之丞を襲名。昭和三二年、大阪市民文化祭優秀賞、平成三年度芸術選奨文部大臣賞、同年度日本芸術院賞を受賞している。

現在、能楽界の人間国宝は、藤田大五郎、鵜沢寿、瀬尾乃武、茂山千五郎、松本恵雄、金春惣右衛門、宝生閑、観世銕之丞の八名で、観世流シテ方として初の人間国宝である。

◈演能カレンダー◈

（熱田神宮能楽殿）

〔5月〕
27日（土）たまも会（来場歓迎）
28日（日）名古屋観衛会（来場歓迎）

〔6月〕
3日（土）山本博之23回忌追善能（有料）（番組①面）
4日（日）大槻清韻会（有料）（番組①面）
5日（月）熱田祭奉納能（来場歓迎）（番組②面）
11日（日）観世会定式能（有料）（番組③面）
17日（土）叶石会（来場歓迎）（番組③面）
18日（日）宝生会定式能（有料）（番組③面）
25日（日）狂言也留舞会（来場歓迎）

〔7月〕
8日（土）清華能（有料）
9日（日）朝日狂言会（有料）
16日（日）観世会業謡会（有料）
22日（土）野村四郎名古屋公演（有料）

〔8月〕
5日（土）名古屋薪能（熱田神宮神楽殿前）（有料）
6日（日）青陽会定式能（有料）
20日（日）普及能公演（有料）
27日（日）衣斐正宜後援会能（有料）

（演能変更の節はご了解下さい）

山本博之 二十三回忌追善能

六月三日（土）午前十一時始
熱田神宮能楽殿

能組

能 清経
河村博重　山本博通　飯富雅介　笛 鉱一　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛
恋之音取　後見 河村栄重　河村禎二　地謡 角当直隆　清沢一政　祖父江修一　赤瀬雅則　山本章弘　松浦信一部　山本順之　久田徹二

松風　梅田邦久
仕舞 鵜之段　久田徹二　地謡 今村一夫　赤瀬雅則　山本章弘　河村栄重
船弁慶　河村和重
独吟 反魂香　河村禎二

能 卒都婆小町
山本勝一　宝生閑　高井松男　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
一度之次第　後見 河村信重　山本真義　地謡 森本哲郎　高橋鉱一　河村博重　和重　松浦信一郎　梅田邦久　若　波多野晋　六郎

舞囃子 融
山本真義　吉田定男　後藤孝一郎　助川竜夫　鹿取希世
酌之舞　地謡 今村一夫　森本哲郎　松浦信一郎　山本博通

狂言 宗論
野村又三郎　野村信行　松田高義
後見 野口隆行

夫人 山本順之
竜王 河村信重
〃 山本章弘
梅若六郎

能 一角仙人
高安勝久　杉江元　辻本正樹　吉田定男　後藤孝一郎　助川竜夫　鹿取希世
後見 赤瀬雅則　山本勝一　地謡 高橋鉱一　清沢一政　祖父江修一　河村栄重　山本博通　波多野晋　山本真義　久田徹二
作物後見 角当直隆　河村博重　今村一夫　森本哲郎

追加

主催 山本追善会

〔入場料〕前売券　一万円（全席自由席）
当日券　一万三千円（自由席）
申込み＝熱田神宮能楽殿（☎052・682・1751）
川久保彰礼（☎052・621・4238）
各出演楽師宅

名古屋清韻会能

六月四日（日）午後一時開演
熱田神宮能楽殿

番組

仕舞
高砂　稲生芳雄
屋島　黒田博
小鍛冶　今村嘉勇
天鼓　八神孝充
地謡 三島憲　山本正人　赤瀬禎友　清沢一政

能 杜若
泉嘉夫　中村弥三郎　河村総一郎　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　鹿取希世
素囃子
後見 味方玄　上田拓司　地謡 根岸住郎　八神孝充　黒田博　今村嘉勇　山本正人　泉田義高　斎藤泰孝　信隆

舞囃子
歌占　近藤幸江　笛 鉱一　柳原冨司忠　大野誠
地謡 久保誠一郎　武富康之　山本正人　斎藤信隆　赤瀬禎友

狂言 貰聟
野村又三郎　松田高義　野村信行
後見 佐藤融

能 唐船
唐子 河村和晃
唐子 山田龍之介
日本子 大槻一文
日本子 上田宜照
大槻文蔵
盤渉　中村弥三郎　吉田定男　後藤孝一郎　助川龍夫　藤田六郎兵衛
間　太刀持 佐藤友彦　船頭 野村信行
後見 武富康之　赤松禎友　地謡 桑野剛年　松山幸親　清沢一政　祖父江修一　河村和重　阿部信之　上田拓司　味方玄
―終了4時30分頃―

主催 大槻清韻会

〔入場料〕（全自由席）一般七千円、学生四千円
お問い合わせ＝熱田神宮能楽殿（☎052・682・1751）
大槻能楽堂（☎06・761・8055）
出演能楽師宅

紫綬褒章 野村万作氏
平成七年春の褒章

学問、芸術など文化的分野ですぐれた業績のあった功労者に贈られる紫綬褒章が四月二十九日発表され、能・狂言界では、和泉流狂言方・野村万作氏（六世）が受章された。

野村万作氏は、六世野村万蔵（人間国宝）の次男として、昭和六年東京生れ、祖父万斎の師事、昭和九年「鶴猿」で初舞台、昭和三十四年芸術祭奨励賞、三十八年ワシントン大学客員教授として渡米、各地で公演、狂言をアメリカに初紹介、四十七年無形文化財総合指定、五十二年「釣狐」を観る会で芸術祭大賞、平成二年芸術院賞受賞。

能「善知鳥」上演
第10回梅若盛義こころみの会

「梅若盛義こころみの会」は、すでに十回を数え、きたる六月十七日（土）東京・松濤の観世能楽堂で公演される。

演能は、能「善知鳥」を外之浜風、替之翔の小書で上演、さらに梅若盛彦師の能「杜若」の能二番。

番組次のとおり。

解説 「善知鳥について」 西 哲生氏

能「杜若」恋之舞（シテ梅若盛彦、ワキ宝生欣哉、笛・一噌隆之、小鼓・鵜沢洋太郎、大鼓・柿原弘和、太鼓・観世元伯、地謡・池内幸三郎、後見・岡田朗詠）

仕舞「浮舟」（山本順之）「大江山」（観世栄夫）

狂言「伯母ケ酒」（シテ山本東次郎、アド山本泰太郎）

能「善知鳥」外之浜風・替之翔（シテ梅若盛義、ツレ岡田晃一、子方・池内志穂、ワキ森常好、アイ・山本東次郎、笛・一噌仙幸、小鼓・鵜沢速雄、大鼓・山本孝、地謡山本順之、後見観世栄夫）

入場料S席一万円、A席八千円、B席六千円、C席四千円、自由席三千円、学生席二千円。

チケット取扱い＝観世能楽堂（☎03・3469・5241）チケットぴあ（☎03・5237・9988）など。

問い合わせ＝梅若盛義後援会事務所（☎03・3705・2884）

平成7年5月・6月放送

〔5月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）

23日（日）「　　」～金剛流～ 梅田 道雄

〔6月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）

4日（日）「高野物狂」～観世流～ 五木田武計

11日（日）「三　　山」～宝生流～ 松本 恵雄

18日（日）「天　　鼓」～喜多流～ 大島 政允

25日（日）「小袖曽我」～観世流～ 山本 真義

〔テレビジョン〕

6月18日（日）午後3時教育テレビ

狂言「無布施経」～大蔵流～ シテ 茂山 千作

アド 茂山 真吾

第1回浄闇薪能
名古屋・闇之森八幡社
金春流 能「八島」上演

名古屋・中区の闇之森（くらがりのもり）八幡社で、初の「浄闇薪能」（じょうあんたきぎのう）が五月十三日（土）午後五時半から金春流により上演された。

闇之森八幡社は、鎮西八郎為朝ゆかりの八幡社で、演能は同八幡社境外の伊勢山中学校校庭の特設舞台で挙行。金春流宗家金春信高師はじめ金春流能楽師多数が来宮した。

主催・浄闇薪能実行委員会
後援・中部日本放送、中日新聞社
補佐・名古屋金春会、長生会。

演能は次のとおり。

解説・金春流・本田光洋

舞囃子「高砂」（鬼頭尚久、笛・大野誠、小鼓・後藤嘉津幸、大鼓・筧鉱一、太鼓・鬼頭好信）

仕舞「殿」（高橋汎、地謡金春晃実、金春穂高）

火入れ式・闇之森八幡社 下世古宮司

舞囃子「杜若」（本田光洋、笛・大野誠、小鼓・後藤嘉津幸、大鼓・筧鉱一、太鼓・助川龍夫）

狂言「口真似」（野村又三郎、松田高義）

一調「舟弁慶」（金春晃実、太鼓鬼頭喜太郎）

能「八島」（前シテ金春信高、後シテ金春安明、ツレ横山紳一、ワキ高安勝久、笛・大野誠、小鼓・後藤孝一郎、大鼓・鬼頭英二、アイ・野村又三郎）

名古屋清韻会能
6月4日 熱田能楽殿

大槻清韻会主催の「名古屋清韻会能」は六月四日熱田神宮能楽殿で開催される。

能「杜若」（泉嘉夫）

能「唐船」（大槻文蔵）

舞囃子「歌占」（近藤幸江）

狂言「貰聟」（野村又三郎）

仕舞「高砂」「屋島」「小鍛冶」「天鼓」

午後一時開演、全自由席一般七千円、学生四千円。（番組①面掲載）

山本定期能
6月11日 山本能楽堂

山本定期能楽会は六月十一日、大阪・中央区徳井町の山本能楽堂で定期能を開催。十二時半始。

能「竹生島」（波多野晋、ツレ河村信重）

能「花筐」（山本真義、ツレ松浦信一郎、王山本優華）

能「安達原」（河村栄重）

狂言「神鳴」（茂山忠亮）

ほか仕舞

大阪

徳川美術館の狂言講座

徳川美術館では、昨年にひきつづいて、狂言和泉流宗家・和泉元秀氏による幅広いお話しや実演で狂言に親んでもらう平成七年度の「狂言講座」を五月六日から開講しているが、第二回以降の開催予定は次のとおり。

五月二十七日（土）狂言「膏薬煉」

六月十日（土）狂言「文蔵」

七月八日（土）狂言「鐘の音」

八月十九日（土）狂言「水汲」

九月二日（土）狂言「謀生種」

時間 午後一時三十分～三時

会場 徳川美術館講堂

受講料 当日受付（一回）千五百円。

申込み・問い合わせ＝名古屋市東区徳川町一〇一七、徳川美術館「狂言講座」係、電話052・935・6262

入場料一回券五千円、学生券二千五百円

次回は七月二日の予定。

熱田まつり協賛
奉納能

六月五日（月）十二時始
熱田神宮能楽殿

能組

舞囃子（観世流）
百萬 今村嘉勇 河村総一郎 福井啓次郎 大野誠

地謡 清沢一政 古橋正邦 梅田邦久 祖父江修一

能（喜多流）
和谷衡市 経政 飯冨雅介 笈鉱一 後藤嘉津幸 鹿取希世

後見 中村正 井上嘉子 西野寛 森健 地謡 戸沢和雄 石原慎一 小出茂吉 長田郷 吉川寛治

狂言（和泉流）
歌争 松田高義 野村信行

後見 野村又三郎

能（宝生流）
竹内澄子 杜若 飯冨雅介 河村真之介 後藤孝一郎 鬼頭喜太郎 竹市学

後見 戸田和 玉井博祐 地謡 津田節哉 近藤良三 久野幸三 佐藤耕司 鬼頭嘉男 辰巳正孝 衣斐宜 稲川寿一

仕舞（金春流）
天鼓 前田茂穂

地謡 渡部道三 佐久間祥夫 伊藤雄二 鈴木寿

舞囃子（金剛流）
海人 牧野元子 吉田定男 柳原冨司忠 鬼頭喜太郎 竹市学

地謡 小林康治 百々市幸司 竹川憲三

能（観世流）
八神孝充 生駒里翠 絹巻 辻本正樹 河崎勲 柳原冨司忠 助川龍夫 大野誠

間 井上祐一

後見 祖父江修一 梅田邦久 地謡 高島良一 松山幸親 今村嘉勇 須部甫 加賀敏彦 古橋正邦 武田邦弘 清沢政一

附祝言

主催 能楽協会名古屋支部
後援 熱田神宮
（御来場歓迎）

名古屋観世会定式能（三回）

六月十一日（日）十二時半開演
熱田神宮能楽殿

能組

能
弱法師 野村四郎 中村弥三郎 吉田定男 福井啓次郎 鹿取希世

間 井上礼之助

後見 武田邦弘 浦田保利 地謡 松山幸親 今村嘉勇 加賀敏彦 祖父江修一 久田徹二 梅田邦久 武田志房 小島一英

狂言
墨塗 井上松次郎 井上祐一 井上靖浩

後見 大野弘之

仕舞
通盛 武田邦弘
水無月祓 浦田保利
鵜飼キリ 武田志房

地謡 本田正勲 古橋正邦 久田徹二 祖父江修一

能
船弁慶 飯冨雅介 高安勝久 杉江元 河村真之介 後藤孝一郎 助川龍夫 藤田大郎 長福

前后之替 松山晃之 観世喜之

間 佐藤友彦

後見 小島一英 武田志房 地謡 高島良一 加藤保彦 高橋瞭一 清沢政一 古橋正邦 梅田邦久 浦田保利 武田邦弘

（終了 午後四時頃）

附祝言

主催 名古屋観世会

（要会員券）
当日券 八千円（自由席）

名古屋狂言史余話（四）

佐藤友彦

名古屋狂言界には野村又三郎家の果たした役割も大きい。九世又三郎信茂は八世又三郎信喜の三男で、天保七年（一八三六）京都生まれ。幼名小十郎。幼年時より名古屋の宗家宅（当時七代目山脇和泉元菜）で修業し、十六歳で京都に帰り、安政四年（一八五七）に家督相続した。（『狂言辞典（事項編）』による）

笛方藤田六郎兵衛氏蔵『安政五年戌午改分限帳』（「名古屋芸能文化」第四号に飯塚恵理人氏により翻刻）によれば、家督相続は安政四年（一八五七）十一月、二十二歳。同年十二月に九代又三郎襲名、二十五石を支給されている。

先の『狂言辞典』では、尾張藩では相続時に五石減ずるのが通例だったが、信茂は技芸すぐれ、逆に五石加増されて三十五石扶持されたと記す。間もなく加増されたものであろう。京都狂言界にも重きをなしていたが、維新により禄を離れ京都の地を去り、大阪に移住している。

藩政時代を通じて尾張藩のお役者には京都を始め、江戸、奈良住まいのまま抱えられた者がかなりあった。前記『分限帳』には、幕末期京都住まいの役者として以下の名が見られる。

山田佐兵衛（シテ方・金春流）
寺田左門治（シテ方・金剛流）
平岩加兵衛（笛方・平岩流）
三村勝五郎（笛方・平岩流）
山脇得平（狂言方・和泉流）
野村又三郎（狂言方・和泉流）
山口九郎兵衛（物着役）

このうち、山脇得平については、本紙の前号で触れた通り、名古屋での住まい、活躍がうかがわれるが、この分限帳には安政四年に上方住まいを願い出て許されたことが記されており、山脇藤左衛門家では引退後京都に住んだことがしばしばあるらしく、或は一時京都にいたのかも知れない。

幕末の京都案内記である『花洛羽津根』文久三年版（一八六三）に当時の京都住まいの能役者を掲げるが、和泉流の狂言方としては野村又三郎、三宅庄市、奥村次郎八の三名が挙げられており、又三郎の住所を「中筋通浄福寺西」と記している。京都では禁裏を中心として江戸時代を通じて盛んに演能が行われていた。ために京都住まいのまま名藩に抱えられ、御用の時以外は京都にあって禁裏を中心に活躍する者が多かった。

尾張藩幕末の藩主慶勝（文公・慶恕）は水戸藩主齊昭（烈公）とともに尊王攘夷思想に厚く、幕府の忌諱に触れ、安政五年に隠居を命ぜられ江戸幽囚の身となるが、万延元年（一八六〇）に赦され、以後朝廷と幕府の間に立って活躍する。京都の尾張藩邸には慶勝の信任厚い尾崎忠征が事務に当っていた。

この尾崎忠征は明治の名古屋能楽界に大きな足跡を刻した尾崎浪音の縁籍に当たり、近衛家などに親しく出入りして、能楽にもかなり造詣が深い人物であったらしい。この忠征の日記（日本史籍協会叢書に翻刻）には、当時京都在住の尾張藩お抱え役者が頻繁に尾張藩邸に出入りしている様子がうかがわれる。中でも野村又三郎は三村勝五郎、寺田左門治らと並んでしばしば訪れている。

慶応二年（一八六六）十月からの記録で、又三郎は十月十、十二、二十四、三十日と訪れており、このうち二十四日には忠征家族とともに岡崎や黒谷に遊び、帰邸して薄茶・一盞、夕飯後そのまま藩邸に泊まっている。十一月には六、十（この日宿泊）、二十四日。十二月は十、十九、二十八日と訪邸している。京都藩邸ではこれら役者の来訪を手厚く遇しており、必ず茶、酒、食事などを振る舞うのが通例だったようで夜遅くなればしばしばそのまま止宿させている。

来訪するのは尾張藩お抱え役者だけでなく、野村久馬造、片山武次郎、柏谷久米次郎、山崎虎蔵、川崎鞆太郎、茂山千五郎、茂山吉次郎、茂山忠三郎などの名も見られる。

慶応三年七月十六日などは左門治、石井孫兵衛、又三郎始め役者二十六名が火大見物（送り火）と称して大挙訪れ、夜更けまで酒、飯・蕎麦などの饗応を受けている。これらのお役者は禁裏や公家のほか、各藩の京都屋敷などにも広く出入りしていたと推測され、幕末の京都の緊迫した状況の中で、これら役者のもたらす情報が各藩にとっても貴重な情報源となっていたのではなかろうか。

又三郎が父祖伝来の地である京都を離れたのは、維新後間もないことだったろう。大阪市東区北久太郎町三丁目に住み、明治天皇大阪行幸の際には御前演奏を勤めている。「小柄だったが高い技量を持ち、一般に愛好されていたらしい」（狂言辞典）また茶の渦、歌舞伎芝居、義太夫など幅広い趣味を持っていた。（大阪府東区史・第五巻）明治四十年十二月三日、七十二歳で没。京都市上京区浄福寺に葬られている。

名古屋には御用の都度出勤する形であったが、それなりの地盤も築かれていたのであろう。明治初期から又三郎は名古屋で精力的に活動を開始していることが番組からもうかがわれる。

（明治三年）
二月十六日　木六駄
二月二六日　鬼継子
三月六日　文荷
三月十一日　隠狸
四月二六日　釣狐
四月二八日　入間川、猿座頭
五月二日　若菜、望月聞
（明治四年）
四月一日　三番叟、大藤内
四月二日　文蔵、連歌盗人、牛盗人、業平餅
四月十日　武悪
四月十一日　船渡聟
四月十二日　泣尼
十月十日　靱猿（猿曳）、柑子俵、素袍落
十月四日　六人僧
十月十一日　吹取
十月十四日　鳴子
（片岡喜平次覚帳日記による）

このうち明確に又三郎が催主として行われたのは明治四年四月一、二日の両日にわたり早川舞台で行われたものである。「翁」を含む両日で能八番、狂言二十三番が演ぜられている。

（初日）
翁　栗本金十郎　千歳　山下武五郎　三番叟　野村又三郎　面箱　中川雄次郎
合甫　柴田吉雄（浜川屋）
二人袴　河村猪三郎（玉水屋）　中川雄次郎　工藤九十九
鼻取相撲　河村鍵三郎（万武侍）
清水　木村重太郎　井上菊次郎
神鳴　佐藤高吉（佐分利侍）
盛久　杉浦芳雄
通園　佐藤五郎治（桑名）
樋の酒　加藤直次郎（加藤屋又蔵之事）
笹山伏　川村証太郎
大藤内　野村又三郎
長刀応答　渡辺鋤三郎（佐野屋佐兵衛侍）
三人片輪　中川雄次郎
舟弁慶　柴田吉雄　中川雄次郎
（二日目）
小鍛冶　加藤半外
文蔵　野村又三郎　佐藤五郎治
禁野　中川雄次郎　井上菊次郎
水無瀬　加藤強次郎
連歌盗人　野村又三郎　九十九
花折　戸田孫吉
阿漕　加藤半外
八尾　工藤九十九
隠狸　佐藤鍵次郎　井上菊次郎
瓜盗人　野村又三郎
牛盗人　栗本金十郎
安達原　（僧）工藤九十九　（ミコ）中川雄次郎
大般若　井上菊次郎　中野彌一郎　野村又三郎（外七人）
吃り　加藤半外
呂連
業平餅
弦上

片岡喜平治の覚帳によるものでアドその他注記の記載は片岡のメモと思われる。狂言方の名は十五名を数え、この内又三郎本人と早川幸八の弟子である井上菊次郎を除く十三名の多くが又三郎弟子と考えられる。しかも「鼻取相撲」の河村鍵三郎はこれが七歳での初舞台であり（本人履歴書）、また「花折」の戸田孫吉は同年五月十一日「井杭」を演じた時の片岡覚えに『子供也』と記されている。

渡辺鋤三郎は『佐野屋佐兵衛侍』、佐藤高吉は『佐分利侍』である。さらに名前の記載はないが「牛盗人」には子供が出演した筈である。また佐藤五郎治は『桑名』の人であり、こうした子供を含めて早くから当地一円に着実な地盤を築いていたと思われる。

（筆者は和泉流狂言方）

叶石会・一謡会

六月十七日（土）午前十時始
熱田神宮能楽殿

番組

経正　兼松倶子
天鼓　小林辰彦　池ケ谷豊
弱法師　近藤重治　高野瀬恵三
班女　後藤孝一郎　池ケ谷豊　海田トシ子
定家　福井啓次郎　海田トシ子　鹿取希世
敦盛　後藤孝一郎　中村多恵子　大野誠
蝉丸　長戸花子　内田睦子　澄川幸子
藤戸　福井啓次郎　吉田啓明　大野誠
江口　後藤孝一郎　澄川幸子　鹿取希世
熊野　福井啓次郎　吉田恵美子　鹿取希世
安宅　福井啓次郎　河村真之介　大野誠
卒都婆小町　後藤孝一郎　川瀬絹子　藤田六郎兵衛
砧　林博敬　柳原富司忠　藤田六郎兵衛
葵上　福井啓次郎　村木寛茂　藤田六郎兵衛
蝉丸　高木和子
三笑　後藤孝一郎　河村真之介　大野誠
百萬　三宅川公香　柳原富司忠　河村総一郎　助川龍夫
実盛　藤田六郎兵衛　林喜久子　柳原富司忠
船弁慶　柳原富司忠　加藤祐子　助川龍夫
高砂　浅野美穂子　柳原富司忠　助川龍夫　鹿取希世

（御来場歓迎）
主催　叶会　一謡会

名古屋宝生会定式能（第39期第2回）

六月十八日（日）午後一時始
熱田神宮能楽殿

番組

能
西行桜　宝生英照　杉江元　高安勝久　辻本正樹　横本宰　覓鉱一　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　鹿取希世
間　佐藤友彦
狂言
長光　井上靖浩　大野弘之　井上松次郎　後見佐藤融
能
三山　広島克栄　佐野萌　飯冨雅介　柳原富司忠　大野誠
間　井上祐一
舞
半蔀　クセ　戸田和
鉄輪　玉井博祐
鵜ノ段　辰巳孝
野守　辰巳満次郎
能
祝言
岩船　宝生和英　飯冨雅介　杉江元　杉江淳　吉田定男　福井啓次郎　鹿取希世
後見　宝生英雄　辰巳孝　地謡　三橋茂三　中島一静男　清水宝生　広島克栄　稲川寿一　鬼頭嘉男　鹿取希世

主催　名古屋宝生会
事務所　名古屋市天白区島田二―三〇一
島田住宅二―一三一〇
佐藤耕司方
☎FAX〇五二―八〇三―七三七二
☎携帯〇三〇―五六七―四六五二

正会員　一万五千円（年四回）
臨時会員　当日券　六千円
学生、当日券　二千五百円

◆仲春の舞台から◆（その二）

「梅猶会」「井上松次郎傘寿祝賀記念・能と狂言の会」「熱田神宮能楽殿建設四十周年記念能」「観世会」

竹尾邦太郎

「百万」　春三月半ば、嵯峨清涼寺の大念仏会の群衆の中で、大道芸を見せながら吾子を尋ねるシテ百万・恵美子、正に旬の能・アイ祐一の挑発を狂ヒ笹で追い払うと、一途な思いは車ノ段から笹ノ段へ、舞にも表われて健気な風情がある。白地露芝文摺箔・茶紫段松葉文縫箔腰巻・萌黄地蚊屋吊草文長絹の地味な姿に白っぽい面深井がやや神経質にみえる。へうつし心か群鳥、とする〳〵とワキ正にゆき下へ面遣ヒするところ、へ肩を結んで摺に下げ、と大小前からする〳〵と正先に出て笹を打ち下ろすところ、など運ビに胸中の微妙を窺わせる。

クセの情景描写も克明に、群衆の中に吾子を探し求める立廻の緩急は、佇んだときの視線の在り方も細心で、へこれ程多き人の中、の絶望感から吾子恋しとシオリ、釈迦牟尼仏に縋る合掌から更に狂乱する精神状態が充分に納得された。（1時間11分）

「昆布売」　近頃昆布がよく売れる。シテ昆布売・融、アド何某・礼之助、は二月の幸謡会同断。アドの素袍裃は蜘蛛の巣文様、獲物の網を張る暗示か。担う・下げる・差し上げる・抱える、の四通りの太刀の持ち様にクレームがつき、「主の太刀は右に持つ」の教え通り持てば、「オーとれはいかう持ちぶりが上ってござる」と相好崩す礼之助に、融の対応も大いに上った。（26分）

「野宮」　シテ晃一・幽寂の秋の夕の情緒を居グセに沈潜し、シテの懐旧の心情をそこに重ね、更には宿怨が昇華された詩的世界を、序ノ舞と破ノ舞に表わして力量発揮、地（普高・生香ら）の好調も大いに与り、ワキ雅介の慎ましさもよく、気品のある舞台だった。

この一番　季節外れだが内容は次の「葵上」に関わる。因に野宮神社は先の「百万」の清涼寺とは同じ嵯峨野のうち。（1時間54分）

「葵上・古式」　出小袖のあと、ワキツレ臣下（正樹）は常座の名宣、梓に掛けよ、と命じてワキ座につくと、面十寸髪が如何にも祈祷のツレ巫女（善久）が一ノ松から出小袖前に出てアズサとなる。一声で後見が車（無紅緞）を大鼓斜め前に出すと、シテ盛義はツレ青女房（盛彦）を伴い車に入り、青女房は車横に立つ。二ノ旬は青女房、シテは車の柱を握り、悔しさの晴らしようもないのを悲しんで、へ梓の弓の音は何処ぞ、と連呼するのも哀しい。

青女房の登場でストーリィ展開はスムーズになり、へ不思議やな、の巫女の不審通り、車の長柄に手を掛けてシオル青女房の存在も明快。シテに成り代る、巫女の口寄せに始まるクドキも、へ我世に在りし、以下を巫女・シテ・青女房の連吟、へただ何時となき、からはシテの独吟、となるのもアクセントがつき説得力を増す。シテは、へ情は人の為ならず、と車を出、巫女は地前に下がって車は退く。情は怨みの逆説、枕に寄り打つところ、浅まし、と一旦は止めに入る青女房も憑かれて打つ激しさである。枕ノ段も鮮烈、へ恥かしや、も自嘲気味に扇ハッシと投げつけて唐織引っ被き、二ノ松の青女房について逃げるような幕入だった。

後場のワキ勝久は兜巾。ノットでシテは緋長袴に白綾被き、ひっそり一ノ松に立ち、一度被きを上げて見込むとそっとワキの後方に寄って跪る。ワキのへ東方に降三世明王、の謡呪に、シテは被きを脱ぎ、畏髪を手繰りつつ立ち、ワキも立つと祈りになった。天を仰ぐシテの哀切な表情がキッと面切ルと一瞬たじろぐワキは、闘争中にシテを見失い、中空あらぬ方を祈る空ノ祈。それを二ノ松で胸杖し、冷やかに見込むシテは、流シで一気に戻るとキリは地（朗詠・和男ら）との掛合の呪法、シテ謡を理に適うワキが翻って首尾が整い、すっきりと引き緊った迫力満点の好舞台となった。（47分・3月19日・梅猶会）

「翁」　シテ九郎右衛門、千歳・清司のコンビは名家の品位自ずから顕れて堂に入り、威厳と清爽の瑞相。三番叟は祖父松次郎傘寿を祝う靖浩の披キ。両袖の露を取るのが少々荒っぽいが若さ。健やかな揉ノ段で、鳥跳びは掛声一杯高く跳んで勇壮。鈴ノ段は種蒔き、囃子によく乗り現代っ子らしいリズム感のよさだった。面箱は融、共に次代を担う真摯敬虔な姿が清々しい。（1時間13分）

「末広かり」　祝言とありスッパ礼之助が太郎冠者・友彦を誑かすのも露骨にならず、主・祐一の不興を買った際に機嫌を取る囃子物の伝受にも、「：と：と：と、と言ふて」と、一々念を入れ耳打ちする親切さ。スッパに摺まされた古傘を、主もこんな物、と投げ出しもせず、「強ち私の咎ばかり」と反論する太郎冠者に、言葉足らずだったのを自省する風もあって飽くまで品が良い。善意の人を騙すという題材を扱いながらそこには救済も用意されていて、キリは主従共に浮かれて踊る人間讃歌のおおどかさ、三者の調和が素晴しかった。（41分）

「枕物狂」　シテ松次郎、三老曲の一を披キ傘寿を自祝する。狂ヒ笹に枕を括りつけて担い、橋懸を千鳥掛に出るのも屈折する人生の軌跡か。へ枕や恋を知らすらん、の地口へ枕ものにや狂ふらん、と百歳に余る老人の乙女への恋情は、枕尽シの謡に更にボルテージは上り、人間の性（さが）の根元に触れて今日的なテーマを持つ。案じる孫二人（靖浩・保志）に本心を隠し、軽くいなす松次郎の年劫は、しかし他人の色事に事寄せてはぐらかしはしても、色に出て狼狽するところ、祖父（おおじ）の面の下の赤面も思われて可笑しい。

老人の回春頭巾を代弁し、枕から連想されるエロティックな感情を扱って賤しくならず、その含羞が微笑ましいのは「型」だけでは処理しきれない、松次郎の「心」によるからであろう。重習の所以である。大柄な乙（弘之）の色気が愛敬。（37分）

「鼎揃」　シテ大槌・元秀、大鼓会に自前ながら着飾って犀ノ鉾を持つのが夢なら、一方アド婆・元弥は朝夕の糧にも悩む現実。亭主の独善にウーマンパワーを結集して興いかかるところに今昔は無く、雄叫びならぬ雄叫び上げて開をつくる凄じさは、お伽話とばかりは言っておれない恐ろしさ。孤軍奮闘の元秀のユーモラスな個性が大いに光った。（26分・3月25日・松次郎傘寿祝賀記念能と狂言の会）

平成七年の今年は戦後五十年、能楽殿も四十年を関する。それを祝賀し、能楽協会名古屋支部九十五名が総力をあげての記念公演である。収益は全て能楽殿の改修資金に当てるという。

「高砂」　「翁」は素謡（金春流シテ芳樹・ツレ雄二）だが登場楽は翁付脇能の本絡で音取鼓鼓、笛一管（誠）と小鼓一調（嘉津幸）の交互演奏から合奏となってゆくところに祝能らしい独得の雰囲気がある。ワキ阿蘇神主・勝久は三ノ松で袖捌きして一旦幕に退き、ワキツレ（信広・正樹）伴い再び姿を見せると悠揚迫らず常座、儀容を繕って正面に平伏して拝礼をする。所謂礼ワキで、この後、笛のヒシギから礼ワキ次第となり大鼓（真之介）が打ち出すが、気鋭の若手揃いの囃子に清爽の気が漲り壮快である。しかし、シテ正宣・ツレ光夫の登場になり、サシ以下ワキとの問答は、抑えて重くなる印象で清朗味は薄い。晩鐘を聞くと上ゲ端あと、斯うもして居られぬとばかり居グセから居立ち、扇腰に差して把（さらい）取るとへ葉色は同じ、と立ち、右から大きく、左から小さく落葉を掻く型をし、クセドメに把捨てて再び下居する迄は少々忙しないか。中入はへ小舟に打ち乗、る態に乗込拍子二ツ、へ追風に任せつゝ、と殊更帆を張った型は無く、する〳〵と一ノ松に抜けて送り笛で幕入。アイは高義、歯切れよい居語りは脇能の爽やかさである。

後シテは白大口・白地袷狩衣の清々しい気品、凛とした神舞に鋭気をみせ、キリに両袖巻き上げスミから常座へ往くところは、風の音（颯々の声）を背に聞く追風の順風満帆を思わせた。地は孝・輝和ら。（1時間25分）

「三本柱」　士烏帽子・襟赤・紅白段熨斗目・青地松喰鶴餅花文素袍裃も目出度いシテ大果報者・松次郎、友彦・靖浩・融の三人で切り出した柱三本を一人宛二本持って来い、と謎を掛ける。柱はものの根幹、柱石と云い大黒柱と云う。謎解き以上に問われるのは柱を貫ぶ心、クレーンで吊り上げ簡単に立ててしまう現代なればこそ柱を運ぶ手立てに疎略は許されない。神輿を担ぐ気分に囃子物に乗ってゆくところ、生気があった。（26分）

「乱・双ノ舞」　酒童の妖精猩々の、気心知れたシテ嘉夫とツレ徹二が、酔う程に戯れ合い睦み合うかの双ノ舞の面白さ。舞のトメ近く、ゆらり正先に酒を酌みに出るツレを、飲み過ぎとばかり遮るシテが、自分ばかり酌んで戻り、独り舞い進めば、それが限度だったかツレは酔い伏すように安座してしまう所。シテが舞の隙に更に酌み、呷って酔い疲れ安座し、へ有難や、とワキ雅介にアシラヒ、管を巻く（？）裡に寝入ってしまうと、切地にはツレが代って舞い出す所、など酒飲みの機微も巧妙なものだった。（39分・記念能一部）

「草子洗小町・替装束」　シテ小町・邦久、前は面若女・襟白二・白摺箔（金剛菱文）・赤萌黄段唐織（菊文）・二ノ松に佇み、歌合に備え予め歌草を吟じるシテの、得心はするがやゝ心細げな風情が佳い。盗聴するワキ黒主・元は、アイ下人・礼之助への言い訳めく口ぶりがどこか上擦り気味なのが根っからの悪人とは思わせず、アイは主の卑劣にも無頓着で、いっそほの〳〵気分である。

後シテは面・襟同前・白地縫箔（金霰文）・緋長袴・唐織（花菱亀甲繋団扇散シ文）重折の盛装、ワキに古歌の剽窃と極めつけられて慌てやる方なく、遁る類なさ惨劇と湧き上るクドキが惹き付ける。綸言で草子を洗うのを許され、唐織脱いでワキ正に膝を着き、へ岸に寄する白波を、と框外から深々と水を汲んで草子にかける所、祈りの心があり、へ入筆なれば、と墨の流れ去った草子をワキに突き付ける所には、慎みも忘れた喜悦をみせた。物着に金色烏帽子と浅黄長絹を着けた舞は、長袴を巧みに捌き床を滑る流麗、疑念晴らした満足の陶酔にシテ自身も酔うかだった。雅夫・和重らの地がシテを支え、翁烏帽子・紫指貫・白地単狩衣の貫之・雅章も存在感をみせた。（1時間27分）

「吹取」　シテ又三郎が清水観世音に申し願をすれば、五条ノ橋で笛を吹き、その音に惹かれ出た女を、との霊夢。吹けないシテはアド何某・信行を代理に立て同道する。折から中秋名月、刻々の月を愛でるアドはシテを慮る気配さら〳〵なく、そわ〳〵するシテとの対照が絶妙。勿体ぶって笛を調べ出すアドに愁眉を開くシテの、自ずから弛んでくる表情の好色は、狂言下り端で出る女・祐一が吹き手に一直線とあって焦り、割って入る。三者の揉み合いに女の被く小袖が取れゝば、御面相は化乙（ばけおと）の俗称もある舌出シで、後は何とか逃げ出すばかりである。アドが笛に不調法だと笛方の付け笛となるため稀曲で、当地三十五年ぶり、信行の笛は実に達者で好演だった。（21分）

「小鍛冶・白頭」　シテ驍。前は童子、クリ・サシを抜きクセもへ頃は神無月、から。へ四方の紅葉も、と頭取って目付柱の方を眺め、地（政允・彬ら）との掛合に草薙剣の霊験譚を言う。へ火焔を放ちて、と居立ち気味に構え、へ尊は剣を抜いて、とすっくと立った。へ四方の草を薙き払えば、の面遣いの緊迫感。刀匠名門の誇れを、へ伝ふる家の宗近よ、と颯と左脚吊り上げて狐足の一端を見せる所も鮮やかだった。中入は、へ必ずその時節に、とワキ宗近・雅介にアシラヒ指シて励ます様に、立つと地一杯を聞いて中入来序（学・冨司忠・定男・龍夫）で静かに幕へゆき、二ノ松過ぎるとワキも立って後見座にクツログ。アイ末社神・弘之の立シャベリは、朴直な味。後場はワキのノット済み、早笛にワキが台を下がって地前に控えると、後シテが喜多流独得の狐足でツツツツと出て来る所から、爪先立ち軽々と空（くう）を踏む鮮やかな舞働へと、しなやかな躍動感は白頭・擬白式の白狐のそれ。ワキとの相鎚に御剣鍛え上げ、へ天下第一の、と切地に喜悦の跳躍をみせ、きり〳〵小廻りしてへこれまでなりと、橋懸へ抜けて二ノ松先でトメるまで、あれよ〳〵と目の離せないスピード感溢れる舞台だった。（51分・4月2日・熱田神宮能楽殿建設40周年記念能）

「清経・替ノ型」　シテ六郎・ワキ勝久、常座の名宣、道行に脇正面へ、へはや時雨降る、と笠に手をかけ、向き直り戻る。着ゼリフ後、一ノ松で案内を乞うが、ツレ徹二の声を聞いて笠を捨てる動揺をみせる。夫の自裁をなじって嘆くツレにワキは自責の念に駆られるか終始伏目がち、早々遺髪を渡してたち去りたいかである。前場のツレとワキのこの湿っぽい雰囲気が捨て難い。地（順之・邦久ら）へ手向け返して、でシテの出。面は窶れた容色の今若、着付は龍田川千鳥文縫箔・白地金青海波文大口・紺地長絹。へ枕や恋を、にツレはシオリ、その返シにシテは一ノ松勾欄にツメる。へ行くも帰るも、とシテがゆっくり幕（即ち、閻浮の故郷）を振り返り、へ辿る心の、で直シてへ儚さよ、と右ウケ一瞬冥茫の方を眺める所、清経の心根が偲ばれ胸に迫る。これあって己れの遺髪をめぐる夢想だにしない展開は、不実を責めるツレとの掛合に愁歎の色濃く、へ濡らす袂、とツレがシオルのをシテは呆然と見守る。めそ〳〵するなとばかりの語題転換の合戦譚に、シテはへ高瀬舟に、と床几に掛る。小書でクセは、へ移る夢こそ、と橋懸へ行き、上ゲ端前のへさるにても八幡の、で戻る。月を眺め、横笛吹く型も柔らかく、へいざや我も、と合掌数拍子踏むのも浄土への強い希求、へ船よりかっぱと、は乗込拍子の後ゆるりと大海に巻かれる様に、扇弱シて廻りながら退って静かに沈み安座、シオル。キリの型も美しく、最後は一ノ松に抜けて合掌、右ウケ袖返シてトメた。（1時間3分）

「八句連歌」　連歌は五七五の長句と七七の短句を連らね、連続する二句間の付合（つけあい）の面白さを楽しむ。懐紙四枚を半折表裏八面、最後に各八句、残り六面に各十四句の計百句が「百韻」。八句連歌とは最初の八句だけで構成する形式である。

借金で疎遠になるところを詫びに出向くシテ又三郎、声色で居留守を使われた帰るさ、折からの花に一句託すれば、固より連歌狂のアド信行、先の声色はどこへやら忽ち連歌を巻くことになる。「お口のやわらぎよう、句のはやさ」などと追従を言いはしても、自作の心は曲げない又三郎のねばっこさに拮抗する信行が見事。（20分）

「海士・懐中ノ舞」　房前大臣（河村浩太郎君）の生母を尋ねる屈託か、ワキツレ雅介・元を伴うワキ宗二朗、次第から道行と重々しい。シテ廣次郎、襟白浅黄・白摺箔（銀露芝文）・茶地縫箔（柳ニ燕文）腰巻・銀灰色水衣の垢抜けした出立も、面の曲見で寂しげである。玉ノ段まで静かに終始するので、玉ノ段の橋懸の型は緩急が際立つ。鎌を持って、へ海漫々、大きくさし分け一ノ松、へ直下、と見下ろし辺りも知らぬ海底に潜るのを、くる〳〵廻って二ノ松へゆく具象の型に見せ、珠を取り得ぬ無念でシオルところは流れるよう。へあの波の彼方にぞ、と二ノ松から右へ遠く眺めてシオルのもと印象的なら、龍宮に飛び入って引き上げられるまでの、一刻を争う手際のよさも鮮やか。

後シテは面泥顔・銀鱗箔・緋模様大口（金波ノ菱文）・白地舞衣（金鉄線文）で黒頭に非ず黒髪。正中右膝着いて経巻を読み上げ、巻き終えて懸中すると舞。途中三ノ松後勾欄でクツロギ、幕際で小廻りし、再び流シで小刻みな運びに常座へ戻り小廻り二度、袖を返スと位進んで囃子の急調に子方へ走り、経巻を渡すと更に舞い進む。品位ある龍女だった。（1時間38分・4月9日・観世会）

眼とメガネを考える
2F眼科クリニック
1Fメガネ
スギウラ
岡崎・康生通東
☎(0564)21-1072㈹

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18-18
（郵便番号　464）
電　話（052）731—7984
振替口座 00800-6-36393

購読料　1年1100円
郵送の場合　1年1800円
一　部　100円

第30回 名古屋薪能

能3番上演

8月5日熱田神宮で

「名古屋薪能」はことし第三十回をむかえ、きたる八月五日(土)熱田神宮神楽殿前・特設舞台で催される、午後四時三十分開場、午後五時三十分開演。

演能は、観世流能「菊慈童」(シテ松山幸親)宝生流能「羽衣」(シテ玉井博祐)観世流能「土蜘蛛」入違之伝(シテ古橋正邦)の能三番。

狂言は「太刀奪」(シテ野村又三郎)ほか観世、金剛、喜多、金春流の仕舞。

火入れ式は熱田神宮今井要祢宜が執り行い、西尾武喜名古屋市長のあいさつが予定されている。

主催・能楽協会名古屋支部、後援・名古屋市、熱田神宮。

入場料は前売二千五百円（当日券三千円）＝番組②面掲載。

伝統文化のタベ

長良川薪能

8月4日　長良川畔で

伝統文化の夕べ、長良川・光と炎のファンタジーとして毎年大きな話題をよんでいる「長良川薪能」はきたる八月四日（金）岐阜グランドホテル前河原の特設舞台で催される。

午後五時開場、午後五時半から林和利名古屋女子大助教授の解説と藤田流笛方宗家・藤田六郎兵衛氏の話。午後六時半開演。

舞囃子「野守」（観世喜正）

狂言「彦市ばなし」（茂山千作）

半能「大瓶猩々」（観世喜之）

入場整理券は七月二日午前十時から正午まで、岐阜市役所本庁舎一階ロビーで一人四枚配布。遠隔地の方には、七月三日以降受付。八十円切手を貼り宛名明記の返信用封筒を同封のうえ、岐阜青年会議所事務局（岐阜市神田町2、岐阜商工会議所三階、☎058・264・8090）に申込むこと。（一人二枚まで）

主催＝岐阜市・岐阜教育委員会、主管＝岐阜青年会議所、後援＝岐阜県教育委員会、岐阜商工会議所。

能楽協会大阪支部特別公演

7月16日　大槻能楽堂

能楽協会大阪支部では大阪府舞台芸術振興事業の一環として、大阪支部特別公演を七月十六日(日)大阪中央区の大槻能楽堂で開催する。

演能は、観世流能「江野島」(シテ山中義滋、ツレ上野朝義、生一知武、上野恭子、上野舞衣、ワキ植田隆之亮)

喜多流舞囃子「八島」(高林白牛口二)

観世流能「半蔀」立花供養(シテ山本真義、ワキ指昭雅之助)

狂言「二人袴」(善竹隆司、善竹隆平)

金春流能「小鍛冶」白頭(シテ金春晃実、ワキ中村弥三郎)

入場料＝一般五千円、学生二千五百円。入場券は梅田・千里阪急プレイガイド、チケットぴあ、各能楽堂、出演楽師宅。

問い合わせは大槻能楽堂内、能楽協会大阪支部（☎06・761・8055）

山口薪能

7月22日　野田神社で

山口市の野田神社で行われる「山口薪能」はとし第五回をかぞえ、観世流シテ方梅若六郎師、狂言方茂山忠三郎師を迎え、七月二十二日上演される。

野田神社能楽堂（山口市野田八三二）は、昭和十一年に旧長州藩主の毛利家が明治維新七十周年を記念して建築、奉納され、厳島神社能舞台などと肩を並べる屈指の能楽堂で平成三年に山口市指定有形文化財に指定された。しかし都市計画による境内の分断、建物の傷みが進み、地元の熱意で「曳き移設」工法により解体せずに百二十メートル移し、平成三年に甦り、山口薪能実行委員会（田原正美委員長＝山口市観光協会会長）により薪能が催されている。

今回の演能は次のとおり。

とき　七月二十二日（土）午後六時半から

演能　能「井筒」（シテ梅若六郎）狂言「口真似」（茂山千三郎）能「融」（シテ梅若晋矢）

全指定席（千二百席）特A（六月二十日現在完売）A席五千円、B席三千円。

問い合わせ野田神社（☎0839・22・0666）山口市観光協会（☎0839・22・8231）

第七回 涛華能

七月八日（土）午後二時始

熱田神宮能楽殿

講演　喜多流の能と粟谷菊生の舞台

粟谷菊生の舞台

能楽評論家　山崎有一郎

能組

舞囃子

飛鳥川　粟谷明生　河村真之介　福井良治　鹿取希世

地謡　粟谷中村邦生　出雲康雅　長島茂

狂言

伯母ヶ酒　井上祐一　佐藤友彦

後見　井上松次郎

一調

笠之段　粟谷幸雄　柳原冨司忠

能

粟谷菊生

漕　宝生閑　筧鉱一　福井啓次郎　助川龍夫　藤田六郎兵衛

地謡　粟谷中村邦生　長島茂　大作　出雲康雅　香川靖嗣　粟谷幸雄　粟谷能夫

後見　高林白牛口二　長田聽　長島茂

附祝言

主催　福井啓次郎

後援　中日新聞社

入場券　指定席　一万円　自由席　七千円　学生席　四千円

チケットぴあ　市内プレイガイド　熱田神宮能楽殿　出演楽師宅

お申込み　名古屋市中区大須三丁目二—四〇

お問い合わせ　福井啓次郎

TEL〈〇五二〉二四一—三一四六

FAX〈〇五二〉二四三—二三五七

◆演能カレンダー◆（熱田神宮能楽殿）

〔6月〕

25日（日）狂言也留舞会（来場歓迎）

〔7月〕

8日（土）濤華能（有料）（番組①面）

9日（日）朝日狂言会（有料）（番組①面）

16日（日）観世会業謡会（有料）（番組③面）

22日（土）野村四郎名古屋公演（有料）（番組③面）

〔8月〕

5日（土）名古屋薪能（熱田神宮神楽殿前）（有料）（番組②面）

6日（日）青陽会定式能（有料）（番組③面）

20日（日）普及能公演（有料）

27日（日）衣斐正宜後援会能（有料）

〔9月〕

3日（日）大衆能（有料）

10日（日）観世会定式能（有料）

15日（金）鳳の会（有料）

16日（土）観世九阜会定例能（有料）

17日（日）宝生会定式能（有料）

23日（土）鳳鳴会大会（来場歓迎）

24日（日）和泉会（来場歓迎）

30日（土）中日文化センター発表会（来場歓迎）

〔10月〕

1日（日）阜楽会大会（来場歓迎）

5日（木）野村万之丞の会（有料）

7日（土）青陽会定式能（有料）

8日（日）幸謡会大会（来場歓迎）

10日（祝）武田謡楽会大会（来場歓迎）

15日（日）邦謡会大会（来場歓迎）

21日（土）猶恵会大会（来場歓迎）

22日（日）誠交会大会（来場歓迎）

28日（土）名古屋能楽鑑賞会（有料）

29日（日）郁謡会大会（来場歓迎）

（演能変更の節はご了解下さい）

第37回 朝日狂言会

七月九日（日）午後一時半始

熱田神宮能楽殿

囃子　遊舞の楽　大鼓　河村綸一郎　太鼓　鬼頭喜太郎　小鼓　福井啓次郎　笛　大野誠

塗附　塗師　井上松次郎　大名　井上靖浩　太名　佐藤融

千鳥　太郎冠者　大蔵彌右衛門　主人　大蔵基照　亭主　大蔵彌太郎

清水座頭　座頭　和泉元秀　ごぜ　和泉元弥

仁王　奏打ち　大野弘之　何某　佐藤友彦　参詣人　井上祐一　参詣人　鷲見征行　参詣人　今枝靖雄　参詣人　小柳保志　参詣人　小柳悠志　参詣人　佐藤融　鼓の男　井上礼之助

（終演予定　午後四時二十分頃）

主催　朝日新聞社　狂言共同社

後援　名古屋テレビ

入場料＝指定席四千円　自由席三千円　階上席二千円

取扱い＝松坂屋・三越・名鉄プレイガイド、朝日新聞企画部　各出演楽師宅

事務所　〒460　名古屋市中区橘一丁目7—5　井上方　電話052・321・1430

平成7年6月・7月・8月放送

〔6月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）

25日（日）「小袖曽我」～観世流～　山本真義

〔7月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）

2日（日）「正尊」～観世流～　野村四郎

9日（日）「養老」～宝生流～　三川泉

16日（日）「鳥追舟」～金春流～　金春晃実

23日（日）「頼政」～観世流～　井上嘉久

30日（日）狂言「薩摩守」～和泉流～　野村万之介

「魚説法」～和泉流～　野村又三郎

〔8月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）

故人をしのんで

6日（日）観世元昭「隅田川」～観世流～

13日（日）武田喜永「砧」～宝生流～

20日（日）桜間道雄「景清」～金春流～

青雅日記 (161)

未央柳

えと文 二井栄逸

未央柳が咲く頃になった。オトギリソウ科には未央柳（びようやなぎ）の外に幾種類かの変種や品種があるが、私は未央柳が一番すきである。

花は、直径三センチから五センチ位の大ぶりの黄色の五弁花で、オシベがふさ〳〵と数多くあり、花びらより長く出ている。

又、同じオトギリソウ科の中に、未央柳とよく似た金糸梅というのがある。金糸梅の方は花がこぶりで、オシベも花びらの中におさまっている。私の家では、門の内側に未央柳と金糸梅を寄せ植えにしているので、雨の日には敷石の上に垂れ下がり、裾をぬらすけれど、切るのが惜しいのでそのままにしている。

いつも不思議に思っていた事はオシベが長く美しいのが金糸梅でオシベが普通の花のように花びらの中におさまっているのが未央柳というのが、ほんとうのように思われてならなかったが、二つ並べてよく見ると、未央柳の方は葉の形が柳や桃の葉に似ているので未央柳、金糸梅の方は花の形がこぶりで、金糸は短いが梅の花によく似ているので金糸梅だということで納得した。

中国原産の未央柳は楊貴姫の初同の中にもほの〴〵と謡われている。

梨花の一枝　雨を帯びたる
桃ひの
臨を帯びたる粧いの
太液の　芙蓉の紅
未央の柳の緑も
これにはいかで優るべき

と、未央柳がよみこまれている。太液とは禁中（宮中）の池、芙蓉は蓮の花、未央柳は御殿をさしての形容のことばとしてつかわれている。

（平成七、六、二記）

平成七年度

邦楽指導研究会

東京芸大同声会主催

社団法人東京芸術大学音楽部同声会主催による平成七年度・第七回邦楽指導研究会は、八月二十三日（水）二十四日（木）の二日間東京芸大で行われる。

この指導研究会は、小・中・高校において、実際に邦楽の生徒指導に当っている先生をはじめ、一般の方を対象に行う指導研究会で音楽が専門でない方も参加している。

開講科目、箏、尺八、三味線、謡曲の実技、レッスンが行われる。

受講料一万二千円、教則本（四教科一冊）三千円。

申込先　東京都台東区上野公園東京芸術大学音楽部同声会。

問い合わせ　電話〇三―三八二一―三九二四。

申込期間　七月三日～七月二十四日（定員になり次第締切り）

謡曲関係の講師は、藤波重満氏（芸大教授）八月二十三日、水上輝和氏（元芸大講師）八月二十四日。

夏の素謡会

七月十六日（日）午後一時始

熱田神宮能楽殿

仕舞

巻絹　瀬戸三津子
蝉丸　三村恵子
大江山　高木美智子

地謡　高島良一　清沢一政　久田徹二　須部甫

素謡

トモ　祖父江修一
ツレ　中川雅章

景清

浦田保利　小島一英

地謡　松山幸親　今村嘉勇　保彦　加藤敏彦　祖父江修一　中川雅章　浦田保利　小島一英

仕舞

正キリ　須部甫
若キリ　加賀敏彦
姥キリ　高橋暁一

地謡　松山幸親　古橋正邦　梅田熙久　本田

素謡

久田徹二　観世清和

花筐

武田邦弘　清沢一政

地謡　高橋暁一　祖父江修一　古橋正邦　清沢一政　中川雅章　久田徹二　観世清和　武田邦弘

仕舞

放下僧小歌　熊沢恵美子
井筒　近藤幸江

地謡　今村嘉勇　中川雅章　小島一英　加賀敏彦

素謡

古橋正邦　片山九郎右衛門　梅田邦久

地謡　本田熙　須部甫　古橋正邦　清沢一政　久田徹二　武田弘　片山九郎右衛門　梅田邦久

（終了　四時半頃）

求塚

◆全館自由席
◆入場料＝前売券四、〇〇〇円・当日券五、〇〇〇円
◆入場券申込先＝能楽殿及び出演者宅・チケット「びあ」

附祝言

主催　名古屋観世会

第12回 野村四郎名古屋公演

七月二十二日（土）午後二時開演

熱田神宮能楽殿

謡曲鑑賞による平家物語　祗園精舎　坂田美子

―― 休憩十五分 ――

能

法王　大槻文蔵
局　山本章弘
内侍　上野朝義
野村四郎

大原御幸

中村弥三郎　塩田重喜
飯森正直　福井啓次郎　河村総一郎
山本順三　藤田六郎兵衛

間　野村又三郎

後見　赤松禎友　山中義滋
地謡　上田公威　山本博通　上野雄三　浦田保親　梅田邦久　片山慶次郎　上田貴弘　鵜沢都雄

主催　中部日本放送　中日新聞社

A席（正面指定席）一万円・B席（一階自由席）八千円
C席（三階自由席）六千円・学生券（二階自由席）四千円
お求めは市内各プレイガイド・チケットぴあにて
お問い合わせ　中部日本放送事業部〇〇五二（二四一）八一一八

第30回 名古屋薪能

八月五日（土）午後五時半開演

熱田神宮神楽殿前

特設舞台

能組

観世流仕舞　天鼓　今沢美和　地謡　三村恵子　高木美智子　熊沢恵美　生駒里翠
金剛流仕舞　蝉丸　竹市幸司　地謡　小林忠三　百々康治　菊川憲三
喜多流仕舞　天鼓　長田驍　地謡　和谷衡市　小出吉　長田　石原慎一郎
金春流仕舞　是界　広瀬雅弘　地謡　渡辺道三　伊藤雄二　加藤正嗣　佐久間祥夫

観世流　能

菊慈童

松山幸親

後見　杉江元　福本宰
地謡　吉田定男　福井良治　大野助川龍夫　黒田博　本田熙　須部甫　今村嘉勇　古橋敏彦　久田徹二　清沢一政

火入式　熱田神宮祢宜　今井要

御挨拶　名古屋市長　西尾武喜

宝生流　能

羽衣

玉井博祐

バンシキ　飯冨雅介

後見　戸田和　竹内澄子
地謡　竹内淳一　三橋茂三　佐久間　藤野　鬼頭喜太郎　鹿取希世　河村総一郎　後藤孝一郎　鬼頭嘉男　耕司　稲川寿一　衣斐辰巳　正宜

和泉流　狂言

太刀奪

野村又三郎

松田高義　井上礼之助

後見　井上松次郎

観世流　能

土蜘蛛

頼光　須部甫
トモ　本田熙
胡蝶　三村恵子
古橋正邦

入進之伝　辻本正樹　高安勝久　西村信広

間　井上靖浩

後見　今沢美和　梅田邦久　近藤幸江
地謡　高島良一　八神孝充　松山幸親　加藤保彦　中川雅章　高橋暁一　武田邦弘　祖父江修一　河村真之介　福井啓次郎　鬼頭好信　竹市学

附祝言

（終了予定　八時四十分頃）

主催　能楽協会名古屋支部
後援　名古屋市・熱田神宮

当日券　三千円（前売券二千五百円）
取扱い＝チケットぴあ、市内各プレイガイド、能楽殿
出演各楽師宅

※能「羽衣」終了後、陸雨の節は以後演能を打切り
※雨天順延の問い合わせは熱田神宮能楽殿（〇五二―六八二―一七五一）内事務所

明治三年四月二十六日に、早川幸八家の舞台で狂言尽くしの会が行われた。これも片岡喜平治の覚え帳による記録であるが、場代六匁、狂言二十一番（実際には三番は行われなかったらしい）に宗家山脇元賀を始め、早川幸八、山脇得平、野村又三郎も出演しており、当時の名古屋狂言界の実力者が一堂に顔を揃えたものとして注目される会である。

狂言組

張章魚（ハリタコ）　広瀬錠太郎　三段治　九十九
二千石（ジセンゴク）　水野代次郎　清太郎
長光　木村国次郎　菊次郎　代次郎
金津地蔵　田中金三郎　三段治　庄太郎
百姓・錠太郎　後藤　菊次郎　録太郎
舟ふな　水野兼次郎　菊次郎
へ素袍落（不出）（内藤事）伏連
塗師　田中庄太郎　三段治　錠太郎
釣狐　野村又三郎　得平
伊文字　佐々録太郎　錠太郎　庄太郎
女・三段治
泣尼（後藤直之進事）
工藤九十九　幸八
鞠猿　大名・早川幸八　猿曳・又三郎
太郎作・菊次郎　さる・清太郎
御田　山脇鍈太郎
少乙女五人・又三郎　菊次郎　九十九　彦六　三段治
咲花　木村重太郎　菊次郎
寝音曲　山脇伊津美　得平
成上り　小川清太郎　庄太郎　録太郎
酒講式　山脇得平　錠太郎
へ薩摩守（なし）　井上錦次郎
瓜盗人　大沢彦六　井上菊次郎
武悪　井上菊次郎　九十九　又三郎
へ神鳴（なし）　加藤久次郎
合柿（定治事）阿部三段治　九十九　錠太郎
庄太郎　金三郎
録太郎

ここに名前が見られるのは十九名。宗家元賀は明治元年に維新によりいったん引退するが、明治三年に至り藩籍を離れてから、再び山脇伊津美を名乗って活躍を初めている。維新以降でうかがわれる元賀の最初の舞台でもあった。

以下明治九年に没するまでの元賀の舞台出演記録を判明するものから拾い出して見よう。（　）内は相手を勤めた者である。

（明治三年）
四月二六日　寝音曲（得平）
五月二六日　花子（幸八、菊次郎）薩摩守・小謡入（庄太郎、録太郎）
（明治四年）
五月七日　貸被（得平）
五月十一日　三番叟　末広狩（又三郎）
五月十二日　枕物狂（宇左衛門　菊次郎、録太郎）　鞠猿・替装束（得平）
八月二十日　文山賊（菊次郎）
十月二日　苞山伏（三段治、郎太）石神（宇左衛門、菊次郎）
十月四日　釣狐（又三郎）　三人片輪・三曲（又三郎、宇左衛門、録太郎）福の神　祐善（菊次郎）
（明治五年）
十月七日
八月十八日　三番叟
八月二五日　粟焼（三段治）
八月二六日　楽阿弥（角淵、丹羽六蔵）
八月三一日　金岡（菊次郎）
九月一日　鳴子遣手（山本金次郎、槌井作右衛門）
（明治七年）
三月十七日　三番叟・橋懸舞・十人子宝、大藤内
三月十八日　狸腹鼓

このほとんどは片岡喜平治の覚えによるもので、記述の粗疎さからもごく一部のものと考えられるが、「釣狐」「花子」「枕物狂」一子相伝である「狸腹鼓」などの上演記録もとどめており、十分に当時の狂言界での活躍がうかがわれるものであろう。

名古屋狂言史余話（五）

佐藤友彦

元賀の相手を勤めているのは、山脇得平（三）、早川幸八（一）野村又三郎（三）、柳川宇左衛門（三）、佐々録太郎（後の山脇録弥・二）など旧藩以来の狂言師以外に、井上菊次郎が五回と最も多く、磯部三段治（定治・二）、角淵宜、田中庄太郎なども勤めている。特に菊次郎は「花子」で師・幸八とともに宗家の相手をしており（当時二十五歳）、その後しば〳〵好んで用いられていることがうかがわれる。

磯部、角淵、田中はいずれも山脇得平の弟子である。このうち磯部三段治は、冒頭番組に阿部三段治の名で見られる人物で、明治初期の名古屋狂言界で最も活躍した一人であり、得平の弟子の内でも田中庄太郎と並んでかなりの実力者と推測される。

鈴木信吉氏提供の過去帳によれば以下の様に記される。

『実父は吉田家（後に菱田庄兵衛）の長男に生まれ、尾張藩士磯部定吉の養子となる。本名磯部定治美平。名古屋市矢場地蔵南の組に生まれ、岩井町甲三十六番戸にて没す。（七十四歳）もと尾張藩先手同心。廃藩後狂言の師となり、男女生徒を教える』

磯部はこの後得平門下の田中、角淵、幸八門下の井上菊次郎、伊勢門水、又三郎門下の河村鍵三郎、山本久平らとともに師家なき後の名古屋狂言界を支えることとなる。

明治十七年三月に二日間にわたって行われた物故三師追善会でも「棒縛」「苞山伏」のシテを勤め、同年六月に建立した「和泉流猿楽狂言記念碑」には十六名の内五人目に名前を刻している。

ところが明治十九年頃までは旺盛な舞台活動がうかがわれるが、この年十月に木下舞台で「菊の花」を演じて以降は全く出演の記録が見出されない。さらに明治二十四年に名古屋狂言界を挙げて結成された狂言共同社には参加していない。

故西村弘敬氏（高安流脇方）の談によれば、共同社結成後は正式舞台には顔を見せなかったが、柴田穀彦（観世流）の稽古館にはしば〳〵出演していたと言う。何故この磯部が狂言界から遠去かることとなったかについては必ずしも明らかではないが、当時の新聞記事に興味ある記事が見出される。

『妓の能稽古　其道不景気からでもあるまいが、客が高尚になりたる加減にや、当旦那にて鉾々の聞こゑある三朝楼の六千代、花六、小豆、富田屋桃吉）荒川すう、清水屋真の六妓は、此頃頻りに能狂言に凝り固まりて、日々清水屋の二階にて磯部某を傭ひて稽古する由なるが、稽古中は世界へは極内々と云ふを探偵人からちりと。』（明治十九・四・一三「扶桑新聞」）

ここに見られる「磯部某」は三段治のことであろう。「過去帳」に見られた「廃藩後狂言の師となり、男女生徒を教える」と記されたものと符号する。新しい生き方を模索しながらまだ〳〵苦悩する狂言界であった。この時期盛流狂言が歌舞伎役者に狂言を教えたことで能楽界から遠去かり、結局中央能楽界から消える運命をたどったと言われている。三段治のこうした活動も当時の名古屋狂言界に相容れられなかったのかも知れない。（筆者は泉和流狂言方）

稀曲「渇水龍女」7月29日 芸創センター

花伝の会特別公演

花伝の会（藤田六郎兵衛氏主宰）は、きたる七月二十九日（土）名古屋市芸術創造センターで、特別公演として能「渇水龍女」（かすいりゅうにょ）が上演される。

この「渇水龍女」は、室町後期の能作者・観世弥次郎長俊（一四八八～一五四一）の作「河水」（かすい）を堂本正樹が補綴した作。極端に多人数なもので玄人による上演の形跡はなく、ことし第九回梅若六郎の会で四百六十年ぶりに上演され、今回の花伝の会が二回目という稀曲。

演能は、第一部（午後一時半開演）、第二部（午後六時半開演）の二部制。

能「渇水龍女」（龍女・片山九郎右衛門、帝王観世銕之丞＝二部では観世栄夫＝王子・龍王大槻文蔵ほか。

ワキ、狂言方、囃子方など三十数人が出演。さらに一部は能「杜若」（シテ観世栄夫）二部は能「猩々乱」（シテ観世銕之丞）ほか狂言の上演。

全自由席七千円。お申込み、お問い合せは「花伝の会」事務局（名古屋市西区新道二ノ七ノ一七　電話052・571・3464）およびチケットぴあ。

◆観能寄稿◆

清経・恋之音取

—山本博之二十三回忌追善能—

「枕や恋を知らすらん」と地謡（地頭順之）が低吟すると長袴の笛方（六郎兵衛）がにじり出て舞方向を向く。

しばしして一管が吹き出す。いわゆる幕内の呂と称する笛である。管途切れ、やがて一管が吹き出すと幕上り、笛途切れる。笛吹き出すとシテ（山本博通）おもむろに斜め右方向に三ノ松まで歩む。一足一足ゆっくりと進み、姿勢は端正そのもの。三ノ松で正先向き停まると同時に笛途切れる。しばしの静寂。笛吹き出すと斜の左方向に歩み出し停まると正先向き、二度左手でシオル。二度目のシオリのとき笛途切れる。シテは左手でシオッタ姿勢のままみじろぎもしない。しばしの静寂。笛吹き出すとシオッタ左手をおもむろに下げ、斜め右方向に進み、二ノ松の手前で正先向き停まると同時に笛途切れる。笛吹き出すと、おもむろに笛方方向に向き、今度は直線で二ノ松を通り、一ノ松手前まで歩み、笛途切れると同時に歩みを停める。しばらくして恋之手吹き出すと、おもむろに歩み出し、笛途切れると後見座前で停まる。笛吹き出すと常座方向に向きを変え、常座に進み、笛途切れると同時に停まる。

この間約十五分。見所は息をつめてシテの歩みを見つめる。

今回の音取の型付は、野村四郎の型付（本紙四月号拙稿参照）とは少し異なる。同じ観世でも宗家と片山・山本家と型付に差があるのであろう。

音取の型付は、いわゆる口伝、秘伝に属し、見所の人々は殆んど知らないと思われるので、千鳥型と称せられるシテの歩みを細かく述べたが、シテと笛方が互に間合を計り合っており、見えない糸で両者が相通じ合っているように見えることが実感できた。

特に、笛途切れたとき、シテがシオリの姿勢を維持しつづけていたところはユニークな型付と思った。

仕方舞のところは、「げにや世の中の…」あたりから橋がかりに行き、「白鷺のむれいる松見れば…」は三の松で面使い、シッカリ舞った。「腰より横笛抜きいだし…」は、扇をとじないで、開いたまま横笛を吹く様を見せたのはめずらしい（金春では扇をとじる）。

「船よりかっぱと落ち潮の……」のところも見事にきまったが、欲を言えば、「かっぱ」の乗り込み拍子は、一つ目は弱く、少し間をとって二つ目を強く踏んだ方が好い。

総じて端正なシテで、いささかの破綻もなく舞い出色の清経であった。

ツレ（河村博重）も好演したが、「手向け返して夜もすがら…」で正先を向いて、次第に夢の世界に入って行く様を見せるところは、いささか力量不足。

ともあれ追善能にふさわしい清経であった。

（松本　武）

青陽会定式能（第39期）第3回

八月六日（日）十時半開演
熱田神宮能楽殿

能組

舞囃子　通小町　今村嘉勇　河村真之介　柳原富司忠　大野誠　地謡　瀬戸三津子　恵子　今沢美和　近藤生駒　前野郁子　里翠　幸江

能　盛久　久田徹二　杉江元　高安勝久　飯富雅介　辻本正樹　河村総一郎　後藤嘉津幸　鹿取希世　後見　三村恵子　梅田邦久　地謡　高島良一　玉木孝男　馬場信至　須部甫　中川雅幸　武田邦弘　祖父江修一　高橋瞭一　間　井上靖浩

仕舞　天鼓　瀬戸三津子　地謡　三村恵子　生駒里翠　近藤幸江　前野郁子　今沢美和　武田邦弘　祖父江修一　高橋瞭一　間　井上祐一　井上礼之助

能　班女　加賀敏彦　飯富雅介　橋本宰　河崎黙　柳原富司忠　大野誠　間

仕舞　敦盛　キリ　祖父江修一　後見　今沢美和　武田邦弘　地謡　高島良一　馬場信至　松山幸親　今村嘉勇　加藤保彦　中川雅幸　梅田邦政　清沢一政

蟬丸　玉木孝男　鐘之段　武田邦弘　地謡　今村嘉勇　高橋瞭一　古橋正邦　加藤保彦

大江山　須部甫　流　佐藤融　佐藤友彦　後見　井上松次郎

狂言　鶏

能　安達原　近藤幸江　杉江元　白頭　飯富雅介　福井啓次郎　吉田定男　竹市学　助川竜夫　間　大野弘之　後見　前野郁子　久田徹二　地謡　瀬戸三津子　玉木孝男　松山幸親　須部甫　加賀敏彦　古橋正邦　清沢一政　祖父江修一

附祝言

主催　青陽会

会員券申込は関係楽師方及び青陽会事務所
名古屋市熱田区神宮一―一―一
熱田神宮能楽殿内
電話〈052〉六八二―一七五一番

（有料）当日券　三千円

◆愛知県文化振興基金事業◆

◆晩春から初夏への舞台から◆

「花伝ノ会」「第一回浄闇新能」「金春会」「九皐会」「やるまい会」

竹尾邦太郎

「見物左衛門」　別名を「深草祭」とも云えば曲名は如何にも祭見物狂のニックネームそのまま。括袴に小振りの菅笠の出立が、雑踏を掻き分けて行くのにぴったりとは云えこれが独り狂言、大童の活躍にシテ信行大いに頑張る。祭に早く、古御所に寄って瀬湘八景の押絵や東坡・牧谿らの軸、楊句は部屋の造作までを目利きして蘊蓄を傾ける所など中々のもの。他人の落馬を笑い、角力は傍目八目の出しゃばり。見物から参加へ、の羽目が、負ける悪さ目に会って更に一番と相手を追い掛けるトメまで、祭の興奮を活き活きと伝えて信行熱演。65年先代藤九郎、77年万之丞（現万蔵）の上演があるが稀曲。（14分）

「天鼓・弄鼓ノ舞」　シテ博通ワキ和幸の呼出で出る。面阿古父尉・唐帽子・白垂・黄褐色小格子、上衣の舞衣（紺地鉄線文）が珍しい。拗ねる気持を無駄と知る勅命背叛の子の父の諦念を、博通気負わずさらりとみせれば、和幸も、忸怩たる思いで、強権発動を言うのでは無い、という心を素直に出す。へ打てば不思議や、と退って心耳を澄ます心持ち、へ君も哀れと思し召して、とワキが平伏し、シテは退りながら撥を取り落して正中で安座両シオリするのも、作らず極く自然がよい。中入はアイ信行の介添でシオリ解くと静かに立ち、「あら有難や云々」の詞無く送り込みとなる余情。

後シテは面童子・黒頭・褄白赤・金地麻ノ葉地紋縫箔（紅白梅文）・紫地金花菱七宝繋文半切・紺地袷法衣（金唐花文）肩脱・唐団扇。撥で舞う楽（がく、誠・達志・哲也・弘美）は弄鼓、弄は戯、嬉々として鼓に戯れる様は流麗で一ノ松へゆき袖を被いて暫時鼓を見込むとする〳〵舞台に入って鼓を打ち、退って拍子音無く踏んで頭を振ると、再び鼓に寄って打ち、更にスミから鼓の後を廻って常座小廻リ迎小廻りと喜悦の心に舞上げる。キリで、柳葉を払って、と袖を被き、へ風冷やかに、と頭を振り、へ水に戯れ波を穿ち、で膝を着いて両手であおり返すところなど、何れもよくこなれた良い型だった。主催者六郎兵衛の言う「次代を担う若い能役者達の熱気溢れる舞台」は、その成果大いに上り爽やかな感動を与えた。（1時間16分・4月19日・花伝ノ会）

観世流太鼓方鬼頭家所縁の閒之森（くらがりのもり）八幡社は、その名の通り楠の大樹が鬱蒼と繁る中に鎮座する。樹間の鉄パイプを組み屋根にシート、床に合板を張った仮設舞台は吹き抜けの後座背景の楠・鬱蒼・公孫樹などが鏡板の替となり、泉水から上る一条の噴水が風情を添えて浄闇新能の舞台は整う。薪は、一間半程の竹竿に一間余の藁包を巻いた点火具二本から点火された。

「口真似」　到来の酒肴に相手欲しさの主・又三郎、シテ太郎冠者・信行に適当な客を迎えにやれば、連れて来たのは酒癖のよくない何某・高義。粗相があっては大変、と挙措応対は全てを真似るよう命ずる又三郎に、ここを先途と鸚鵡返しに応答する信行がその愚鈍ぶりを活き〳〵とみせたが、何某の姓を間違えたのは勇み足。（12分）

「八島」　前後にシテを分けて前は信真。海上から芦火を認め、へほの見え初むる面白さよ（他流は物凄さよ）とツレ紳一と連吟のところ、詩情一入深まり、ワキ勝久が部人と聞いていつとき感傷に浸るのも首肯される。合戦譜は床几を立った後、閒の声も絶えて、へ磯の波松風ばかりの音、を脇正で細かい面遣ヒに淋しく聴く風情から正中に下居するところ、戦い済んで日が暮れて、の脱力感のようなものを滲ませて印象的だった。

後シテは安明、へ夜の夢路に、と床几に掛って夢物語を語るところ、望に近い月齢13・4の月が雲を離れて舞台左上方に在った。折柄シテのサシ、へ月も今宵に冴えかえり、は一一八五年陰暦二月のことだが、季を異にすれど皓々と輝く月は歳月を隔ててもその時の月、弓流からクセも床几に居てワキにアシラフだけで特に無いのが却って想像を掻き立て、カケリも夢の中に見るようで夢幻能とは正にこれ、うたた感慨に堪えなかった。（1時間9分・5月13日・第一回浄闇新能）

「角田川」　シテ光洋。男笠の旅装が飾らない金春の古風と見えて面白い。カケリの焦躁感が、へ其方とばかり、と笠に手をかけて目付柱に冥茫の果を見るかにシオルところになってじわりと利く。笠を脱ぐと面は曲見、冴え〳〵とした白さが憔悴も露わに、「なう舟人（あれに白き鳥の）」、と問答でワキ勝久にアシラヒ笠掴てたのも珍しい。都鳥の狂ヒ地（汎・広明・穂高）半ばに二ノ松にゆき、戻ると脇正から、へ思へば限りなく遠くも、と幕を指ス。舟中は、笠も狂ヒ笹も退いてあるので下居の膝の辺が淋しいが、シテワキ語の間しんと凍った心持を身じろぎもしないところにみせて充実ぶりを示す。「遂に事終って候」と一旦シオルと、絶望の思いはいや増し、へこれは夢かや、と立ち上りかけてがっくり腰を落して双シオリするところは痛切だった。クドキに塚に寄り、土を掘り返すにも、念仏の声に跪跟と幻の子方（二宮惇）を追うにも、力は萎えて悲しい。子方はよく念仏前に塚に入れることがあるが、初めから中に入れるのは当然で、惇君も好演。優れた能役者を育てるときは言うまでもなく、易きに付ければその舞台成果も凡庸なものになるだろう。キリは、へ塚の上草茫々として、としみ〳〵とした詠感で力無く塚の上を撫でさするばかり直シて下居するとさめ〳〵と泣く双シオリに傷心深甚である。へ哀れなりけれ、の返シに立つとシオリの手は左右ずらせて解き、シテ柱に詰メてトメた。（1時間21分）

「太刀舞」　武器であることを越えて力と富を象徴する太刀。偶々小アド使いの者・友彦の持つ結構な太刀を見て羨望するアド主・祐一と、それを進上して喜ばせたいシテ太郎冠者・弘之、しかし手段は奪取の短絡的思考は穏やかではない。そこを弘之、少々はしゃぎ過ぎながら旨くみせる。最後は図式通りの太郎冠者の泥縄に、使いの者は掴り抜けて主が捕縛される阿呆らしさ。久々のトリオで息の合ったところがみられた。（16分）

「小鍛冶」　前シテ童子・晃実の勁捷。幕を見込んで拍子強く踏めば、数万騎の夷共はその勢いに雲散霧消の、クセ以下にみせる日本武尊の勁さが惹きつける。中入に、壇を飾り我を待てと肩怒らせてワキ宗近・元に威光を示し、立つと、へ夕雲の稲荷山、とスッと一つ抜き足する狐足に稲荷明神の化身を暗示する捷さ、地一杯に構懸へ入りする〳〵と幕入。アイ靖浩は末社、立シャベリそつ無く退くと、後ワキは風折烏帽子・単狩衣に装束を改めて何事もなく出ると壇上ノットを上げるが名詞だった。ワキのへ謹上、を地（安明・紳一・忍ら）がへ再拝、と受けて早笛（誠・啓次郎・総一郎・喜太郎）、ワキは地前に行き後シテ穂高が走り出る。赤頭・狐戴・紅白段厚板・金卍繋飛雲文法被（袖折込）・金地立湧文半切の、きら〳〵と躍動する舞働が若々しく小気味よかった。トメは二ノ松。（54分・5月14日・金春会）

「芦刈」　シテ直也。謡は明晰で歯切れよく、芦売る生業に落ちぶれて妻も養い得なかった。附甲斐無い屈折した心持など感じさせず、前半は流れるように推移して笠ノ段も如何にも几帳面で切れがよい。ために、芦を求められて畏まり、ツレ妻（二郎）に顔を上げて視線が合い、はったと芦を取り落して蒼惶と三ノ松へ逃げるのが少々突出して見えた。夫の面目を思って従者を押し留め、独り一ノ松へゆき妻が夫と会う所は殊更辛気くさくならず、割に淡々としているのが良かった。男舞も若さ爽やか、キリで、へ越ゆる白波、と正先も框一杯に乗込拍子踏むのに嬉しさが溢れていた。（1時間22分）

「清水」　水汲み如きは女子供の仕事、シテ太郎冠者・祐一にはそれが不服で、鬼に手桶押っ放り出して逃げ戻ったと逆らう。手桶大事で自ら出向く主・松次郎を、一度は鬼に成り果せて脅しはしたが、図に乗り声音覚えられてアウト。蟷螂の斧の祐一の弱腰もさることながら、予々人使いが荒いと陰口叩かれる松次郎の因業な強面ぶりが出色。（20分）

「野守・黒頭」　シテ喜之、一セイから直ぐワキ山伏・勝久と野守の鏡の謂れを言う問答。どっしり大地を踏みしめるように大きく構え、ワキにアシラフ時などじり〳〵とねじてゆく足の強靭さは、両足揃うさらいのワキを圧倒して野翁の気骨をみせる。中入に、真の鏡は持たない、とワキへへ疑はせ給ふかや、と強い視線を当て、杖取り立つと地（三郎・喜久・宜夫ら）の裡に一ノ松へ抜け、へ真の鏡を見んことは、と顎をしゃくる様にワキを見込むと三ノ松へ、へ塚の内に、と杖捨てて幕入するところ胸がすく。後シテは「天地ノ声」、幕内で謡い出し、へ野守の鏡は、と一ノ松に走り出て鏡をぐいと突き付ける。黒頭に唐冠、面の黒癋見の魁偉が如何にも古怪。裝着厳に紫金段半切袈も猛々しいが、ワキが恐ろし、と言えばなら帰ろう、の素振りにユーモアもみせる。七ツ拍子に山伏修道を代行してへ二制多伽、と舞台に入ると鏡の威力に天地を映すところ鏡を投って連続する型も目覚しく野趣が欲しい程。キリは三ノ松、へ大地をかっぱと、と乗込拍子二ツ、右に飛返り下居から立ち、へ奈落の底、と左ウケて拍子二ツ、太鼓（龍夫）の残り留となった。（1時間6分・5月20日・九皐会）

「岡太夫」　男（高義）方の酒肴の後の、口直しの蕨餅が滅法旨い、とつい手を出し、その都度名を聞いても、忽ち忘れる程に夢中で食い尽すシテ聟・信行の、活き〳〵とした無邪気な表情が良い。娘即ち我が妻（健太郎）が製法を知ると聞き、早々に戻っても亦名を忘れる。妻が知る朗詠の文句にも在ると聞きはしても思い出せない苛立ちは、朗詠を吟じさせられる妻も同じ、言葉はつい荒くなる。漸く蕨餅と分ったが、もはやふて腐った夫の無理に堪らず、妻は「わらびもち」を連呼して追って来る夫を尻目に幕に入った。太郎冠者は隠行。若手の清新な舞台だった。なお岡太夫とは延喜の帝（醍醐天皇）が賞味して賜った蕨餅の呼称。延喜式（平安初期の禁中の年中儀式や制度などを漢文で記す。五十巻）では太夫は五位の通称。蕨は岡に生育する著名な山菜、蕨餅の他にも蕨縄・蕨糊・蕨帚などの用途があり、またその形状から蕨手の刀（柄頭が早蕨状に曲った刀。奈良時代から平安前期にかけて行われた。）・蕨爽斗（「のし」という字を蕨手の形に書くこと。）などと使う。鶯に五位の位を賜ったということもあり岡太夫もその類であろう。また倭漢朗詠集は概ね七言二句の漢詩文、当時女人は仮名を用いるのが専ら。ということは愚夫賢妻のテーマを持つ曲ということでもある。（35分）

「法師ケ母」　昔、男児は頭髪を剃った。法師は坊主で、現に男親は男児を「坊主」と呼ぶことがある。シテ夫・又三郎。小格子・半袴に段熨斗目を壺折に着る遊冶郎の放埒は、アド妻・万作にねちへ〳〵と絡み、挙句は騎虎の勢いで離別する。へ果てしなの人の心や、と悲嘆にくれる妻の胸中を笛が沈痛にアシラヒ佳。後場、夫は装束を替えて掛素袍の右肩を脱ぎ、狂ヒ笹持って狂言一声（六郎兵衛・啓次郎・真之介）で一ノ松に出、へ物に狂ふも五臓故、酒の仕業と覚えたり、と反省の色もしおらしく、舞台へ出ると辺りを呼ばわって妻を探し、カケリに執心をみせるところ、少々虫がよすぎるが不安と焦躁の気分は巧み。妻の日常を代弁する地（信行・高義ら）の、へ法師ケ母ぞ恋しき、での安座双シオリも、妻恋し、と直截でないのは意味深。大団円に至る夫と妻の掛合は名調もしっとりとまるでランデブーで、「愛しの女や、ちやっとおりゃれ」はこちらが気恥しい程だった。（28分）

「右近左近」　右近は烏帽（愚かな事）、また日本では左は右より上位なので、右近左近と並べて愚かな右近と賢い左近を暗喩する。和泉流は「内沙汰」で、左近との密通が表沙汰にならぬ様に右近の妻は内沙汰（内々の裁断）を画策する。さてシテ右近・則直が剛速球なら、アド妻、真吾は多彩な変化球であろうか。田を左近の牛に荒らされた右近が公事に上げようとすれば、妻は全てがバレルのを怖れて模擬白洲で地頭に成り代り、口下手の夫右近を痛めつけて止めさせようとする。「妻はちと仔細あって左近殿の愚痴をせねばなりません」と独白する妻は、右近に男勝りと言わしめる活躍。万事に不慣れな右近はこそぞばかりに非を言い募られ、威勢に畏れて返答もしどろもどろである。この辺の迫真は見応え充分。キリは男斎生と言われ、箸に目鼻を付けても男は男、と言い返すのも空しく、「笑え〳〵」の泣き笑い。「そちと左近は夫婦じゃわいやい」の和泉流の拍科白よりはスマートにしても、少々切ない（28分）

「茶子味梅」　第四回朝日狂言会（昭37）以来の上演、稀曲。近頃とみに望郷の思いが募るシテ唐人・万作の、アド妻・幸雄に遠慮する唐語の喋き節は妻には不可解。で、妻が何某・礼之助に尋ねれば、唐の妻の元に帰りたいの身勝手。内容が深刻な割には万作のチンプンカンな唐語が可笑しく、怒りを鎮めて酒で慰める献身的な幸雄も好演。唐団扇持たされ舞う妻の「花の袖」、へ月をも共に眺めばやの、と目付上を見るのに触発されたのか、楽（がく）を舞う途中スミで袖返シたまま、やはり唐人も目付を見上げるとシオル。舞上げてからの正中での安座双シオリには、流石の妻も激怒すれば、「たぶけ〳〵」、と逃げる唐人を、やるまいぞ、と追込んだ。（30分・5月21日・やるまい会）

◎訂正とお詫び

本紙五月号④面「仲春の舞台から」記載の「吹取」は、本年一月「鳳の会」で祐一、靖浩、弘之によって上演され、靖浩が笛を吹き好演であったと伝聞します。文中「当地三十五年ぶり」とあるのを削除して訂正します。

正しいメガネで　しあわせを……
メガネの日進堂
名古屋市西区那古野二丁目20－23（円頓寺本町）
☎〈052〉571－6181（代）（駐車場完備）
■営業時間 AM9.30～PM8.00　■定休日 毎週木曜日

観世流・金剛流
宗家本発行元
檜書店
〒101　東京都千代田区神田小川町2－1　電話03（3291）2488－9　振替東京00130-7-3552
〒604　京都市中京区二条通麩屋町東入　電話075（231）1990　振替京都01010-0-113

謡曲本専門店
創業75年
株式会社 東文堂書店
名古屋市中区栄三丁目28番16号（〒460）
（松坂屋南一丁）電話（052）241-1059番

能楽の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18-18
（郵便番号　464）
電　話（052）731—7984
振替口座 00800-6-36393

購読料　1年1100円
郵送の場合　1年1800円
一　部　100円

名古屋城夏まつり

8月3日～15日 薪能上演

能楽協会名古屋支部協力

真夏の夜のファンタジーとして恒例となった「名古屋城夏まつり」は、ことしも八月三日から十五日まで開催されるが、薪能は、この名古屋城夏まつりのシンボルイベントとして毎年多くの来観者と話題をあつめている。とくに今年は、十周年を記念する特別プログラムで構成され、「高砂」「鶴亀」などのおめでたい曲のほか、「羽衣」「葵上」などポピュラーな曲の上演。日曜日の六日、十三日には狂言を上演。十二日は、市民参加デーとして、薪能の舞台を一般の能楽愛好者に開放、仕舞、狂言、独謡、連調、一管などが上演される。

薪能の上演予定は次のとおり。

八月三日　能「高砂」（祖父江修一）
八月四日　能「半蔀」（須部甫）
八月五日　学生能（名古屋学生能楽連盟）
八月六日　狂言「磁石」（野村又三郎）能「鶴亀」（梅田邦久）
八月七日　能「巴」（前野郁子）
八月八日　能「安達原」（今沢美和）
八月九日　半能「山姥・白頭」（久田徹二）
八月十日　能「船弁慶」（清沢一政）
八月十一日　能「羽衣」（松山幸親）
八月十二日　市民参加デー（一般公募による市民参加日）
八月十三日　若手狂言会・狂言和泉流「蝸牛」（井上靖治ほか）狂言大蔵流「清水」（茂山宗彦、茂山逸平）狂言和泉流「棒縛」（野村信行ほか）
八月十四日　能「葵上」（近藤幸江）
八月十五日　能「菊慈童」（高橋晾一）半能「石橋」（梅田邦久、古橋正邦）

8月11、12日 大阪薪能

第三十九回大阪薪能は、八月十一、十二日の二日間、生国魂神社で行われる。開演午後五時。

八月十一日、能「鶴亀」（梅若善高）半能「松虫」（広島克栄）狂言「鏡男」（善竹幸四郎）能「野宮」（山本勝一）能「鍾馗」（小林喜久）他に仕舞。

八月十二日　能「賀茂」（赤松禎友）半能「兼平」（小西弘通）狂言「呼声」（善竹忠一郎）能「羽衣」（豊嶋三千春）能「龍虎」（上野朝義、三宅昭男）他に仕舞。

主催能楽協会大阪支部、大阪薪能委員会。

入場料　当日券二千五百円。（前売二千円）問い合わせは電話06・943・1810。

能楽後継者育成研修発表会

8月5日 熱田能楽殿

能楽協会名古屋支部では、能楽後継者育成研修発表会（第三回）を八月五日熱田神宮能楽殿で開催する。後継者育成会の会員約二十人が出演する。来場歓迎。午前九時始。

（おことわり）巻中広告の掲載は紙面の都合にて勝手ながら七月号、八月号に分けて掲載させて頂きました。順不同と併せ何卒ご理解賜りますようおねがい申上げます。

◈ 演能カレンダー ◈

（熱田神宮能楽殿）

〔8月〕
5日（土）名古屋薪能（熱田神宮神楽殿前）（有料）
6日（日）青陽会定式能（有料）
20日（日）普及能公演（有料）（番組①面）
27日（日）衣斐正宣後援会能（有料）

〔9月〕
3日（日）大衆能（有料）
10日（日）観世会定式能（有料）
15日（金）鳳の会（有料）
16日（土）観世九皐会定例能（有料）
17日（日）宝生会定式能（有料）
23日（土）鳳鳴会大会（来場歓迎）
24日（日）和泉会（来場歓迎）
30日（土）中日文化センター発表会（来場歓迎）

〔10月〕
1日（日）皐楽会大会（来場歓迎）
5日（木）野村万之丞の会（有料）
7日（土）青陽会定式能（有料）
8日（日）幸観会大会（来場歓迎）
10日（祝）武田謡楽会大会（来場歓迎）
15日（日）邦謡会大会（来場歓迎）
21日（土）猶恵会大会（来場歓迎）
22日（日）誠交会大会（来場歓迎）
28日（土）名古屋能楽鑑賞会（有料）
29日（日）郁謡会大会（来場歓迎）

（演能変更の節はご了解下さい）

能・狂言—普及公演

八月二十日（日）
一部・十一時／二部・二時
熱田神宮能楽殿

〔一部〕十一時始
解説　本日の能について　梅田邦久
狂言　昆布売　大名 井上礼之助　昆布売 佐藤殿　後見 井上祐一
能　実盛　梅田邦久
飯冨雅介　辻本正樹　橋本宰　河村真之介　柳原冨司忠　助川竜夫　鹿取希世
間　井上祐一
後見　今沢美和　泉嘉夫　地謡　高島良一　本田勲　清沢一政　須部甫　久田徹二　加賀敏彦　武田邦久　古橋正邦

〔二部〕午後二時始
解説　本日の能について　泉嘉夫
狂言　雷　雷 佐藤友彦　薬師 井上靖浩　後見 井上松次郎
能　藤戸　泉嘉夫
高安勝久　西村信広　河村総一郎　後藤孝一郎　竹市学
間　松田高義
後見　加藤春枝　梅田邦久　地謡　八神孝元　松山幸親　加藤保彦　武田徹二　久田邦久　中川雅章　祖父江修一

※公演二部終了後、出演者と懇談の場を設定（約三十分程）
各部とも前売　二、五〇〇円（当日　三、〇〇〇円）
学生一、五〇〇円
前売り＝市内各プレイガイド、「ぴあ」、熱田神宮能楽殿
問い合わせ　熱田能楽殿（電話〇五二・六八二・一七五一）

主催　能楽協会名古屋支部
後援　愛知県・愛知県教委
名古屋市・名古屋市教委

狂言和泉流宗家 和泉元秀氏逝去

和泉流十九世宗家の和泉元秀氏は六月二十二日、東急文化村シアターでの「狂言&狂言オペラ」の舞台出演中に身体不調で東京都港区の病院に入院、加療していたが、六月三十日午後五時五十四分、脳出血のため逝去した。享年五十七歳。

葬儀、告別式は七月二十七日午後一時から東京築地本願寺で執行、葬儀委員長土屋齊大垣共立銀行名誉会長、喪主長男二十世元弥氏。

故和泉元秀氏は九世三宅藤九郎氏の長男として昭和十二年生れ、十六年「頼政」で初舞台、「枕物狂」「鹿の梅」「比丘貞」の三老曲を四十五歳で完演。芸術祭優秀賞四回受賞。和泉流現行曲二百五十四曲完演。海外で伝統狂言の上演、普及につとめた功績は大きなものがある。

謹賀新年

観世清和

社団法人 鐏仙会
観世鐏之丞
観世栄夫
観世暁夫

幽謡会
片山九郎右衛門

財団法人 研能会
梅若万紀夫
梅若万佐晴

梅猶会
猶諷会
大阪国際フェスティバル能
梅若盛義

井上嘉久
（〒603）京都市北区紫野下鳥田町六

名古屋観衛会
山本勝一
名古屋正花会
山本博通
〒540 大阪市中央区徳井町一丁目三—六
電話〇六（九四二）四〇七〇番

大槻清韻会
大槻文蔵
〒540 大阪市中央区上町A番七号
電話〇六（七六一）八〇五五番

鳳鳴会
武田志房
稽古場 名古屋市千種区今池四丁目15—3 浅井ビル
電話〇三（七三二）三七三六

幽花会
片山慶次郎
伸吾
〒603 京都市北区小山下花ノ木町二一番
TEL 四九二—五三〇二番
FAX 四九二—五三〇九番

野村四郎

名古屋観世九皐会
観世喜之
観世喜正
加藤保彦
青木武弘
高木美智子
高橋晾一
外山圭一

春雅日記

(162)

若女

えと文 二井栄逸

若女は他の女面のように、性格の抽象化された一つの型式に嵌め込まれていない。そのためか、何か写実的な親しみを覚える。

世の男性が常に夢に描いている女性の如く、淡い夢の現実化された美しさに対する無限の憧憬を感じる。

若女は、序の舞をかなでるすき通るような能管のひびきの中に、煌々と月夜の鏡の如く、哀愁をたたえて、時を超えて生きている。

（平成七年七月十日記）

第一回 法政大学能楽セミナー

〈能楽戦後50年〉テーマに

法政大学では、大学院と能楽研究所が共催で、本年度より能楽研究セミナー（代表幹事西野春雄氏）を実施する。第一回目である今年は、戦後五十年にあたるため〈能楽戦後五十年〉というメインテーマで開催、受講生を募集している。

第一回セミナーの要項は次のとおり。

八月十二日「能楽復興」（維新から敗戦まで）法政大学教授表章氏、「現代演劇との交流」演劇評論家堂本正樹氏▽八月十九日「市民社会への広がり―東京大学名誉教授小山弘志氏、「国民社会のなかの能楽」武蔵野女子大学教授増田正造氏▽八月二十六日「戦後の再出発」東京国立文化財研究所横道萬里雄氏、「新作・復曲の動き」東京国立文化財研究所羽田昶氏▽九月二日「狂言の魅力と再評価」武蔵野女子大学教授小林責氏、「狂言役者半代記」大蔵流狂言方茂山千之丞▽九月九日「能楽研究の歩み」文教大学教授田口和夫氏、「世阿弥研究の足跡」早稲田大学教授竹本幹夫▽九月十六日「わたしと能」歌人馬場あき子氏、「名家の面影―（16ミリ映画上映）「名家の面影を観て」金春流太鼓方金春惣右衛門氏、西野春雄氏対談。

応募資格 一般および大学院生、学生▽会場法政大学92年館▽受講料一般一万二千円▽問い合わせは法政大学大学院事務課（東京都新宿区市谷田町2―15―2、☎03・5228―0550）

和泉元秀宗家を偲ぶ

竹尾邦太郎

訃を聞いたとき俄には信じられなかった。この春、流儀の長老で狂言共同社代表井上松次郎師の傘寿記念狂言会には「鬼檜」のシテを普段通り精力的に勤められ、その後の祝賀会では今後の抱負を語る元気一杯の謦咳に接したばかりだったから。私が初めて拝見した宗家の舞台は昭和三十五年、「和泉流の若き宗家を観る会」と銘打たれた第二回朝日狂言会での大曲「花子」だった。「花子」は昭和三十三年の披キで翌年は真ノ型で再演し、三年連続三度目であった。保之を名乗っていた時代で当時廿三歳、和泉流発祥の当地盟爽の登場は、正に流儀の牽引車としての自負に溢れ面目躍如だった。

六歳で宗家山脇家に入り十九世を継承し、昭和廿一年二月、和泉流に因む姓を和泉と改め、九歳で世上天才児の名を恣にした三番叟を披くが、そこには病弱な母の期待を叶えなければ、の優しい心と、宗家として立派に立ってゆこうとする健気な自覚があったに違いない。母はその年の夏に死去するが、宗家は自著『狂言を観る』で言う、「早くから自立心をもたせてくれたのも母親のお蔭かもしれませんし、自分に厳しくなれるのも母親の無言の教えかとも思っています。」と。爾来生まれながらの狂言役者は本人の資質もさりながら厳父であり師匠でもある九世三宅藤九郎師の鉗鎚によく応え、狂言の道一筋の精進は目覚ましく次々に大曲・秘曲を披いて持てる芸を大きく開花させるが、特筆されるのは舞台五十年記念の平成三年、東京と名古屋の「狸腹鼓」をもって和泉流現行二百五十四曲の完演を果したことであろう。厳父を追憶して宗家は言う。「目的のある稽古と、稽古のための稽古を両輪として二十歳の成人までの間に、実に膨大な稽古を与えてくれたことが今日の結果を生む大きな財産でありました。」と。先代藤九郎師が宗家としての帝王学を早くから授け続け、一日も早い名実備わった宗家を育成するために心血を注いだように、元秀宗家も嗣子元彌君に、自分の持てる芸を早く伝えたいと思う気持の逸りが結果として生き急ぐことになったのではなかろうか。近年は、幼時から狂言に強い関心を示したという淳子・祥子二嬢も史上初の女流狂言役者として世に出し、一男二女との共演が多かった。母の愛に餓えていた天才児元秀宗家の孤独は、常に家族と共に芸の道にあることで癒やされたのかもしれない。そして近い将来には、「狸腹鼓」を新たな初舞台として是非孫の「刎猿」の猿を、の願いも今は空しく、舞台五十二年を半ばに茫惶として黄泉へ旅立たれてしまった。謹んで御冥福をお祈りするばかりである。

ありし日の和泉元秀宗家（奈須与市撮）

観世芳宏門人会
観世芳宏
観芳会
観世芳伸

大垣浦声会
稽古場 大垣市伝馬町大垣別院 電話〈五六〇〉七三―三三六二
住所 京都市左京区下鴨芝本町共 電話〈七三〉七八一―七〇三〇
浦田保利
浦田保浩
浦田保親

邦謡会
梅田邦久
清沢一政
須部甫
本田勲
今沢美和
名古屋市昭和区台町二丁目十六―五 電話〈八三〉（八四一）四六三二番

壺泉会
泉嘉夫
名古屋市昭和区山手通3―8―2―306 電話八三二―三一八五
西宮市甲陽園目神山町二三―二五 電話〈〇七九八〉〈七三〉二四五八

財団法人 鎌倉能舞台
中森晶三
中森貫太

名古屋橋岡会
名古屋市昭和区丸屋町五ノ三五 山田紀子方

誠交会 與善助
東京都世田谷区三軒茶屋二―一〇―二二 電話（〇三）三四二二―二六三七番

山中能舞台
山中義滋
〒545 大阪市阿倍野区阪南町六―五―八 電話（〇六）六九二―三八二五

武田謡楽会
武田欣司
武田邦弘

名古屋淡交会
橋岡慈観

三交会
瀬戸三津子
稲沢市稲島町二ノ宮六 瀬戸方 電話〈〇五八七〉〈七三〉三八八番

下田雄三
豊中市曽根東町四―一―二二

雄諷会中部地区連合会
名古屋和諷会
一宮竹石会
岐阜花諷会
下呂雄諷会
萩原雄諷会
高山雄諷会
倭文之屋社中

名古屋修諷会
梅若修一

(株)大阪能楽会館
大西智久
〒530 大阪市北区中崎西2―3―17

笙月会 中川雅章
長浜市地福寺町八ノ二九 電話〈〇四二〉〈六七〉〇六三〇番

松音会
泉泰孝
〒168 東京都杉並区宮前四―一九―四 電話〈三〉三三三二―八二八〇番

佳泉会
泉雅一郎
〒181 東京都三鷹市牟礼二―三―一 電話〇四二二―七一―二四〇四

春鶯会
梅若善高
〒565 豊中市新千里南町三丁目18―12 電話〈〇六〉八三一―七八五四
〒166 東京都杉並区高円寺南4―27―7―903 電話〈〇三〉三三一二―〇五七〇

山本眞義
山本章弘
豊中市本町六丁目一〇―六

初陽会
武田宗和
稽古場 名古屋市千種区今池四丁目15―3 浅井ビル 電話〇三（七三二）三七三六

上田観正会能楽堂
社団法人 観正会 TEL〇七八―六九一―五四四九
上田観正会
上田貴弘
大公拓司
介威

名古屋狂言史余話（六）

佐藤友彦

維新直後の名古屋狂言界には宗家山脇元賀を始め、旧藩以来のお役者各家はいずれも健在し、野村又三郎信茂もしば〳〵来名、維新後の復興はむしろ能楽よりも狂言の方が活発だったようである。

当時の判明する主な狂言関係の催しを列挙しておこう。

明治二年四月六・九日
早川舞台で狂言尽し興行。
狂言二十三番、途中で雨天となり九日に延期。
幸八、得平、田中庄太郎、磯部定治、井上菊次郎ほか。

明治二年十二月一日
早川舞台で狂言尽し興行。
狂言十二番（内子供狂言四番）
囃子四番、及び三番叟。
幸八、庄太郎、定治、菊次郎、ほか。

明治三年二月十六日
狂言尽し興行。
狂言十三番、仕舞七番、一調。
得平、幸八、又三郎、庄太郎、定治、菊次郎ほか。水野代次郎（伊勢門水）初舞台。

明治三年二月二十六・三月六日
早川舞台にて興行。
能三番、狂言十四番、囃子五番
途中で雨天により延期。
得平、幸八、又三郎、山脇哲太郎（後の元清）、庄太郎、定治、菊次郎ほか。
シテ方・大野藤五郎、寺田左門治ほか。

明治三年四月二十六日
狂言盆し興行。於早川宅。
狂言二十一番（前号に詳細）・
山脇伊津美、鈴太郎、得平、幸八、又三郎、庄太郎、定治、菊次郎ほか。

明治三年五月二十六日
山脇伊津美催・狂言尽興行。於早川宅。雨天により二十八日に延期されているらしい。
狂言二十一番。
山脇伊津美、鈴太郎、得平、幸八、又三郎、庄太郎、定治、菊次郎ほか。
「花子」（伊津美）

明治四年四月一・二日
野村又三郎催。於早川宅。
初日「翁」両日とも能三番、狂言計二十三番（五月号に詳細）
又三郎、菊次郎、河村鍵三郎（初舞台）ほか。

明治四年五月十一・十二日
山脇伊津美催。於早川宅。
初日・「翁」付能三番、狂言十番、二日・狂言尽十九番。
山脇伊津美、鈴太郎、得平、幸八、又三郎、柳川宇左衛門、庄太郎、定治、菊次郎、角淵新太郎、水野代次郎ほか。
「三番叟・橋掛舞」（伊津美）
「枕物狂」（伊津美）
「釣狐」（宇左衛門）

明治四年十月一日（二日）・三日（四日）
山脇伊津美催。於早川宅。
雨天により初日が二日に、三日も一部が四日に延期。
初日・「翁」付能三番、狂言十四番。三日・狂言尽六番。四日狂言尽十八番。
山脇伊津美、鈴太郎、幸八、得平、又三郎、柳川宇左衛門、庄太郎、定治、菊次郎、水野代次郎ほか。
「三番叟」（宇左衛門）
「釣狐」（伊津美）
「唐人相撲」（得平）

以上はいずれも狂言方が主催するなどして行われた会である。明治二年代には宗家元賀の舞台活動は見られず、三年四月から復帰している。以後は主な狂言の催しには伊津美（元賀）、幸八、得平、さらに又三郎まで揃って出勤しているようだ。これらの会はほとんどが早川幸八の舞台で開催されている。ことに伊津美の復帰前後は二月、四月、五月といずれも二十六日には狂言会が催されており、（三月は不明）偶然こうした結果となったものであろうが、或いは毎月定期的に開催する意図があったのかも知れない。その後は伊津美が主催して興行するケースが多く、宗家を中心に名古屋狂言界がしっかりとまとまり、新しい弟子たちも確実に育ちつつあることがうかがわれるだろう。

明治九年五月に、早川幸八家の舞台で二日間にわたる狂言会が行われた。二日間で狂言二十八番。

五月十四日　初日
相合鳥帽子　野村又三郎
舞り　青山保吉
猿座頭　青山儀平
水汲　勝野久次郎
鳶　河村鍵三郎
通円　井上菊次郎
蜘盗人　田中全三郎
（中入）
勧進聖　野村又三郎
花子　角淵新太郎
悪太郎　河合五郎次
石神・替ノ形　田中庄太郎
隠狸　水野代二郎
蟹山伏　木村重太郎
闘罪人　野村又三郎

五月十五日　二日目
三本柱　河村鍵三郎
魚説法　岡本吉次郎
不見不聞　神戸嘉二郎
抜殻　野村又三郎
法師母　加藤玉三郎
吹取　水野代二郎
伊勢詣　山本久平
（中入）
鞍馬賀　田中庄太郎
浦島　野村又三郎
狐塚・小謡入　井上菊次郎
武悪　勝野久次郎
鞠猿　三橋正太郎
蝸牛　角淵新太郎
太鼓負　野村又三郎

これがどのような性格の催しだったかは明らかでないが、ここではもはや旧藩以来のお役者は又三郎（信茂）しか見当たらない。又三郎自身は番外曲である「浦島」を始め、「勧進聖」「闘罪人」「太鼓負」などの秘曲、大曲ばかり六番を勤めると言う意欲的な舞台を勤めており、おそらく又三郎を中心とした会であったと推測されるが、あとのお役者たちはどうなったのであろうか。

宗家山脇伊津美（元賀）はこの半年後の翌年十一月に六十五歳で没しており、すでに病などでこの頃は舞台を勤める状態になかったかも知れないが、山脇鈴太郎（元清）の名も見られない。

早川幸八も翌十年七月に七十六歳で没する。山脇得平も十一年に没するが、この日得平門下の角淵新太郎が「花子」を披いており、通常なら何らかの名前がうかがわれそうなものだが、得平の名も息子録太郎の名も見出されない。こうした中で後年狂言共同社創設のメンバーとなった七名は、すでにこの会に全員参加しているのが注目されるだろう。

（得平門下）
角淵新太郎、田中庄太郎、三橋正太郎
（幸八門下）
井上菊次郎、水野代次郎（伊勢門水）
（又三郎門下）
河村鍵三郎、山本久平

ともあれ名古屋狂言界が大きな曲がり角にあったことは事実だろう。宗家を中心にしっかりと体制を守って来たお役者の家はこの後大阪の又三郎家を除いて相次いで廃絶、さらに宗家を継承した元清の上京へと続くのである。

（筆者は和泉流狂言方）

平成7年7月・8月・9月放送

〔7月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）
30日（日）狂　言「薩摩守」～和泉流～　野村万之介
　　「魚説法」～和泉流～　野村又三郎

〔8月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）
故人をしのんで
6日（日）観世　元昭「隅　田　川」～観世流～
13日（日）武田　喜永「　砧　」～宝生流～
20日（日）桜間　道雄「景　清」～金春流～
NHK教育テレビ　8月27日（日）
午後3時～4時
大蔵城新能「渇水龍女」

〔9月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）
3日（日）「雨　月」～宝生流～　高橋　章
10日（日）「檜　垣①～観世流～　橋岡　久馬
17日（日）「檜　垣②～観世流～　橋岡　久馬

久田観正会
久田徹二

大倉流小鼓松月会　久田舜一郎
郁謡会　前野郁子
松詔会　松山幸親
馬場信至
玉木孝男
〒462 名古屋市北区東水切町四ノ四三
電話〈〇五二〉九八一―三六四三番

宝生英雄
宝生英照

名古屋巽会
辰巳孝

佐野由於
〒150 東京都渋谷区東2―14―21
〒921 金沢市泉野町四丁目12―14

宝生流
嘉宝会
鬼頭嘉男
名古屋市昭和区川名本町二ノ五一

司宝会
佐藤耕司
名古屋市天白区島田二丁目三〇一
島田橋住宅三―三〇 電話〈〇〇〉七三七二

金剛巌
金剛永謹

廣田後援会
廣田陛一
廣田幸稔

菊扇会
後援会
廣田泰三
泰能

豊嶋館の会
豊春会
豊嶋三千春

金剛流
松野恭憲
松野洋樹
〒616 京都市右京区鳴滝泉殿町一八―三
TEL〇七五（四六二）二一四八番
FAX〇七五（四六一）六〇九八番

金春信高
金春安明
〒167 東京都杉並区南荻窪3―17―16
電話〇三（三三三一）二五七一番

金春欣三
東京都杉並区成田東四丁目35―20
電話〇三（三三一五）七三八二番

春敲会
金春晃実
金春穂高
廣瀬瑞弘
〒467 名古屋市瑞穂区東栄町三―二四
電話〇五二―八四一―四七四五

本田光洋
東京都中野区上高田二ノ二五ノ二
電話〇三（三三八六）二六四一番

伊勢金春会
中村富次
伊勢市宮町一―一四―一七
電話〈〇五六〉㊐二四五六番

二井栄逸
松阪市殿町1412の3
電話（〇五九八）二三―〇二一六

喜多流
和楽会
和谷衡市
〒516 伊勢市中島二丁目26―12
電話〈〇五六〉㊐〇一五九番

名古屋高安会
高安勝久
飯冨雅介
杉江元

豊嶋十郎
〒221 松戸市下矢切五五―五
電話（〇四七三）㊐一九八二

植田和光会
植田隆之亮

龍吟会
藤田六郎兵衛
名古屋市西区幅下二丁目一〇番九号
電話（〇五二）五七一―五七六三

◆水無月の舞台から◆

「山本博之廿三回忌追善能」「清韻会」「熱田神宮奉納能」

竹尾邦太郎

「清経・恋ノ音取」　シテ博通、赤地縫箔（金霞ニ梅花文）着付に流水ト楓の淡黄色文大口、帆掛舟ニ鉄線文紺地長絹の袖を折込み、面今若の姿は優美な公達振り。

六郎兵衛の、嫋々とした笛に曳かれて出るが、ふと幻聴とも思えて立ち止まれば、音色は微かに耳朶に残るだけで霧てふっと消えてしまう、といった趣は、この曲を支配する生の儚さを感覚的にみせて両者好調。クセ前半を橋懸でするのが戦の阿鼻叫喚を離れる暗示なら、上ゲ端前に舞台へ戻るのは酸鼻を自ら避け、入水して果てる意図。月を眺め、へ音も澄みやかに、笛を吹く聖も美しい。へ帰らぬは古、と大小前から正中へ、下居して、へこの世とても旅ぞかし、とツレ妻（博重）にアシラフのは最前の怨み辛みの返答。この曲中応答（くせなかあしらひ）が効果的で説得力がある。

クセ切は、スミと乗込拍子してキリッと廻ると退り安座、入水に有無を言わせず、ツレの嘆きの一句を省き、へ立つ木は敵、と居立ち、へ雨は矢先、と立つと、自らの入水は修羅道の苦患を軽くするもののように、キリは軽快だった。（1時間15分）

「卒都婆小町・一度ノ次第」　僧の登場の後先、即ち老女が既に卒都婆に掛けているのと、眼前で掛けるのとでは、僧の心証は微妙に変り、前者は舌鋒も自ずから鈍るだろう、と思わせる小書である。

シテ勝一、面姥・襟朽葉・鈍イ鬱金色摺箔着付・紺地段替青海波文縫箔腰巻・淡緑縹水衣・女笠。習ノ次第（六郎兵衛・啓次郎・総一郎）で三ノ松にクツロギ、一ノ松では、へ月諸共に、の返シは庁立のまま、常座では笠に手をやり右ウケて詰メルと川瀬舟を遠くに眺め、へ漕ぎ行く人、の返シに胸杖するが直ぐに外し一呼吸、「余りに」苦しいと壁桶を認めて笠を脱ぎ、老足十歩さりげなく静かにぴたりと腰を掛けたのが美事。次いでワキ着流僧（閑・松男）、舞台に入るとシテを見咎め問答。当初、休息を邪魔され煩そうに面だけアシラッていたのだが、遂には「台になし」とワキにキッと面を切るところに矜持をみせる。

卯頭の僧を尻目に立ち、正中下居、小町が成れの果ての羞恥は、風体の一々を明かすにつれ乞食の自己認識を強いられるかである。突如堰を切った亢奮で僧に物乞う狂とへの経緯も明快に、四位ノ少将の霊が憑き、物着に風折烏帽子・松扇文淡黄色長絹を着けて百夜通いをみせるところは趣深い。へ一夜を待たで死したりし、と安座するとへ斯様に物には狂はするぞや、とワキにアシラフ心持も切実だった。へ悟りの道、と合掌し、返シ句に扇開いて右ウケ、右の爪先を静かに下ろすと左足すっと出して揃えたトメも沁み〻〻と、象徴的だった。地は六郎・邦久・晋・信一郎ら、後見を真義・信重。（1時間24分）

「宗論」　シテ浄土僧・又三郎、身許が割れて同道を拒むアド法華僧・信行に執拗に絡んで度が過ぎる。法文を説く段でやっと生気を取り戻したかにみえたアドだが、勤行にも先を越されて散々の態は挙句に南無念仏と題目にエスカレート。互いが我が宗旨の法悦に浸る裡に両者混同、翻然と仏道の要諦に目醒めるのだが、シテの苛めの陰湿な印象は拭いようがない程だった。角頭巾の上部を後ろに撓ねたシテと、前に垂らしたアド、外向と内向の性格を象徴して妙。（40分）

「一角仙人」　萩屋は笛前に角カケ、岩屋は大小前一畳台に置く。天冠・襟赤・白摺箔・黄色大口・赤地舞衣（唐草文）薙折のツレ施陀夫人・順之はワキ官人・勝久を従えて輿で出るが、萩屋のシテ一角仙人・六郎とワキとの問答の間、スミに下居して有らぬ方を見ているのが面白い。初同（真義・晋・徹二ら）へ柴の枢を推し開き、で黒頭・小格子・黒っぽい水衣（木ノ葉付）・羽裏・剣のシテが萩屋を出ると、ツレの色香に惹かれたとみたワキはシテに酒を勧め、ツレが酌に立てばいつの世も美人に弱い男の性（さが）、ストイックな仙人とても口実を設けて盃を受けるのが、騙されると分っているだけに身につまされる。歓心を買うにはツレの余興の楽（がく）にも途中からついふら〻〻と見様見真似に付き合い、スミ近く袖を被いてツレに寄り、左肩におず〻〻と手を掛ける風情は、その後を独りで舞い続けるので一層いじらしい。

舞上げ地となって更に舞い進み酔が廻り下居すればツレの酌、へ情に心を移し、とツレの右肩に手を掛ける此の度は泥酔の狎れであろう。この辺りの機微を六郎巧みに写して上々。シテ酔臥の後は通力から解放された龍神（章弘・信重）、一は割れた岩屋から躍り出し、一は暮から疾駆して出ると凄烈な舞働に舞台狭しの活動。キリの闘争からトメへ、目が離せなかった。（49分・6月3日・山本博之23回忌追善能）

「杜若・素囃子」　シテ嘉夫、面若女・襟白二・赤浅黄段唐織、腰巻を着込んではいても姿が美しい。千鳥掛の運ビに、ジグザグに架る八橋をやって来ると見せ、一ノ松でのワキ旅僧・弥三郎との掛合は、如何にも群生する杜若の中の橋上に佇む風情である。来し方を追懐してゆっくり百八十度体を廻らせ、右から左へ見て一足退き、へ今とても、と運んで初同一杯に常座に立つまで、濃密な味わい。

物着後はイロエを抜き、クセ中に橋懸へ。一ノ松に沢辺の杜若を眺め二ノ松、花の紫に誘われへ妻しあるやと、と招クのも深長。へ仮に現われ、と素平の化現を言って舞台に戻ると、舞は小書で極く短かく、常座で足拍子の後、太鼓（喜太郎）に合わせ更に二ツ踏むと舞い出した。素囃子（しらばやし）の素は白でもあるが、「もと」「本質」の謂か、舞台を一巡するだけだが紫の杜若の心葉が舞の心を生（き）で見せるようだった。（1時間10分）

「貴船」　掛素袍のめでたい亀甲繋文も皮肉にシテ舞・高義、酔の勢いでアド妻・信行を離別するが、酒気が抜ければ青菜に塩、衣服を箭ニ鏑牛文の肩衣に改めて男・又三郎の方へ妻を貰い下げに行く。再三のことで態度を硬化させている男と、高を括り、掬うような上目遣いに目を笑わせている食えない舞との対立に現実感があって怖い。挙句は子は鎹、妻の母性本能に訴えてまんまと連れ出す卑怯未練。いつの世にも「今の若い奴等は」、と舌打ちしたくなることがあるもの、「祭には呼ばぬぞよ」の男の涙声も悲痛だった。（26分）

「唐船・盤渉」　廣因十三年のシテ祖慶官人・文蔵、安香を気遣う唐子（河村和晃・山田龍之介）に遮断して帰唐を許されるが、日本で授かった子（大槻一文・上田寛照）は同行出来ない。ディレンマに自裁を計るがワキ箱崎何某・弥三郎の義侠で無事船の人となり喜びの楽を舞う。一月三日の大槻自主公演でもシテ鈬之丞・ワキ茂十郎・船頭アイ千作で上演されたが、日本子と唐子の適当な年齢差に加えて役謡もあり、子方の粒が揃わないと上演は不可能。唐子の一セイから着詞への張りのある連吟や、船頭更にはワキとの聴するところのない問答、幼い日本子が父との同行を遮られてワキに訴えシテの袖に縋る一所懸命ないじらしさなど、子方諸君の好演は再演を割り引いても態度と言い謡と言い立派の一語。アイ僧行の帆船を操る手際のよさや、尤もらしい唐語の軽妙に意表をつく「你好（ニイハオ）」のまともも可笑しく、ワキの貫録から滲み出る情味も如何にも義侠である。

シテは白亜・唐帽子・襟浅黄・小格子目引・茶水衣（肩上ゲ）、物着後は黄褐色単法被。クセ中、へ船にも乗るまじ留るまじ、と右左に面遣ヒ、へ巌に上りて、と立って合掌し、日本子、唐子と見れば四人はシオリ、へ流石心も、でシテもシオッて頽れるかに下居の味わい深く、キリの船中の楽の円転滑脱も見事、好舞台だった。（1時間15分・6月4日・清韻会）

「経政」　紅白段厚板着付・黄色大口・淡青緑色長絹も品のよいシテ衛市、淡々と運び初同一杯に常座に立つと、さらりとへ風枯木を吹けば、と謡う。衒のない舞グセ、カケリの卒直、そしてキリの、あからさまを厭う含羞の人経政の修羅道の活躍、そこには所謂擦れていない初々しさがあって好ましく、公達の洗練からは離れるが、質朴の味がこれも一つの経政像。地頭の謡が懸命に一統を纏め、ワキ行慶・雅介は沙門に重味を見せた。（36分）

「歌争」　誘い合わせて野遊びはよいが、風流心に歌を詠めば互いに一知半解の高義と僧行は古歌の換骨奪胎もよいところ、「（風）騒ぐなり」を「（萎れて）ぐんなり」、「咲くやこの花」は「匂兵の花」・酒落（同音を生かして言う地口）にもならないとばかりに互いを嘲笑して相撲になる。思の合ったがっぷり四つだった。（14分）

「杜若」　シテ澄子、物着に初冠・紫長絹（花籠ニ扇芝文）を着る。赤地縫箔腰巻は金の石畳と扇面に杜若を入れた文様が効く。しかし、別れて後に恨みの残る唐衣を都（の女）に返そうか、の寓意で舞の袖を翻（返）すイロエの省略は錦綿たる情緒を削ぐのではなかろうか。それがあらぬか序ノ舞もさら〻〻とした感じ、舞上げて地（孝・正宣ら）との掛合に、へ蟬の唐衣の、と正先で下に居ながら左袖をとって右手の扇で受け、抱くようにして見入るところは良かった。（1時間3分）

「巻絹」　シテ里翠、面十寸髪・濃白赤・緋大口・白水衣。クセ中、へ和歌の徳に非ずや、と扇カザシてスミから大小前、ワキ正樹に祝詞を勧められ、扇を幣に替えてノットから神楽へとスムーズ。幣で招キ正先一杯に出る所や、直って扇に替えての神舞の活発、舞上げ、へ神語するこそ、と再び幣に替えるイロエの味、など女流の心延え。ツレ孝充の真摯も結構だった。（1時間1分・6月5日・奉納能）

伺　御　中　暑

幸清会
幸義太郎
正昭
東京都中野区丸山二―二四―一―310
電話FAX〇三（三三三七）五六七二番

幸友会
涛華能
福井啓次郎
福井良久
福井良治
柳原冨司忠

桂会
後藤孝一郎
嘉津幸

亀井俊一
忠雄
保雄
実

瀬尾乃武
〒171 東京都豊島区西池袋一―30―10―105

飯島佐之六
〒920 金沢市香林坊2―8―17

谷口正喜
京都市上京区中立売通室町西入室町スカイハイツ610号

叶石会
河村総一郎
河村真之介
466 名古屋市昭和区前山町一丁目二三
電話〈〇五二〉七六一―四八八二

河村大
602 京都市上京区仁和寺街道千本西入コスモトゥデイ四〇二号
電話〈〇七五〉四六二―四一一五

前川光隆
前川光長
名古屋稽古場　京都市右京区御室芝橋町一の六
名古屋市東区葵二―13―3
ツインクルガーデン801前野舞台
電話九三二―八八〇六番

金春流太鼓
青耀会
上田悟
〒590―02 和泉市青葉台58―4
電話〇七二五（56）八五二一
名古屋稽古場　名古屋市中区丸の内二―三―一七　那古野神社
電話（〇五二）二〇一・四〇三〇

大蔵流
大蔵狂言会
大蔵彌右衛門
大蔵彌太郎
大蔵吉次郎
〒215 川崎市麻生区岡上四三八―一
電話〇四四（九八七）一一八七番

野村万蔵
東京都豊島区南長崎六―五―三
電話〇三―三九五〇―五二八八番

名古屋和泉会
狂言共同社

狂言やるまい会
野村又三郎
野村信行
〒460 名古屋市中区正木二丁目16―25
電話〇五二（三三一）七五五三番

二井栄逸師画抄集
'96能画カレンダー
◉予約特価　1部　1500円　（郵送の場合送料とも1部　1900円）（2部以上の場合送料は一部600円）
◉カレンダー価格は前回と同じです。ハガキで部数記入のうえ、当社へ予約申込み下さい。
能楽の友社（詳細次号）

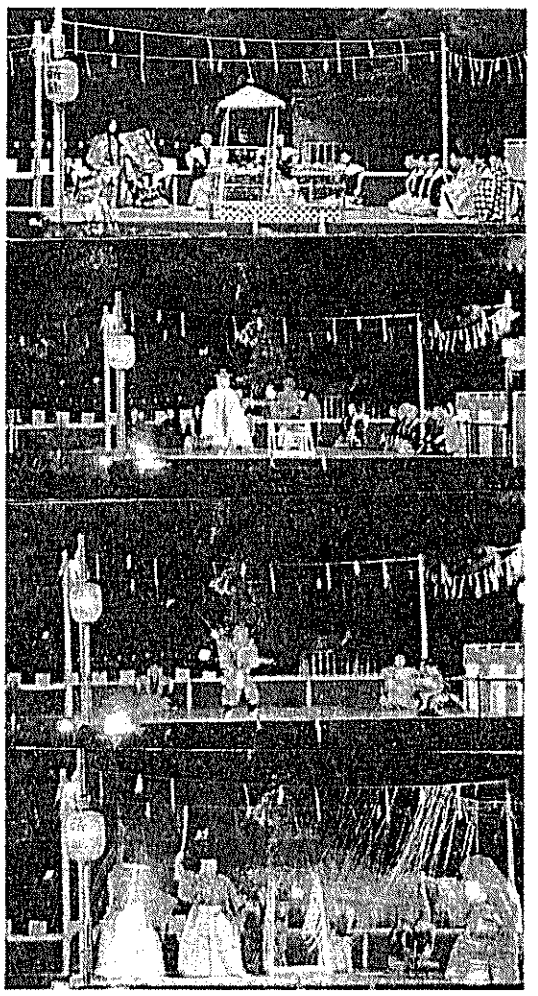
能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18-18
（郵便番号　464）
電　話（052）731—7984
振替口座 00800-6-36393

購読料　1年1100円
郵送の場合　1年1800円
一　部　100円

◈ 演能カレンダー ◈（熱田神宮能楽殿）

〔8月〕
27日（日）衣斐正宜後援会能　（有料）（番組②面）
〔9月〕
3日（日）大衆能　（有料）（番組③面）
10日（日）観世会定式能　（有料）（番組③面）
15日（金）鳳の会　（有料）（番組③面）
16日（土）観世九皐会定例能　（有料）（番組③面）
17日（日）宝生会定式能　（有料）（番組④面）
23日（土）鳳鳴会大会（来場歓迎）（番組④面）
24日（日）和泉会　（来場歓迎）
30日（土）中日文化センター発表会　（来場歓迎）
〔10月〕
1日（日）阜楽会大会　（来場歓迎）
5日（木）野村万之丞の会　（有料）
7日（土）胥陽会定式能　（有料）
8日（日）幸謡会大会　（来場歓迎）
10日（祝）武田謡楽会大会　（来場歓迎）
15日（日）邦謡会大会　（来場歓迎）
21日（土）猶恵会大会　（来場歓迎）
22日（日）誠交会大会　（来場歓迎）
28日（土）名古屋能楽鑑賞会　（有料）
29日（日）郁謡会大会　（来場歓迎）
〔11月〕
3日（祝）幸友会秋の会　（来場歓迎）
4日（土）萠謡会大会　（来場歓迎）
5日（日）能楽協会素人会　（来場歓迎）
12日（日）観世会定式能　（有料）
18日（土）観修会大会　（来場歓迎）
19日（日）宝生会定式能　（有料）
23日（祝）和泉会　（有料）
25日（土）清謡会　（来場歓迎）
26日（日）久田観正会　（来場歓迎）
（演能変更の節はご了解下さい）



◈30回　名古屋薪能
㊐から能「菊慈童」「羽衣」
狂言「太刀盗」能「土蜘蛛」

大衆能

2部制で能4番上演
9月3日　熱田能楽殿

能楽協会名古屋支部主催の「大衆能」は、本年度三十七回を数えきたる九月三日（日）、熱田神宮能楽殿で、第一部（午前十時半開演）第二部（午後二時半開演）の二部制で催される。後援愛知県、名古屋市。

〔第一部〕観世流能「智茂」（シテ祖父江修一、ツレ加賀敏彦、須部市）
金剛流仕舞「放下僧」小歌（吉川周子）観世流仕舞「葵上」（中川雅章）
和泉流狂言「鈍根草」（井上祐一、井上靖浩）
宝生流能「阿漕」（シテ衣斐正宜）

〔第二部〕観世流「自然居士」（シテ高橋晾一、子方秋山宣仁）
金春流仕舞「松虫」キリ（小島芳樹）観世流仕舞「歌占」キリ（古橋正邦）
和泉流狂言「菊の花」（野村又三郎、松田高義）
喜多流能「紅葉狩」（シテ長田曉、ツレ長田郷、頼光・和谷衡市）
入場料（一部料金）前売券二千五百円、当日券三千円、学生券千五百円。プレイガイド、チケットぴあ、熱田神宮能楽殿、出演者宅で取り扱い。お問い合わせは熱田能楽殿（03・682・1751）

熱田神宮能楽殿
運営委員会
熱田神宮権宮司
委員長　岡地幸雄
委員一同

名古屋観世会

賀水会
桑名賀水会
名鉄百貨店友の会
加賀敏彦
〒463　名古屋市守山区森孝二丁目七〇九
電話（〇五二）（七七一）八九四五番

洗心会　奥村富久子
〒606　京都市左京区永観堂西町二〇
電話〇五二（七七一）〇七六七番

観修会　祖父江修一
多治見市日ノ出町2丁目
電話（〇五七二）㉒三六五六

猶恵会　熊沢恵美子
名古屋市名東区平和ケ丘3—76
日車マンション四〇四

芳韻会　稲生芳雄
半田市船入町三十一
電話〇五六九㉑〇八一五

幸謡会　近藤幸江
岡崎市鴨田本町十一番地ノ三
電話（〇五六四）㉑二五二九

中日文化センター
謡曲・仕舞教室　名古屋（栄）岐阜・四日市
翠謡会
生駒里翠
名古屋市名東区社ガ丘3ノ1503
電話（〇五二）七〇三—五七一七番

胥陽会　菊池重郷
犬山市犬山字柏生五九—一六
電話（〇五六八）㊸四五〇一番

清謡会　今村嘉勇
岩倉市東新町下境52—401
電話（〇五八七）㊲七二三八

恵謡会　三村恵子
〒445　西尾市住吉町三—一二
電話〇五三（五七）二五九四番

光盛会　熊沢光俱
〒485　小牧市篠岡3—2—11
電話（〇五六八）七九—九五八七

近藤乾之助
〒170　東京都豊島区巣鴨五—二三—八

恵美寿会
衣斐正宜
〒466　名古屋市昭和区御器所3—23—19
御器所パークマンション802号
電話（〇五二）八八二—五六〇〇番

衣斐正宜後援会
〒450　名古屋市中村区名駅三—二六—二六
平松昌彦方
電話（〇五二）五八六—一一二〇番

金剛流
名古屋周星会
岐阜周星会
吉川周子
名古屋市千種区西崎町三—六
電話（〇五二）七六一—二二五七

倉本雅
県津市千里丘東3丁目11-13-303
電話〇七二六（二四）七二一六番

金剛流景雲会
国際能楽研究会（I・N・I）
インターナショナル能インスティテュート
（日本・カナダ・アメリカ・ニュージーランド・ドイツ・フランス・台湾）
宇高通成面乃会
宇高通成後援会
宇高通成
〒606　京都市左京区高野泉町四〇
TEL（〇三）七〇一—〇七九三
名古屋事務所　前組英安方
TEL（〇三）八五二—二三二四

喜多流　山本才
愛知県高浜市青木町三丁目七の五
電話（〇五六六）五三—六一八二番

長田曉後援会
〒514-22　津市高野尾町三三五一—四六
電話（〇五九二）㉚〇六九七番

福王茂十郎
〒662　西宮市名次町六番十二号
電話（〇七九八）㉓〇七七二

宝生閑
欣哉
〒176　東京都練馬区小竹町一—五〇—五
電話　〇三（三九七二）七三三〇
〇三（三九五五）四七九五

岡次郎右衛門
向日市上植野町地田一ノ五四
電話（〇三）九三四—二四〇六

春雅日記

(163)

容花

えと文 二井栄逸

容花（かおばな）は、七月、八月の暑い真昼間の野の道や、草いきれのはげしい畑の縁等に、薄桃色の小花をつけて涼しげに咲く萬葉の花で、普通、ひるがおとよばれています。ひる顔は、昼開き、夜には花を閉じてねむる花なのです。

同じ萬葉の合歓（ねぶ）は、普通ねむの花とよばれていますが、ひるがおのように夜は花を閉じます。

昔、紀女郎（きのいらつめ）という萬葉歌人がいました。大伴家持とよく歌の贈答を行っていましたが、或る時、次のような歌をねむの枝に添えて家持に贈りました。

昼は咲き
夜は恋ひ寝る
合歓の花
君のみ見めや
戯奴（わけ）さへに見よ

紀女郎は人妻ですが、たわむれに若い家持に恋歌を贈るのです。同じ夜をねむる容花を詠んだ歌に次のような歌があります。

東歌の一首ですが、紀女郎の歌より一途さが強く感じられて感動を覚えます。

打日さつ
宮の瀬川の
容花の
恋ひてか寝らむ
昨夜（きそ）も今宵も

しかし、私はやはり大伴家持が詠んだ次の歌が好きで画文にもよくかきます。

高円の
野辺の容花
おもかげに
見えつつ妹は
忘れかねつも ——

細編みの籠等に生け、露を打つと、この花のみづみづしさと命の短かさに、一期一会の、切実なふれ合いのひとときを感じるのです。

第11回
衣斐正宜後援会能
八月二十七日(日)午後一時始
熱田神宮能楽殿
講演
「能舞台という空間」
東京芸術大学助教授 作家 林望
番組
舞囃子
安宅 衣斐 愛 河村真之介 福井啓次郎 鹿取 希世 地 佐野 輝和 武田 孝史 萌
杜若 能 衣斐正宜 工藤和哉 河村真之介 柳原冨司忠 助川竜夫 大野誠 地 石村善悟 平田正文 久野幸三 野月聡 辰巳満次郎 水上輝和 武田孝史 佐野登
清水 狂言 佐藤友彦 井上靖浩 後見 佐藤融 宝生英雄 宝生英照 山内崇生
藤戸 能 寺井良雄 工藤和哉 高井松男 則久英志 笠福井啓次郎 鉱一 鹿取希世 間 井上祐一 後見 宝生英照 武田孝史 地 門脇達祐 竹内良伯 久野幸三 山内崇生 佐野 辰巳満次郎 水上輝和 佐野登
附祝言
主催 衣斐正宜後援会
事務所 名古屋市中村区名駅3—26—26 平松昌彦方 TEL052-586-1120
〔入場料〕一般 五千円 学生 二千円

野村広二氏逝去

8月12日 告別式執行

能楽評論家・野村広二氏はかねて病気療養中のところ八月十日午後十時三十分、心不全のため逝去された。享年八十二歳。

葬儀は八月十二日午後一時から北区若葉通・愛昇殿で行われ、霊前には能楽界から金剛流宗家金剛巌氏、狂言共同社の供花が飾られ、会葬者の焼香がつづき、金剛宗家、日本放送協会などから弔電が寄せられた。喪主は妻・野村浅子さん。

故野村氏は大正三年生れ、日本放送協会（NHK）の芸能関係で多年にわたり活躍、雑誌「金剛」、名古屋市文化振興事業団発行の「なごや文化情報」に寄稿。本紙「能楽の友」紙に毎月「紅梅記」として演能紹介、批評を寄せ、能楽評論家として知友が多かった。

谷田宗二朗 〒603 京都市北区衣笠街道町31—7 電話〇五二（四六三）四八七五番
森常好 東京都世田谷区世田谷一—47—12 電話〇三（三四二六）四八五三
高安流 岡同門会 清水利宣 高坂康弘 森晴蔵 北野三郎 塩田耕三 村山弘 中川湖舟 伊藤久蔵 谷口雅信
大倉源次郎 〒532 大阪市淀川区宮原五—五—八 ローズコーポニュー大阪七〇五 電話〇六（三九七）二三二三
冨耀会 柳原冨司忠 〒466 名古屋市昭和区滝川町47—147 サザンヒル八事2—703 電話（八三二）一〇三一番
小鼓教室 名古屋市中区栄 朝日神社内（丸善前）
呉竹会 筧鉱一
吉田定男
長生会 鬼頭喜太郎 好信 愛知県中島郡平和町城西 電話（〇五六九）㊊一九六〇番
助川龍夫 助川治 〒453 名古屋市中村区下米野町3—27 電話（〇五二）四五一—九六一一
茂山千作 千五郎 真吾 千三郎 正邦
茂山忠三郎 〒606 京都市左京区北白川大堂町47—1 電話〇七五（七〇一）二〇一一番
能楽講座 能と狂言に親しむ会 梅田邦久 藤田六郎兵衛
朝日カルチャーセンター 囃子教室 小鼓 後藤孝一郎 丸栄スカイル10階
葵心庵舞台 尾張旭市東大道町原田二四九三ノ二 若杉ビル（旭市役所南） 電話〇五六一五—二三四六番 能舞台 電話〇五六一五—〇六九八
能楽写真 ウシマド写真工房 〒602 京都市上京区北野上七軒 TELO五二—四六二—一三四一番 FAXO五二—四六二—五七七二番
ビデオ撮影 西川企画 〒451 名古屋市西区名駅2—20—3 輪の内荘 小椋方 電話（〇五二）五七一—五八一六 〒500 岐阜市北野町20—2 電話〇五八—二六三—九八六九番
栄能楽舞台 名古屋市中区栄五—六—四 電話（二六二）一一八三番
楽諷庵舞台 名古屋市昭和区滝川町四七—八三 電話（八三二）七〇〇一番
彰諷閣 名古屋市天白区植田西二—八〇二—二 電話（〇五二）八〇五—三三〇一 連絡先 名古屋市緑区鳴海町有松裏40—9 電話（〇五二）六二一—四二三八
能楽殿喫茶室 グリル 喫茶 城 猪口節子 連絡先 〇五二—九三七—〇一八二

〔訂正〕七月号掲載の暑中広告のうち、金春欣三氏の住所、電話を次のように訂正します。（〒630）奈良市法蓮南町一四 電話〇七四二—二二—七九二九番

〔おことわり〕暑中広告の掲載は紙面の都合にて勝手ながら七月号、八月号に分けて掲載させて頂きました。順不同と併せ何卒ご理解賜りますようおねがい申上げます。

明治九年十一月十五日、和泉流第十五世山脇和泉元賀は、六十五歳で上総島町の寓居で没した。遺子鉄太郎は伊津美を継承し、後和泉流第十六世山脇和泉元清を名乗ることになる。

翌明治十年七月二十五日には、四世早川幸八が七十六歳で日之出町の家で没している。娘ばかりで男子がなく、早川家はここに絶家となることとなった。

さらに翌十一年三月二十四日には、山脇藤左衛門家第九世山脇得平が没している。家督を相続した遺子録太郎は山脇録弥を名乗り、しばらくは舞台を勤めているが結局は廃業してしまう。

明治九年からわずか数年の間に相次いで師家の異変に遭遇することとなり、名古屋狂言界は大きな転機を迎えることとなった。

明治十二年十月十二日に金剛寺において四代目早川幸八の追善会が行われた。

早川追善　狂言組
重喜　岡本吉次郎
魚説法　神戸般次郎
悪坊　夏目儀平
薩摩守　山本吉五郎
不腹立　三橋政太郎
骨皮　田中庄太郎
（休憩）
蛸　勝野久次郎
飛越　井上菊次郎
宗八　水野代二郎
呂蓮　河村鍵三郎
宗論　松原八太郎
鈴木孫十郎
瓢神　角淵新太郎
いずれも追善にちなんだ曲ばかりがずらりと並べられ、会場も常寺を借りての催しで、或いは内輪の追善供養の形だったのかもしれない。残念ながらシテの名前しか判明しないが、主な出演者は先の明治九年五月に行われた狂言会（本紙七月号に掲載）に参加したメンバーであり、得平門の角淵や又三郎門の河村らも参加しており、幸八追善に各家、流派を超えて参集したことがうかがわれる。しかしながらここにはどうやら山脇和泉系の人の名は見出されないようなのである。

早川追善からわずか一ヵ月後、同年十一月六日に、今度は山脇和泉元賀の三周忌の追善会が大野舞台で開催され、狂言十三番と仕舞八番が演じられた。

『卯（明治十二年）十一月六日於大野宅先代伊津美追善』

入間川　伊藤昇三郎
井杭　筒井定之丞
見諸　荒川孫吉
盆山　尾木鍬太郎
法師母　広瀬健次郎
武悪　飯沼定九郎
瓢神　筒井秀之助
中入
仕舞
西王母　桜井保太郎
誓願寺　林治九郎
八嶋　中島雅吉
経政　大野彦七郎
山姥　猪原吉次郎
源氏供養　古春増五郎
熊坂　伊藤太郎一
百万　林増次郎
右流左止　伊藤昇三郎
唐り・替之形　山脇伊津美
鍛　筒井安平次
伯母酒　筒井秀之助
不須　筒井安平次
瓜盗人　能里庄作
棒縛　水野金次郎
通円　山脇伊津美

ここでもシテのみしか判明しないが、前記早川幸八の追善会に出演していたメンバーは一人として見出せない。また明治九年五月の狂言会のメンバーも見出されないのである。

わずか一ヵ月の間に二つの追善会が行われた。ともに尾張藩以来の名古屋狂言界を支え、明治維新の動乱にもめげず、力を合わせて伝統の灯を守り続けた巨星であった。しかも元賀の妻は幸八の妹おていであり、二人は義理の兄弟、つまり後継宗家の伊津美（元清）にとっては父と母方の叔父にあたっていた。そして二人のもとには多くの弟子が育ちつつあった。その後継、弟子たちがそれぞれの師の追善を別々に行う結果となったものである。

後者は少なくとも和泉流宗家の追善であった。遠隔地の又三郎はともかく、流儀に携わる者なら当然参集してしかるべき筋の会であろうが、これまであらゆる催しを通じて当地の狂言会常連の出演者であった井上菊次郎、田中庄太郎、磯部定治らを始めとして、後年共同社を結成するお歴々の名前が見られないのはどうしたことであろうか。或いはお手伝いに出勤、アドぐらいは勤めているかとも考えられるが、詳しい事情はわからない。また元賀追善会に出演している人で後年共同社結成に参加した人はいないのである。一体この人々はどうなったのであろうか。

この山脇元賀追善会を主催したのは、元賀没後に山脇伊津美を襲名した元清であった。元清はこの後明治十四年二月五日に、代々住み慣れた名古屋の地を離れ、東京へ移住することとなる。

（筆者は和泉流狂言方）

名古屋狂言史余話（七）

佐藤友彦

平成7年8月・9月放送

〔8月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）

27日（日）観世流「小鍛冶」　山中義滋
観世流「経正」　長山礼三郎

◈NHK教育テレビ
日本の伝統芸能　能楽鑑賞入門Ⅱ
能「道成寺」（再）
8月26日（土）午後9時30分～10時

8月27日（日）午後3時～4時
大阪城薪能「渇水龍女」

〔9月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）

3日（日）「雨月」～宝生流～　高橋章
10日（日）「楢垣」①～観世流～　橋岡久馬
17日（日）「楢垣」②～観世流～　橋岡久馬
24日（日）「浮舟」～金剛流～　金剛巌

第三十七回 大衆能

九月三日（日）
熱田神宮能楽殿

一部（午前十時半開演）

里女　須部甫
天女　加賀敏彦
祖父江修一

観世流能　加茂
杉江元
高安勝久
辻本正樹
佐藤友彦
間　河村総一郎
後藤孝一郎
後見　生駒里翠
近藤幸江
地謡　黒田博
松八神孝充
加藤幸保
彦親
古橋泉久稲生
田嘉徹芳
正雄
邦夫
大野好信
鬼頭誠
金剛流仕舞　放下僧　吉川周子
小歌　地謡　小林竹市
菊百
川々
高橋幸忠
高島康司
梅三
松山良一
観世流仕舞　葵上　中川雅章
地謡　高橋瞭一
松山幸邦
幸親久一

名古屋観世会定式能（四回）

九月十日（日）十二時半開演
熱田神宮能楽殿

能　梅若盛義組
部　高安勝久
間　佐藤融
吉田定男
久田舜一郎
鹿取希世
後見　久田徹二
梅田邦久
地謡　松山幸親
加藤嘉勇
高橋保彦
瞭一
今村
中川雅章
吉井順一
武田邦弘
井上祐一
佐藤友彦
後見　井上松次郎

狂言　悪太郎　井上礼之助
仕舞　放下僧　清沢一政
小歌　中川雅章
地謡　松山幸親
古橋正邦
佛原　久田徹二
錦木　加賀敏彦
祖父江修一

附祝言
（当日券　三千円）
主催　能楽協会名古屋支部
後援　愛知県・名古屋市

喜多流能　紅葉狩
杉江元
橋本宰
西村信広
長田駿郎
和谷衡市
吉田定男
後藤嘉津幸
助川竜夫
竹市学
関　女末社　佐藤大野鍋弘之
後見　高林白牛口二
井上嘉子
地謡　伊藤英毅
戸沢和雄
中村正
森田克彦
狩野丹秀
大島政允
森彬
松井健
（終了　五時半頃）

和泉流狂言　菊の花
野村又三郎
松田高義
後見　野村信行

金春流仕舞　松虫
小島芳樹
地謡　伊藤雄二
広瀬雅弘
加藤正嗣
鈴木寿
キリ

観世流仕舞　歌占
古橋正邦
地謡　本田清沢
一政
須部
久田徹二
甫
キリ

名古屋観世九皐会定例能（納会）

九月十六日（土）午後一時始
熱田神宮能楽殿

舞囃子　葛城　加藤保彦
笠
柳原冨司忠
鬼頭鉱一
鹿取希世
好信
連吟　鐘ノ鍛　外山圭一
青木武弘
駒瀬直也
観世喜之

能　松風　飯冨雅介
河村総一郎
福井啓次郎
藤田六郎兵衛
戯ノ舞
間　井上礼之助
後見　観世喜正
五木田武計
地謡　小島英明
佐久間二郎
古川充
高橋瞭一
小林喜久
五木田三郎
中所宣夫

狂言　柿山伏　佐藤融
後見　井上祐一
佐藤友彦
通　小町　中所宣夫
仕舞花　籠クセ　高橋瞭一
道明寺　地謡　小島英明
古川充
駒瀬直也
五木田武計
佐久間二郎

能　項羽　高安勝久
観世喜正
高木美智子
間　井上靖浩
後見　外山圭一
観世喜之
地謡　小島英明
佐久間二郎
古川充
高橋瞭一
小林喜久
中所宣夫
五木田三郎
駒瀬直也
柳原冨司忠
鹿取希世
鬼頭好信

主催　名古屋観世九皐会
〒457　名古市屋南区元塩町一一一一七
（加藤保彦方）
TEL〇五二（六一一）三六五九

（要会員券）
当日券　五千円

和泉流狂言　鈍根草　井上祐一
井上靖浩
後見　井上松次郎

宝生流能　阿漕　飯冨雅介
鉱一
福井啓次郎
鬼頭喜太郎
鹿取希世
衣裳　正宜
間　野村信行
後見　竹内澄子
玉井博祐
地謡　沢村雅利
平田正文
佐久野幸三
耕司
鬼頭嘉勇
辰巳
水上坪和孝
稲川寿一
（終了　二時頃）

附祝言
（当日券　三千円）

二部（午後二時半開演）

観世流能　自然居士　高安勝久
飯冨雅介
柳原冨司忠
河村真之介
大野誠
高橋瞭一
子方　秋山宣仁
間　野村信行
後見　今沢美和
前野郁子
地謡　高島良一
本田勲
今村嘉勇
加賀敏彦
清沢一政
中川雅章
梅田邦久
祖父江修一
キリ

金春流仕舞　松虫　小島芳樹
地謡　伊藤雄二
広瀬雅弘
加藤正嗣
鈴木寿
キリ

観世流仕舞　歌占　古橋正邦
地謡　本田清沢
一政
須部
久田徹二
甫
キリ

和泉流狂言　菊の花　野村又三郎
松田高義
後見　野村信行
和谷衡市
長田駿郎

喜多流能　紅葉狩　杉江元
橋本宰
西村信広
長田駿郎
吉田定男
後藤嘉津幸
助川竜夫
竹市学
関　女末社　佐藤大野鍋弘之
後見　高林白牛口二
井上嘉子
地謡　伊藤英毅
戸沢和雄
中村正
森田克彦
狩野丹秀
大島政允
森彬
松井健
（終了　五時半頃）

附祝言
（当日券　三千円）
主催　能楽協会名古屋支部
後援　愛知県・名古屋市

名古屋観世会定式能（四回）

九月十日（日）十二時半開演
熱田神宮能楽殿

能　梅若盛義組
部　高安勝久
間　佐藤融
吉田定男
久田舜一郎
鹿取希世
後見　久田徹二
梅田邦久
地謡　松山幸親
加藤嘉勇
高橋保彦
瞭一
今村
中川雅章
吉井順一
武田邦弘
井上祐一
佐藤友彦
後見　井上松次郎

狂言　悪太郎　井上礼之助
仕舞　放下僧　清沢一政
小歌　中川雅章
地謡　松山幸親
古橋正邦
佛原　久田徹二
錦木　加賀敏彦
祖父江修一

附祝言
（当日券　三千円）
主催　能楽協会名古屋支部
後援　愛知県・名古屋市

狂言鳳の会ジョイント
人形劇団むすび座公演

九月十五日（金）午前の部十時三十分始
午後の部午後二時始
熱田神宮能楽殿

人形芝居　わわしい女
出演　永草友士
安藤勝司
高田良子
永井聖子
八幡美佳

新作狂言　お用の尼
坊主　佐藤友彦
尼　井上祐一

入場料　一般前売四千円
（当日四千五百円）
主催　鳳の会
チケット取扱い　チケットぴあ、市内各プレイガイド
問い合わせ　052・852・1111
名古屋女子大学・林研究室

能　融　関根祥六
指吸雅之助
柳原冨司忠
鬼頭喜太郎
藤田六郎兵衛
クツロギ
間　井上靖浩
後見　小島一英
梅若盛義
地謡　高島良一
勲
本田武田
須部邦弘
清沢甫
梅田
一政
古橋
祖父江修一
正邦
邦久
（終了　四時頃）

附祝言
（要会員券）
当日券　八千円（自由席）
主催　名古屋観世会

名古屋宝生会定式能（第339期 第3回）

九月十七日（日）午後一時始
熱田神宮能楽殿

能 忠度
竹内澄子
番組
間 井上礼之助
後見 衣斐正宜 稲川寿一 地謡 村上茂 杉浦雖雄 石原勝成 加賀山嶽治 鬼頭嘉男 馬場富四夫 佐藤耕司
飯富雅介 橋本宰 河村総一郎 井上良治 鹿取希世

能 三井寺
鈴木慶祐 高橋章
間 佐藤融 佐藤友彦
後見 玉井博祐 足立知子 地謡 安江良郎 中野恵生 中島静男 竹内良伯 鬼頭嘉男 広島克栄 稲川寿一
高安勝久 辻本正樹 飯富雅介 福井啓次郎 筧鉱一 藤田六郎兵衛

狂言 梟山伏
大野弘之
後見 井上翊治 小柳保志 井上松次郎

能 鶴亀
仕舞 桜川 稲川寿一 広島克栄 地謡 沢栗幸子 倉本雅 戸田和 永井喜美

能 融
辰巳満次郎
間 井上祐一
後見 辰巳孝 佐藤耕司 地謡 石森智幸 大松福三郎 高橋章 馬場富四夫 広島克栄 衣斐正宜
杉江元 河村真之介 柳原富司忠 鬼頭喜太郎 大野誠

附祝言

主催 名古屋宝生会
事務所 名古屋市天白区島田二―三〇一 島田橋住宅二―一三一〇 佐藤耕司方
当日券 六千円
学生券 二千五百円

鳳鳴会大会番組

九月二十三日（秋分の日）午前十時始
熱田神宮能楽殿

素謡 神歌 木下義国 千才武田文志

素謡 老松 伊藤義郎 矢野義章 木本仁之
井筒 渡辺光子 武田宗和
砧 三村恵子 村上郁子 山森幸男
定家 山下恵美子 長谷川京子
阿漕 佐藤正弘 松井弘
仕舞 鶴亀 木本仁之 網之殿 山森幸男

素謡 当麻 月キリ 花 笹浦さおり
祖父江修一 笹山忠 村上清
道成寺 大坪重遠 武田志房 松木千俊
間 佐藤友彦 立衆 藤谷音弥 池田章文 田中義仲 下川宣長

能 紅葉狩
村瀬純
間 佐藤融 井上祐一
後見 小島一英 武田文志 武田志房 高橋眼一 武田宗和 地謡 清沢一政 祖父江修一 中川雅章 岡久広 藤井完治 下川宣長 村瀬提 木本仁之 山森幸男 木下義国 山崎哲生 柳原富司忠 助川竜夫 藤田六郎兵衛

舞子松風 石井鎧子
戯之舞
砧 前 浅井一元 河村総一郎 柳原富司忠 藤田六郎兵衛
野宮 岡本歳子 高野彰 柳原富司忠 藤田六郎兵衛
拝留
求塚 山本一 河村総一郎 柳原富司忠 藤田六郎兵衛
養老 吉田明 高野彰 助川竜夫 柳原富司忠 藤田六郎兵衛
水波之伝

番外 仕舞 笠之段 武田文志
鉄輪 武田志房

（終了予定 午後五時半）

附祝言

◎入場無料
◎御来場歓迎

主催 鳳鳴会
幹事 武田志房
松井弘
豊明市間米町敷田一二二五―一〇一
電話〈〇五六二〉九二―〇二三五

◆水無月の舞台から（その二）◆

「能にしたしむ会」「観世会」「宝生会」

竹尾邦太郎

「清水」　茶の水汲みに遣らされた太郎冠者・忠三郎、主あきらの頤使に抗い、鬼が出たと桶を放り出して逃げ帰る罷業・秘蔵の桶とて取り戻すと言う主に、先廻りして鬼に扮し脅す太郎冠者。怯える主の弱味に付け込み、待遇改善を要求する辺りの、忠三郎の険の無いまろやかな物言いは、蚊帳を吊れ、の冷酒を飲ませ、のといった細事だけに如何にもほの〳〵とした味。一方あきらの、態勢立て直す機を窺いつつも、どこか高を括ったところもある風情も上々。（23分）

「姨捨」　ワキ盛興信夫ノ何某・閑、京からの帰途は折しも中秋、同行のワキツレ欣哉・謙吉と寄り道して更科姨捨山の「月を眺め故郷の物語に」しようの気持は、都人の、有名とは云え辺土へ観月、の風流とは自ずからその趣を異にする。されば登場楽も、深奥の重習で時に使う置鼓でなく次第の常である。道行は帰国の開放感の賑やか、着詞に笠は後見座に置き正中、「我この山に上りてみれば、万里の空目前にして」の一大パノラマ風景は、月の上る期待に心の弾みも思われ、幕内深くのシテの、たしなめるかの呼掛もさもありなんで面白い。シテ慶次郎は前を殊更秘曲ぶらず、襟は白浅黄で面深井・白摺箔（金露芝文様）・無紅段秋草文様唐織は極く普通の里女。初同（九郎右衛門・邦久・暁夫・清司ら）へ松も桂も、と舞台に入り、へ色づくか、と常座に立つと、へ薄霧も立ち渡り、と右ウケ茫洋と見て風を聞き、へ寂しき山の景色、と三足退くところに心の在り様をみせる。問答から中入も只管静か、地一杯に聞き消えてゆく沁々とした淋しい情調を送り笛（六郎兵衛）が独き立てる。アイ居語は千作、妻の譫言で捨てた伯母が、清光の中で石塊となっているのを見、悔悟して出家する男のことを、篤と語って襟を正させる思いである。

後シテは一声で出る。面姥・姥髪・襟白二・着付白摺箔・極淡黄色大口・生成リ（晒さないままの）地芒文様長絹の姿は、着付の、さりげない花菱亀甲文様に僅かな華やぎも見せるが、浮世のしがらみを払拭し、繕うものとては月光の微粒子、といった黄味である。月を愛でる清興も、旅人と居れば言わでもがなの事ついロをつき、へ盛りふけたる女郎花の、と老女の歳月の歩みを現前するかに十数歩を運び、また姨捨山に、へ出でて、とワキに向けば、月に顔を曝すも恥かし、と袖で面隠すのも忍びない。浄土を言うクセ、それにつけても昔恋し、と月光の中に舞う序ノ舞はあくまで慎ましく、常座先下居の型処、左手の扇に月を映して見、更に右ウケ暫時、霄月ノ型も沁々と清寂。舞上げの直前は扇で面を蔽い暫しの佇立、所謂空立（そらだち）で位を戻すか。キリは地との掛合に、孤愁を乱されたとは言え旅人との別離の哀感と懐旧、へ今宵の秋風身に沁々と、と面クモリ扇を胸に当てるところ、又、へ恋しきは昔、偲ばしきは、と扇を胸から離すと、テラシて茫乎と虚空を見るところ、心持充分。帰る旅人を、佇立で見送り、遠離ると地らずワキ正に出、幕に消えると大小前、へ独り捨てられて、と慨嘆し、へ老女が、と力無く下居するが、両袖に持つ扇は殆に見え、両手に握りしめて哀しみに耐えるかだった。切地一杯を聞き、凝然と居て一分余、立つと囃子がアシラヒ残り留になった。

清浄無垢な世界に居た老女が、観月の旅人に一夜清問を乱されはしたが、再び寂び〳〵とした払暁の中に溶けこんでゆくところ、無常観の哲理を垣間見せた求道者慶次郎の厳しいドラマツルギーだった。囃子は六郎兵衛・源次郎・総一郎・光長、後見を鈴之丞・欣司・道喜。（2時間25分・6月10日・第21回能にしたしむ会・京都観世会館）

「鞘法師」　シテ四郎、ホームレスではあるが何処となく小さっぱりとして品も感じられる、といった俊徳丸で、へ深き思ひを人や知る、とは言い条、盲目の深刻味は薄く、坦坦と運命を甘受している趣。そこには浄土信仰のバックボーンがあり、例えば日想観に東門を拝んで「東門とは」、とワキ弥三郎に咎められると、すっと立って語気強く、「極楽の東門に向ふは僻事か」、と反駁するなど、拠り所の信仰に帰依の深さもみせる。へ満目青山は心にあり、と扇を胸に軽く二度当てたが、盲目前の見慣れた景色を反芻する心。長柄の橋の貴賤の人に行き逢う型処も盲人の控え目、内輪にとった動きがよかった。ワキは謡言には無縁とみえる押し出し、年齢もあって脂ぎらない枯れた老人が好ましいが、こればかりは無いものねだりと言うもの。（1時間34分）

「畳塗」　シテ松次郎。田舎大名の野卑は、昂然と面を上げた名宜が欲しいが、伏目がちなところは馴染んだ女・祐一と別れる屈託か。一方、女は莫連、空泣きに同情を買おうの魂胆である。察した太郎冠者・靖浩は涙のからくり知って水を墨に替える。色香に弱い大名もハッと気付くが、直ぐには明かさず、女に鏡を遣って黒塗りの面を自分の目で確めさせる野暮加減。しかし、結果や如何に、と固唾をのむ松次郎の悪戯顔は憎めない。父祖三代の鏡演に靖浩の元気溌剌もよい。（13分）

「船弁慶・前後ノ替」　シテ喜之、面若女・襟白二・白摺箔（菊ニ流水文）・赤萌黄段菊文様唐織、物着に金色烏帽子。君の門出の一さしの舞は、別離の辛さに居た堪れぬかに舞の途中、一ノ松に抜けて勾欄に寄ると、子方（松山晃之君、可憐）に背を向けて右ウケ、ひっそり沈んで摘んだ扇を静かに抱いてシオッた。笛（六郎兵衛）がシテの動悸を伝えるように切なく、哀憐の情一入だった。

後場は半幕で幕内の床几のシテを見せ、シテが子方を見込んで名宜ると一旦幕を下ろし、次に幕を上げると、手掛りの早笛で三ノ松に出たシテは、頭を取ってから亦幕に退き、再度幕を上げると、弾みがついたシテは疾駆して一気に常座、へ声をしるべに出船の、の返シにはスミ近く、疾風迅雷のスピード感の壮快は長刀捌きもきびきびと鮮烈。ワキ勝久も気力充実してよくシテに拮抗し、キリは、へまた引く汐に、と走り込んで残り留になった。金色波涛文半切・白地金色立涌ニ波ノ丸文袷狩衣（袖折込）の装束もきらびやかで曲趣を盛り上げた。（1時間17分・6月11日・観世会）

「西行桜」　シテ英照、西行庵の老桜ノ精は風折・白垂・淡鶯色大口・黄土色単狩衣の淡い出立、面は舞尉か。「あたら桜の咎にはありけれ」をめぐるワキ西行・勝久との問答に気骨をみて、両者の阿吽の呼吸も見事。花の名所尽しのクセは少々重苦しく、痴れるような花の温気に地（孝・富四夫ら）も陶酔するか、舞クセも粘いような感じだったが序ノ舞は老桜の骨太な風格を見せる。しかし、翁寂びるという枯淡の味が出るのはこれからだろう。キリは、へ白むは花の、とスミから山を眺め、へ花の枕の、と左袖を内から返して手枕をするように下居するのが良い型だった。なおワキはもと北面の武士とは言え出家遁世の世捨人西行、武張った大口でなく着流が相応しいのではなかろうか。（1時間24分）

「長光」　アド弘之は東国方の田舎者、上方へ太刀を届ける旁賑わう市に寄れば、ホクソ頭巾のシテすっぱ靖浩が取り付いて太刀をせしめようとする。素知らぬ面で下緒を執り、俺のだ、と広言して憚らず、証拠を摑まれる迄は白を切る図々しさは罪悪感の欠片も無いオウムの若僧に似る。羽織の下の盗品の数々が見つかって逃げ出すシテには、「さまあみろ」と浴びせかけたい位だった。愚直なアドとは好対照。目代は松次郎、最後をきちんと仕切ってほっとした。因に長光とは現存の国宝の太刀の銘。室町期に六百貫の値が付き、大般若経六百巻に通じたため「大般若長光」と呼ばれる。（21分）

「三山」　観世流は先年復曲したが、宝生流は現行曲。当地では昭和42年（綦二）・54年（雅）・63年（高橋章）の上演がある。

颯然独り大和路を尋ねるワキ良忍・雅介、アイ所ノ者・祐一に通り一遍の三山の説明を聞くが、前シテ里女・萌の話は曰く付きで、「猶々三山の謂れ委しく」と興を煽り立てる程のもの。里女は正体を仄めかし、三角関係の男の変心を訴えて消える。後場は、前シテの唐織を脱掛け、増の面が女増髪に変わる怖さで、萌の、妬みに狂うカケリは強烈である。ツレ花の桜子（充栄）の濃艶に刺戟され、月の桂子の清婉が弁えもなく、持枝を振り上げてへ雪と散れ桜子、と打ち合うのも哀切、キリの和解もよそ〳〵しく思えた。（1時間14分）

祝言「乗船」　和英君。早笛の登場から舞台狭しの流刺の働キは赤頭の下の利かん気の直面の面構えもよく、面切るタイミング、拍子のリズム感、全身をバネに袖返シ、力一杯の留拍子まで当地初シテの龍神を立派に勤めた。地頭英照、後見英雄の三代のめでたさ。（13分・6月18日・宝生会）

眼とメガネを考える
2F眼科クリニック
1Fメガネ
スギウラ
岡崎・康生通東
☎(0564)21-1072㈹

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18-18
（郵便番号　464）
電　話（052）731―7984
振替口座 00800-6-36393

購読料　1年1100円
郵送の場合　1年1800円
一　部　100円

岡崎城二の丸能
10月13日　能「松風」上演

壺泉会主催、岡崎市、岡崎市教育委員会の後援により、十月十三日（金）岡崎城二の丸能楽堂で能「松風」（戯之舞）、狂言「雁大名」が上演される。

午後六時開演。演目次のとおり。

狂言「雁大名」（大名・佐藤友彦、太郎冠者・佐藤融、亭主・井上礼之助）

解説「松風」の能　八神孝充

能「松風」戯之舞（シテ泉流夫、ツレ清沢一政、ワキ飯冨雅介、ヅイ・井上祐一、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・後藤孝一郎、大鼓・河村真之介、後見・吉井順一、近藤幸江、地謡・梅田邦久、久田徹二、山本正人、鶴克彦、今村嘉勇、松山幸親、八神孝充、黒田博）

入場料四千円、学生千五百円。入場券取り扱い＝岡崎ショッピングセンター、クレオプレイガイド電話〇五六四・二三・三八三八、岡崎市観光協会直営店公園・電話〇五六四・二四・四七七二。

二の丸能楽堂・電話〇五六四・二五・五五一六。

なお十三日雨天の場合は十六日（月）午後六時開演。

ころも能
狂言鑑賞会

豊田市・豊田市教育委員会主催の「ころも能・狂言鑑賞会」が十月二十日（金）豊田市民文化会館で催される。

演能は「杜若」恋之舞（シテ武田志勇）狂言「寝音曲」（シテ野村万作）。

開演午後六時三十分、入場料三千円（全自由席）豊田市コンサートホール準備室（電話〇五六五・三五・八二〇〇）豊田市民文化会館、豊田市中央公民館でチケット取扱い。財団法人豊田文化協会協力。

野村万蔵家継承記念
狂言　万之丞の会

名古屋・京都・大阪で

狂言方・野村耕介氏は、ことし一月に五世・万之丞を襲名し野村万蔵家の八代目当主を継承、これを記念して、名古屋、京都、大阪で万之丞の会を開催する。

日程は次のとおり。

〔名古屋〕十月五日（木）二時始、熱田能楽殿（番組①面掲載）

〔京都〕十月六日（金）午後六時始、京都観世会館。

〔大阪〕十月七日（土）午後二時開演、午後六時開演の二回上演。

各会場とも、舞囃子「養老」水波之伝、狂言「蝸牛」脇万・宝生欣哉（名古屋・京都・大阪）福王茂十郎（大阪公演）の語り。万之丞が自作自演する新作狂言「子ほめ」スペクタクル狂言「唐人相撲」が上演される。

S席（全席指定席）一万円、A席（全席指定席）七千円、B席（全席指定席）五千円、C席（補助・自由席）三千円。

チケット申込み、問い合わせ＝名古屋能楽鑑賞会（電話〇五二・七二二・四〇〇〇）

岐阜誠交会で
能「道成寺」

10月22日　熱田能楽殿

岐阜誠交会（奥普助師主宰）はことし発会四十五年を迎え、きたる十月二十二日（日）熱田神宮能楽殿で秋の大会を開催する。

岐阜誠交会は、岐阜県に本格的な能舞台がない関係で、平成六年より大会会場を名古屋の熱田神宮能楽殿に移して演能を行っており今回は、素人能として大曲「道成寺」（シテ岡田信道）を上演、さらに能「海士」（シテ高木鴻子）、素謡、舞囃子、仕舞など二十数番、観世鉄之丞、観世栄夫の諸師が来演する。午前九時三十分始。

（番組③面掲載）

◆演能カレンダー◆（熱田神宮能楽殿）

〔9月〕
23日（土）鳳鳴会大会（来場歓迎）
24日（日）和泉会（来場歓迎）（番組①面）
30日（土）中日文化センター発表会（来場歓迎）

〔10月〕
1日（日）車楽会大会（来場歓迎）（番組①面）
5日（木）野村万之丞の会（有料）（番組①面）
7日（土）青陽会定式能（有料）（番組②面）
8日（日）幸輪会大会（来場歓迎）（番組②面）
10日（祝）武田謡楽会大会（来場歓迎）（番組③面）
15日（日）邦謡会大会（来場歓迎）（番組③面）
21日（土）猶恵会大会（来場歓迎）（番組③面）
22日（日）誠交会大会（来場歓迎）（番組③面）
28日（土）名古屋能楽鑑賞会（有料）（番組④面）
29日（日）郁謡会大会（来場歓迎）（番組④面）

〔11月〕
3日（祝）幸友会秋の会（来場歓迎）
4日（土）萌輪会大会（来場歓迎）
5日（日）能楽協会素人会（来場歓迎）
12日（日）観世会定式能（有料）
18日（土）観修会大会（来場歓迎）
19日（日）宝生会定式能（有料）
23日（祝）和泉会（有料）
25日（土）清輪会（来場歓迎）
26日（日）久田観正会（来場歓迎）

〔12月〕
2日（土）幽花会（来場歓迎）
3日（日）歳末助け合い協賛能（有料）
9日（土）青燿会（来場歓迎）
10日（日）壺泉会能（有料）
16日（土）久田徹二能リサイタル（来場歓迎）
24日（日）能楽殿創立40周年記念乱能（有料）

（演能変更の節はご了解下さい）

和泉流狂言大会

九月二十四日（日）十一時始
熱田神宮能楽殿

狂言組

墨塗　大名　増山幸司　太郎冠者　鹿島俊裕　女　佐藤融
舎弟　弟　林泰礼　兄　森智一　教え手　佐藤友彦
舟ふな　太郎冠者　増田昭典　主　人木村進
樋の酒　太郎冠者　二村敏勝　次郎冠者　藤田茂樹　主　人今枝靖雄
語　朝比奈　平野豊
薩摩守　船頭　新発意　金子丹辺　路江文彦　茶屋　鷲見政行
盆山　盗人　能登香奈恵　何某　鹿島俊裕
痺り　太郎冠者　石田喜子　主人　井上松次郎
鏡男　田舎者　石黒生子　女　鏡屋　安原美枝　藤田茂樹
附子　太郎冠者　矢田三千代　次郎冠者　角岡淑子　主人　小野豊子

小舞　掛川　長谷川寿美子
小舞　宇治の晒　恒吉幸子

雁礫　大名　中北宇多子　通行人　佐藤友彦　目代　佐藤融
空腕　太郎冠者　富田智之　主人　鷲見政行
舟ふな　太郎冠者　小柳悠志　主人　井上靖浩
伯養　伯養　小野豊子　勾当　村上錦子　僧　那増山幸司
三人片輪　博奕打　林朝子　博奕打　安原美枝　博奕打　足立米子　有徳人　能登香奈恵

（終演・十六時四〇分）

名古屋皐楽会秋季大会

十月一日（日）午前十一時始
熱田神宮能楽殿

〔御来場歓迎〕

主催　狂言共同社

番組

番外能　経　外山圭一　正　飯冨雅介　笠鉱一　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛　後見　小林喜久　観世喜之　地謡　佐久間二郎　古川充　駒瀬直也　武弘　加藤晾一　高橋保彦　青木　観世喜正　中所宜夫

舞囃子　田村諸隈良吉　河村総一郎　古川充　駒瀬直也　武弘　加藤晾一　高橋保彦　柳原富司忠　大野誠　中所宜夫

舞囃子　山姥　野田道子　笠鉱一　後藤孝一郎　助川龍夫　大野誠

素謡　野宮　岩井比佐　観世喜正

能　卒都婆小町　橋本とも　福王茂十郎　一度之次第　広谷和夫　河村総一郎　柳原富司忠　藤田六郎兵衛

野村万蔵家継承記念
第一回　名古屋・万之丞の会

十月五日（木）午後二時開演
熱田神宮能楽殿

番組

舞囃子　養老　梅田邦久　河村総一郎　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛

狂言　蝸牛　水波之伝　宝生欣哉　野村万之丞　井上礼之助　野村又三郎　信行

語　野村万之丞・台本・演出

新作　子ほめ　野村万之丞　野村良介　野村史高

狂言新生作　唐人相撲　野村万蔵　野村万之丞　三宅右近　能村英丘　ほか

（終演予定　午後四時半）

S席（全席指定）一万円
A席（全席指定）七千円
B席（全席指定）五千円
C席（補助・自由席）三千円

共催　名古屋テレビ放送　名古屋万之丞の会　野村万蔵家狂言会

協力　名古屋能楽鑑賞会

チケットの申し込み　名古屋能楽鑑賞会（052・722・4000）

仕舞　清経　粟田純子　後見　五木田武計　古川充　観世喜之　地謡　加藤保彦　中所宜夫　高橋晾一　小林喜久　観世喜正　五木田三郎　駒瀬直也

舞囃子　梅枝　深見しげ　笠鉱一　福井啓次郎　藤田六郎兵衛　子方　佐久間二郎　姉和　駒瀬直也　義経　小林喜久

素謡　正尊　矢橋浩吉　観世喜之　起請文

舞囃子　砧　深見一枝　笠鉱一　深見しげ　助川龍夫　大野誠　トモ　古川充　ツレ　中所宜夫

素謡　景清　浅井銭二　五木田三郎　ツン　観世喜正　奈倉早苗

能　千手　福王茂十郎　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛　郢曲之舞　後見　駒瀬直也　観世喜之　地謡　佐久間二郎　古川充　加藤保彦　高橋晾一　中所宜夫　五木田三郎　五木田武計　小林喜久

番外仕舞　鷺　観世喜之　（素謡省略個所有）

終了　五時頃

〔御来場歓迎〕

主催　名古屋皐楽会　観世喜之

名古屋市南区元塩町一ノ一ノ一七（加藤保彦方）
電話〇五二（六一一）三六五九
主催事務所　名古屋観世九皐会

青雅日記 (164)

花の名

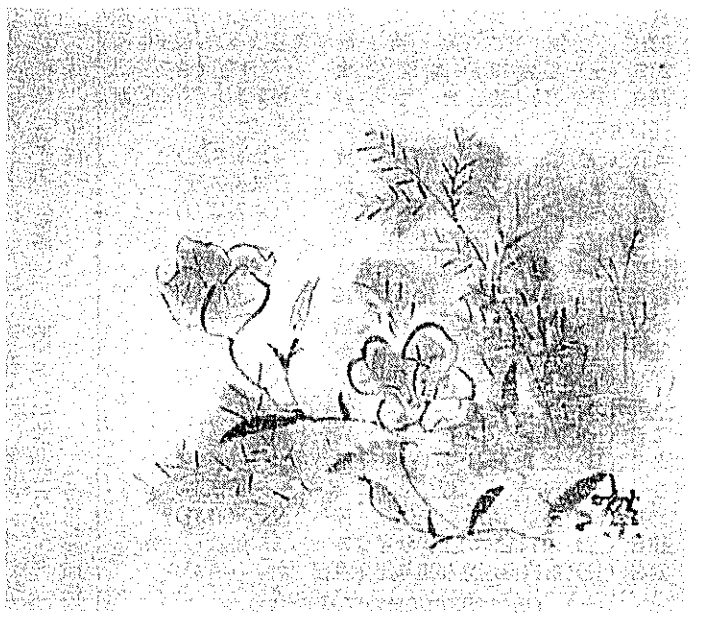
えと文 二井栄逸

さやさやと風にそよぐカゼグサによりそっていた夕化粧の花は、静かな夕暮になると、ほのかに淡紅色の花を開きます。

夕化粧はマツヨイグサの一種ですが、こぶりで美しい花です。

花の名前は誰がつけたのか知りませんが、よくその風情をあらわしているようです。

夕化粧も湯浴みの後のほのぼのとした香りがただようようですしカゼグサもさやさやと風に吹かれて生えている風情がよく表われています。いなかの路傍に生える雑草なのに、カゼグサを見ていると風の音を感じますし、「風と共に去りぬ」とか、「風の紋次郎」を、ふと連想したりします。



名古屋観衛会秋季大会

十月八日（日）午前十時始

名古屋市中区栄五丁目四―一四 栄能楽ビル四階（女子大小路）

栄能楽舞台 電話（〇五二）二六二―一一八三

番外仕舞 歌 占クセ 山本博通 戸苅佐知子 甘粕良枝

素謡 賀茂 太田和子 杉野仲江

通小町 砂 石黒鏡子 班 放下僧小唄 水野恵子 網之段 川久保彰礼

仕舞 高砂 川久保彰礼 鈴村とみ

素謡 忠度 神野勝之助 滝川一司

遊行柳 水谷圭子 東 北 河合温子

仕舞 西王母 胡蝶 湯浅知子 猩々 稲葉正信

素謡 定家 伊藤一枝 川瀬とよ子

披き 卒都婆小町 胥柳イツエ 山中節子 上遠野ひな子

義経 静 寺田雅美 姉和 森本哲郎

披き 正尊 起請文 伊藤健一郎 奥村泰広

独吟 邯鄲 砧 郭 原田一平 野 宮 豊住雅子

披き 山崎栄治 上遠野ひな子 駒形賀津子

素謡 恋重荷 伊藤秀子

葵上 中川芳子 足立奈々子 吉田琴子

番外仕舞 江口クセ 山本勝一 自然居士キリ 山本順之 今村一夫

附祝言 （終了予定 五時半頃）

主催 名古屋観衛会 名古屋正花会

〔御来場歓迎〕

忠三郎狂言会

東京・京都など四都市で

茂山忠三郎狂言会の本年度の催しは十月十二日、福岡を皮切りに東京、大阪、京都の四都市で行われる。

京都会場の演目は「船渡聟」（聟・茂山良暢、舅・善竹幸四郎、太郎冠者・茂山宗彦、船頭・茂山忠三郎）「文荷」（太郎冠者・茂山千之丞、次郎冠者・茂山あきら主・茂山千三郎）「彌宜山伏」（山伏・茂山忠三郎、彌宜・茂山千作、茶屋・茂山真吾、大黒・茂山良暢）

日程は次のとおり。

〔福岡〕十月十二日（木）午後六時四十五分開演、大濠公園能楽堂。

〔東京〕十月十八日（水）午後六時四十五分開演、千駄ケ谷・国立能楽堂。

〔大阪〕十一月十六日（木）午後六時三十分開演、大槻能楽堂。

〔京都〕十一月二十九日（木）午後六時三十分開演、観世会館。

正面指定席五千円、脇・中正面指定席四千五百円、脇・中正面席（当日指定）四千円（当日券四千五百円）

問い合わせ。予約は、忠三郎狂言会館事務局（京都市中京区木屋町二条下ル上樵木町四九一、電話〇七五・二三一―〇八五一）

片山博通33回忌 追善特別公演

10月8日 「道成寺」など

京都

片山定期能楽会主催による「片山博通三十三回忌・追善特別公演」は、九月十七日（日）京都観世会館で第一日として能「朝長」（梅田邦久）「卒都婆小町」（小林陵三）「恋重荷」（武田欣司）を上演。ひきつづき〔第二日〕として、きたる十月八日（日）京都観世会館で、能「景清」（橋保尚）「采女」美奈保之伝（分林弘一）「道成寺」（古橋正邦）ほか狂言仕舞が上演される。

入場料＝全館自由席・前売五千円（当日六千円、学生券三千円）。チケット取扱いは京都観世会館（電〇七五・七七一・六一一四）片山定期事務局（電〇七五・五六一・二九一一）

広田後援会能

10月1日 金剛能楽堂

京都

金剛流・広田後援会主催による「第八十五回、広田後援会能」は十月一日、金剛能楽堂で開催される。午後一時半始。

舞囃子「熊坂」（広田陛一）

狂言「鍋焼」（茂山千之丞、茂山千五郎、丸石やすし）

能「望月」（シテ広田幸稔、ツレ宇高通成、子方宇高徳成、ワキ谷田宗二朗、間・茂山あきら）

入場料前売四、五〇〇円（当日券五千円）広田後援会電話〇七五（七八一）一八八五、三四二一

平成7年9月・10月放送

〔9月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）

17日（日）「檜垣」②～観世流～ 橋岡久馬

24日（日）「浮舟」～金剛流～ 金剛巌

〔10月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）

1日（日）「半蔀」～観世流～ 浅見真州

8日（日）「女郎花」～宝生流～ 宝生英照

15日（日）「松風」～喜多流～ 喜多六平太

22日（日）「一角仙人」～観世流～ 大西信久

29日（日）「雨月」～宝生流～ 高橋章

（9月3日放送休止のため）

〔テレビ〕NHK教育テレビ

10月10日（火）午後3時～4時

「安芸の宮島 1400年祭の能」から

曲目未定

（10月4日に行われる記念能を収録）

青陽会定式能（第439回）

十月七日（土）十二時半始

熱田神宮能楽殿

能 清経 能組 今沢奚和 梅田邦久 飯冨雅介 河村総一郎 後藤嘉津幸 竹市学 替之型 後見 三村恵子 中川雅章 地謡 高島良一 松山幸親 須部甫 前野郁子

仕舞 道明寺 高橋暎一 清沢一政 地謡 加賀敏彦 武田正邦 清沢一政 馬場信至 加藤保彦 武田邦弘 加賀敏彦

松風 清沢一政 中川雅章 地謡

花筐 瀬戸三津子

狂言 井筒 高安勝久 福井啓次郎 河村真之介 鹿取希世 間 佐藤友彦

後見 生駒里翠 梅田邦久 地謡 玉木孝男 今村嘉勇 高橋暎一 近藤幸江 清沢一政 久田徹二 祖父江修一 井上祐一 佐藤靖浩 井上松次郎 後見 井上松次郎

狂言 苞山伏 井上祐一 佐藤靖浩 後見 井上松次郎

仕舞 岩船 鉄輪 三村恵子 前野郁子 地謡 今村嘉勇 近藤幸江 生駒里翠 瀬戸三津子 星野路子 美和

能 海士 松山晃之 松山幸親 杉江元 辻本正樹 後藤孝一郎 鬼頭好信 大野誠 間 大野弘之

後見 前野郁子 久田徹二 地謡 三村恵子 高島良一 馬場信至 須部甫 高橋暎一 古橋正邦 祖父江修一 加藤保彦

附祝言 （要会員券） 当日券三千円 主催 青陽会 （愛知県文化振興基金事業）

幸謡会大会

十月八日（日）午前十時始

熱田神宮能楽殿

能 三輪 能組 芝崎恭子 太田静江 加藤マサ子 前田鈴子 荒川志づ 杉浦ゆき

素謡 玄象 仕舞 笠之段 安宅 長井嘉生 清水克郎 敦盛キリ 高取良昌 枕之段 小林俊雄 清経クセ 吉房徳二 清経キリ 鈴木寿太郎

仕舞 鶴亀 経正クセ 寺島洋子 井筒 百瀬永三子 虫キリ 荒川俊子 松 鷲見良子

舞囃子 屋島 小森辰雄 河村総一郎 福井啓次郎 鹿取希世

百萬 川浚秦子 河村総一郎 福井啓次郎 鬼頭喜太郎 鹿取希世

素謡 鉢木 小林俊雄 三越糸子 高取良昌

能 蝉丸 宇野順子 増田保雄 構本宰 飯冨雅介 杉江元 河村総一郎 福井啓次郎 藤田六郎兵衛

間 野村信行

後見 武富康之 大槻文蔵 地謡 小野喜子 田中米子 石川晴子 中井邦子 磯貝勝子 前野郁子 近藤幸江 塩谷恵子 瀬戸三津子

番外仕舞 阿漕 昭君 大槻文蔵 泉嘉夫

舞囃子 高砂 八段之舞 石川晴子 笠鉱一 柳原冨司忠 鬼頭喜太郎 藤田六郎兵衛

女郎花 田中米子 笠鉱一 柳原冨司忠 鹿取希世

仕舞 網之段 石河フサ子 近藤幸子 班女アト 田キリ 龍 柿木園子 杜 若キリ 芝崎恭子

舞囃子 白楽天 磯貝勝子 笠鉱一 柳原冨司忠 鬼頭喜太郎 藤田六郎兵衛

野宮 村井邦子 笠鉱一 柳原冨司忠 鹿取希世 合掌留

素謡 弱法師 小野喜子 川浚秦子

安達原 青木朋子 杉浦郁子 大見富美子

番外舞囃子 紅葉狩 急之舞 近藤幸江 笠鉱一 柳原冨司忠 鹿取希世

附祝言 （終了予定 五時頃） 主催 幸会 謡 近藤幸江

〔御来場歓迎〕

二井栄逸師画抄集

'96 能画カレンダー

ご好評を頂いております能画カレンダー1996年版。B3（タテ51.5cm×ヨコ38.0cm）表紙とも7枚の美麗カレンダーです。

◉ 予約特価　1部 1500円、郵送の場合送料とも1部1900円（2部以上の場合、部数にかかわらず送料は一律600円、例・3部の場合送料とも5100円）

◉ 予約申込み期限10月30日（それ以後は部数によりお応えできない場合がありますのでご理解下さい）

◉ お申し込み方法　ハガキで部数明記のうえ当社へお申込み下さい。代金は振替、切手、現金書留いずれでも結構です。（電話での受付けはいたしませんのでご理解下さい）

申し込み先　能楽の友社

〒464　名古屋市千種区千種2-18-18

振替口座　00800－6 － 36393

武田謡楽会秋季大会

十月十日（祝）午前九時始

熱田神宮能楽殿

舞囃子　小袖曽我　武田大尚　吉田定男　後藤嘉津幸　大野誠
武田大志　後藤嘉津幸　毛利喜久男

素謡　野宮　高橋爽一郎

仕舞　花月　加藤愛郎　屋島　鈴木利治
放下僧小歌　長谷川邦彦

素謡　定家　川端栗　並河益子

仕舞　浮舟　伊藤悦子　冨士太鼓　井田順子
玉鬘　中里明子

舞囃子　胡蝶　大森美佳　吉田定男　後藤嘉津幸　助川竜夫

西王母　太田ふみ子　吉田定男　後藤嘉津幸　大野誠

仕舞　通小町　楠井みつ子　笹之段　助川竜夫
船橋　佐野晟子　後藤嘉津幸　大野誠

玄象　桑原寿子　吉田定男　後藤嘉津幸　小林良子

舞囃子　芦刈　小林直子　吉田定男　後藤嘉津幸　大野誠
五段

松風　鈴木紀子　吉田定男　後藤嘉津幸　大野誠

融　村主美知子　吉田定男　後藤嘉津幸　助川竜夫　藤田六郎兵衛

仕舞　忠度　上野典子　弱法師　川村ちゑ子
昭君　奥田ちゑ
子方　松山晃之　田中蔦子

能　隅田川　飯冨雅介　杉江元　河村総一郎　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛
独吟　蝉丸　阿竹登代子

舞囃子　難波　高木宏子　河村真之介　福井啓次郎　助川竜夫　大野誠
五段

砧　小牧大助　河村総一郎　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛

前　海士　小林冨美代　河村総一郎　後藤孝一郎　助川竜夫　大野誠
五段

番外仕舞　花筐クルイ　小瀬古喜代子　片山九郎右衛門

半能　石橋　高安勝久　河村真之介　福井啓次郎　助川竜夫　藤田六郎兵衛
占クセ　松岡満寿子　班女クセ　一見敏子
枝キリ　松陰真澄

舞囃子　養老　渡辺一彦　河村総一郎　後藤孝一郎　助川竜夫　藤田六郎兵衛
水波之伝

竜田　野中淳子　河村真之介　福井啓次郎　助川竜夫　大野誠

砧　今村香　河村総一郎　福井啓次郎　助川竜夫　藤田六郎兵衛
後

天鼓　北田尚子　河村真之介　後藤孝一郎　助川竜夫　藤田六郎兵衛
盤渉

仕舞　清経クセ　毛利喜久男　籠太鼓　山路敬一郎

舞囃子　山姥　高橋千紗　河村総一郎　福井啓次郎　助川竜夫　大野誠
立廻

雲林院　梅田弘子　河村真之介　福井啓次郎　助川竜夫　大野誠

藤戸　大塚幸二　河村真之介　後藤孝一郎　大野誠
船

番外仕舞　白楽天　吉井順一岩　武田邦弘
（終了　午後六時頃）

〔御来場歓迎〕　主催　武田謡楽会　武田邦弘

邦謡会発表会

十月十五日（日）九時半始

熱田神宮能楽殿

素謡　弱法師　高橋和成　竹内英雄

千手　竹内寛子　牧野あい子
永瀬冨美子

仕舞　西行桜　沖見ナカ　梅ケ枝キリ　横山国枝
通小町　小川次江

舞囃子　松風　南原彩稀子　河村真之介　柳原冨司忠　鹿取希世
融　西川喜代子　河村真之介　柳原冨司忠　助川龍夫　鹿取希世
五段替之型

素謡　籠太鼓　岡田春江　滝口乙子
間　野村又三郎

仕舞　班女アト　箕浦美智代　島　丹羽久子
笠之段　牧野あい子　籠之段　半田智子

舞囃子　養老　徳田文代　河村真之介　柳原冨司忠　助川龍夫　藤田六郎兵衛
水波之伝

采女　宮川千尋　河村総一郎　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛

素謡　卒都婆小町　丹羽久子　半田智子
田中美子

仕舞　白楽天　小林冨美子　盛　野田博子
雨之段　加藤井知子　求　塚　井上苑枝

舞囃子　花月　深川寿美子　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
カツコ入り

遊行柳　二木昶子　河村総一郎　福井啓次郎　助川龍夫　藤田六郎兵衛
青柳之舞

一調　島追舟　片山慶次郎　半田智子

素謡　鵺小町　木村ひで　小林冨美子

仕舞　網之段　山本泉　野守　三口謙介

舞囃子　菊慈童　堀みどり　河村総一郎　福井啓次郎　助川龍夫　鹿取希世

雲雀山　村上一代　河村真之介　福井啓次郎　鹿取希世

松虫　美濃辺真知子　河村真之介　福井啓次郎　鹿取希世

素謡　隅田川　田中純一　若林緞菊雄
山本泉

山姥　加藤井知子　佐藤英生　三口謙介
番外仕舞　難波　梅田邦久
（終了　六時三十分）

〔御来場歓迎〕　主催　邦謡会　梅田邦久

猶恵会三十周年記念大会

十月二十一日（土）午前十時始

熱田神宮能楽殿

素謡　紅葉狩　杉山房子　熊沢恵美子　橋本雅一
梅若善久

清経　大河戸こと　池内幸三郎
野宮　並木明子　池内光之助

仕舞　鶴　亀　中原裕行
班女　老女クセ　中原崇博
竹中隆子

素謡　高砂　寺岡佑子　井戸和男
中村悦子
杜若　神谷千津　梅若基徳

舞囃子　通小町　谷節子　河村総一郎　福井啓次郎　竹市学

山姥　杉浦一枝　河村総一郎　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　竹市学

融　河合紀代美　笈鉱一　柳原冨司忠　鬼頭喜太郎　竹市学
岡田晃一
熊谷り江

素謡　砧　梅若善高
梅若盛彦

求塚　宮崎勝二　梅若修一
橋本雅一
日下すみ子

能　葵上　飯冨雅介　杉江元　河村総一郎　後藤孝一郎　助川竜夫　鹿取希世
梓之出　佐藤融
間

舞囃子　羽衣　安藤美恵子　熊沢恵美子　池内光之助
和合之舞　梅若盛彦　梅若修一　盛義
後見　岡田晃一　梅若善高　池内幸三郎　梅若盛義
梅若朗詠　地謡　井戸和男
独吟　安達原　外山聖子
熊野　鈴木きみ

百万　鈴木ふく　笈鉱一　福井啓次郎　竹市学
萩野ちとせ　笈鉱一　柳原冨司忠　助川竜夫　鹿取希世

菊慈童　笈鉱一　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　鹿取希世

番外舞囃子　高砂　熊沢恵美子　笈鉱一　柳原冨司忠　鬼頭喜太郎　鹿取希世
八段

主催　猶恵会　熊沢恵美子

〔御来聴歓迎〕

岐阜誠交会秋の大会

十月二十二日（日）午前九時三十分始

熱田神宮能楽殿

素謡　橋弁慶　子方　山内紀子
トモ　杉山籠彦
砂森口慶三　吉田勝巳　経　正キリ　赤地哲夫

仕舞　高砂　放下僧小歌　森俊勝

素謡　通小町　四十塚雪美子
山田きよ　高橋冨美子

舞囃子　田村　内田永男　草子洗小町　中井牧子
唐船　中村朝子
盤渉

仕舞　菊慈童　横山女春　栄　山内紀子
雲雀山　松野雅子

玄象　師長　仁科初夫
姥　村瀬隆夫
武藤靖夫　兼松信雄

能　道成寺　岡田信道
野口致弘
吉田祐一
小原利宗
笈鉱一　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛

間　野村又三郎
松田高義
後見　観世加賀　敏彦　河合正次
若松栄夫　松山幸親　柴田文義
健史　地謡　浅井稔
本田勲　須部雨　観世銕之丞　清水寛二

鐘後見　奥善助　西村高夫　馬野正基
久田徹二　岡田麗史

仕舞　花狂　冨満輝夫　玉鬘　兼松信雄
坂井満

舞囃子　融　藤戸　関谷正一
竜田　河合満子

仕舞　老狂　村山長一郎　高木鴻子

能　海士　高安勝久　吉田定男　助川竜夫
飯冨雅介　杉江元　後藤孝一郎　鹿取希世

間　野村信行

舞囃子　班女　小林曙
後見　松田憲二　中村朝子　西村高夫
鵜沢雅　地謡　三村恵子　下田雄三
瀬戸三津子　奥善助
清水寛二

番外仕舞　雨景　月中入前　観世栄夫
清　観世銕之丞

舞囃子　女葛城　仲村スミ　大和舞　早川清子
松　杉山籠彦　英　上　仁科初夫

仕舞　老狂　芥川　野村信行　井上祐一
山本策一　羽衣　小林曙
奥善助

舞囃子　籠　栖
（終演予定　午後六時）

番外仕舞　国

〔御来場歓迎〕　岐阜誠交会

名古屋能楽鑑賞会公演（第12回）

十月二十八日(土)午後二時始
熱田神宮能楽殿

解説　国立文化財研究所　羽田昶

狂言　栗焼　太郎冠者　善竹幸四郎
主人　茂山千作

能　井筒　片山九郎右衛門
宝生閑　河村総一郎　曽和博朗　藤田六郎兵衛
間　茂山千作
地謡　味方玄　清沢一政　古橋正邦　片山観世清司　武田邦弘　観世銕之丞　梅田邦久　暁夫

主催　名古屋能楽鑑賞会

〔入場料〕臨時会員券八千円　事務局　名古屋市東区大幸4－19－26　岩田方TEL(052)721－5000
入場券取扱い＝チケットぴあ（052・320・9999）熱田神宮能楽殿・事務局
※会員無料　会費正会員一万一千円（自由席）学生会員五千五百円　特別会員一万八千円＝定期公演二回分

郁諷会大会

十月二十九日(日)午前十時始
熱田神宮能楽殿

連吟　葵上　平松尚子　水野臣子　石本純子

素謡　敦盛　大島修　豊島慎一
仕舞　賀茂　米田真理
源氏供養　中野裕子
富士太鼓　加藤尚子
玉之段　足立由起

素謡　小袖曽我　田中清江　志津明子　名倉恵子
仕舞　花月　天野到
笠之段　佐治光幸
殺生石　豊島慎一

素謡　班女　福島中子　忍田チヨ子　中野裕子
仕舞　菊慈童　名倉恵子
羽衣　田中清江
松風　水野臣子
笹之段　伊藤明美

舞囃子　邯鄲　渡辺郁子　吉田定男　柳原冨司忠　鬼頭喜太郎　鹿取希世
草子洗小町　志津明子　吉田定男　柳原冨司忠　鹿取希世
玉鬘　江川恵美子　河村真之介　後藤孝一郎　大野誠
須磨源氏　門脇千鶴　河村真之介　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　大野誠
五段替之型

素謡　鉢木　米田真理　広瀬正雄　吉川利彦
舞囃子　吉野天人　石本純子　吉田定男　柳原冨司忠　鬼頭喜太郎　鹿取希世
小督　赤尾正　吉田定男　柳原冨司忠　鹿取希世
龍田　忍田チヨ子　河村真之介　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　大野誠
紅葉狩　宮口由美　河村真之介　後藤孝一郎　大野誠

素謡　花筐　門脇千鶴　野口千鶴子　渡辺郁子　加藤尚子
番外仕舞　井筒　上田貴弘
通小町　久田徹二

素謡　鞍馬天狗　佐治光幸　浜田国松　天野到
番外舞囃子　自然居士　前野郁子　河村真之介　後藤孝一郎　大野誠
附祝言
（終了予定　五時十五分頃）

主催　郁諷会

〔御来場歓迎〕　前野郁子

◆文月の舞台から◆
「朝日狂言会」「野村四郎名古屋公演」「花伝の会」

竹尾邦太郎

「塗附」　シテ塗師・松次郎。狂言には象徴的な小道具の多い中、塗師箱一式は漆刷毛に砥粉袋、乾燥用折畳式風呂（室）など如何にもそれらしく実用的。行きずりの大名・靖浩と聟の剣げ鳥帽子を、冠ったまま二人一絡げで繕う、と安直に請け負うが、塗師箱の紐を解く段になりこれが解けない。しかしそこは老練松次郎、「これはまたよう締めました」のアドリブも余裕で塗りの過程手順の説明も尤もらしい。並べて塗り終え一息、被せた風呂を取れば研ぎと磨きの手を抜いた烏帽子は食っ付いたまま。拍子（誠・啓次郎・総一郎・喜太郎）に掛かり、「イーヤー、エイ」、と角棒で捻ね上げればやっと身二つになりトメ。時の商売風俗も窺われた。稀曲。（30分）

「千鳥」　シテ弥右衛門、春の大蔵会番外小舞「餅酒」でも健在ぶりを見せたが、明治生れの気骨は茫洋として大きな太郎冠者の渋味である。樽酒入手を不首尾と悟り、ならば戻るまで、とアド弥太郎の気を惹きつつ飄然と踵を返そうとするところなど憎い。「余り面白さうにあるによって」と語尾を強めて破顔、翻意を促す弥太郎の普人ぶりも映える。主を基照、後見は吉次郎の三代の嘉。（30分）

「清水座頭」　元秀宗家急逝によりシテ座頭・元弥、アド聟女は元弥に代る淳子である。盲目の男女が夫々伴侶を求めて清水観音に立願、瓢の酒を酌み交して座頭は平家を語り、聟女は「地主ノ桜」を謡う。舞台に生きる者の宿命とは言え、健気に父の死を乗り越えてゆく姉弟の節回しにはどことなく哀調があってしんみりする。相寄る魂が結ばれて互いに手を取り合い、へ夫婦となるぞうれしき、の連吟には余情一入のものがあったが、技もさりながら心を要求される難曲、今後更に経験を積み重ねて行って貰いたいものである。（37分）

「仁王」　シテ弘之、賭博で無一文の深刻は、一転仁王に化けて供物を当てにする調子のよさだが、押し出しを恃んで賢しらを排し、愚直に徹する意気込みが天晴れで可笑しい。参詣人の中に交通安全を祈願する者があるのも時勢である。後から来た礼之助は、大草鞋に托して跋の平癒を祈るが、蹠り寄られて縋りつかれ、摩り回されると仁王はくすぐったさに身悶えせんばかり。更に、真面目くさった顔で礼之助が、「ちと樣ってみよう」と抱きつけば、弘之はたまらず爆笑する。両者の応対が傑作の近頃の「仁王」は、逃げる弘之が一ノ松から投げつけた大草鞋を、礼之助がはっしと抱き止めたのも印象的。（82分・7月9日・第37回朝日狂言会）

「大原御幸」　シテ建礼門院徳子（四郎）幽棲の庵に、偶々上皇（文蔵）のお忍びがあった青葉隠れの遅桜の小半日。歴史の一断面を、さりげなく淡彩で見せた閑雅な絵巻の一裂の印象。

引廻を取ると、大薬屋に局（章弘・面小面）と内侍（朝義・面深井）が床几のシテを挟み、淡浅黄花帽子に萌黄水衣で下に居る。面若女のシテは、極く淡い黄味を帯びた白花帽子に白綾着流である。内侍を残して檜を採りにたつ中入静穏な日常の中にも絶えず底流する傷心を、四郎は運ビの重さにみせて微妙。

法皇は白花帽子・淡灰色指貫・柿色水衣・錦襴掛絡。一ノ松に佇み、草深い山里の郭公の声に耳を澄ます風情は、へ古りにける岩の陰より、の地（慶次郎・邦久ら）にゆっくりと右から左へ視線を移すところ、来し方行く末の感慨も窺われ、文蔵の気品は辺りを払うか、随従のワキ方万里小路中納言・弥三郎の重厚謹直と好一対である。

後場は紫水衣を着て花籠を持つシテが法皇の来訪を聞き懐旧も一入、へなほ思ひ出の涙かな、とシオリ、床几を立つて地の裡に運ぶと一ノ松、へ籠の清水月ならで、と左袖に右袖を胸に重ね、我と我が身を愛おしむように抱いて薄く上を見、へ御影や今に残るらん、と下を眺めるのも儚い現し世を思い吐息洩らす哀れである。遠山の雲を落花の形見と左上に茫と見、珍しい遅桜を右上にみとめる感懐も一方ならず、上を見る型に四郎深長の巧味をみせる。安徳帝の最期を語る語りの苦渋は、へ自らも続いて、と右ウケ床几立つて右袖胸に左袖は膝に下居から、へかひなき命長らへ、と安座、へ再び籠顔に、と法皇にアシラフと花帽子の縁を両手に取って双シオリするところに唯一激情をみせた。キリは柱に摺まり法皇一行を見送るとへ庵室に入り給ふ、と左ウケ目付柱をみて合掌し、キリ地一杯聞いて詰メ残リ留、余情寂々だった。なお能に先立ち鹽摩琵琶「祇園精舎」があった。諸行無常のイメージを安易に取り込む意図に思えたが、能は他芸から想像力を剥奪される程弱い筈のものでは無く、非ずもがな（1時間39分・7月22日・野村四郎名古屋公演）

「杜若・恋ノ舞」　大小前に薬屋を出すのも珍しければ、ワキ欣哉が、へあら美しの杜若やな、と詠嘆するところで引廻が下うされ、初冠（巻纓・老懸・日蔭糸・紫ノ心葉）・小面・襟白赤・白摺箔・白地縫箔（花ノ丸文）腰巻・浅黄長絹・真ノ太刀の床几のシテ栄夫が呼び掛けるのも珍しい。これなる唐衣は高子の后の御衣、と長絹の左袖を見せ、またこの冠は、と右手の扇で初冠を指スのもどことなく得意気で可愛らしい。ワキとの掛合から、へ遥く済度、と薬屋を出、地次第の〈舞を奏づらん、で拍子を踏むと一気に〈花前に蝶舞ふ紛々たる雪、と受け、地の〈柳上に鶯飛ぶ片々たる金、と常座へゆき舞になった。舞一点に絞った演出は恋情を凝縮して遺憾なく感懐中程に抜け、右袖被いて水鏡を見たまま少しずつ沈んで左袖抱くように下居するところなど、抽象的な恋の概念を具象化して見せるかで、しっぽりとした風情が捨て難かった。（41分）

「宗論」　法華僧・千作、浄土僧・又三郎の異流競演は共に狂言次第（希世・啓次郎・真之介）で出るが、運ビにしてからが互いの心の在り様を反映する。人懐っこそうな法華が独り旅の無聊を慰める連れ欲しさなら、浄土は退屈凌ぎの慰み者に出会った按配。事もあろうに相手が犬猿の仲の浄土と知ったときの千作の狼狽と如何にも苦々しげな表情は、獲物を得て舌舐りせんばかりの又三郎の面魂と好対照である。事ここに及び、精一杯の抵抗を試みる千作の痛々しさと戯れつく又三郎の憎々しさそれも口角の泡と共に消え、我が宗旨が金科玉条と礼賛して他を誹謗する段には、互いに己れの芸を楽しむかの迫熱の好舞台になった。宿屋は真吾。（45分）

「渇水龍女」　堂本正樹の補綴添削による「河水」の略四世紀半ぶりの復曲は壮大華麗な叙事詩劇となって甦った。

王子（文蔵）に恋した龍女（九郎右衛門）の結婚の願いが叶えられると、干上った河は再び水を湛え、更に返礼として敵襲に感応して鳴る太鼓が帝王（鎮之丞）に献上される。その運搬の労を稿われた隣ノ精達（千五郎ら）の酒宴が賑やかに果てると、帝王は楽を舞い名残りを惜しむが、俄に鳴る太鼓に敵（茂十郎ら）の襲来を知る。応戦する延臣達（雅則ら）との一大斬組みは、危急存亡を救わんと武器を執って現われた龍王（文蔵二役）と龍女に太鼓ノ精（和晃）も加勢すれば、遂に敵は仆れて平和が戻り、喜びの舞を舞う龍女に龍王も和し、連舞となって舞いつつ別れて行くのを帝王が見送るトメとなる。仙人（千之丞）の狂言口開で、この仙人が文字通り狂言廻しとなり、場面転換の度に現われて物語をスピーディに展開させてゆく手法は斬新である。今公演に先立ち既に一月廿五・廿六日の国立能楽堂と七月廿六日の大阪城薪能（六間四方の大仮設オープン舞台）の三公演があるが、夫々舞台機構機能が異なり演出にも異同（既演のものは、一、笛が連管。一、大阪の地謡は後座。一、東京二日目は王子・龍王に喜多流友枝昭世・敵将にシテ方観世栄夫の起用。一、大阪では女官二名配役に延臣二名増の六名・アイ立衆一名増の五名。一、東京では作物の太鼓が観音開き）があるが大筋は変らない。

特筆されるのは、重厚なドラマに効果的に用いられた多様な音楽――既存曲の他にその変形や創作曲（就中、剪頭の、笛・六郎兵衛の独奏から小鼓・源次郎が加わる音取置鼓風のものや、王子の中入の地に囃される太鼓・惣右衛門に大鼓・孝と小鼓は、情景描写に人物の心象風景も重ねて秀逸）――や、役の個性を際立たせる工夫の多彩な装束（福福・雲扇・カルサンなども珍しい）の綺羅、更に創作面（仙人の一種の祖父面・龍王の魁偉な切顎面・後ノ龍女の王女面）の採用、である。

また、仙人にみる狂言方の重用や、仏倒レ、欄干越シ・宙返りなどのため、斬組みの群衆処理にワキツレ立衆の中のシテ方の登用もドラマの円滑化に与って力があった。千之丞の軽妙、九郎右衛門の伝法と妖婉、鎮之丞の威厳、文蔵の冷静と勇猛、千五郎の剽軽、茂十郎の傲岸、と役の持味もよく出た。地は勝一・晋らで好調、後見は栄夫・邦弘・玄で各役合計三十六名である。とまれ主要な役々にダブルキャストの互換性を得、舞台を重ねて六郎演出に微調整があったであろう。初演は所要一時間廿分の曲だが今回は一時間六分、充実した密度の濃い劇空間だった。（7月29日昼・花伝の会・市芸創センター）

能装束の世界展

浅井能楽資料館

滋賀県浅井町の浅井能楽資料館では、開館三周年を記念する秋季特別展として、ヨーロッパ・アメリカ・国内展覧記念「能装束の世界展」を前期（九月十九日～十月二十九日）後期（十月三十一日～十二月十七日）にわけて開催している。

主催、浅井能楽資料館（滋賀県東浅井郡浅井町力丸、電話〇七四九・七四・三八七一、JR長浜駅よりタクシー約十五分）、共催浅井町、協力伝統文化フォーラム。なお関連講座として、九月二十四日（日）「能装束の復元」講師山口憲氏、十月一日（日）「文化財としての能面」講師中村保雄氏（能面・能楽研究家）、十月二十二日（日）「能装束の美」講師大手前女子大教授切畑健氏などが催される。

入館料七百円、開館時間午前十時～午後五時（休館・月曜日）

二井栄逸師画抄集　予約締切 10月30日

'96能画カレンダー

◉予約特価　1部　1500円　（郵送の場合送料とも1部　1900円）（2部以上の場合送料は一律600円）
◉カレンダー価格は前回と同じです。ハガキで部数記入のうえ、当社へ予約申込み下さい。

（詳細9月号）能楽の友社

能楽の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18-18
（郵便番号　464）
電　話（052）731—7984
振替口座 00800-6-36393

購読料　1年1100円
郵送の場合　1年1800円
一　部　100円

◈ 演能カレンダー ◈（熱田神宮能楽殿）

〔10月〕
21日（土）猫恵会大会（来場歓迎）
22日（日）誠交会大会（来場歓迎）
28日（土）名古屋能楽鑑賞会（有料）
29日（日）都諷会大会（来場歓迎）
〔11月〕
3日（祝）幸友会秋の会（来場歓迎）
4日（土）萠謡会大会（来場歓迎）（番組①面）
5日（日）熱田能楽殿40周年記念大会（来場歓迎）（番組②面）
11日（土）野村又三郎舞台70周年記念鑑賞会（有料）（番組③面）
12日（日）観世会定式能（有料）（番組③面）
18日（土）観修会大会（来場歓迎）（番組③面）
19日（日）宝生会定式能（有料）（番組④面）
23日（祝）和泉会（有料）
25日（土）清謡会（来場歓迎）（番組④面）
26日（日）久田観正会（来場歓迎）
〔12月〕
2日（土）名古屋幽花会（来場歓迎）
3日（日）歳末助け合い協賛能（有料）
9日（土）青翔会（来場歓迎）
10日（日）壺泉会能（有料）
13日（水）花伝の会（有料）
16日（土）久田徹二能リサイタル（有料）
24日（日）能楽殿創立40周年記念乱能（有料）
〔平成8年〕
〔1月〕
3日（水）能楽協会名古屋支部謡初式
6日（土）凰の会（有料）
7日（日）学生能（来場歓迎）
15日（祝）名古屋清韻会大会（来場歓迎）
20日（土）青陽会定式能（有料）
（演能変更の節はご了解下さい）

宝生流十八世宗家 宝生英雄氏逝く

シテ方宝生流十八世宗家・日本能楽会会長の宝生英雄氏は、九月十四日午前十時五十分、心不全のため逝去された。享年七十五。

通夜は十七日、葬儀・告別式は十八日正午から東京・水道橋の宝生能楽堂で、葬儀委員長観世清和氏、喪主長男の英照氏により執り行われた。能楽界をはじめ各界からの会葬で故人の遺徳をしのび、焼香の列がつづき冥福を祈った。

故宝生英雄氏は、大正九年二月十八日、十七世宗家宝生九郎重英の長男として東京に生れ、大正十四年「隅田川」の子方で初舞台、昭和十四年「道成寺」十五年「望月」三十一年「綾鼓」四十六年「鶯鳴小町」四十八年「卒都婆小町」を披く、四十九年に第十八世宗家を継承、平成元年紫綬褒章受章、社団法人日本能楽会会長の重責をにない、社団法人能楽協会の会長、宝生会会長を歴任、海外公演など能楽界の振興発展に多大の貢献をし、平成六年勲四等双光旭日章を受章している。

よみがえる桃山の響き
尾張徳川家秘蔵 鼓と笛演奏
10月31日　マツザカヤホールで

尾張徳川家秘蔵の「荊田蒔絵鼓」能管「蟬折」を用いての演奏により、〝桃山の響き〟をよみがえらせる企画が実現、きたる十月三十一日（火）松坂屋本店南館の「マツザカヤホール」で、観世流宗家観世清和氏、笛方藤田流宗家藤田六郎兵衛氏、小鼓大倉流宗家大蔵源次郎氏が出演。また小鼓製作修理技術で文化財保存技術者認定の鈴木理之氏の解説も行われる。

徳川美術館開館六十周年記念特別企画。午後七時開演、入場料三千円（全自由席）主催／徳川美術館、中日新聞社、NHK名古屋放送局。入場券は市内主要プレイガイドで取り扱い。

〔第一部〕鼓、笛の構造、音色の比較解説

〔第二部〕一調一管「龍田川辺」謡・観世清和、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・大倉源次郎

一調「謡無蘭曲　奥布鼓乱」小鼓・大倉源次郎

能「石橋」より一管「獅子」笛・藤田六郎兵衛

一調一管「安宅」瀧流　謡・観世清和、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・大倉源次郎

徳川美術館には能面や能装束、笛・鼓などの楽器、小道具を含め千二百点余りの能の道具類が収蔵されている。なかでも「荊田蒔絵鼓」は慶長十六年（一六一一）に徳川義直（尾張初代藩主）が豊臣秀頼から贈られた由緒ある鼓。能管「蟬折」（伝獅子田作）は室町時代の作品で、これまで展示されることはあっても、その音色が披露される機会はなかった。

今回は三宗家の出演で、三代将軍徳川家光の作詞による「龍田川辺」ほかの曲目が実際に荊田蒔絵鼓と能管を用いて演奏される。

野村又三郎師 斯道70周年
「釣狐」鑑賞会
11月11日　熱田能楽殿

和泉流狂言・野村又三郎家十二世当主・野村又三郎師は斯道七十周年を迎えこれを記念して名古屋市民芸術祭'95協賛〈釣狐〉鑑賞会をきたる十月十一日、熱田神宮能楽殿で公演する。午後二時開場。

演目は、狂言「夷捉沙門」（井上祐一、佐藤友彦、松田高義）舞囃子「翠慈童」（梅田邦久）「釣狐」（野村又三郎、野村信行）＝番組③面掲載。

会員券は五千円（自由席）申込みは、名古屋市守山区八剣2の21 05、大矢方「釣狐」鑑賞会事務局（電話052・798・4558）

幸友会秋の会
十一月三日（文化の日）午前十一時始
熱田神宮能楽殿

囃子、連謡など二十数番

〔御来場歓迎〕　主催　幸友会　福井啓次郎

萠謡会（十五回）
十一月四日（土）午前十一時始
熱田神宮能楽殿

連吟
三輪　深川寿美子　今村玲子　高野千勢子　井上苑枝　森崎紀子　宮川千尋　小林富美子　今沢美和子　半田智子　関谷薫
仕舞（和謡会）
菊慈童　矢羽々みどり
松風　児玉洋子
連吟（千謡会）
葛城　大竹初美　水野次子　尾関喜久子　浅野八重子
独吟（昂謡会）
猩々　広間敏夫
連吟（和謡会）
源氏供養　有浦敦子　石川良子　児玉洋子　成瀬千恵子　矢羽々みどり　太田敦子　増田仁美　橘文子　加藤久子　梛野多賀子
仕舞（梧葉会）
大江山　大島と志子
玉鬘　水谷久子
猩々　城田成子
連吟（誠謡会）
夕顔　シテ小島鉴子　ワキ福波礼子　堀場おきん　野田美江子　宵井宮子　小島文子　市川菽子　桜井文子
素謡（芙蓉会）
百萬　熊田恵子　後藤越子　地謡　栗本富美子　長谷川清子　後藤早波　可児嘉子　水野悦子　宮川千尋　小林富美子　半田智子　今沢美和子
仕舞（和謡会）
班女　石川良子
井筒　成瀬千恵子
独吟（富謡会）
雨之段　林愛子
仕舞（舞紀謡会）
高砂　堀藤吉郎
熊野　野村和子
胡蝶　川瀬清子
野宮　大野操

連吟（高謡会）
紅葉狩　佐藤貞子　八木きみよ　和田一子　佐藤富美栄　大橋芳子　山田多鶴子　笠井千代子
素謡（芙蓉会）
部　可児嘉子　長谷川清子　地謡　栗本富美子　後藤越子　水野悦子　熊田恵子　井上苑枝　今沢美和子　半田智子　高野千勢子
独吟（昂謡会）
経正　大池雅子
仕舞（和謡会）
柏崎　太田敦子
枕之段　梛野多賀子
連吟（鈴謡会）
笠之段　関山妙子　藤田かずよ子　真柄喜美子　織田和子　日置豊子　小島アイ子　川端とみ子　黒谷典子　中川さと
仕舞（和謡会）
草子洗小町　有浦敦子
江口　高橋禧子
花月　増田仁美
素謡（誠謡会）
阿漕　武馬守永雄　広瀬正雄　地謡　堀内田一義　堀場吉成　梅田邦久　鈴木照之
仕舞（鈴謡会）
羽衣　井上奈央
敦盛　加藤弘子
羽衣　下川智恵子
雲林院　沢村ひさ子
蝉丸　山副ちよ子
連吟（千謡会）
船弁慶　水谷暎子　島田照子　近藤かずよ　神谷三千枝　岡田房子
素謡（薫謡会）
隅田川　岡川園枝　高橋武子　古田まち子　富田初江　地謡　関谷薫　高島良一　梅田邦久　堀場吉成
連吟
鉄輪　堀場吉成　高島良一
番外独吟
勧進帳　梅田邦久
附祝言（終了予定　五時）
〔御来聴歓迎〕　主催　萠謡会　補佐　梅田邦久

春雅日記 (165)

萬葉の花紀行 ①

えと文 二井栄逸

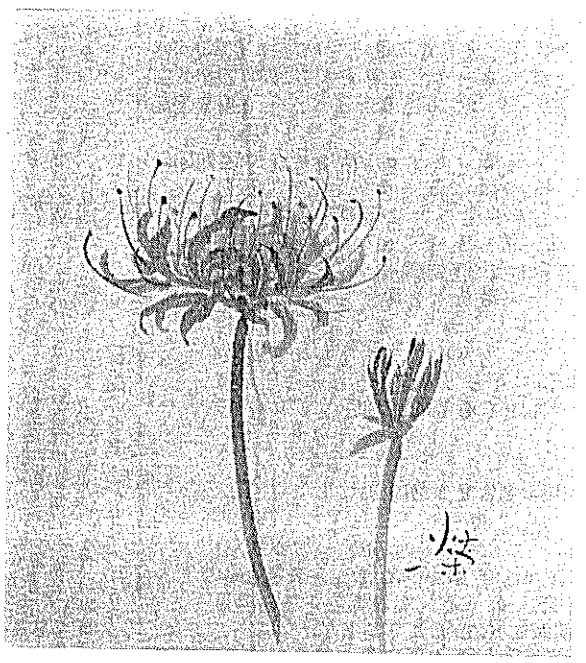
彼岸花のことを萬葉びとは「いちしの花」と呼びました。そして、この花を恋しい妻の面影にかさねました。

道の辺の　壱師の花の
いちしろく
人皆知りぬ
わが恋妻を
―柿本人麻呂歌集―

のように道ばたのいちしの花はすぐ人目につくが、わたしの恋しい妻のことも知られてしまった。恥ずかしいけれど嬉しいとうたわれています。「いちしろく」とは、はっきりとめだってという意味であります。

現代では、いちしの花を、彼岸花、曼珠沙華等と呼び、シビト花、ジゴク花、シタマガリ等の悪名もありますが、改良種も多く栽培され汚名も晴れました。

私は大和路が好きでしたので、昔は秋になるとよく出かけました。伊勢物語に取材した、井筒も在原寺が舞台になっていますし、一むらずゝきのそばには必ず彼岸花が秋を彩っています。



又、田のあぜには紅だすきを引いたように彼岸花が連なっていました。

（平成七・一〇・九記）

宝生英雄宗家追懐

竹尾邦太郎

八月廿七日、第十一回衣斐正宜後援会能で宗家は「杜若」の後見に就かれ、それから僅か十八日後に逝明を異にされた。多分最後の出勤だったのではなかろうか、温顔を偲び謹んで御冥福をお祈りするばかりである。

英雄宗家は五流宗家の中で名古屋への来演が殊に多かった。昭和三十二年名古屋宝生会発足以来、六月の定例は毎回、それに故内藤泰二師の鍵雲会九月例会と八月の衣斐後援会である。しかし、ここ十年程は、昭和六十一年秋の先代九郎重英十三回忌追善の「頼政」を最後に能は勤められず、宝生会の出勤も平成四年六月の仕舞「高野物狂クセ」と本年六月十八日の令孫和英君当地初シテ「祝言・岩船」の後見だけであり、衣斐後援会能での一調も第八回以後は専ら後見だった。しかも既ね後場だけで、体調勝れないことを窺わせたが、容姿そのまゝ磐石の重味で要（かなめ）の役を果されたのも斯道への愛情の深さだったろう。野口兼資師に心酔し、その後継者と目して絶大な支援を惜しまなかった川瀬一馬氏は、「能楽論随想」の中で「英雄氏の芸に望む」と題して次の様に言う。「能は写実を離れた表現とは言え、舞台姿という点から、折角能姿に最適の背丈のある丸胴に恵まれた氏が、肥り過ぎにならぬよう、減量に努力されんことを望む」（昭和三十四年）と。しかし、体質は如何ともしがたく、晩年は天賦の才能を十分に発揮する舞台に恵まれなかったことは残念としか言いようがない。その宗家自身の無念を晴らして余りあるのは、名伯楽として後嗣英照師を立派に育てられたことである。昨年八月廿七日、シテ英照師、子方を令孫和英君が、勤めた「西王母」の、後見に就かれた英雄宗家の慈愛に充ちた眼指しは忘れられない。以て瞑すべし、と言うべきであろう。合掌。

在りし日の宝生英雄宗家
＝昭和49年6月27日、鬼頭八郎叙勲祝賀能にて、舞囃子「船弁慶」

平成7年 10月・11月放送

〔10月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）
22日（日）「一角仙人」～観世流～ 大西 信久
29日（日）「雨月」～宝生流～ 高橋 章
〔11月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）
5日（日）「錦木」～観世流～ 梅若万紀夫
12日（日）「女郎花」～宝生流～ 宝生 英照
19日（日）「花筐」～金春流～ 本田 光洋
26日（日）「砧」～観世流～片山九郎右衛門
〔テレビ〕NHK教育テレビ
11月3日（祝）能「敷盛」～宝生流～ 佐野 萌

熱田神宮能楽殿四十周年記念 能楽大会（二日目）

十一月五日（日）午前九時始
熱田神宮能楽殿

連吟 夜討曽我
仕舞 竹生島 川本マサ子 七騎落 森田 俊枝
仕舞 草紙洗 近藤 翠 胡蝶 玉井 房子
仕舞 東国 小島加代子 大江山 逸見由利子
仕舞 北クセ 勝島とし子 歌 酒井美由貴
連吟 鳥追 河出 和子 小笠原 修 青柳 光昭 加賀山 登茂子 川口 裕子 岡本 欽市 浅井 秀香 荻村 幸明 関口 初夫 高柳 晴夫 山本 玉井 房子
連吟 藤戸 末良 岡本 忠弘 英子 山本 近藤 井澄 洋子 酒井 はる 青柳 啓介 水山 美子 高木 アイ子 白倉 英一 近藤 中島 静男 小平 溝子 鳥羽 稲美 丹羽 八郎 成夫 良三
連吟 唐船 水野 安江 吉良 尚 堀清 広 石森 智幸 高瀬 英苑 田辺 舟津 瑞雄 正啓
連吟 海人 川本 酒井 美由貴 立岩 江口 勝野 邦弘 杉浦 哲朗 鈴木 小木曽 三橋 服部 萩野 敏子 梅田 河田 三橋 青木 岡戸 猪飼 公恵 四茂 達也 鷲田 純彦 順二 直倭 三朗
連吟 夜討曽我 七屋 近藤 和郎 都築 正孝 近藤 正男 鈴木 久仁七 水野 邦弘 藍川 栄三 立岩 江口 秀雄 勝野 幹雄

山脇伊津美（元賀）の判明する上演記録で最後のものは、明治七年三月十七、十八日に早川舞台で行なわれた催しである。これは雨天により一日ずつ延期されたものだが、以下演目とおもな出演者を紹介しておこう。

明治七年三月十六日　雨天に而十七日

能　組

翁　面箱　勝野久次郎
三番叟　山脇伊津美
（橋懸舞　十人子宝）
千歳　宮村保彦
嵐山　大野藤五郎　河村竹八
麻生　山本金次郎
杭ケ人ケ　久次郎
八嶋　寺田左門治　中川六太郎
鞠座頭　柳川宇左衛門
大藤内　伊津美
（中入）
望月　藤五郎　西村庄一郎
通円　山脇四郎
船弁慶　左門治　庄一郎
白波船中語
隠岐人　井上菊次郎
祝言　奈村登三　大河内助太郎
鱗形
嵐山間　猿舞名倉増右衛門
八嶋間　奈須尾木松之助
望月間　宇左衛門
同十七日　雨天日送り十八日
狂言組
粟田口　早川幸八
祢宜山伏　久次郎
鶏猫　増右衛門
囃子松風　林増次郎
名取川　四郎
花子　宇左衛門
花折新発意　水野代次郎
（休息）
能
普知鳥　大久保孫九郎　庄一郎
狸腹鼓　伊津美
水汲　金次郎
武悪　菊次郎
囃子山姥　梅若千代治
朝比奈　松之助
内沙汰　伊東昇三郎
鳴子　伊津美　四郎
囃子照君　林治六
大殿若　宇左衛門
福神　四郎
以上

これによれば元賀は初日の「三番叟」、「大藤内」、二日目には「狸腹鼓」、そして息子四郎（元清）と「鳴子」を勤めており、元気な様子がうかがわれる。さらに幸八、およびその弟子である菊次郎、水野代次郎（門水）らも出演している。どうやら元賀、幸八の存命中は、宗家を中心に名古屋狂言界はよくまとまりを見せていたものであろう。

和泉流第十五世、八代目山脇和泉（伊津美）元賀は、明治九年十一月に、上総島の家で没した。六十五歳であった。遺子四郎（後元清）は二十九歳、間もなく宗家を継承したものであろう。亡父の晩年の名乗り・山脇伊津美をそのまま名乗ったようである。

能楽協会名古屋支部で編纂した「お能の番組」（昭和二十六年刊）で、明治十年十月十八、十九日の三日間行なわれた催能に、初日、「末広」、二日目「朝比奈」、三日目には「法師母」を山脇伊津美郎　藤田清丸　松本流太郎　水野金次郎　山脇録弥。

以上二十二名。維新直後から明治五年ごろまでに見出された名前でここに見られるのは荒川孫吉と山脇録弥の二人だけである。あれほど活躍をしていた、井上菊次郎、田中庄太郎、磯部三段治を始め、後年共同社を結成して、名古屋狂言の担い手となって行った人々の名は一人も見られない。

そしてここに見られる二十二名の内、山脇録弥を除く全員が、伊津美（元清）の上京後には残存する番組からきれいに消えてしまうのである。一体この人々はどうなったのであろうか。何故宗家のもとに実力ある弟子たちがこの頃参加しなかったのであろうか。

ともあれ、この中で注目されるのは山脇録弥である。録弥は先に没した山脇得平の遺子であり、佐々録太郎の名前で明治初期に数多くの舞台に立っている。山脇姓を名乗る前は佐々藤左衛門が本姓であり、幼名録太郎の内は、佐々姓を名乗ったものであろう。得平が十一年三月に没しているが、明治十年十月の番組にはすでに山脇録弥の名前が見られ、これ以前に或いは得平の引退、録太郎の家督継承などがあったのかも知れない。録弥は実際にはこの十年十月の会に一度だけ伊津美と同勤しているのがうかがわれるが、以後録弥の名は見られない。元清上京後はごく限られた機会にのみ出勤しているだけで、間もなく廃業したと伝えられる。

また伊津美としばしば同勤している飯沼定九郎は、先代三宅藤九郎氏の談によれば、三宅庄市の弟子で美濃大垣で狂言を行なっていたとのことである。

雑誌「能楽」六巻九号（明治四一・九）に掲載される「岐阜県大垣町和泉流狂言方氏名」に八大垣町竹島　飯沼悌吉」の名が見られまた当時宗家の記す「神文帳」は明治十六年以降流儀への入門者、免状の発行記録を残すが、明治二十九年五月の項に「三番叟」免状発行記録として「三宅惣三郎取立　美濃大垣竹島町　飯沼悌吉、同飯沼慈吉」の二人の飯沼姓が見られる。あるいは縁者かも知れない。

さらに伊津美の出演する会には筒井秀之助、安平治、定之丞の三人の名が、皆勤と言ってよいほど見出される。

この内筒井定之丞が演じている曲目は「井杭」「肩り」「重喜」「柑子依」「腰祈」などで、曲目から判断すれば当時まだ幼かったと考えられる。

この三人が一族であったかは不明だが、前記「神文帳」によれば昭和十七年になって「三宅藤九郎（先代）取立　筒井定之丞」として入門・奈須語の免状が発行されている。もし同一人であれば、この筒井家は山脇宗家にとって大きな後援となった家で、現在和泉家に伝わる「和泉家古本」なども筒井定之丞氏が永く旧蔵していたものである。なおこの筒井家も美濃大垣の家であるやに聞いているが、彼の地は和泉流三宅派が行なわれていたようであり、或いはその流れを汲んでいたかも知れない。

（筆者は和泉流狂言方）

名古屋狂言史余話（八）

佐藤友彦

名古屋市民芸術祭'95

名古屋市民芸術祭実行委員会、名古屋市、名古屋市文化振興事業団主催により、十一月十一日、名古屋芸術創造センターで、市民芸術祭受賞者による「燦」が公演される。

能楽関係では、能「道成寺」より「素囃子」（物着―乱拍子―急之舞―祈り）上演。

笛・藤田六郎兵衛、小鼓・柳原冨司忠、大鼓・河村真之介、太鼓・助川龍夫の諸師が出演。午後二時始。ほか箏曲、地唄、新内などが上演される。入場料三千円。チケットぴあ、プレイガイドで前売り。

名古屋市民芸術祭95協賛 野村又三郎舞台七十周年記念 「釣狐」鑑賞会

十一月十一日（土）午後二時四十五分始
熱田神宮能楽殿

狂言
夷毘沙門　夷　井上祐一　毘沙門　佐藤友彦　有徳人　松田高義　野村隆行　地謡　野村信行　井上靖浩　奥津健太郎

舞囃子
菊慈童　梅田邦久　河村総一郎　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛

狂言
釣狐　伯蔵主　野村又三郎　狐　野村又三郎　猟師　野村信行　後見　井上松次郎　井上礼之助

（終了予定午後五時十分）

主催　野村又三郎舞台七十周年記念〈釣狐〉鑑賞会
事務局　名古屋市守山区八剣2の2105
電話052（798）4558

斯道七十周年記念

〔要会員券〕臨時全員券五千円（自由席）
申し込みは鑑賞会事務局

名古屋観世会定式能（五回）

十一月十二日（日）十二時半開演
熱田神宮能楽殿

能　組

能
観世安弟子　観世鈴之丞

三井寺　宝生閑　坂苗融　大日方寛　野村信行　野村又三郎　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛

間
後見　中川雅章　武田宗和　地謡　松山幸親　今村嘉勇　須部甫　清沢一政　古橋正邦　梅田邦久　観世暁夫　武田邦弘

狂言
咲嘩　佐藤友彦　佐藤融　井上靖浩　後見　井上松次郎

仕舞
白楽天　小島一英　本田勲
楊貴妃　武田宗和　古橋正邦　地謡　梅田邦久　祖父江修一
天鼓　観世暁夫

囃子
観世芳伸

熊坂　植田陸之亮　笠鉱一　後藤孝一郎　鬼頭好信　竹市学

間
後見　小島一英　観世暁夫　地謡　高島良一　加藤保彦　高橋瞭一　中川雅章　武田宗和　久田徹二

（終了四時半頃）

〔有料〕当日券　八千円　主催　名古屋観世会

附祝言

観修会秋の大会

十一月十八日（土）午前九時半始
熱田神宮能楽殿

囃子
菊慈童　関戸紀子　祖父江智子
安達原　加藤桂子　諧久原京子　高橋慶子
班女　金田和　矢橋昌　加藤祐子

仕舞
高花　砂　小島豊子
蝉　月キリ　諧久原京子
須磨源氏　丸　関戸紀子
猩々　林英子　水野治子

囃子
通小町　河村光昭　原荒夫　長縄鑑二
蝉丸　山上イエノ　高石梅代　辻スミ子

舞囃子
清経　高橋慶子　河村真之介　柳原冨司忠　大野誠
桜川　井上好美　河村真之介　柳原冨司忠　大野誠

囃子
弱法師　小島豊子　松原叶江

舞囃子
小袖曽我　有賀欣哉　河村真之介　柳原冨司忠　大野誠
百萬　加藤祐子　河村総一郎　柳原冨司忠　助川龍夫　大野誠

囃子
葵上　関戸紀子　安田昭子　加藤定子　林英子

舞囃子
巻絹　浅野美穂子　河村真之介　柳原冨司忠　助川龍夫　大野誠

囃子
放下僧　高木和子　河村総一郎　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛

囃子
杜若　加藤幸子　井野口敏枝

地謡
武田水野幸子　久子　水野江尻貞子　喜命

舞囃子
遊行柳　川瀬絹子　河村総一郎　柳原冨司忠　助川龍夫　藤田六郎兵衛

囃子
天鼓　林喜久子　河村真之介　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛

囃子
夕顔　宮川在枝　林英子

舞囃子
通小町　海田トシ子　河村総一郎　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛

囃子
葛城　近藤重治　河村総一郎　柳原冨司忠　助川龍夫　藤田六郎兵衛

囃子
野守　澄川幸子　河村真之介　柳原冨司忠　助川龍夫　大野誠

囃子
玄象　有賀欣哉　植木安田正一　茂哉　林博敬

主催　観修会　祖父江修一

附祝言

〔御来場歓迎〕

名古屋宝生会定式能（第439期 第4回）

十一月十九日(日)午後一時始
熱田神宮能楽殿

能 六浦
衣斐正宜　飯冨雅介　河村総一郎　助川竜夫　後藤嘉津幸　大野誠
間　井上祐一　竹内淳一　鬼頭嘉男　後見　戸田和　織田哲也　馬樣富四夫　広島克栄　竹内澄子　地謡　富田正代司　寺部一威　稲川寿一

狂言 狐塚
佐藤融　井上靖浩　後藤友彦　後見　井上松次郎

仕舞 玉ノ段
辰巳満次郎

国栖
戸田和　地謡　佐藤耕司　馬樣富四夫　広島克栄　久野幸三

邯鄲
竹内澄子　地謡　辰巳満次郎　広島克栄　和久荘太郎

蟬丸
玉井博祐　地謡

能 善知鳥
福川寿一　武田康睦　倉本雅
高安勝久　河村真之介　福井啓次郎　竹市学
間　井上礼之助
後見　衣斐正宜　和久荘太郎　地謡　柴田義行　稲葉純造　松尾平子　辰巳満次郎　佐藤耕司　鬼頭孝男　福美

附祝言

主催 名古屋宝生会
事務所　名古屋市天白区島田二―三〇一　島田橋住宅二―一三一〇　佐藤耕司方　電話〇五二―八〇三―七三七二
〔有料〕当日券　五千円

秋の清謡会

十一月二十五日(土)午前十時始
熱田神宮能楽殿

番外仕舞 殺生石
鬼頭和子　高見順子　地謡　田中たみ　奥村小浪　丹下操　山内志げ

楽囃子 吉野天人
西野志保　清沢一政　中村正一　地謡　徳島千鶴子　田中賢三　十倉成巳

弱法師
吉村春枝　地謡　伊藤泉　三輪博子　山本枝　大久保早苗

三井寺
子方　深谷紀佐子　伊藤礼子　水越弥生　服部玲子　地謡　三輪博子　山本枝　大久保早苗

仕舞 敦盛
高野物狂　盛キリ　榊原国男　道明寺　奥村小浪　三輪藤枝　隅田川道行　山本博子

舞囃子 経正
鬼頭みゆき　河村真之介　柳原冨司忠　大野誠

舞囃子 経清
服部玲子　河村真之介　柳原冨司忠　大野誠

舞囃子 田村
水越弥生　河村真之介　柳原冨司忠　大野誠

後 当麻
大久保早苗　河村総一郎　福井啓次郎　鹿取希世　手嶋なみ江　河村総一郎　福井啓次郎　助川龍夫　鹿取希世

五段 求塚
柳山きよ子　鬼頭澄

能 三輪
不破峯子　高安勝久　河村総一郎　福井啓次郎　助川竜夫　鹿取希世　間　松田高義

後見　清沢一政　小島一英　地謡　松山幸親　本田勲　須部甫　加賀敏彦　高橋暸一　中川雅章　藤田邦久　祖父江修一

舞囃子 邯鄲百萬
林和子　笈後孝一郎　助川竜夫　大野誠　岩田加代　笈後孝一郎　大野誠

番外舞囃子 通小町
サシクセ　小林美和子　笈後孝一郎　大野誠

舞囃子 葛城
梅田邦久　河村真之介　柳原冨司忠　助川竜夫　鹿取希世

大和舞

附祝言

主催 清謡会
清沢一政
岡崎市竜美旭町五―九　電話〇五六四―五二―六九〇九
（終了予定　六時前）

〔御来場歓迎〕　補佐　梅田邦久

◆酷暑の夏から新涼への舞台◆

「青陽会」「普及公演」「衣斐後援会」「能」と「観世会」「鳳の会」

竹尾邦太郎

「班久」　シテ徹二、標浅黄・着付立湧地紋白練・萌黄色大口・掛絡は覚悟の程の死装束。鎌倉へ引かれて行く途次、清水観音に暇乞いの祈念をワキ土屋三郎(勝久)に願い出る冒頭の、従容たる態度が先ず立派なら、京を離れるにつれてふと寂寥を覚え、へ雪の富士の嶺、と感慨深げに一ノ松から左へ見上げる心持も深い。床几に居て虜囚になった呟きの、へかくて永らへ、の語気つい強く、屈辱より断罪を願う心に、同情措く能わざるワキの風情もよく、シテに許した説経を聴聞の程にシテと連吟になるところも結構。首の座に直ってからの奇跡、物着後の男舞、そこには揺らない感恩の気持があって興味しかった。直面物は先代秀雄が得手としたがそれを凌ぐ出来栄え。（1時間7分）

「班女」　シテ敏彦、思い人一途、頑なに心を閉ざして座敷に侍らない遊女花子。アイ宿ノ長・祐一に面罵されて暇を出される切迫のときに、依怙地より優柔不断の印象を受けたが、投げ捨てられた形見の扇をしめやかに両手で拾い上げ、右手に持つと左手でひっそりシオル哀感に、思い人愛しの気持が溢れる。カケリは心に懸かる狂乱とは云え、くる〳〵小廻りのところ少々ぎこちないが、クセ中の型どころ、へ欄干に立ちつくして、と右手の扇を抱きしめ、へ其方の空よと、と左へ見上げる辺りの情緒は中々。控え目な気分は中ノ舞からキリへと揺曳し、慎ましいシテだった。（1時間22分）

「鶏流」　流は立（りゅう）、立は泣の旁で泣は鳴に通じる。「舟ふな」「お冷し」と異曲同工で、鶏は「鳴く」か「歌う」か、がテーマである。しかし、古歌の応酬で互いの正当化を言って遊ぶ余裕がアド主（友彦）に皆無で、シテ太郎冠者（融）の、漢詩にまで及ぶ歌の造詣の深さが一方的に強調されるのが下剋上の興味で稀曲。融の口跡の爽やかさを大いに買うが、小僧らしさが滲み出るのはとれから。（16分）

「安達原・白頭」　シテ幸江、紺縹水衣を着る。面は、白頭のとき観世は概ね姥を掛けるが痩女、姥髪に重なる毛描きの黒が異様に妖しい雰囲気を醸し出す。静かに糸繰るところ、へ世渡る業こそ物憂けれ、とふと手を止めるのは、客僧共をどう捌くかの思案の発端とみえ、浮世の明け暮れを〳〵悲し、とシオル嗜眠から居グセのトメのシオリ、へ恨みてもかひなかりけれ、は好餌となる客僧へのそれとも思われ、糸ノ段に〳〵月に夜をや待ちぬらん、と呟くかに手を止め右ウケたところなど、頬の削げた面の冷やかな鬼気は痩女演出の妙である。

中入は疑心で一ノ松に止まり、ワキ（元）を見返ると小走りに入るが、暗鬼を生ずるのは己れの影の皮肉である。アイ祐一、睡眠三態に鼠を追っ払う型は無く、舟を漕ぐうちにがくっと頭を落したついでにワキを盗み見る抜目の無さ。聞は覗くや恐怖を封ずるかにぴたり閉めたが、中途半端がよくはないだろうか。

後シテは走り出て一ノ松、裏切られた恨みは〳〵胸を焦す焔、と打杖の先を胸に当てて悔しさを涙らせる。水衣を巻いた負桀を捨てると身軽になり、祈りの中、シテ柱に摺まり怒りに身悶えして打杖振りかぶる辺り鋭い。キリ地の〳〵漂ひ廻る、で飛返り萩柴屋に向くが先に〳〵足元はよろ〳〵と、とあるので疑問。最後は〳〵夜嵐の音に、と走り込み残り留、前シテが殊によかった。（1時間5分・8月6日・青陽会）

「昆布売」　シテ融、アド何某・礼之助。このコンビで本年三度目、「慣れ」はよいが「仰れ」は禁物、いつも真摯に勤める融が初初しい。「ヤイ昆布買へ昆布買へ」の礼之助の横柄が相変らずの迫力。（24分）

「実盛」　シテ邦久。「だてらに」が死語になり久しい。「女だてらに」などと、ふさわしくない意を表した。されば、「老人だてらに」と指弾されるのを惧れ、恥辱を知る実盛は白髪を染めて合戦に赴く。その意気は正に壮烈、そこには戦で消耗する体力の、所謂ペース配分などありようもない。クセ中、へ錦の袂を、と颯と袖を返し、大きく〳〵飜し、て解くところや、へ名を北国の巷に揚げん、とスミ框一杯にぐいと出るところの意気込みが素晴しい。地（邦弘・徹二ら）との掛合に、義仲との組打ちを〳〵手塚めに隔てられ、た無念は息も上らんばかり。スミで首掻き切る型も鮮やかに、キリ地に立つと、へ枯木の力も折れて、と右左と膝を着いて安座するのが如何にも力尽きた感じ、邦久の全力投入の一所懸命が爽やかだった。ワキ雅介、前シテとの問答・掛合の慎重味がよい。（1時間36分・8月20日・能・狂言普及公演一部）

「杜若」　ワキ旅僧・和哉が厳歎久しく見つめるのに気羞いしてシテ杜若ノ精・正宜が里女に変じて出るところ、へ色も一入濃紫の、と三ノ松に止まって直シ、へあら心なの旅人やな、と旅僧にアシラフのが、気詰まりな空気を破る趣。打ち解け、宿を勧めて思い出の衣冠を着ければ、里女は忽ち杜若ノ精、それは亦菜平に生き写しである。面増・初冠垂纓（追懸付）・襟白二・赤地縫箔（金霞ニ花尽色紙散文）・紫長絹（金破レ菜平菱ニ花ノ丸文）の装束が実に好ましい。

物着済みワキとの問答の間、左袖微かに震えるのは気分の昂揚か。舞クセは型少なく、へ光も乱れて飛ぶ螢の、とつつと運びを速めて出ると、へ雲の上まで、と左袖返シ引分けるところが特に印象的。舞は手堅くて切い少ない感じだったが、キリの型、へ似たりや似たり、の招キ扇で正先に出、へ梢に鳴くは、と右へ目付柱高く見、へ蟬の唐衣の、と左袖を右の扇で受けて抱くように沈み、下居したのが艶めいた。（1時間14分）

「清水」　「清水の汲みようを知っているか」、と剛性せっかちな主・友彦、雑用御勘弁の気持は「いや存じません」、と間髪容れぬ思慮不足のシテ太郎冠者・靖治。されば、の水汲み講釈に、「それ程のことは知っています」、と忽然となるところ、成り行きも暗示されて両者、役柄を得た。（26分）

「藤戸」　シテ漁師ノ母・良雄、襟浅黄・紺無地裂斗目・無紅（朽葉地萌黄縦縞蒲公英文）唐織・面曲見、我が子の横死を泣訴して平然と居るワキ盛綱・和哉に取り乱し、声高になるのを大喝されて瞬時冷やりとした緊迫に包まれるところ、引き付ける。次第に事の全貌が明かされる坦々としたワキ語もよく、シテの表情はクセに微妙。上ケ端前、へ待遠に思ひしに、と遥くテラス儚い望みは、へまた何時の世に、と薄くクモッてシオル落胆が切なく、上ケ端後の、へ亡き子と同じ道になして、とぐっと居立ち、へ賜ばせ給へと、とすっと立つや双手を上げてワキに迫る激情は、突き放されて安座双シオリの〳〵現なき有様、アイ祐一ならずとも恂隠の情に駆られた。アイに促されて立ったシテは暫時ワキを見詰め、一方ワキは右頬にシテの視線を感じつつ真直ぐ前方を見ているのも両者の心の在り様である。

後シテ漁師ノ亡霊は面痩男・黒頭・白縹水衣・腰蓑。刺殺の場はワキ語に「二刀刺し」とある様に先ず一刺し。泳ぐところを、を前にすっと出ることで表わし、更に一刺しも敗下を深々と貫き鮮やか。キリ中、へ悪龍の水神となって、恨みをぶつけんとするところは、ワキへ詰めるだけ。トメは、へ成仏得脱の身となりぬ、と小廻りして杖を放し合掌すると、返シに右ウケ留拍子、後は全体にやわらかな行き方にみえた。（1時間12分・8月27日・第11回衣斐正宜後援会能）

「半蔀」　シテ盛義・前シテの清楚より艶麗な感じは、へ恩かのお僧の仰せやな、と一ノ松でゆっくりワキ旅僧・勝久に向くところなど、コケティッシュな程の美形である。後シテは褪色した緋大口にくすんだ浅黄長絹の色調が沈み何となく古色蒼然とした印象が損。序ノ舞も、袖を被いて半蔀の下に入るところ、ほのぼのと白く浮き出るような夕顔の風情が感じられない。地謡にシテの心を体するところが欠けるのか、何かもどかしかったのも遠因。（1時間18分）

「悪太郎」　シテ礼之助、伯父祐一に「軽う」、の遠慮も喉元過ぎれば「軽いは気味が悪い」、と図に乗るが、少々酒が弱くなったか、へあの山みさい、は高歌放吟とは参らない。酔臥中、剃髪された上に「南無阿弥陀仏」を法名にインプットされてその気になる単細胞ぶりは、称号唱える僧友彦に応答して怪しまれ、挙句は僧共々法楽境に遊ぶのも無邪気だった。（40分）

「融・鵜」　シテ祥六。担桶を前後共に手繰らずぶら〳〵させて出る。汐を汲むのは正中で担桶を投げ出すのだが、不粋な音を殺すのは至難。しかし瑣事に拘らない気っ風が見えて、融大臣の化現らしい尉の骨柄の大きさ。後は小立烏帽子・紫指貫・白単狩衣に太刀を佩く。へあら面白や、と扇をスミへ投げるのも鮮やか（拾うのは案外）。小書で早舞の中に三ノ松へ抜けてクツロギ、三鼓の流シで戻る辺の溯遡味は、舞上げて地との掛合に、きび〳〵と型を極めて小気味よく爽快。ワキ雅之助の残り留。（1時間23分・9月10日・観世会）

「お用の尼」　新作。僧・友彦は角頭巾・長衣、尼・祐一は無紅縫箔着流・白花帽子・面尼・番袋で腰には瓢。何事にもあれ御用を足す尼、というのが僧尼だけの世界で些か胡散臭く、事実、話は色塀みで猥雑に進展するのが露骨で厭らしい。「笑い」のベースも僧の読経の「むにやら」と、被布を奪れば醜女或は妻女の出現（「因幡堂」「釣針」など）、の流用で少々浅薄。それに念仏三昧とは云え読経は冗長に思える。熱演は買うが曲に品が無かった。（38分・9月15日・鳳の会）

観世流・金剛流
宗家本発行元
檜書店
〒101　東京都千代田区神田小川町2－1
電　話03（3291）2488　振替 00130-7-3552
〒604　京都市中京区二条通麩屋町東入
電　話075（231）1990　振替 01010-0-113

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18-18
（郵便番号　464）
電　話（052）731－7984
振替口座 00800-6-36393
購読料　1年1100円
郵送の場合　1年1800円
一　部　100円

◈ 演能カレンダー ◈（熱田神宮能楽殿）

〔11月〕
23日（祝）和泉会（有料）
25日（土）清麗会（来場歓迎）
26日（日）久田観正会（来場歓迎）（番組①面）
〔12月〕
2日（土）名古屋幽花会（来場歓迎）（番組①面）
3日（日）歳末助け合い協賛能（有料）（番組②面）
9日（土）青嶺会囃子会（来場歓迎）（番組②面）
10日（日）壺泉会能（有料）（番組③面）
13日（水）花伝の会（有料）（番組③面）
24日（日）能楽殿創立40周年記念乱能（有料）（番組③面）
〔平成8年〕
〔1月〕
3日（水）能楽協会名古屋支部謡初式
6日（土）鳳の会（有料）
7日（日）学生能（来場歓迎）
15日（祝）名古屋清韻会大会（来場歓迎）
20日（土）青陽会定式能（有料）
〔2月〕
4日（日）宝生会定式能（有料）
11日（祝）富翔会（来場歓迎）
12日（振休）観世会定式能（有料）
17日（土）初陽会大会（来場歓迎）
18日（日）九皐会定期能（有料）
24日（土）恵美須会（来場歓迎）
25日（日）恵美須会（来場歓迎）
（演能変更の節はご了解下さい）

歳末助け合い運動　協賛能

能楽協会名古屋支部主催

12月3日　能3番上演

能楽協会名古屋支部（野村又三郎支部長）主催による平成七年度の歳末助け合い運動「協賛能」はきたる十二月三日（日）熱田神宮能楽殿で、宝生流、観世流による能三番、和泉流狂言、金剛流舞囃子、金春流、喜多流仕舞など協会支部能楽師の出演で開催される。

この助け合い運動協賛能は、毎年能楽協会名古屋支部の主催で行われ、今回は第二十七回目。昨年は愛好者の協力により、愛知県へ二十五万五千四百八十円、名古屋市へ二十五万五千四百八十円、合計五十一万九百六十円が寄付された。

演能は、宝生流能「清経」（シテ稲川寿一）観世流能「富士太鼓」（シテ近藤幸江）観世流能「殺生石」（シテ清沢一政）

狂言「盤山伏」（大野弘之、佐藤融、井上靖浩）金剛流舞囃子「西王母」（百々康治）仕舞・金春流「難波」（鈴木寿）喜多流「松風」（和谷衛市）

午前十時半開演、入場料前売り二千五百円（当日券三千円）全館自由席、前売取り扱いは、熱田神宮能楽殿（TEL052・682・1751）、各出演楽師宅、チケットぴあ、市内各プレイガイド。

（番組②面）

熱田能楽殿創立40年　12月24日　記念乱能

熱田神宮能楽殿

能楽協会名古屋支部では、熱田神宮能楽殿創立四十年を祝して、本年は、愛好者による能楽大会を二回にわたり開催してきたが、その掉尾を飾って、きたる十二月二十四日(日)、熱田神宮能楽殿創立四十年記念の「乱能」を開催する。

支部主催の「乱能」は、昭和六十年に「熱田神宮能楽殿創立三十周年記念乱能」、平成元年に「名古屋市制百年を記念する乱能」平成五年に「熱田神宮能楽殿改修募金勧進能」と銘うっての乱能で、二年ぶりの催しである。

演能は、能「鶴亀」「吉野天人」「葵上」の三番。狂言「棒縛」「茸」舞囃子「熊坂」「融」ほか仕舞、狂言小舞など。

来場者には受付で記念の菓子とパックのお茶が呈上される。色紙の福引き（二千円）も行われる。入場料は全自由席三千円。

芸術院会員に　片山九郎右衛門氏

日本芸術院（大丸亀院長）は、このほど今年度の会員補充選挙を行い、新たに六人を会員に内定した。邦楽部門で、観世流シテ方・片山九郎右衛門氏、洋画・熊田広喜、平松譲、彫塑・長江鉞弥、文芸部門で詩歌・大岡信、洋楽の伊藤京子の諸氏が新会員となる。十二月十五日付で文部大臣から発令される。

片山九郎右衛門氏は、本名・博太郎（ひろたろう）。緻密な芸は現代の能の指標ともいえる。昭和五年、片山博通長男として京都に生まれる。昭和五十八年観世寿夫記念法政大学能楽賞、平成元年芸術院賞、平成六年紫綬褒章受章。

金春流太鼓　青耀会囃子会

12月9日　熱田で記念会

金春流太鼓・青耀会（主宰上田悟師）では、大阪青耀会十五周年、名古屋青耀会十周年を記念して、きたる十二月九日午前十時から、熱田神宮能楽殿で記念囃子会を開催する。

当日は名古屋、関西地区の会員の出演、囃子二十数番、連調、独調など。番外独鼓「三笑」（梅田邦久、上田悟）が上演される。番組②面参照）

久田観正会秋季大会

十一月二十六日（日）十時始
熱田神宮能楽殿

仕舞　田村キリ　小沙保経　敦盛クセ杉東優子　小塩キリ船橋里美　草子洗小町髪堀江達雄
仕舞　柏崎道行　村井すみ子　枕之段永坂千鶴子　蝉丸　山田和子
仕舞　邯鄲アト　前川幸子　三輪　放下僧小歌岡田康子　菊慈童中村萩枝
素謡　蝉丸　久田政子　加藤久枝　岩田実
舞囃子　盛久　山内ふさ　吉田定男　柳原富司忠　竹市学
舞囃子　松風　磯部信義　吉田定男　柳原富司忠　大野誠
舞囃子　井筒　金井美晴　笈田鉱一　久田舜一郎　大野誠
舞囃子　女郎花　梅村展子　吉田定男　柳原富司忠　竹市学
素謡　望月　瀬戸三津子　前野郁子　服部喜美子　久田徹二
仕舞　放下僧小歌佐野安男　杜梅クセ稲垣つね子　若キリ服部喜美子　玉之段田中雅子　女舞アト近藤とこ代
舞囃子　頼政　神谷貞子　笈田鉱一　柳原富司忠　竹市学
舞囃子　楊貴妃　石黒操子　笈田鉱一　福井啓次郎　大野誠
舞囃子　松虫　神谷功　吉田定男　福井啓次郎　大野誠
舞囃子　歌占　市野美代子　笈田鉱一　久田舜一郎　鹿取希世
舞囃子　巻絹　平野裕子　笈田鉱一　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　鹿取希世
舞囃子　山姥　大場はま子　河村真之介　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　鹿取希世
番外仕舞　弱法師　浦田保利
番外仕舞　遊行柳　義経　松山晃之　静御前　石黒直子　平知盛
能　船弁慶　弁慶　高安勝久　辻本正樹　河村真之介　久田舜一郎　鬼頭喜太郎　驛田六郎兵衛
間　野村又三郎
番外仕舞　附祝言　遊行柳クセ　久田徹二
（終了予定　四時半頃）
〔御来聴歓迎〕　主催　久田観正会

片山博通三十三回忌追善　名古屋　幽花会秋季大会

十二月二日（土）午前十時始
熱田神宮能楽殿

舞囃子　百萬　片山慶次郎　河村総一郎　林光寿　助川龍夫　光田洋一
仕舞　杜芭海　若キリ藤原美哉子　蕉キリ伊藤やす子　士キリ富岡道代
素謡　雨月　宮崎晃吉　波方晃　三上文夫
素謡　弱法師　藤野正　杉浦健之祐
舞囃子　班女　村川喜久子　河村真之介　林光寿　光田洋一
舞囃子　唐船　森万紀子　河村真之介　林光寿　助川龍夫　光田洋一
素謡　求塚　村川喜久子　村木玲子　宮崎昌子　野村満子
砧　小田和季　富田まさ子　片山慶次郎
独吟　隅田川　辻井けい
片山伸吾　村木寛茂
能　葵上　梓之出　高安勝久　飯富雅介　河村総一郎　林光寿　助川龍夫　光田洋一
間　野村又三郎
仕舞　屋島　山崎立実　玉鬘　富田フク　柏崎道　石原雅子
義経　高宮正彦　子森万紀子　姉徳岡孝二　尊　松枝寅太郎　大江正照
素謡　正清　経　比江島孝子　河村真之介　林光寿　光田洋一
舞囃子　野宮　村木玲子　河村総一郎　林光寿　光田洋一
素謡　藤戸　宮崎晃吉　奥村昭男　石川輝夫
仕舞　邯鄲　鞍馬天狗　東山清和　誓願寺　小泉いく子　岡本耕蔵
番外舞囃子　融　松風　片山九郎右衛門　片山清司
（終了予定　五時過頃）
〔御来場歓迎〕　主催　名古屋幽花会　片山慶次郎　片山伸吾

春雅日記 (166)

萬葉の花紀行 ②

えと文 二井栄逸

やぶこうじは、古くは、やまたちばなの名で万葉集をはじめ、源氏物語、能の文章にもよく出てくる。

この雪の　消（け）残る時にいざ行かな　山たちばなの実の照るも見む

――大伴家持――

今日降ったこの雪の消えて少し残っている頃に山にゆきたいものだ。そしてやまたちばなの実が雪に映じて赤々と光っているのを見ようと思うのが、歌の意で、いかにも優雅で美しい歌である。

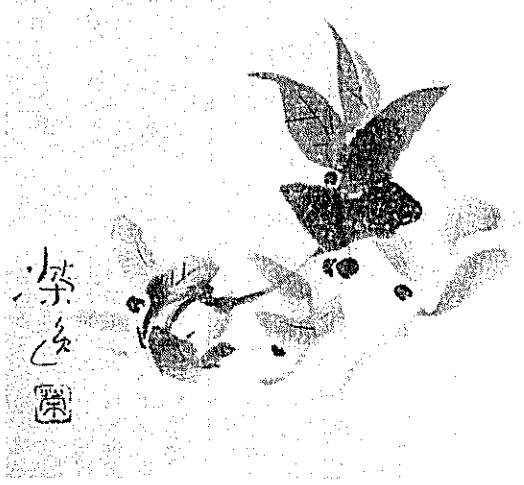
やぶこうじを好んだ父は、庭の赤松の木の下に、やぶこうじをたくさん植えて楽しんでいたことを覚えている。昔は、この辺でも雪がよく降ったし、雪の降る日は、やまたちばなの実が雪にうづまって赤さが冴えざえと美しかったことも忘れ得ない。

いくつかの説があるが、万葉は永い時代にわたる意、葉はコトバを示し、したがって万葉集は多数の歌を集めた日本国民共有の一大歌集である、ということが出来る。

× × ×

同じように赤い実をつけるものに万両（まんりょう）千両（せんりょう）からたちばな（百両）やぶこうじ（十両）アカモノ（一両）等、縁起のよい植物として重宝がられているのも面白い、アカモノは、一名いわはぜともいい、紫葉、果実とも紅色なのでこの名がある。

（スケッチはやまたちばな）



21世紀に向けて能と狂言を考える会
能楽座公演 12月24日 国立能楽堂

東西の能楽師が流派を越えて、二十一世紀に向けて能と狂言を考える会として「能楽座」が結成され、その公演がきたる十二月二十四日（日）東京・国立能楽堂で、第一部（開演午後十二時三十分始）第二部（開演午後四時三十分始）の二部制で行われる。

第一部は、舞囃子「高砂」（粟谷菊生、一噌幸政、幸正昭、安福建雄、三島元太郎）一調「錦木」（近藤乾之助、宮増純三）

狂言「宗論」（野村万蔵、茂山千之丞、茂山千作）

能「朝長」（大槻文蔵、梅若六郎、宝生閑、一噌幸政、北村治、安福建雄、三島元太郎）

第二部能「三輪」（友枝昭世、宝生閑、藤田大五郎、宮増純三、柿原崇志、金春惣右衛門）

狂言「蚊相撲」（茂山千作、茂山忠三郎、山本東次郎）

能「国栖」（観世銕之丞、観世栄夫、工藤和哉、藤田六郎兵衛、大倉源次郎、亀井広忠、観世元信）

入場料（全席指定）S席一万円、A席八千円、B席六千円、C席三千円。

チケット取り扱い＝能楽座事務局（東京都渋谷区千駄ケ谷四―九―五―四〇一、TEL03・3478・8677）、チケットぴあ（03・5237・9999。）

「能楽座」の結成について、観世銕之丞代表は次のようにあいさつしている。

近年、能・狂言は能楽堂はもとより、各種文化施設、屋外、神社仏閣などで、さまざまな形態の上演が求められるようになってまいりました。また海外においても、能・狂言に深い関心が寄せられており、その国際的役割はたいへん重要になってきております。

全国各地にあらたに能楽堂が建てられ、地方文化施設においては仮設の能舞台が積極的に設置される一方で、能・狂言の制作に携わる人材の不足、上演計画のうすさ、また能楽そのものの情報不足が指摘され、その改善が今後の大きな課題であります。

私たちはそうした状況をふまえ、質の高い能・狂言を上演し、そのすばらしさ、面白さを各地域に広めていくために、そして、その伝統を継承し、さらに創造的な活動をする場として東西の能楽師が流派を越えて「能楽座」を結成しました。

能「井筒」観世銕之丞
狂言「彦市ばなし」茂山千之丞
12月3日 瀬戸市文化センター

きたる十二月三日、瀬戸市文化センターで、観世流・観世銕之丞氏、大蔵流狂言方・茂山千作、茂山千之丞の両氏はじめ、浅見真州、山本順之、観世暁夫の諸氏が来演して、能「井筒」、狂言「彦市ばなし」が上演される。

企画・主催は能に親しむ会、構成藤田六郎兵衛氏、後援瀬戸市、瀬戸市教委、瀬戸市文化協会。同会は平成二年能楽の普及をめざし瀬戸市に誕生、これまで〝日本に出合う能・狂言〟のタイトルで毎年能を公演している。

今回は、とくに木下順二作の民話劇が狂言となった「彦市ばなし」（彦市・茂山千之丞、天狗・茂山童司、殿さま・茂山千作）と、能「井筒」の上演。

「井筒」の出演は、シテ・観世銕之丞、ワキ・高井松男、間・英山あきら、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・後藤孝一郎、大鼓・河村総一郎、後見・浅見真州、柴田稔、地謡・山本順之、観世暁夫、清水寛二、岡田麗史、遠田修、加藤其悟、八田達彌、馬野正基の諸氏。

午後一時開演、瀬戸市文化センターは、瀬戸市西茨町一一三（TEL0561・84・1811）

前売券指定席七千五百円、自由席五千円、当日券指定席八千五百円、自由席六千円。チケットは、能に親しむ会事務局（TEL0561・82・5582、夜間0561・83・6611、瀬戸市文化センター、ユニー瀬戸店プレイガイドなどで発売中。

〔お詫び〕本紙前号・前々号①面「演能カレンダー」のうち「12月16日（土）久田敬二能リサイタル」とあるのは間違いでした。一部にご迷惑をおかけしたことをお詫びして削除いたします。

歳末助け合い運動
協賛 能（第二十七回）

十二月三日（日）午前十時半始
熱田神宮能楽殿

舞囃子（剛）西王母 百々康治 河崎勲 後藤孝一郎 鬼頭喜太郎 竹市学

能（宝）清経 玉井博祐 稲川寿一 杉江元 福井良治 河村真之介 大野誠 地謡 小林幸司 竹市憲三 菊川憲三

仕舞（春）難波 鈴木寿 地謡 加藤正嗣 伊藤雄二 小島芳樹

（喜）松風 和谷衛市 地謡 長田長巳 吉川寛治 長田暁郎 後見 戸田和 竹内澄子 地謡 石森智幸 安江良郎 加賀山徳治 久野幸三 鬼頭嘉男 衣斐孝宣 佐藤耕司

能（観）富士太鼓 松山晃之 近藤幸江 高安勝久 筧鉱一 柳原富司 鹿取希世 間 野村信行 後見 瀬戸三津子 泉嘉夫 前野郁子 地謡 八神孝充 黒田博 松山幸親 本田勲 中川順部 久田徹二 加賀敏彦 雅章甫

狂言（和）蟹山伏 大野弘之 佐藤殿 井上靖浩 後見 今枝靖雄

能（観）殺生石 清沢一政 飯富雅介 吉田定男 後藤嘉津幸 助川龍夫 竹市学 間 佐藤友彦 後見 三村恵子 梅田邦久 今沢美和 地謡 高島良一 今村嘉勇 古橋正邦 本田勲 加藤保彦 祖父江修一 須部甫 高橋晾一

（終了 三時頃）

附祝言

主催 能楽協会名古屋支部

◎入場料（全館自由席）前売券 二、五〇〇円 当日券三、〇〇〇円、学生券 一、五〇〇円。

◎前売券発売 熱田神宮能楽殿、各出演者宅、チケット『びあ』チケット『セゾン』、市内各プレイガイド

◎お問合せ 熱田神宮能楽殿TEL六八二―一七五一

大阪青耀会十五周年
名古屋青耀会十周年 記念囃子会

十二月九日（日）午前十時始
熱田神宮能楽殿

連調 出端 上田慎也 上田悟 高砂 石黒鏡子 守家上田 由訓敦史 松久保美恵子 鹿取希世 竹生島 前田和子 守家上田 由訓敦史 目黒美保子 鹿取希世 西王母 水谷圭子 守家上田 由訓敦史 鍾村としゑ 鹿取希世

葛城 瀬戸咸子 河村真之介 大倉源次郎 山中鹿取希世 菊慈童 田川キヌ 河村真之介 大倉源次郎 小橋克江 藤田六郎兵衛 猩々 稲葉正信 河村真之介 久田舜一郎 中村福子 藤田六郎兵衛 龍田 寺田雅美 河村真之介 久田舜一郎 高木町子 鹿取希世 邯鄲 吉川崇 上野義雄 久田舜一郎 吉田忠弘 鹿取希世 養老 岩田時代 上野義雄 久田舜一郎 田川キヌ 鹿取希世 東方朔 高野千勢子 森崎紀子 上野義雄 大倉源次郎 阿部慶子 藤田六郎兵衛 巻絹 鍾村としゑ 上野義雄 大倉源次郎 篠村玲子 藤田六郎兵衛 当麻 井上苑枝 守家大倉源次郎 由訓 松浦季子 藤田六郎兵衛

独調 右近 山本良子 正雄 横井敬子 六浦 青山さよ子 能 坂中道勝美

須磨源氏 河村真之介 大倉源次郎 西本壽子 藤田六郎兵衛 小鍛冶 上野義雄 久田舜一郎 篠原典子 鹿取希世 鞍馬天狗 上野義雄 久田舜一郎 矢野恵美子 鹿取希世 紅葉狩 上野義雄 久田舜一郎 中平晴世 藤田六郎兵衛 船 上田大介 守家大倉源次郎 由訓 武市温子 藤田六郎兵衛 岩 上田大介 守家大倉源次郎 由訓 奥野智登利 藤田六郎兵衛 山姥 上田知代 守家大倉源次郎 由訓 浜静 藤田六郎兵衛 羽衣 森勝子 守家大倉源次郎 由訓 上野義雄 大倉源次郎 野守 山本正人 上田敦史 大川典良 鹿取希世 三輪 山本博通 上野義雄 久田舜一郎 瀬戸咸子 鹿取希世 船弁慶 井戸和男 河村真之介 上田敦史 釜鳴鮑子 鹿取希世 老松 久田徹二 河村真之介 久田舜一郎 近藤文子 藤田六郎兵衛 阿漕 波多野晋 河村真之介 大倉源次郎 三宅川公香 藤田六郎兵衛 善界 上田拓司 守家久田舜一郎 由訓 岩田時代 鹿取希世 遊行柳 梅田邦久 守家大倉源次郎 由訓 入口美喜代 藤田六郎兵衛 絵馬 笠田昭雄 斉藤信隆 赤松禎友 河村真之介 久田舜一郎 平出京子 藤田六郎兵衛

〔御来場歓迎〕

三笑 梅田邦久 上田悟 金春流太鼓 主催 青耀会 上田慎也 上田悟

名古屋狂言史余話（九）

佐藤友彦

ここで本題からは少し離れることとなるが、明治以降に行なわれた当地の能舞台について触れておこう。故内藤泰二師著の『眼・名古屋から』に町方能役者私邸の舞台として、以下の舞台が挙げられている。

○早川舞台・和泉流早川幸八
○山脇舞台・和泉流山脇伊津美
○大野舞台・宝生流大野藤五郎
○古春舞台・宝生流古春増五郎
○木下舞台・観世流木下敬賢

早川舞台は日之出町大乗院境内にあった。明治二年頃から盛んに行なわれたが、明治十年七月に四代早川幸八が没して後、十一年十月十二・十三の両日に行なわれた催しを最後に演能記録は見出せない。

山脇舞台は巾下の御姫様屋敷跡に、十三世山脇和泉元貞が建立し、その後十四世元業が見物場を設けて「寿泉軒」と称したものである。維新後はかなり早い時期に退転したと見られ、この山脇舞台での催しの記録は見当らない。

大野舞台はお役者だった宝生流大野藤五郎所有の舞台で、巾下井桁町にあり、山脇舞台とは隣に位置したらしい。（本紙三月号参照）大野延年台とも呼ばれ、明治初期から早川舞台と並んで盛んに演能が行なわれたが、明治十一年に藤五郎が、さらに十三年には彦七郎も相次いで没したため、大阪より来名した古春増五郎がこれを引継ぐこととなる。

片岡喜平治が書き留めた明治十二、三年頃の能番組が「寮拾雑集」（名古屋市史編纂資料・鶴舞図書館蔵）に収められているが、これに明治十二年十二月四・五日の催能が見られ、おそらくこれが大野舞台の最後の演能だったと思われる。

古春増五郎に関しては本紙平成六年十二月と本年一月号で飯塚恵理人氏が詳しく述べられており、明治十二年頃来名したものであろう。この年大野舞台の最後の演能で、翁付咸陽宮、満仲を舞っている。

前記「寮拾雑集」には古春が上園町一丁目に居を構え、ここに大野舞台を移した舞台披きの挨拶状が写されている。年月日は不明だが、同書の内に『（明治十三年）三月十三日　上園町壱町目三十三番地　於古春宅　稽古能』と十四日の二日間にわたる番組が見られ、古春自身、翁付萬砂、葛城を演じている。大野舞台を年末に移築したとしても三ケ月後のことであり、時期的にもこれが古春舞台の最初に限りなく近い興行であったと考えられる。以後古春は保能会を中心に数年間ではあるが、旺盛な舞台活動を続けて行くこととなるのである。

手許の資料では古春の名が最後に見られるのは、明治十七年三月九、十六日の二日間にわたって古春舞台で行なわれた、山脇元賀・山脇得平・早川幸八三師追悼の能である。ここでは飯塚氏が指摘される通り、古春左右衛門の名で、蟬丸、俊寛を勤めている。これ以降古春の名は名古屋能楽界から姿を消すこととなるのだが、この二ケ月後の十七年五月十八日には大阪で、古春左右衛門が亡父追悼の会を催し、「鼠月」を勤めることが新聞記事に予告されている。「亡父追悼」とあるからには、古春増五郎本人と推測される。

さらにこれとは別に明治二十年五月二十九日に、大阪中の島翠柳館に故古春増五郎氏の追善能楽が催されている。（朝日新聞明治二十年五月二十七日）

なお、河村鍵三郎自筆の履歴書が遺されており、ここには「明治十弐年（十七才）上園町壱丁目古春舞台ニ於テ三番曳ヲ開ク」と記される。月日、会の記載なく、該当する資料も見当らないが、前記のごとく、十二年十二月四、五日に巾下大野宅で催能の記録があり、その後年内に移築、古春宅で演ぜられたとは考えにくく、この鍵三郎履歴書は晩年に記されたもので、おそらく何らかの記憶違いがあるものであろう。

古春がいなくなってからも、上園町の舞台はしばらく名古屋での演能活動の中心となった。木下敬賢を中心に保能会は毎月のように演能を続け、「お能の番組」でうかがわれるだけでも明治十九年六月十三日には既に三十六回を数えている。

明治十八年一月十八日保能会（二十三回）以後は「上園町一丁目木下舞台」と記されるようになる。この木下舞台も十九年十月二十三日の演能以後、姿を消してしまうのである。以後二十七年六月に博物館内に能舞台が建設されるまで、名古屋能楽界は、拠点となる能舞台を持つことなく、臨時の会場を求めてさすらうこととなる。

以下うかがい知られる催能記録と会場は以下の通りである。

明20・12・07　追善能狂言　白川町寿経寺
明21・04・08　木下正三郎追善　門前町阿弥陀寺
明21・06・01　大谷光瑩襲応　東本願寺
明21・10・14　山脇元賀追善　門前町性高院
明22・03・25　若宮神社献能　若宮神社献能
明22・11・12　山脇和泉追善　山脇和泉追善
明23・05・18　門前町博物館内　内田忠蔵追善
明24・03・21　川西四軒道光明院
明24・03・27　奉納能　徳川侯邸内義宜侯霊社
明24・04・16　月次狂言研究会　門前町博物館品評所
明24・06・13　東照宮能狂言　東照宮献能
明25・03・05 06　東照宮献能　東照宮献能
明25・06・01 02　東照宮奉納狂言　東照宮奉納狂言
明25・11・12　狂言尽し　愛知博物館内
明25・12・03 04　東照宮の献能　博物館の狂言
明26・04・23　博物館の狂言　博物館の狂言
明26・11・11　博物館の狂言　博物館の狂言
明26・11・23　奉納能　徳川義宜侯社社務所
明27・05・06　東照宮能狂言奉納　東照宮能狂言奉納
明27・06・09　東照宮奉納能　東照宮奉納能

（能者は和泉流狂言方）

壺泉会能

十二月十日（日）午後一時始
熱田神宮能楽殿

狂言　雁大名
大名　野村又三郎　太郎冠者　野村信行
雁屋　松田高義

後見　井上礼之助

仕舞　忠度　浅見真州　地謡　鶴島三克　泉嘉彦　山本正人　今村嘉夫　遊勇

独吟　近江八景　泉泰孝

能　大原御幸
大臣　野見山光政　宮増純三
ワキ　鈴木岩男　高橋正光　河村其之介　藤田六郎兵衛
コシ　安田登
アイ　野村信行

後見　泉近藤幸江　赤松奈孝　禎友　地謡　黒田博　松山幸親　節克彦　祖父江修一　山本正人　阿部信之　浅見真州　梅若善高

主催　壺泉会
〒466　名古屋市昭和区山手通3-8-2-305　泉嘉夫方

後援　朝日新聞社

〔入場料〕一般六千円、学生券二千円（全自由席）
取り扱い　市内各プレイガイド、熱田神宮能楽殿（052・682・1751）、泉嘉夫方（052・832・3185）

花伝の会若手能

十二月十三日（水）午後一時半始
熱田神宮能楽殿

一管鷺　藤田六郎兵衛

舞囃子　猩々乱　青木道喜　片山清司　白坂信行　柳原冨司忠　井上敬介　大野誠　双之舞

地謡　梅田邦久　河村博通　山本博通　片山伸吾

能　邯鄲
松山晃之　古橋正邦
飯冨杉江元　辻本雅介　橋本正樹　宰　守家由訓　吉阪一郎　前川光長　竹市学

間　佐藤融

後見　梅田邦久　片山九郎右衛門　地謡　片山伸吾　味方玄　山本博通　河村博重　片山清司　青木道喜

入場料　三千五百円（当日券四千円）全自由席
学生券二千五百円、団体割引（10名以上）あります。
申し込み　花伝の会事務局（052・571・3484〈FAX共〉）
又は熱田神宮能楽殿（052・682・1751）

熱田神宮能楽殿創立四十年記念乱能

十二月二十四日（日）午前十時半始
熱田神宮能楽殿

能組

鶴亀　後藤嘉津幸　河村其之介　福井啓次郎
大野弘之　井上松次郎　松田高義　長田驍　泉嘉夫　久田徹二　前野郁子　藤田六郎兵衛

能　吉野天人
竹市学　大野誠　杉江元　鹿取希世　後柳原冨司忠　前後藤孝一郎

間　加賀敏彦

後見　筧鉱一　高安勝久　井上祐一　地謡　佐藤融　後藤嘉津幸　高義　辻本正樹　松田

舞囃子　熊坂　高安勝久　須部吉川周子　地謡　辻本正樹　橋本宰　飯冨雅介　筧鉱一　杉江元　中川雅章　戸田和

狂言　棒縛　次郎冠者　武田邦弘　太郎冠者　梅田邦久　主　久田徹二

後見　古橋正邦

狂言小舞　雪山　松山幸親　広瀬雅弘　地謡　小島芳樹　伊藤　佐久間祥夫　鈴木寿雄二

舞囃子　三人長者　前田茂穂

暁　後見　野村信行　柳原冨司忠　飯冨雅介　地謡　井上祐一　鬼頭好信　福井良治　河崎靖浩　後藤孝一郎　河村其之介　筧鉱一　黙

狂言小舞　夷大黒　須戸三津子　加藤冨貴子　石河藤五郎　今沢美和　七つ子　生駒里翠　地謡　牧野恵元子　三沢恵子　熊野都子　前田智子　木村美智子　大野太郎　鬼頭喜　河村総一郎　河村其之介　筧鉱一　梅田邦久

舞囃子　融　河村総一郎　古橋正邦　玉井博祐　舞返　竹内澄子　野村信行　地謡　柳原冨司忠　福井啓次郎　福井良治

狂言　茸　山伏高橋暖一　何某佐藤耕司　茸本田　茸加藤保　茸和谷市　茸衡市司　茸姫茸　茸鬼頭茸　茸高島八神　百々良孝　稲川嘉一　康治充　地謡　福井啓次郎　福井良治　柳原冨司忠　後見　黒田博

能　葵上
高砂　筧鉱一
仕舞　羽衣　鬼頭喜太郎　地謡　後藤嘉津幸　後藤孝一郎　柳原冨司忠
野村信行　野村又三郎
猩々　井上礼之助

後見　井上祐一　梓之出　空之祈　佐藤友彦　祖父江修一　武田邦弘　梅田邦久　加藤正嗣

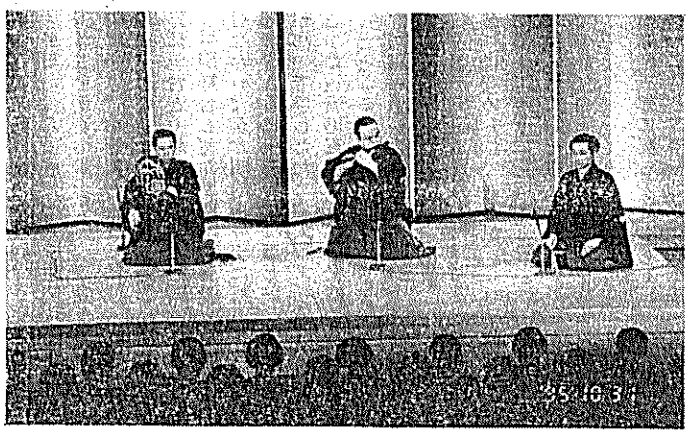
間　飯冨雅介

後見　井上礼之助　大野弘之　松田高義　地謡　佐藤融　竹市学　井上靖浩　河崎勲　後藤孝一郎　後藤嘉津幸　筧鉱一　河村其之介

終了予定　午後三時半頃

附祝言

主催　能楽協会名古屋支部
〔入場料〕三千円（全自由席）



徳川美術館開館60周年記念

よみがえる桃山の響き

マツザカヤホールで盛会

徳川美術館開館六十周年記念として、尾張徳川家秘蔵の荒田の鼓と笛・蟬折の音色を再見する特別企画「よみがえる桃山の響き」は本紙既報のように十月三十一日、マツザカヤホールで催され、観世清和、藤田六郎兵衛、大倉源次郎の各流儀宗家により演奏され、満席の来場を堪能させた。（写真は当日の演奏）

平成7年 11月・12月放送

〔11月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）
26日（日）「　砧　」～観世流～片山九郎右衛門
〔12月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）
3日（日）「通　小　町」～観世流～　泉　桂孝
10日（日）「夷　盛」～宝生流～　近藤乾之助
17日（日）「黒　塚」～喜多流～　粟谷　菊生
24日（日）　（休止）
31日（日）「　巴　」～観世流～　山本　勝一
〔テレビ〕NHK教育テレビ
12月9日（土）午後8時45分
「芸能花舞台　～　よみがえる桃山の響き～」
「龍田川辺」ほか
笛・藤田六郎兵衛
小鼓・大倉源次郎
謡・観世　清和
～マツザカヤホールでの録画～

◈ 清秋の舞台から ◈

「九皐会」「宝生会」「大槻自主公演能」と「名古屋・万之丞の会」

竹尾邦太郎

「松風・戯ノ舞」　シテ喜之。均整のとれた緑美しい松に紅い短冊も貫（あて）やかな正先の作物。それは松風が行平への思慕を募らせ、幻惑に纏わり戯れさせるに充分な佇まいである。さればクセ、へげにや古を、と小立烏帽子に長絹（紫地、扇面ト葛文様）を持つシテの、一方ならぬ追懐の情緒の纏綿と地（三郎・喜久ら）が謡い上げれば、形見の品の焦めつ眇めつも切なく、クセ後半、へ取れば面影に、と抱き抱き、退ると抱いたまま安座して深く頭を垂れるのもへ涙に伏し沈む、悲しさ。この悲嘆が物着で烏帽に転じ、更に狂乱へ亢進してゆくところに効き、戯ノ舞のトメに位進んで極く狭い松の外周をすり抜けるのが見事の一語、精神の高潮がこの一点に凝縮されるかに思えた。

次いでワキ正から松に寄ると短冊を両手に取って詠み、へそれは因幡の、と幕を見るのも感傷的気分。キリは、へ吹くや後の山風、と月ノ扇に一ノ松で来し方を見るとする〳〵幕に入り、ワキ雅介が常座で見送り、へ松風ばかりや、と松の方を見てからトメ。ツレ直也の節度ある挙措も好ましかった。（1時間40分）

「柿山伏」　断りはしても畑主（友彦）不在では盗みの汚名免れられないが、渇きには堪らず柿の木に登るシテ山伏・融、夢中に喰らいつく折柄発見されては観念せざるを得ない。リモコンよろしく足場の悪い山伏を地上からいいように翻弄する畑主と、惑に擬され「飛ぶか」とけしかけられて真剣に思案する融、親子競演の隠し味が見えた。（18分）

「項羽」　シテ尉・喜正が渡船賃代りに美人草を謂えば、不審したワキ草刈男達（勝久・元・正樹）は、尉が語る四面楚歌の項羽と龍姫虞氏の故事にその謂れを知り、尉は素性洩らし、跡弔い給え、と消える。味方の背叛に孤立し、馬すら借って動かぬところを喜正淡淡と語って哀れさがあり、我が首級を手柄に、と馬を下りて敵将に迫る居立ッ型には鋭気一閃をみせた。以後を地（喜久・三郎）が受け、畏怖して怯む敵将を尻目に、語り草にせよと自刎して果てる辺りの、象徴的な型もきびきびと美しい。

後シテは面淡男（か）・唐冠・金色眩い半切と法被が黒頭に映えて猛々しい。項羽は偉丈夫だった由だが身丈は喜正に適い、働キは豪快というよりは俊敏。地の、へ剣も矛も、と持った鉾を後へ捨てて両袖さりりと巻上げたところには、身を焚くばかりの口惜しさが体現された。ツレ美智子、アイ靖浩。（1時間7分・9月16日・九皐会）

「忠度」　ワキ旅僧・雅介、道行を抜き名宜から直ぐ着詞になるが、シテ尉・澄子もへわくらわに、の歌とその佗しく淋しい磯住まいの感懐をいうサシの一部を省いたので、舞台となる須磨浦の情景描写が薄められたのは否めない。へ山の桜も散るものを、と胸杖するのが突出する様にみえた遠因もそこらにありそうである。

後シテは連続する型の、六弥太との組打ちから郎党らに右腕打ち落されるところ、右手の扇をばったと落すのが効く。この曲の動因でもある一首、へ行き暮れて、の地（富四夫・満次郎ら）のあと、カケリに忠度の焦心をみせ、転じてシテの立場は六弥太、へ木の下蔭を、以下を詠み継ぎ、さればこそ薩摩守、と呆然佇立短冊取り落してシオルところ女流の心延えだった。（1時間13分）

「三井寺」　シテ章・前は無紅唐織着流、後は腰巻に水衣、面曲見・参龍夜叉。疲れに寝入るところ、吾子と巡り合えるとの霊夢に、常々慰藉を得ている人にこの事「語らばやと思ひ候」、とスッと立つ姿の、弾む悦びが素直に伝わる。逸る心を抑えかねる狂おしいカケリ、更に道行の終り、へ風凄ましき秋の水の、とスル〳〵ッと框枠まで出て来るところは表情に富み、鐘ノ段では、へ我も五障の雲晴れて、と紐を扇で引っ掛けて下を潜るのが、自ら五障を晴らす気分で面白い。クセにみる母の深い心持に比して、子との再会後は、子方の力量もあろうが、しんみりはさせて貰えなかった。ワキ勝久、金襴角帽子・小格子厚板・白大口・紫水衣の品位に適う。（1時間17分）

「泉山伏」　泉に惑かれて躰を震わせ、「ホーン」と奇声を発する紅鉢巻を垂らした小アド保志。その療治をシテ山伏・弘之に頼むアド兄・靖浩。秘術鳥ノ印を結んで祈り退けんと向きになる弘之が人柄で可笑しく、伝染した靖浩が爪先立ち両手を羽搏かせての「ホーン」も恍けた味。（20分）

「融」　シテ満次郎・担桶は前を手繰り、後ろも左手背に廻し手繰る。風趣をいう一セイから直ぐワキ元との問答は、シテの心情をいうサシ・下歌・上歌を省くため、毎度言うように情緒は欠くが、前場にはそれを吹き飛ばすだけの奔放さがあった。即ち、興に乗った名所教えに無駄な時を過したとばかり、倉皇と担桶を荷なうと、框踏み外さんばかりにぐい〳〵正面に出て担桶二つ一気にぐっと下ろし、一度に汲む気勢は豪快。

後シテは初冠（垂纓）・紫指貫・白単狩衣。へ千重ふるや、と舞台に入り、へ面白や曲水の、は嬉々として正先へ出、左右に盃を受けると早舞は英気勃々、舞上げてからのリズム感も上々で袖扱いも伸びやかに、悠々と勤めおおせた。地は孝・富四夫ら、囃子は鼓・富司忠・真之介・喜太郎、アイ祐一、後見を嘉男・耕司。（1時間19分・9月17日・宝生会）

「浮舟・彩色」　シテ四郎。大方は前を腰巻・水衣（後は脱掛ケ）のところ、四郎は前を女笠・脱掛ケ姿。一声（雅義・貴俊・総一郎）で、常には無い常座の柴舟（「兼平」同断だがポージに更に色無シ紅段を千鳥に掛ける）に入る。宇治川に棹さす里女の表情は笠の下で窺えないが、水を挟んでワキ旅僧・茂十郎との古人に纏わる問答で、浮舟のこと私がどうして知りましょう、むつかしい事を仰しゃる、などとワキにアシラフ所は従順。初同（文蔵・朝義ら）へ小島が崎を、と笠に手をかけテラシて遠く眺め、更に、へ後より雪の、と躰を廻らせ蓆へずーっと見る辺りは煙・風・雲・雪と移ろう時を辿るか。下居、棹置き初同一杯に笠を脱ぐと舟を出る。面は曲見、されば深井より地味で質朴な印象は、浮舟の懊悩をいう居グセも深刻にみえた。後を頼み川霧に消える中入、送り笛の哀調もよく、アイ里人・忠三郎の居語は諄々と説いて気張らないのが興味しい。

後シテは、前が狂女と同装の棹さす女の脱掛ケだったので、どうするか関心をそそられたが、面十寸髪・付ケ髪・懸白二・段替摺箔（金茲ト銀花菱文様）・緋大口、の装着胴の異色だった。一ノ松で、へ亡き影の、と謡い出し、ワキを見込んで法の力を頼むと、あさまし、の自覚に自裁を遂ぶ哀しみをシオル。外は川波が烈風に荒れ狂い、そこに未知の人が、へ誘ひ行く、ところ、後匂欄へ後退り小さく廻ってゆっくり舞台に入るのがイロエか。常座に出、へ心も空に、と前へ、へなり果てて、と退りカケリになる。後場はここに至るシテの心象風景の表現が巧緻入念。キリは兜率に生まれた悦びを伝えるかにワキを見込むと、地を残して幕に入りワキ留。うつつなき後シテの消えて行くところも暗示に富み、新しい浮舟像を創造しようとする意欲に溢れた舞台だった。後見は義滋・禎友。（1時間29分・9月30日・大槻自主公演能）

「蝸牛」　主・礼之助の言い付けで延命薬と謂う「かぎゅう」を捜す太郎冠者・又三郎、「でんでん虫」とは露知らず、外見だけで山伏・僧行をそれと信じる粗忽。果れた山伏が太郎冠者をなぶりに掛かれば、太郎冠者も面白がって付いて行くところ、互いに生気溢れる和やかが上々。それにしても、昨今聞く児童生徒の陰湿卑劣な苛めの何と低次元なことよ。選曲は万之丞襲名の耕介が主宰した「蝸牛の会」に因むか。（22分）

「子ほめ」　テーマを落語から採った万之丞の新作。熊・隠居・何某役は順に万之丞・良介・史高だが、夫々本名を呼び合い、それが撰りにもなる。言葉遊びの面白味を扱う現行曲のいくつかは、和歌を軸に対立する二者が秀句を展開してゆくが、それに較べてこれは聞き違いによる言葉の齟齬（只の酒と灘の酒、祝ってと弱って、など）や、「お七夜」と「初七日」にみる明と暗の取り違えなど、落語に寄りかかる部分が多く、その笑いも所謂落語芝居のそれで、トリオの力演にも拘らず格調に欠ける嫌いがあった。（19分）

「唐人相撲」　シテ帝王・万蔵、日本人・万之丞・通辞・右近。脇座に引立大宮、日本人が唐子を抱いて一曽で出る、新生作を謳う初演時（平成四年節走「蝸牛の会十周年記念」）と異なり、一畳台は大小前。一管は幕内で唐子は抱かず出た万之丞の名宜。次いで待従・稚児・楽人・従卒を前後に賑々しく登場する万蔵の悠揚迫ぬ風格が立派なら、「……コロッケ」「チントンリョウ」「ウーロンハイ」など流暢な唐語を駆使し、多勢を鮮やかに裁く右近の行司ぶりも見事。しかし眼目は相撲、就中決り技の多彩は能・狂言の草創期、大唐伝来の曲技軽業の散楽芸を彷彿とさせ、「大田楽」を手掛ける万之丞の面目躍如、奇手妙手の数々は文字通り取っては投げ千切っては捨ての大車輪が痛快。なお登場人物の大方は大髭（後宮の美女も加えたいが）で、その色も紅茶鼠黒と西域に跨る大唐の威勢。とまれ華麗壮大な群衆処理に手腕を発揮した万之丞と共に、流れるような舞台構成に果した一噌幸弘の、異国情緒のある音楽の手柄は大きい。（50分・10月5日・第一回名古屋万之丞の会）

観能随想

詩劇「松風」

寄稿

秋たけなわ、十月十三日の夜、岡崎城二の丸能楽堂で、能「松風」戯之舞（泉嘉夫）が上演された。この能楽堂の見所は建物のそとでは上は暗い夜空、舞台と楽屋の後方には大きな立木が並んでいる。

「松風」は中入はなく、一場型夢幻能であるが、汐汲む海士乙女を配して月光の須磨の情景をくりひろげる場面と、行平への恋慕の思いが狂乱になり舞になる場面と、二つの場面からなりたっている。この二つの場面は、一夜の宿を乞い、塩屋のなかに案内されるワキ僧とシテ松風との問答を介してつながっており、ここでは囃子方が床几からおりてくつろぐ。前場と後場のある夢幻能に近い形であり、この能が詩的空間を形成し得たのは、「松風」のこの構成にも拠っていると思う。

この日の観能で「松風」は詩劇であることを痛感したのであった。真ノ一声で登場する二人の海士乙女は、須磨の海辺で汐を汲むという辛い仕事をしている自分のはかない身の上に思いをいたす一方、桶の海水に映る月の光に興じる。詩情に満ちたこの場面は、かなり長いのであり、詩的情緒を持続して飽きさせないのは演じる側の技術である。舞台はまさに須磨の海辺であり、波がひたひたと寄せては返すかの感があった。

舞台に月光の須磨をみせたのは、何よりもシテの謡によってだったと思う。もちろん、謡は、シテの動きとともにあるのであり、地謡や囃子との関係のなかで謡われていくのだが、深い謡の声と声をあつかう技術が情趣を表現し、官能的な味わいも出していた。夢かうつつか判然としない魅力的な空間、時間であり、能での謡の比重の大きさをつくづくと思う。

ワキ僧に問われるままに、松風、村雨の姉妹はかつて須磨に下向していた行平に愛されていたことを語り、松風は行平への幕情をつのらせていき、形見の烏帽子、長絹をかき抱いて舞台を回る。物着で形見を身につけて狂乱の状態になり、正先の松を行平とみて近づこうとするが、ツレにとめられると、「立ち別れ因幡の山の峰に生ふる松とし聞かば今帰り来ん」という行平の歌は、再び会うことを約束した歌だという。シテは狂乱のうちに橋掛りへぬけ、一ノ松から小走りに戻って中之舞を舞い、更に舞い続けるが、謡のうちにシテ、ツレは幕に入り、夢はあとかたもなく夜が明けて観せていただいている私達も現実にもどったのである。一緒に観た友人も舞がよかったといい、クライマックスの恋慕狂乱の舞がかおりたかい抒情で舞いあげられて、最後まで夢の空間を楽しむことが出来た。

（鴨田都弥子）

観世流・金剛流
宗家本発行元
檜書店
〒101　東京都千代田区神田小川町2－1
電　話03（3291）2488　振替00130-7-3552
〒604　京都市中京区二条通鉄屋町東入
電　話075（231）1990　振替01010-0-113

能楽の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18-18
（郵便番号　464）
電　話（052）731－7984
振替口座　00800-6-36393
購読料　1年1100円
郵送の場合　1年1800円
一　部　100円

3月・8月普及能
義経シリーズ　海と山の名曲シリーズ
能楽協会名古屋支部主催

能楽協会名古屋支部（野村又三郎支部長）は、平成八年度の催能予定として、恒例の熱田まつり奉納能、名古屋薪能、大衆能、歳末助け合い能の四公演と、これまで実施してきた「普及能」を「義経シリーズ」と「海と山の名曲シリーズ」のタイトルで、三月と八月の二日間、四回にわたり上演する。

「義経シリーズ」は、三月九日（土）、能「船弁慶」と「安宅」「海と山の名曲シリーズ」は八月十八日（日）能「松風」と「山姥」でいずれも二部制で公演。

なお特別企画として、二月二十日（水）、「名古屋市青少年のための芸術劇場」として〝能楽鑑賞会〟が名古屋市芸術創造センターで行われる。当日は二部制で、入場料千五百円。

一部（午前十一時始）狂言「附子」能「鞍馬天狗」二部は午後四時始。番組は同じく狂言「附子」能「鞍馬天狗」

（平成八年度の支部催能予定は③面掲載）

謡初めの公演は中止

能楽協会名古屋支部では、昨年は初春を寿ぐ謡初会を一月三日、熱田能楽殿で一般に初公開して舞囃子、仕舞などが上演されたが、平成八年は、初詣のための交通事情、渋滞その他の都合により謡初めの公演は中止される。

観世寿夫記念法政大学能楽賞（第17回）
一噌仙幸氏　梅若六郎氏　受賞

法政大学（下森定総長）は昭和五十四年に「観世寿夫記念法政大学能楽賞」を設定し、すでに十六回の受賞が行われているが、本年も、各方面の識者により推薦された候補者について、選考委員（川上忠雄〔法政大学理事〕・観世栄夫・馬場あき子・西哲生・表章の五氏）が慎重に選考した結果に基づき、第十七回の受賞者として、一噌流笛方・一噌仙幸氏、観世流シテ方・梅若六郎氏の両氏を決定した。

なお贈呈式は、「催花賞」の贈呈式と合わせ、明年一月十六日（火）午後六時より、赤坂プリンスホテルで挙行される。

〔受賞者〕
（いっそう・ひさゆき）
一噌仙幸氏

〔授賞理由〕堅実な技術の上に立つ情趣豊かな氏の笛は、近年、その深さと清澄さを増し、一曲の能の創造と成功に大きく寄与している。とくに〈桧垣〉（梅若六郎）、〈楊貴妃〉（友枝昭世）など本三番目物における卓越した演奏が高く評価されている。

〔受賞者〕
（うめわか・ろくろう）
梅若六郎氏

〔授賞理由〕揺るがぬ基礎技術に立脚し、能本の不備や演出を正して作品の主題を復活させようと努める氏の演技は、近年とみに充実し、埋もれた能の復曲に賭ける情熱と成果も高く評価される。

演能カレンダー
（熱田神宮能楽殿）

〔12月〕
24日（日）能楽殿創立40周年記念乱能　（有料）

〔平成8年〕
〔1月〕
6日（土）扇の会（有料）（番組①面）
7日（日）学生能（来場歓迎）
15日（祝）名古屋清韻会大会（来場歓迎）（番組①面）
20日（土）青陽会定式能（有料）（番組②面）

〔2月〕
4日（日）宝生会定式能（有料）
11日（祝）富耀会（来場歓迎）
12日（振休）観世会定式能（有料）
17日（土）初陽会大会（来場歓迎）（番組④面）
18日（日）九皐会定期能（有料）
24日（土）恵英須会（来場歓迎）
25日（日）恵美須会（来場歓迎）

〔3月〕
3日（日）大蔵狂言会（来場歓迎）
9日（土）普及能（有料）
10日（日）三交会大会（来場歓迎）
16日（土）久田追善能
17日（日）梅猫会（有料）

（演能変更の節はご了解下さい）

催花賞　小鼓方　曽和博朗氏

法政大学は服部康治氏からの観世新九郎家文庫受贈を記念して、昭和六十三年四月に「服部記念法政大学能楽振興基金」を設定し、同基金に基づく事業の一つとして能楽囃子方を初めとする能楽三役の功労者や能界を陰で支える人々を顕彰する「催花賞」を設けているが、その催花賞の第七回の受賞者として、法政大学能楽研究所の推薦に基づき、幸流小鼓方・曽和博朗氏を決定した。

〔受賞者〕
（そわ・ひろし）
曽和博朗氏

〔授賞理由〕多年、家芸である幸流小鼓の研鑽に努め、高度の技芸によって京都の囃子方の中心的存在として縦横に活動するのみならず、能楽協会京都支部等の役員を歴任して地域の能楽振興に寄与し、京都能楽養成会講師として後継者育成に尽力するなど、能界への貢献が甚大である。

狂言鳳の会
第10回記念公演

平成八年一月六日（土）午後二時開演
熱田神宮能楽殿

オープニングトーク
名古屋女子大学助教授
林和利

酢薑　井上松次郎　井上礼之助
隠狸　佐藤友彦　佐藤殿
鶯　井上佑一　井上靖浩
靱猿　井上佑一　今枝靖雄　佐藤友彦　林泰礼

〔有料〕
（全自由席）前売券　三千円、当日券　三千五百円
学生券　二千円、会員券　千八百円
チケット取扱い＝チケットぴあ、市内各プレイガイド
問い合わせ先＝名古屋女子大学　林研究室
052・852・1111
ギャラリーA・C・S
052・835・3780
井上方
0561・3・8・6430
熱田神宮能楽殿
052・682・1751

名古屋清韻会

平成八年一月十五日（祝）午前九時始
熱田神宮能楽殿

番組

素謡　千手　江口　三郎　飯島　弥助　久須　隆之
地謡　酒井　永田　洋子　大森　孝二郎　絲矢　昭子　加藤　千一郎　鈴木　武子　加野　二郎　山村　喜代子　鈴木　博明　高木　啓子　原　彦　田鶴子　三浦　秀男

素謡　三輪　服部　美さ　安藤　敏子
地謡　石塚　光子　八木　美智子　内田　寿美枝　浅井　肇子　中村　喜久子　森明　肇子　御牧　紀代子　加藤　美知子

素謡　三井寺　田中　泰子　水野　紐子　中垣　こう　樟本　圭子
地謡　木下　芙蓉　伊藤　すま子　森　清子　中野　和子　冨田　初子　田村　玲子　緒方　陽子　冨田　真子　伊藤　るり子　阿部　タマ

素謡　須磨源氏　平岩　昌子　岩田　正子
地謡　坪田　玉江　浅野　芳子　武山　秀子　柴田　なみ　田中　文子　青山　信江　山田　富美子　樟本　圭子

仕舞　東　北クセ　吉房　徳二
東　北キリ　鈴木寿太郎
玉鬘　原　博彦
大江山　加藤　千一

舞囃子　草子洗小町　白木喜美子　筧鉱一　柳原冨司忠　大野　誠
井筒　名倉　菊子　筧鉱一　柳原冨司忠　鹿取　希世
吉野天人　谷口　寛子　河村其之介　後藤嘉津幸　助川　龍夫　大野　誠
融　小川美智子　筧鉱一　柳原冨司忠　助川　龍夫　大野　誠
五段替之型
菊慈童　志水志津枝　筧鉱一　柳原冨司忠　助川　龍夫　大野　誠

（③面につづく）

観世寿夫記念 法政大学能楽賞 受賞者の経歴

一噌 仙幸 氏

一噌流笛方。日本能楽会々員。昭和15年5月19日、一噌正之助の次男として東京に生まれる。昭和29年中学2年の4月から藤田大五郎氏に師事。この年発足した能楽三役養成会で修業した第一期生で、専門の笛はもちろんのこと、高橋進・幸祥光・吉見晋樹・亀井俊雄・柿本豊次・金春惣右衛門氏らから謡や囃子の稽古を受ける。

初舞台は14才で〈生田敦盛〉。師の厳しい薫陶を受けつつ、修業に励み、真摯な態度で舞台を勤め、登場楽やアシライに、また舞事に、その能一曲の創造に貢献している。

近年の舞台では、〈桧垣〉（友枝喜久夫）、〈姨捨〉（梅若六郎）、〈伯母捨〉（粟谷菊生）、〈実方〉（観世栄夫）、〈楊貴妃〉（友枝昭世）などが特筆される。また、狂言〈鷺〉の復曲では笛の譜を復元し、謡物〈海道下り〉の譜も復曲するなど、古譜の復元にも成果を見せ、一柳慧氏作曲のオーケストラ〈ガリレオ・ガリレイの生誕〉への出演、舞踊家の山田ナナ子氏と吉村幸子氏の〈高野聖〉では笛を担当（俳優座）、ジャズピアニストの山下洋輔氏や小鼓の大倉源次郎氏とフランスでの大門四郎氏のライブに約一ヵ月出演するなど、他ジャンルでの活動も行っている。国立能楽堂研修講師を歴任。

梅若 六郎 氏

観世流シテ方。昭和23年2月16日、55世梅若六郎の次男として東京に生まれる。本名善政、前名は景英・六之丞・紀彰。祖父の二世梅若実および父に師事。昭和26年〈鞍馬天狗〉の花見で初舞台。昭和29年〈猩々〉で初シテ。少年・青年期からその将来が嘱望された逸材で、父没後は梅若六郎家の当主として東奔西走の活躍を続けている。地謡や囃子の隅々まで神経の行き届いた舞台活動を展開し、すでに〈桧垣〉（木賊）なども披く。

近年は、月並能という、ごく普通の会で課題曲を設定し、劇作家や研究者の協力のもと、現行曲の能本・演出の見直しを具体化させて成果を上げるとともに、後進の育成にも努めている。

〈大般若〉に始まり〈治親〉〈生替〉〈懸天狗〉〈松山天狗〉〈渇水龍女〉と続く復曲の成功もめざましく、六郎の会の〈護法〉の復曲では、演出家としての卓抜な力量を見せ、1993年度第1回読売演劇大賞特別賞を受賞した。

海外公演にも意欲的で、特に1993年、アメリカのメトロポリタン美術館での演能の質の高さは、現代における海外能の頂点と評価が高い。1987年（昭和62）芸術選奨新人賞ほか数々の賞を受賞。大阪の大槻文蔵氏らと能劇の座を結成し、演技の交流を図り、九州蝋燭能や学生能では東京・関西・九州を一丸とするチームワークの軸となっている。

曽和 博朗 氏

幸流（こうりゅう）小鼓方。大正14年4月27日、曽和椿吉の長男として京都に生まれる。本名は博。曽和家は、祖父の曽和鼓堂が金沢藩小鼓方で江戸初期以来京都で活動した稽谷家の後裔から芸事の一切を相伝した幸流の名家。祖父・父、ならびに幸祥光に師事。初舞台は昭和10年。昭和17年に祖父に続いて父が早世したため家を継ぎ、京都の能界に不可欠の囃子方として若年から旺盛に活動した。曲趣を生かした的確な演奏には定評がある。

16歳の昭和16年に〈絃〉〈頭取〉、19年に〈道成寺〉を披き、40年に〈卒都婆小町〉（シテ故林喜右衛門）、44年に〈鶏鳴小町〉（シテ金剛巌）、51年に〈姨捨〉（シテ藤井久雄）、63年に〈桧垣〉（シテ観世銕之丞）を勤めた。昭和40年から日本能楽会々員。この間、京都能楽養成会の講師として後継者の育成に尽力し、また京都囃子方の協議機関である同明会や、戦前に組織されて今も活動している京都能楽会の役員を歴任し、京都能界の世話役としての功績も大きい。

現在は能楽協会京都支部副支部長・同明会理事長。昭和59年の金剛巌氏を団長とするイタリア・ヴァチカン公演など、能楽の海外公演にも参加。平成4年に京都市芸術功労賞を受賞。趣味は写真撮影。長男正博氏が後継者。孫の尚靖氏も同じ道を歩んでいる。

新春能面展

鶴舞中央図書館で

能面研究会「面紹社」（主宰＝保田紹雲氏）は、新春一月六日（土）から二月十一日まで、名古屋市・鶴舞中央図書館一階展示コーナーで「新春能面展」を開催する。来場歓迎。

なお図書館休館日は毎週月曜日祝日振替日（一月十六日）と第三金曜日（一月十九日）

NHK年始番組

◈ テレビ　午前7時～8時　教育テレビ

1月1日（月）能　「淡　　路」～金剛流～　金剛　巌
　　金剛　永謹
2日（火）狂言「附　　子」～和泉流～　野村又三郎
　　「宝の　猿」～大蔵流～　茂山千之丞
3日（水）能　「自然居士」～観世流～　梅若　六郎
　　宝生　閑

1月1日（月）12時15分～12時45分　衛星第2
　　「三　番　叟」～和泉流～　野村　萬斎

◈ FM放送　午前11時～11時50分

1月1日（月）番囃子「国　　栖」～喜多流～　喜多六平太
2日（火）狂言「節　　分」～和泉流～　野村　万蔵
　　「花　盗　人」～大蔵流～　善竹忠一郎
3日（水）謡曲「三　　山」～宝生流～（再）松本恵雄

平成7年12月・平成8年1月放送

〔12月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）

31日（日）「　　巴　　」～観世流～　山本　勝一

〔1月〕

7日（日）「東　　北」～観世流～　観世銕之丞

14日（日）一謡一声「三井寺」
　　観世　栄夫・宮増　純三
　　番囃子　「井　筒」①
　　～喜多流～　友枝　昭世

21日（日）番囃子　「井　筒」②
　　～喜多流～　友枝　昭世
　　――NHK能楽鑑賞会から――

28日（日）「求　　塚」～金剛流～　金剛　永謹

能楽鑑賞・再放送　午後5時より　ラジオ第2

1月4日（木）「西　行　桜」～宝生流～　三川　泉
1月15日（月）「角　田　川」～金春流～　金春　信高

青陽会定式能（第140期 第1回）

一月二十日（土）十二時半開演
熱田神宮能楽殿

（名古屋清韻会番組つづき）

仕舞　邯鄲　鄔アト　光崎　照子
実　盛キリ　加藤美智子
松　虫キリ　川崎　信義
鵜　加藤新一郎

能　半蔀　長島みつこ　宝生　欣哉　河村総一郎　後藤孝一郎　鹿取　希世
間　井上礼之助
連吟　通小町　吉田三郎　中平岩明　中原甚夫　浅川亨
独吟　姨捨　奥村　久枝

舞囃子　東岸居士　御牧紀代　河村真之介　後藤嘉津幸　大野　誠
頼政　佐藤アヤ子　吉田定男　福井啓次郎　大野　誠
善知鳥　古井佐季　河村総一郎　後藤孝一郎　大野　誠
乱　渡辺節子　河村総一郎　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　鹿取希世

仕舞　放下僧小歌　北原良一郎
玉葛　佐久間美親

桑原信夫　能　天鼓　宝生欣哉　吉田定男　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　鹿取希世
弄鼓之舞
間　野村信行

舞囃子　山姥　鬼頭貴代子　河村真之介　後藤孝一郎　大野　誠　鬼頭喜太郎
歌占　殿島博子　河村真之介　後藤嘉津幸　大野　誠
清経　伊藤敏子　河村真之介　後藤孝一郎　大野　誠
弱法師　福間克彦　河村真之介　後藤嘉津幸　大野　誠
イロエ入
難波　富士道周明　吉田定男　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　鹿取希世

狂言　因幡堂　野村又三郎　野村信行

番外仕舞　高砂　大槻文蔵

（終了予定　六時過）

〔御来場歓迎〕　主催　大槻清韻会

〔有料〕　当日券　三千円

愛知県文化振興基金事業

能組

仕舞　東北　クセ　三村恵子
花月キリ　生駒里翠　地謡　今沢美和子　近藤幸江　前野都子　瀬戸三津子

能　須部甫　杉江元　河村総一郎　後藤孝一郎　竹市学
間　井上礼之助

後見　瀬戸三津子　梅田邦久　地謡　星野路子　生駒里翠　高島良一　馬場信至　中川加賀敏彦　雅章　古橋正邦　祖父江修一

仕舞　清沢一政
梅　キリ　中川雅章　地謡　高島良一　高橋瞭　武田孝邦　木男弘
巻　絹　祖父江修一

能　松山幸親　葛城　辻本正樹　高安勝久　橋本宰　河崎勲　後藤嘉津幸　助川竜夫　鹿取希世
間　大野弘之

後見　近藤幸江　久田徹二　地謡　三村恵子　今沢美和子　加賀敏彦　高橋嘉勇　清沢一政　古橋正邦　保彦　瞭政

狂言　昆布柿　佐藤友彦　佐藤陸　井上祐一　後見　井上松次郎

能　籠太鼓　武田邦弘　飯富雅介　笈鉱一　柳原富司忠　大野誠
間　井上靖浩

後見　前野都子　中川雅章　地謡　三村恵子　生駒里翠　松山幸親　須部甫　清沢一政　久田徹二　梅田邦久　祖父江修一

附祝言

主催　青陽会

名古屋狂言史余話（十）

佐藤友彦

山脇伊津美元賀が明治九年に没し、元清が跡を継いでからは名古屋狂言界がどうやら二つの勢力に集約されていったらしいことはすでに触れた。新宗家である元清を中心としたグループと、幸八・得平・又三郎の弟子を中心としたグループである。

この頃までに活躍がうかがわれた人物のうち、おもだったメンバーの推定される師弟関係を記しておこう。

＊得平弟子と考えられる人物
田中庄太郎、磯部定治（磯部三段治）、田中金三郎、広瀬錠太郎、角淵新太郎（宣）、小川清太郎、荒川孫吉

＊幸八弟子と考えられる人物
井上菊次郎、水野代次郎（伊勢門水）、三橋正太郎、大沢喜六、木村国次郎、木村重太郎、勝野久次郎、井上錦次郎

＊又三郎弟子と考えられる人物
河村鍵三郎、後藤九十九（直之進）、山本久平、河村猪三郎、川村鉦太郎、中川雄次郎、渡辺勘三郎、佐藤鍵次郎

元清が宗家継承から上京するまでの四年間に、元清と舞台活動をともにしているものは、手元の資料では二十三名の名が見られるが前記メンバーの内では、得平門下と思われる荒川孫吉の名が見られるのみで、ほとんどが新しい名前の登場である。明治四、五年頃の片岡喜平治のメモには孫吉はこのころ「子供也」と記され、古参の弟子で中心的存在となったとは考えられない。またこの二十三名中には大垣在住だった三宅派の流れを汲む人物の名も見られ、維新以来師家と一丸となって名古屋狂言界を支えた実力ある弟子たちが、何らかの事情で元清のもとを離れた結果と推測される。この後元清の上京とともに元清と活動を共にしたこれら二十三名の名は、名古屋狂言界からまったく姿を消してしまうのである。

井上菊次郎、田中庄太郎を中心とするグループの活動は、元清在名中はわずかの記録しか見出し得ない。何らかの制約があったのかも知れない。そのなかでも明治十二年十月には早川幸八の追善狂言会を自分たちの手で金剛寺に催している。（この一ケ月後に元清は自分たちのグループで元賀の追善会を大野舞台で催す）

明治十四年二月、元清は名古屋の地を離れて上京する。前年に母・おていが没したことも、元清がこの地を離れる決意をうながす遠因となったかも知れない。厳寒の二月、代々住み慣れた故郷の地を後に、名古屋港から船での旅路であったと伝えられる。

元清上京後は、名古屋狂言界は自然菊次郎らを中心とするグループで占められることとなった。相次いで没した師に加え、宗家の上京と言う事態をむかえ、彼らの結束がいよいよ堅いものとなっていったことは十分考えられる。そして上京した宗家元清ともまもなく和解がなったものだろう。明治十六年三月には井上菊次郎と角淵新太郎の二人に、当地一円の和泉流狂言芸道取締りが言い渡されている。

井上菊次郎は末広町に住んで、屋号は播磨屋、代々軍兵衛を名乗り仏具商を営む。（門水の「御酒落傳」によれば明治二十四年に仏師から転じたと言う）すでに嘉永年間に八歳で城内の舞台に出演の記録があると言う。維新当初から最も活躍が見られる一人で、師である早川幸八だけでなく、宗家元賀や野村又三郎なども相手としてしばしば菊次郎を用いており、早くからその技量を認められる存在だったと思われる。

角淵新太郎は弘化四年生まれ。旧名古屋藩士で、維新後代言人に転じ、そのまま弁護士となった。学識者としての信望も厚く、名古屋市制が布かれるとともに、第一期の市会議員をも勤めている。早くから得平について狂言を習得していたらしく、慶応元年にすでに三番叟を披いており、得平没後は一門の中心的存在となった。

明治十七年三月九、十六日の両日にわたって、山脇元賀、山脇得平、早川幸八の物故三師追祀の会が古春舞台で開催された。

〈初日〉（三月九日）
玉の井　木下敬賢
唐人相撲　田中庄太郎
猿座頭　山本久平
無布施経　三橋正太郎
鍬　腹　井上菊次郎
蟬　丸　古春左衛門
狸腹鼓　角淵新太郎
棒　縛　磯部三段治
六人僧　田中金三郎
舎　利　寺田左門治

〈後日〉（三月十六日）
俊　寛　古春左衛門
飄　神　田中金三郎
木六駄　山本久平
子盗人　解淵新太郎
仁　王　田中庄太郎
葵　上　木下敬賢
釣　狐　井上菊次郎
苞山伏　磯部三段治
業平餅　伊勢門水
融　寺田左門治

両日ともに能三番、狂言七番を数え、「狸腹鼓」「釣狐」「唐人相撲」「業平餅」など、大曲、秘曲を揃えて、文字通りの大きな催しであった。師家、宗家なきあと弟子たちが総力を結集して、この催しを成し遂げたのである。彼らにとって大きな自信となったであろう。同年六月にはこれを記念して「『和泉流猿楽』狂言記念碑」と題する石碑が当時名古屋西本願寺別院に建立された（現在は昭和区の八事山興正寺に移設）。表面には名古屋和泉流狂言の伝統とその現状を要い、弟子たちが三師の追善会を催したことを刻し、裏面には以下の十六名の名を刻している。前記番組ではシテの名しか判明しないが、これらの人々は何らかの形で出勤したと思われる。（上段）

角淵　宣　三橋正太郎
井上菊次郎　井上光太郎
田中庄太郎　山本鉞輔
山本政守　菱田錦造
磯部三段治　稲葉権一
河村鍵三郎　稲葉千万吉
伊勢門水　浅井鉞夫
田中金三郎　浅井　恵

この追善会の開催が、名古屋狂言界の大同団結をはかる大きな機運となったものであろう。この機運はやがて組織的活動を促す方向へと高められ、明治二十四年「狂言共同社」の結成となって実を結ぶのである。

共同社結成の成立員となったのは、角淵新太郎、井上菊次郎、伊勢門水、河村鍵三郎、三橋正太郎、山本久平、田中庄太郎の七名と伝えられる。先の石碑裏面に名を刻した内に山本久平の名が見当らないが、上段右から当時狂言界に占める序列あるいは年功等を配慮して列記したかと推測され、あるいは四人目の山本政守が久平の本名かと思われる。

（筆者は和泉流狂言方）

青陽会

平成八年　第四十期予定

第二回　五月十一日（土）
素謡　通小町　高島良一
経正　三村恵子
楊貴妃　生駒里翠

第三回　八月四日（日）
国栖　瀬戸三津子　今沢美和　久田徹二
通盛　清沢一政　高橋睦一
三井寺　前野郁子　加賀敏彦
鵜飼　

第四回　十月十九日（土）
舞囃子　玄象　今村嘉勇
龍田　近藤幸江
花筐　吉橋正邦　梅田邦久
殺生石　祖父江修一

能楽協会名古屋支部主催 '96 能と狂言公演

会場　熱田神宮能楽殿

義経シリーズ　普及能公演

三月九日（土）十一時
解説　文山賊　衣斐正宜
狂言　船弁慶　後之出留之伝　井上礼之助　子方　山名達郎　衣斐正宜

三月九日（土）二時
解説　隠狸　河村晴久
狂言　安宅　勧進帳　延年之舞　酌　掛　貝　立　野村又三郎　子方　松山晃之　ツレ　味方玄　〃　松山幸親　〃　河村和重　〃　河村晴通　〃　祖父江修一　〃　高橋睦一　〃　河村晴久　〃　清沢一政　〃　古橋正邦　梅田邦久

熱田まつり　奉納能

六月五日（水）十一時
能　花月　長田郷
狂言　子盗人　井上松次郎
舞囃子　忠度　吉川周子
舞囃子　松風　加藤冨貴子
能　小鍛冶　衣斐愛

熱田神宮　薪能

八月三日（土）五時半
能　小督　ツレ　近藤幸江　トモ　瀬戸三津子　祖父江修一
能　三山　ツレ　戸田和　竹内澄子
狂言　腰祈　佐藤友彦
能　鉄輪　早鼓　泉嘉夫

海と山の名曲シリーズ　普及能公演

八月十八日（日）十一時
解説　岩橋　泉嘉夫
狂言　松風　見留　野村又三郎　ツレ　清沢一政　久田徹二

八月十八日（日）二時
解説　太子手鉾　長田麗
狂言　山姥　白頭　井上靖浩　ツレ　長田郷　長田麗

大衆能公演

九月一日（日）十時半
能　三輪　前野郁子
狂言　素袍落　野村信行　ツレ　須部甫　〃　本田勲　〃　加賀敏彦　古橋正邦

九月一日（日）二時半
能　松虫　ツレ　稲川寿一　玉井博祐
能　蝉丸　狂言　水掛聟　大野弘之　松山幸親
能　鵺　

助け合い能

十二月一日（日）十時半
能　弱法師　高橋睦一
狂言　籔入　松田高義
能　熊野　ツレ　三村恵子　今沢美和
舞囃子　善知鳥　竹市幸司
能　紅葉狩　ツレ　玉井博祐　〃　竹内澄子　〃　戸田和　佐藤耕司

初陽会大会

二月十七日(土)午前九時三十分始
熱田神宮能楽殿

業　謡
敦盛　長谷川輝和　藤谷音弥
山姥　三村恵子　鷲見弘　笠田昭雄
鉢木　祖父江修一　杉本勉　上田貴弘
江口　松木千俊　松浦忠男　村瀬純
羽衣　広田睦子　村瀬堤
梅　松井くに江　岡久広
卒都婆小町　宮川美代子　武田宗和　新井和明

龍
林院　浅井一元　村瀬純　村瀬堤　柯村真之介　柳原冨司忠　助川竜夫　藤田六郎兵衛
間　野村信行
後見　武田尚浩　武田宗和　地謡　藤谷音弥　笠田昭雄　祖父江修一　武田宗典　藤井完治　藤井徳三　上田貴弘　中川雅章

素　謡
鵜飼　大野木節子　小島一英　高橋晾一
木賊　松木千俊　鈴木信太郎　武田志房
頼政　森郷巳　武田尚浩
景清　新井和明　武田宗典　岩本美智子　藤井完治

舞　囃子
松風　鈴木容子　河村真之介　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛
戯之舞　神沢幸吉　河村真之介　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛
砧　番外　須磨源氏　武田宗典　河村真之介　柳原冨司忠　助川竜夫　藤田六郎兵衛

仕　舞
花筐　武田宗和

附　祝言
（素謡省略個所有り）

（終了予定　午後五時五十分）

御来場歓迎
入場無料

主催　武田宗和
初陽会

◆深秋の舞台から◆

「名古屋能楽鑑賞会」と「野村又三郎斯道七十周年記念《釣狐》鑑賞会」「観世会」「宝生会」

竹尾邦太郎

「栗焼」　到来の栗は四十(個)、その心を始終仲良く、と判じて主・千作の御意に召したシテ太郎冠者・幸四郎、来客用に焼きにかかる。爆ぜる栗たちとの対話、その独白の滋味が何とも言えず優しい。焼き上げると、味見に一つが後を引き「手の離さるる事ではない」旨さに食べ尽してしまう幸四郎。その表情の変化は、寵神夫婦と三十四人の公達に進上した、の独弁共々持前の飄逸味で上々。怪訝ながら納得はしても、残り三個にこだわる千作の、算用の堅さもまた可笑しい。

上方の、神信心に篤く算盤勘定には敏い、懐しの人々。炊飯器と水道の普及は荒神様や水神様信仰を亡ぼしてしまったが、その習俗を知らない演者と見所の将来がやがて来るだろう。空恐ろしい。後見・正邦。（31分）

「井筒」　シテ九郎右衛門、面小面・襟白二・白摺箔（金襴芝文様）・浅葱赤段秋草文様唐織。木ノ葉入水桶を持ち微かに躱を右にひねった姿の含羞は、床しい里女の淑やかな佇まい。ひっそりぬかずき樒を手向け合掌するところ、ワキ旅僧・閑が見咎め問答になるが、身でなしの変らぬ蓋じらいは、へ（これこそ）それよ亡き跡の、の初同（鍵之丞・暁夫・邦久ら）で初めてワキにアシラフ。へ一叢薄、と一足退きながら薄を眺め、へ草茫々として露深々と、とワキ正へ面遣フ寂寥感は、夜半、高安の女のもとに通う業平の身を気遣う歌に底流する優しさと無縁ではなく、あればこそ哀れを述べるのも理、とワキにアシラと同意を求める。中入の、意味ありげな風情をみせながら、へ言ふや往連縄の、とワキから直シて立つと消えてゆくところも趣深い。

アイ里人は千作、歌に託された真情を知って業平の「高安通ひは御止まりありたると申す」、と語る安堵感の口調の旨み。

後シテは初冠に渋い茶地紅入縫箔腰巻、紫長絹。舞の前、へ形見の直衣、といかにも慎ましく左袖を少し出して見つめるところ、その感傷的な気分は舞にたゆたい、切近く、業平追慕の情が一気に昂ると、へ男なりけり、と思せき切るかに井に寄る。へ業平の、と井桁に左肘をつき、へ面影、と逸って覗き込むと、へ（見れば）懐しや、と立つが、沁々とは見ていられない小面の、うら若い女人の直情。へ我ながら、と左袖でシオリ、退ってへ凋める花の、と両袖で面を隠して下居するところは得も言われぬ風情だった。厚味のある地謡と囃子方（六郎兵衛・博朗・総一郎）の好演奏で格調の高い舞台。後見は欣司・道喜。（1時間52分・10月28日・名古屋能楽鑑賞会）

「夷毘沙門」　有徳人・高義、娘に舞を、と祈願すれば祈願されたシテ夷三郎・祐一と毘沙門天・友彦の両福神は自分を売り込む自薦の厚顔。互いに旧知か、鉢合わせして遣り合い、「蔵馬のビシャ」、「西宮のサブ」と呼び捨てる応対のあけすけが、福神に非ざる次元の低さで愉快。二者択一もならぬ有徳人はこれ幸いと宝を所望すれば、固より入舞に納まるよりは福を授けるのが本業の両福人は自前の舞で景気をつけ、よい気分の連舞からめでたくガッシ留。調和のとれたトリオの、ほのぼのとした脇狂言の和楽だった。（26分）

「釣狐」　シテ又三郎、十三回目の狐という。濃萌黄色沙門帽子・濃色無地裏斗目・鼠色長衣、面の白蔵主のそこはかとなき薄気味悪さの妖気は又三郎の芸功・水鏡を覗く姿、道行での四肢のウォーミング・アップじみた仕種、など獣足に至る入念は役に挑む意気込みを窺わせる。アド狐師・信行が釣った狐の処理を聞き、躾めて怯えるが、それではならじと玉藻前の故事を引き狐を思い留まらそうと、恐怖も忘れて仕方話に熱中してゆく床几の語りが白蔵主の老獪なら、罠を捨てると聞いて一安心の矢先に、いきなり罠を面前に突き出されで仰け反るところでは狐の地を仄見せる。

罠の一件落着させて帰途、へこの里に、住めばこそ浮名もたていのう、の上機嫌の小歌は流石に名調。杖を両肩に担い、後ろ向きに浮かれ歩いて捨て、罠に躓いてからの、罠に絡む仕種の表現も細かい。餌に惹かれながらも堪忍自重、身軽になって再度、の尻窄げの中入は着付の裏斗目までは捲れなかった。一方、白蔵主の挙動を怪しみ、荒された罠に古狐と悟り、両手を腰に当てて行く手の幕を見込構むえには、狐師信行の烈々たる闘志があった。

後シテ狐は幕の下から被衣を潜って出る。幕内での啼声、ワキ正辺りで左右の気配を窺い、喉を鳴らす様な「いちらう〳〵」「のぶゆき〳〵」の呟き、の微妙。キリは掛った罠を外して一ノ松に逃げ勾欄に寄って三度嘲笑すると附せアドが追って先に幕へ走り、シテは三ノ松で勝閧をあげるように更に一声啼くと、遣って入った。狐が狐師の後に入る演出が珍しく、又三郎七十四歳の獣性のしなやかさが見事だった。（1時間21分・11月11日・釣狐鑑賞会）

「三井寺」　シテ観之丞・地頭暁夫・子方安寿子、三代で勤める。得てして肉親には甘くなるものだが流石に家柄、安寿子君が見事な好演をみせて見所を唸らせた。学齢前は女児も男児と区別がないものなのか、毅然として物怖じしない態度は男児なら面構えを言いたいところ、芸に対する自覚を弁えた凛とした気品は立派の一語。母と認め、ワキ僧・閑に素性を問わせて再会となるところ、精一杯張りのある詞の真剣味は、場面が場面だけに深こらえかねる程だったが、それ以上にいたいけな安寿子君が健気に舞台を勤める姿に感動した。久しぶりに子方がシテを食う舞台だった。

前シテは縫箔腰巻・唐織薄折、「無俳ノ伝」ではなかったが女笠を着けた。後は永衣（濃緑色）、月の琵琶湖の情景をいう初同、さりげないサシ込ヒラキの型にも哀れがあり、月に誘われ棹をさす態にする〳〵と一ノ松へ流れて行きやがて湖上を渡る櫓の音を聞くところ、特に印象的だった。（1時間33分）

「咲嗤」　さっか、とは盗人の異称・連歌の宗匠に頼んだ伯父と思いきや、名うての咲嗤（靖浩）を同道のシテ太郎冠者・友彦に主（融）は伸天。粗相を案じた深慮が裏目で、「身共が言ふ様する様にせい」と命ぜられた太郎冠者は主に粗忽を責められれば、得たりと丸々反復して咲嗤に応対する。泡を食う咲嗤が上々だがシチは愚に徹しきれたか。（33分）

「熊坂」　シテ芳伸・盗賊から来るのだろう。茶角帽子・濃茄子紺無地厚斗目・黒水衣に前場の暗く怪しい雰囲気を纏おうにも僧形に妖気な稀薄。後場は魁偉な面長盥癋見のシテ大盗熊坂長範（ノ幽霊）、蔚盗仲間を屠られ一大決意。へ熊坂思ふやう、とワキ僧（隆之亮）にぐいとアシラフと牛若と対決する一人二役の攻防。繰り出す長刀を、へはっしと、打ち止めてひらりと左へ跳び退くかの牛若の飛返り、それを追い縋るようにへ追っかけ、膝行スル長範が姿を見失うところ、へ具足の隙間を、斬られる組落シ、など、きび〳〵とした技の切れに見応えがあった。（1時間11分・11月12日・観世会）

「六浦」　シテ正宜、善知鳥のツレと重なるのを避け、面増女・襟白二・白摺箔（銀菊菱文様）・赤地唐織（秋草ニ楓ト露芝文様）の若い里女。六浦の里の称名寺で一本の楓だけが紅葉していないのを訝るワキ旅僧・雅介に呼掛け、よくぞ気付かれた、と橋懸から問答となるところ、シテの嬉しい心持が素直なら、二ノ松で右ウケ、へいかにして此の一本に時雨けん、山に先立つ庭の杷葉、と口ずさむ歌にこそ理由はある、とばかりにワキにアシラフところでは、些かの得意をみせる。これに触発され、手向けの返歌をするワキが更に詳しい理由を問うとき、答えて己れの素性も明かし、消えてゆく中入に情緒がある。

後シテは緋大口に紫長絹。クセから序ノ舞へ、天の道を知る母ノ精らしい慎ましさが奥床しい。キリはハネ扇に風に乱舞する杷葉を見せ、落葉散り敷く庭に面遣として眺めるところなど美しかった。（1時間19分）

「狐塚」　太郎冠者・融、次郎冠者・靖浩、主・友彦。陽が沈む前、鳥が群れて塒に帰るところを鳴子で威す。しかし暮れれば狐が悪さをするのが怖い。独り田の守に遣られた太郎冠者は疑心暗鬼、見廻りに来た次郎冠者ばかりか主をも狐が化けたと思い込み、縛り上げて杉葉で燻す。現在と違い夜の暗い時代、昔の人々には笑いにも切実な思いがあったろう。若い狂言役者が着実に育っている。技と共に心も掴んで欲しい。（30分）

「善知鳥」　シチ雅、いつもながらめり張のある確りした舞台だったが、シチ一人が抜きんでている印象。後場、へ我は外の浜千鳥、と杖を両手に持ってキッと見ると小さく廻り、へ音に立てて、の地と同時に杖を捨てた音の暗合から安座双シオリしたのなど素晴しかった。（1時間7分・11月19日・宝生会）

御料理あつだ
蓬莱軒
本店　熱田区神戸町五〇三　電話(671)8686～8
神宮東門店　熱田区神宮一-一-一　電話(682)5598
中店　松坂屋本店10階　電話(264)3825
売店　松坂屋本店地下1階　電話(264)3761

株式会社セントラルパーク
本社　名古屋市東区泉1丁目23-36(NBN泉ビル)
PHONE 052-951-6111
FAX 052-953-2910